

おさかな海賊団の幸せな旗

てっちやーんツ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

*2021/6/13 一旦完結です。

アカウント毎消えたので再投稿です。

初投稿（2018年）から軽くりメイクされた物語。

また一緒におさかな海賊団とエクストリームバーサスな旅しませんか？

*注意!!

この小説はガンダムネタの多さ故に「宇宙の心」が試されながら「俺がガンダムだ!」とエクバに狂い「死ぬほど痛いぞ」と小説の内容に警告されて「それはエゴだよ!」と心配される振る舞いもあり「遅かったなあ!」と作者の頭の無事を諦めて「なんてパワーなんでしよう!」と徐々にチート要素が浮かび「この俗物が!」と誤字脱字と煩惱に塗れ「弱かった自分とお別れをした!」と良くあるパターン系を見られるが「ウツキー!今年は申年イ!」と横格闘チンパン全覚落ちで有名なエクバを背負い歩まされた主人公の物語…

まあ、つまり、エクバをプレイしてる時の様に脳死しながらあまり考えず、おさかな海賊団の物語のために作られた一人の主人公…

ややガンオタな”海ノ雪旗(うみの ゆきはた)”からお送りする【もんむす・くえすと!パラドックス】の世界でボニーとアシエルのお胸にL覚醒(ダイブ)したい目的です。

目次

1日目	イリアスヴィル	1
3日目	イリアスベルク	12
5日目	ポルノフ	25
8日目	レベリング中	34
9日目	道中	46
10日目	揺れる船の上で	66
18日目	おさかな号	78
30日目	おさかな号	94
32日目	おさかな号	104
32日目	大海賊の洞窟	122
38日目	内海	139
40日目	海軍本部	152
42日目	ポルノフ	165
44日目	おさかな号	184
50日目	外海	195
54日目	おさかな号	214
56日目	外海	228
57日目	雪越えの山	254
58日目	雪越えの山	267
58日目	雪越えの山	282
60日目	スノウヘブン	296
61日目	スノウヘブン	312
69日目	ナタリアポート	335

アリス	end	586	
ナビス	end	562	
ジエシー	end	535	
エル	end	511	
エリツサ	end	495	
マージュ	end	482	
あげは	end	463	
ステイシー	end	454	
幸せな旗はへ	if		
を掲げる世界線			
80日目	おさかな海賊団	end	424
76日目	エスタ周辺	その2	413
76日目	エスタ周辺		396
74日目	グランドノア		382
74日目	外海		369
69日目	おさかな号(夜)		353

1日目 く イリアスヴィル

パラ1

さて、突然だけど「もんむす・くえすとパラドックスRPG」って知ってるかな？

存分に『あひい☒？』れるゲームだと思いきやシナリオがガチでヤバイ（良い意味で）ゲームなんだ。

無印である前作に続いてそのクオリティーは揺るぎない凄さを俺たちに再び見せてくれた。それはもう感無量である。

さて

そんな前置きはここまでにして…

うん

ぶつちやけよう

俺はその世界に飛んできたようだ…

く （この世界に降りてから） 1日目 く
く たぶん昼ごろ く

とりあえず俺は軽く日記取ることにした。しばらくは脳内による日記だが、いずれ紙に書くことができたらと思いつつ、周りを見渡す。

あたり一帯は森…かと思いきや崖が多く、ちよつとした山になっている。そしてスライム娘で沢山だ。ブーメランで遊んでいる個体が多い。ぶるぶるしている。

「これって…」

どこかの人外の世界かと想定しながら搜索していく。そして何匹も同じスライム娘を見るようなものだから脳裏に刻まれた記憶が少しずつ蘇ってきた。

「もしかしくなくともこの世界って…」

この時からあのゲームの世界だと理解してきたのだ、もしかしかなくともそうなんだろう。

とりあえず…

「俺も『あひい』られる前にとつと安全な場所を見つけないと。さっさと思い山を降りたほうがいいな」

まあその後は大した戦闘もなく、スライム娘が沢山いる山から降りてこれた。敵意のない親切なスライム娘に道を教えてもらったりと比較的平和に入り口まで向かえた。時々喜んで襲うスライム娘がいたが、一度も戦わずに無視して走り去ったりを繰り返した。

あと山を降りる途中なんだが、クレーターがあつた。もしかしかなくとも”とあるロリ天使”がヤムチャしやがってをした後なんだろう。因みにヤムチャしやがっていた天使はもう既にいなかったけど、でもこれで色々確定要素が増えた。

「やはりあの世界なのかな…」

期待と不安を巡らせながら近くの村まで向かった。

～ 1日目 ～
～ まだ昼ごろ ～

のどかな村【イリアスヴィル】までやってきた。ほのぼのとしたがらも元気に生きる人々で活気に満ちている。そして村の奥のイリアス神殿に向かえば沢山の冒険者で溢れている。冒険者などからいろんな話やコミュニケーションを得れるだろう。しかし村の探索は大事。急いで向かいたい気持ちを抑えつつ、もうしばらくイリアスヴィルを歩いて回ることにした。

あと村の入り口で如何にも新米な冒険者の少年と、旅の格好が少しアダルティな神官の少女、そして穿いてないロリ天使とすれ違ったが……あれはもしや？

「ルカさんか？」

見間違いでなければルシフィナとマルケスの子であり、この世界では人類最強候補に分類されるあの「ルカさん」に違いない。

あと彼に『さん』はちゃんと呼けることだ。
年関係なく親しみ込めて付けよう。

さてそうなる今日は彼の旅立ちの日か。先程のイリアスヴィルの裏山で誰かがヤムチャした時に起こしたクレーターが出来上がってだくるいだ。それはある意味彼の旅立ちを知らせる証だろう。だからあの3人は間違いない。

「そーいやお金はどうしようか？」

この世界のお金を持ってないから買い物は出来ない。
軽く積んでる……普通にやばいな。

今すぐお金を手に入れるなら村の外に出てモン娘を狩ることなん

だろうが、生憎武器を持つてないし、職業すら就ていない。クソザコナメクジ娘以下ですわ。……すんません、ナメクジ娘に失礼でした。あとナメクジ娘に関しては仲間になった時の序盤の剣技は役に立ちました。なかなか強かった。

さて、モン娘倒すにしてもスライム娘くらいならと思うが、もし負けた時を考えると嫌だね。それが性的な快楽の幸せが確定されたり、温厚な性格なモン娘と死ぬまで生きることになるとしても『君の冒険はココで終わった。セーブポイントからやり直しますか?』つて戻るわけでも無いだろう。そもそもリスポーン関係については女神イリアス様から洗礼を受けた『勇者の特権』であり、それが”反省会”となつて復活する。

だから洗礼を受けた勇者でもない俺にリスポーンも一度の保証は無いに等しいだろう。そのため安定感を自身にもたらしてから挑戦するべきだ。それがスライム娘が相手だとしても。

「ねえねえ！お魚買わない?」

「うわっ!! ス、スライム!?!」

「ひっ! ……ごめんなさい。もしかしてお兄さん、スライム嫌い?」

「え? あ、ああ、すまん、違うんだ。少し考え事してたからな、別に怖がつてるわけじゃないし、スライムは嫌いでも無いよ? あと持ち合わせないからお魚はまたの機会にして欲しい」

「ぶるぶる。ううん、私も突然ごめんね?」

普通にお魚売ってるスライム娘に謝りながらそのうちお魚の購入を約束すると俺はその場から離れて奥に進む。

「今の強さが心配ならやることはひとつ……神殿に行こう」

そしてイリアス神殿に向かった。

途中フラフラとしながら歩いてるおっさんがいたけど……あれはも

しやラザロかな？ 片腕がダラーンとしているし…

あ、転けた…

あれでマルケス化物の一員なんだよなあ…

だからあのヒョロヒョロした姿は恐らく自分の実力を隠すための
フェイクだろう。

ゴチン

フラフラ

ゴチン

「…」

本当にフェイクかどうかは分からんけど。

このゴッドファーザーの頭を読めれるほど今の俺は強くもかしくも無い。

さつさと転職だ。

強さを手に入れなければ。

～ 1日目 ～

～ お昼頃過ぎ ～

イリアス神殿に来たけどすぐ賑わっていた。

初心者から熟練者までありとあらゆる人たちが溢れており、旅の話やアドバイス、職業の説明に論争、道具の扱い、世界の状況など色々なものが聞けた。

途中美味しい匂いにつられ食堂まで行くと俺のことを新たな冒険者だと思われ、旅立ちの祝いとしてお昼頃を出してくれた。

感謝ツツ!!

圧倒的感謝ッツ!!

「今日のお昼頃確保も嬉しかったが神殿来たからには何に就こうか？」

戦士？ 僧侶？ 魔法使い？ 魔物使い？

一般職と言えどもこの基礎から土台をしっかりと固めなければならぬ、自分が求める夢（上級職）のために…

「しかし改めて見るとジャンル豊富だな」

俺がこの世界をプレイした時は【武闘家】にした。まず足払いと回し蹴り、そしてレベリングの秘孔には大変お世話になったものだ。弱点をズブズブと敵を刺しまくって経験値稼ぎした前章の思い出だ。

「しかしシーフや商人も良いな…」

戦闘力はともかく敵からアイテムを奪えれるとそれならに便利だし、商人なら路銀稼ぎが捗る。

だがそれは非戦闘キャラに任せるべきだ、俺は今一人だから戦闘特化した職業がいい。資産のやりくりはシーフや商人じゃなくてもできることはあるからね。

しかしどうしようか？

これだけあると…

うーん…

「身持ちが固いなガンダム！」

「はっ…」

後ろで待っていた人がなんか叫んでいた。

金髪の男だ。

なんかどこかで見たことあるような…

てかやめてくれ。おれはこの人と知り合いでもありませんから周りの皆さんは俺のことを変な目で見ないでください。

「誰ですか…」

「あえて言わせてもらおう、”ブラ”ハム・エーカーであると!!」

「……」

なんかすごくアカン人と出会った…

アレだよアレ。

強烈なおふぎけで入れられた『ス〇ト〇大〇』並のヤバさを漂わせてる人……てか、それそのもだろこれ。

グラじゃなくて”ブラ”ハムと言ってるし。

なんてタイミングでエンカウントしたものだ…

まあいい、無視だ、無視!

「さーて、どれにしようか………ん?」

【料理人】

【ナース】

【メイド】

【貴族】

【見習い勇者】

【無職】

▷ 【トランザム】

「……」

「……ふつ、これも運命か」

おい、何見えてんだお前。

俺しか見えないメツセージウインドじゃないのか？

ブラハムのあと指が伸びている

「……間違ってもそのボタンは押すなよ？」

「了解！ トランザム!!」

【料理人】

【ナース】

【メイド】

【貴族】

【見習い勇者】

【無職】

▶？ 【トランザム】ピッ

「あああー?!?!? アアアア!!? アア”ア!!? テメエええエエ!!? 何やつつてんだヨオオオオ!!?」

何を思ったのか後ろで並んでい金髪の乙女座が『何故か目の前に現れてるウインド画面』に対してボタンを押し、俺は発狂した。

あとそのセリフはエクシア大好きっ子のなんですすがそれは…

「うわ!うわわ!!? なんだこれ!!?」

体が赤く瞬く！

「!! ……ふっ、好意を抱くよ。君は興味以上の対象だということ
さ」

俺の欲しい回答になってないし！
とりあえずお前は黙ってる！

「ツツ〜」

チリチリと痺れる体
しかし増幅はせず光はスツと治った。

「ぜえ…ぜえ…」

なんだったのか理解不能だ…
とりあえずチリチリとした痺れが治った事に喜びを感じながらも
不安が湧き上がる。

「何やらおかしな職業に就いたようだが…とりあえずこれで終わり
だ。新たな冒険に出るといい」

おいおい、爺さん！

あんたそれで良いのかよ！
人を導くのがあんたの仕事でしょ!!

「次のひとー」

「さて、順番を譲るが良い。私は我慢弱いのでね」

うるせえよ。

早く職に就きたいからって俺の職業勝手に選んで順番待ち地縮めてんじやねーよ。

お前なんかE L Sに特攻して氏ね。
普通に人類のために氏ね。

「しかし何かしらの職業に就いたようだな」

嫌な予感を漂わせながら『S A Oの様な非現実的なウインド画面』を出す…

名前 【フラッグ】

年 【20】

性別 【男】

職業 【エクストリームバーサス】

「…」

頼む。待ってくれ。 頼む。

お願いだから1つずつツツコミを入れさせてくれて。

まず名前が【フラッグ】ってなんだよ!!

たしかに俺の名前には『旗』って文字が入ってるから『旗||フラッグ』は分かるけど安直過ぎやしません？ けど偽名考えるのも省けたって事でそこは納得してやる。そこは良い。

てかさつちじや無い。

俺は盛大はツツコミを入れたいのは…

「【エクストリームバーサス】って何さ!？」

あれか!?

ガンダムのお祭りゲーのアレか!?

あれなのか!? てか、あれなんですネ!!

と、とりあえず

ステータス確認をををを

「…」チラッ

最大HP コスト1500クラス

最大MP コスト1500クラス

最大SP コスト1500クラス

攻撃【C】 防御力【C】 魔力【C】

精神力【チンパン】 素早さ【C】 器用さ【C】

「……………」

このあとどうなるんですか? (白目)

気分は全覚落ちだった…

とりあえず…

俺の1日目がこうして終わったと言うこと。

それをこの日記に残します。

宿泊場所は…

そこらへんの草原です

寒い…

つづく

3日目　　～　イリアスベルク

～ 3日目　～

～ お昼前頃　～

イリアスベルクまで来た。

田舎のイリアスヴェルよりやや北に離れてるこの街はなかなか大きく、明るい時間は賑わっていた。　これだけ大きな街だと商業が捗りいろんな商人で溢れているだろう。

噴水を囲いながらバザーの様に色んなお店も顔を出して、この街の住人から、旅人まで色んな方がお金を落としている様だ。

ネコタマのモン娘が魚を狙っていたり、ミミズ娘もお金を払ってリngoを齧ったりしている姿が見られた。　微笑ましい。

そしてこんな話で沢山だった

強大な力を持つ盗賊団がいると…

まあ”あのチビっこ4匹”なのは既に知っているがその真実と正体を知らない住人達はその恐怖と隣り合わせで今も生活しているんだろう。　だがこの騒ぎルカさんの力で勝手に解決されるから俺はノータッチで良いと思う。　とりあえず…

「さて、宿屋どこかな？」

イリアスベルクと言えばあの高級な宿屋が有名であるが別にそこを探してる訳ではない。　てか払えるかよ。　俺が探してるのは普通に一般利用しやすい宿屋だ。　しかし大きな街だから人に尋ねないと迷いやすいな。　どこだ宿屋は？

「あれ？　　どこどこだ？」

うん、早々に迷い込んでしまった。
周りを見渡せば家で沢山。
ここら辺は住宅地の様だ。

「……?? エ、エリイの家？」

たまたま目の前にあった看板を読んでみる
な、なんだつけ？ どこかゲームで見たよな…
とりあえず訪問をして……

「あら？ 誰ですか？ もしかして”挑戦者”？」
「!？」

扉を叩こうとしたら後ろから声をかけられた。
そこにはシルクのローブを着こなし、金色の髪に赤いカチューシャ
を付けた女の子が一人。背丈が俺より頭二つ分低いので子供だろ
うか？ 片手にバックを揺らしながら首を傾げる。 買い出しを済
ませたのか色んな物が詰まっている。

「ええと？ あなたがエリイさん？」
「はい、コッホ……はい、そうですよ」

少し咳き込むと穏やかな笑みを浮かべながらお答えしてくれた。
しかしなんか辛そうだな？
あとこの子、どこかで見たことをある様な……

あれ？

そーいやイリアスベルクの住宅地奥には確か…
……あ!!

「あの、もしかして『バトルファッカー』の人ですか？」
「ええ、そうですよ」

そうだ、思い出した。この少女はもんパラ世界の新要素であるバトルファッカーの一人であり、イリアスベルクの街で挑戦を受ける方だ。

そんで男のモノノを美味しそうにお口の奥に誘って喉を鳴らしながら飲み干す子だったな。

「ふふ、帰宅早々ですがお相手いたしますよ」

「どうしますか？」

ゾワツ……

「っ!？」

「ふふ」

はは…

あ、あかん…

これはあきまへんわ…

彼女に絞りたい要求、そしてバトルファッカーとして名乗れるほどの者が持つ技術から与えてくれるだろう快樂の期待。それが頭の上から足のつま先までビリリと痺れが走る。

これは恐怖感に似てる何かだが…

こちらを容易に惑わせる蠢きだ。

勝ち負け関係なしに味わいたい快樂…

おずおずと頷きたくなる男の性と要求…

でも…

「すみません、自分はこのチャレンジャーでは無く、ただ宿を探しに迷ってるだけなんですよ」

生憎だが勝てる気もしないし、ここでお金消費するのはいただけない。

それよりも宿を取らないと部屋が満室になった時に困るからここで暇は潰せない。

「あら？ そうでしたか。 申し訳ありま…コホツ、コホツ」

「だ、大丈夫ですか？」

「え、ええ…心配ありがとうございます。 でも大丈夫ですよ…ケツホ」

喉を痛めてるのかわからないがさつきも咳き込んでたな…でもこれは。

「もしかして風邪でも拗らせていて？」

「！…え、ええ…お恥ずかしながら、ちよつと喉を痛めまして…」

「ならバトルファッカーの挑戦は受けない方が良いですよね？ 喉、危ないのでしたら」

「！…ふふ、私がお口が得意の知っていましたか。 もしかして期待してここまで来てくれましたか？」

「いや！ 違いますよ!?! ただここまで迷っただけですから。 この街初めてですから」

「ふふふ、ごめんなさい。 ケツホ…ええと宿ならこの道を戻りまして、噴水広場のケツホ、ケツホ」

「…」

お口が得意…

それは構わないが、色んなモノを喉の奥に誘っているなら咳を拗らせても仕方ないだろう。

まあ、おそらくバトルファック始める前には挑戦者のモノを綺麗にして喉の奥に誘うと思うけど。危なっかしいな。

「薬はちゃんと飲んでますか？」

「？ は、はい、こうして買い出しを…あ

？」

「か、買い忘れました…」

「…」

「ケツホ…また、行かないと…ケツホ、コツホ！ ケツホ…うえ」

「悪化してるじゃないですか！まったく！」

苦しそうに口元を抑えて咳き込むエリイに俺は我慢できなくなつた。 これを見て放っておくのはもう無理だ。

「仕方ないですね！ 俺が薬買って来ますからここで待っていてくださいー！」

「え？ あ、あの…それは」

「ほら、家の中に入ってる。 そして看板は一旦閉じ時なさい！」

エリイの背中を押して家の中に入れる。

「ダメだよ、もう外に出たら」

「あの…薬は…」

「良いからここで待ってなさい！ 年上の言うことぐらい聞いとけつて！」

強引にそれだけを言い残すと噴水広場まで戻り、俺は薬を探した。

「そっ、そういやエリイって子、あの家で一人暮らしてるのだろうか？」

「そうなるは大変だな…」

「てかこんな時は誰かに頼れば良いのにさ。」

「道具屋あった！」

そしてこの後、喉に良く効く薬を見つけた。だが薬草とか毒消し草とかではない、ちゃんとした市販のお薬だ。

ついでだから自分の分も購入する事にしておいた。お値段はそれなりに張っていたからまた路銀稼ぎしないと。 お値段はその

この「エクストリームバーサス」ってふざけた職業を扱えるようになるためにも路銀稼ぎと共に並行して練習しないと。

「確かこっちの道だったな。 ゲームと同じように少しわかりづらいな」

そんなこんなでエリイの家に到着、早速お薬を渡そう…と、したが急に病状が悪化してるのかエリイはフラフラとしていた。 倒れそうになるエリイの体を急いで支えて椅子に座らせる。

RPGゲーム如く勝手に邪魔したエリイの家の中で処置を行った。

「お水とお薬を分けて渡すだけなんだけどね。」

あと消化の良いものを渡して安静にする様に告げてから早々に去った。

「イリアスベルク」

「四日目」

この世界に來た二日目同様に俺はイリアスベルク付近で路銀稼ぎ、また熟練度を上げるためにモン娘を狩っていた。

それでエクストリームバーサスの職業はどんな力を扱えるのか？そこらへんを研究した結果、幾つかわかったことがある。

まず聞いて欲しいことの一つだ。

イリアス神殿にてあのふざけた乙女座^{ハム}が俺をこんな職業にしてくれてから次の日、朝の寒さに手が震えてポケットに手をつまむと変なものが入つてることに気づいた。

それを取り出すと【剣】のアクセサリーが入っていたのだ。学校で使う消しゴムのようなサイズだが何か力がこめられて入るように思えた。

そしてこれがなにかと言うと早い話、俺の攻撃の要になる【キーアイテム】だと言うことだ。

これは2日目の路銀稼ぎで理解した。

そしてこのキーアイテムはなんなのかと言うと、実はこれ【マキナ】と同じ役割を果すアイテムであることを知った。このアクセサリーを持つていれば【ビームサーベル】が扱えるようになるのだ。ポンつと手元に召喚する感じ。まるでアシスト機みたいだな。

そうなると【槍】のアクセサリー、または何かしら長い棒状の武器を手に入れば槍の武器が使えるようになるのだろう。いまはまだ練度が低く、1500コストの強さなのでベルガ・ギロスの【シヨットランサー】が扱えるくらいかな？

あとライジングガンダムの：いや、あれは【凧刀】だから槍に分類はされないかもね。しかしコストが増えたらアルトロン^アの武術も使えるのか。なるほど今後がたのしみだな。

とまあ、こんな感じに扱えるものが増えてくるだろうと踏んでい

る。しかしマキナ扱いとなるマキブのアクセサリーは一体どこで手に入るのか？それが全く不明だ。今のところはビームサーベルでなんとかなるがお魚海賊団のところまで行く気ならしつかりと強く

なる必要がある。そもそもR P Qゲームで良くあるのが”海”のモンスターはめちやくちや強い事だ。ドラクエ6とか全滅しそうになったのも覚えてる。もんパラも同じことであつたか娘やマンタ娘に出会った瞬間は覚悟した方が良いな。アレは強すぎる。

さて、マキブの話に戻しまして。

ビームサーベルは軽くイメージすれば手元に召喚され、そのまま斬ることができる。しかし召喚すると【S P】を消費する。しかしエネルギーが切れるまではいくらでも振るうことができるみたいだ。しかし時間が…まあ、ターンのなものだな。それが経つとエネルギーがなくなつて消滅するようだ。そこら辺原作引き継いでるね。もし【銃】のアクセサリを手に入れたら【ビームライフル】を扱えるようになるが、この場合扱うのはM Pの可能性が高いな。魔法みたいなジャンルだからな。

つまり…

近距離の武器を召喚するとS Pを消費する。

遠距離の武器を召喚するとM Pを消費する。

おそらくこんな感じだろう。

このようにエクストリームバーサスって職業の戦い方がある程度理解した。しかしこの面倒な仕様の元で苦労しなければならぬのはあの乙女座のせいだな。上級職のバトルマスターになって頑張ろうと思ったのにそんな強者ムーブの夢も計画も丸潰れだちきしよう。

いや、ガンダムと強者そのものだけど扱えなかつたらと思うとやはり単純な力ほどやりやすいものはない。こんなんで外海で戦えるのか？ 不安だ…

「夕方だし戻るか」

この辺で切り上げる事にした。

そういえばレベリングから帰る途中、イリアスベルクの入り口でルカさんと仲間と、吸血鬼、ゴブリン、ドラゴン、ラミアの四体のチビを引き連れてる姿が見られた。

途中道中で見なかったからハーピの羽を使って一瞬で戻ってきたんだろう。

そうなる、盗賊団を早々にしばいて解決したのか。
仕事早い、さすがルカさんだな。

〽 五日目 〽

〽 朝 〽

朝食を得たあと少しあの子が心配になった。
もちろんエリイって娘だ。

別に惚れたとかじゃない…

あ、もちろん可愛いのは認めるけどね？

ただ病状が気になるだけだ。

正面向いて立ち会ったから心配になっている。

なので最近迷うこともなくなった住宅街を歩き、エリイの家の前まで来た。

すると上から何かヒラヒラと落ちてきた。

白くて三角の布…：下着？らしきものをガシツと鷲掴みで受け止める。

「落ちて来たということとは上なんだろうか？」

見上げるとベランダで顔を赤くしてこちらに驚いてるエリイの姿だった。

どうやら元気になったようだ。

しかし顔が赤いのは風邪ではなくおそらくこの下着か、なんか悪い

こととした気分だ…

そのあと家に招かれて下着をお返した。

「どうもありがとうございます」

エリイからは風邪の事でお礼を言われた。

勝手にした事だから気にしないで良いと言った。

あと少しは大人に頼れと言った。

…最近20になったばかりだけど。

「あ、私も20歳ですよ?」

「…俺と同じやん」

見た目が幼いからまだ20歳には届いてないと思ったがそうでもなかった。童顔だからそう決めつけた俺の間違いだったようだ。普通に立派に一人暮らしをしている人でした。なんかすいません。

「あの、お礼させてください」

もう一度言うが勝手にやった事だお礼は良いと言うが…次の言葉で俺は悩ます。

「いますごく喉の調子も良くて、舌もよく動きます。最上級のコンデিশョンでとても滑らかなんですよ? …よろしければ如何ですか?」

「!」

「あとこれはただのお礼なので、お金のやり取りは無しで味わっていただけますけど…ふふ、どうしますか? 私は歓迎ですよ」

思わず頷きたくなるお誘い…

俺の体ピシツと固まり、動きをとめてしまう。

エリイの言葉選びが非常に心を惑わせてくれるからだ。

これには俺も何も言えなかったが…

断ることすら出来なかった。

「まだまだ未熟な口技ですけど、それでも、とつ／＼ともお気持ちだが、よいですよ？　いかがですか？　ふふ」

口元到人差し指指を当ててニコリと笑う。

「……お、お願い」

俺はエリイのお誘いに負けてしまったようだ。

てか、ルカさんのおねだり時するときのセリフが自然と口から出てしまった事については後で気づいた……

この後

無茶苦茶　啜われた。

◆？　やっただぜ（U C）　◆

エリイから無償でいただく快樂には戦慄した。

レベルをあげるだけであの口撃に耐えられるルカさんマジやばいな。

「アレがバトルファッカー、か……すごいな」

むしろお金を出したくなるほどの余韻と共に俺はイリアスベルクを後にして次の場所を目指すことにした。

「ポルノフにでも行ってみようかな」

カジノで遊んでみたい要求に従って自由気ままに次の目的地まで向かう。

まだ平和なんだ。

一歩ずつ進もう。

フラッグ (海ノ雪旗)

レベル5 熟練度 3

この世界に来て5日目

ここまでの記録と共にイリアスベルクの教会に祈りを捧げた▽

へんじ

5日目　　ポルノフ

　　5日目　　
　　～お昼ごろ～

ポルノフまでやってきたが、途中ミツバチ娘と出会ってしまい戦闘となる。　羽をビームサーベルで斬り落として不慣れや格闘戦で追い込み、ミツバチ娘は逃げるように撤退した。　命は助かったが手からはちみつまみれになってしまった。　しかし蜜の味は美味しかったです。　あとミツバチ娘は虫にしては知能指数高くて少し驚いた。

さて、ベトベトな手を水辺で洗っているとスズメ娘が空から降りてきて話しかけにきた。　人が珍しいのかな？　すると片目を痛めていたようで、スズメ娘は目薬を欲していた。　一つ渡してあげると喜ばれた。　好感度でも上がったのか？

ちなみにスズメ娘は情報屋の職業に就いてるので『マキナ』について少し話をした。　そのまま『エクストリームバーサス』の職業についても質問したが「知らない」と返された？

やはりこの職業は珍しいようだ。
てか、普通はこんなあり得ないから当たり前か。
でも何か少しでも知っていたら助かったな。

今のところビームサーベルしか攻撃手段が無いので困っていた。　せめてビームライフルによる遠距離攻撃も欲しかったね。　攻撃手段を増やせるのなら嬉しかったけどその情報はないみたいだ、残念。

さて、気を取り直してポルノフの説明だ。

まず一言だけ述べるなら…

ここ、変態だらけだ。

それで普通にロリコンでシスコンでマザコンなサングラスが居た。
ハッキリ言ってるなんの感動も無い。ちなみに俺は宇宙世紀シ
リーズは好きだ。だからシャアとかカミーユとかも好きだ。

でもなんの感動も無い。

本当、これはひどい。

「む！この出会い！運命の赤い糸に結ばれているようだ！」

「ま、た、お、ま、え、か」

そして居ましたよグラハム…

いや、正しくは『ブラバム』だ。

まあ、ポルノフに行けば会えるだろうと思っただけけど本当にいるとは
な。あれだ、絶対あれだ。パンツや下着を集める変態と同じ巣を
作ってるはずだ。

「ふむ、なるほど。その力、少しずつ使いこなしてるようだな」
「！」

こいつ、エクバ（職業）の事何か知ってるな？

「その口ぶり、俺をこんなふざけた職業したこの力を知ってるようだ
な？」

「無論だ」

「なら教えてもらおうか？」

「構わぬが、私と共に来てもらおう」

「そう言って路地裏に連れてたら斬るぞ」

「私はノーマルだ」

原作含めて彼の言葉”だけ”を見ればアブノーマルなんだよなあ。誤解を招いてるだけで実際その気は無いらしいけど、厄介。

そう言っただけで連れていかれたのは普通の一軒家。向かう途中橋を渡ったが橋のしたから「ちつ、男か」って声が聞こえた。女性の下を覗き込もうとして橋の下にいるのか。ここは本当にロクなやついないな。ゲームスロットで遊んだら早く出て行きたい。

「中は綺麗だな」

「紳士たるもの、常に清潔を心がける。たとえ性癖が特殊でも外面は人を不愉快にさせてはならない」

カッコいいこと言ってるけど間違いなく女性の敵だな。ほら、あの隅っこ。いろんな『ブラジャー』がぶら下がっている。つまり……そういう事だ。

「あいにくだが、今日は先輩がいないのでな。まあ今回は私と二人きりで語り合おうではないか」

おそらく性癖の話七割だな。

付き合わなければならぬのか…

まあ今は我慢だ。

「まずその職業についてだが、それは選ばれた者にしか扱えない職業だ」

「へー」

RPGゲーム特有の設定だな。

え？なに？俺は選ばれた者で、勇者の一人とかそんな感じなんですか？…なにそれ怖い。

誰が好んで異次元な敵と戦わなければならないんですか。

「それで？ ほかに何かあるの？」

「いや、ただそれだけだ」

「……は？」

「ただ選ばれた者だけが就ける職業、それだけだ。別に特殊な何々がある話はない」

「……じゃあ俺がこの職業にされたのはどういう事なの？」

「それについてはこれを君に見せよう」

そう言うとブラバムはダンスから何かを取り出した。

「！」

「これは『マキナ』に比較的近いアイテムだ。これを持っていれば君が就いてる職業の戦闘における攻撃方法を増やせるのだ。ちなみにマキナは聞いたことあるな？」

「あるよ」

「ならば話は早い。これを使えばマキナと同じように攻撃手段や防御手段、また移動手段など様々な力を扱える。そして私はこれをいくつか持っている」

「へー」

「……さて、話は少しだけ変わるが、私はこう見えてー」

「ブラジャーを集めるのが好きなんだろ？」

「その通り、よくぞ見破ってくれた」

いや、あんたの部屋（？）らしきスペースに沢山のブラジャーの山があるからな。

そこで名前が「ブラ」ハムの時点でお察しだ。

「ここまで賢い君ならもう分かるな？」

「俺がモン娘のブラジャー集めて、そこでブラバムさんに集めたブラジャーを渡すことによって、そのアイテムを交換してくれる……って

事だな？」

「その通り、ギブアンドテイク」

「今のところギブギブしかねえぞ。バトルマスターで脳筋したかったのにな」

「それもまたよし。だが、せつかく選ばれた職業に就けるのだ、勿体無いと思わないかい？」

「……あんだ、もしかしてワザと俺の事をー」

「それに付いては私として情動が抑えられなかった故だ。しかしエクストリームバーサスの職業に就ける運命の者に出くわした驚きと嬉しき、それが私の指先が君の職業をトランザムしたまでだ！」

「だからと言って強引にやるかいな？」

「いや、すまない。私は我慢弱くてね」

「そこまで原作再現しなくていいから」

「しかし君はこの不思議な職についても対して動じてない。もしやその職業は何か知っているのか？」

「……まあ、それなりに、ね？ でも初対面であんなことした悪い子には教えない」

「ふむ、まあ良い。私はブラが集まれば構わないからな。楽しみにしてる」

「……なんか納得いかないけど、俺自身もこの職業気になるから今のところはこれ以上言ってやらないでやるよ」

てかもうすでに手遅れだからな……

「潔い男は好意に値するよ。それではまずこれを渡そう、君の期待を込めて」

「遠慮なく受け取るよ。あまりこの家に入りたくないけどな、変人扱いされてたまらねえや」

フラッグは【ビームライフル】を手に入れた▽

「ちなみにこれはなんて言うんだ？ マキナ？」

「マキナではない」

「なら、なんだ？」

「これは」マキ^{魔機武}ブ「だ」

「あ、はい」

RPGゲーム特有の言葉遊びかよ。

悔しいけど、なんかしつくりきた。

少し面白かったじゃねーか。

◆？

さて『マ↓キ□？ブ□？』を受け取った俺はポルノフの小さなカジノで遊んでいた。原作通り時間をかければ当たってくれる辺り有情ですね。職業値の上昇を効率よくする腕輪が欲しいけど枚数がまだ遠いな。時間泥棒されてもあれだから満足感だけ溜めてそろそろ行こうか。

「ねえ、君？ 私とバトルフアックしない？ 気持ちいいよお？」

「勝てる気がしないので、遠慮します」

そして緑色の際どい格好をしたバニーさんに誘われる。この人もなかなか手強かった記憶。

しかしすぐ『あひいる』ルカさんもレベル上げれば与えられる快樂にも耐えられるし、俺もレベルあげれば耐えられるか？

いや、高校卒業してもソツチ関係は卒業してない貧弱一般人チエ

リーがプロのバトルファツカーの技を耐えられる訳ないだろ。しかもこの冒険で今のところエリイを除いて快樂による攻撃は全く受けてない。慣れない快樂を受けた場合それに耐えれず、なんかの拍子に心すらも堕ちてしまうことがいま一番怖いからな。でも人外から与えられる快樂に興味が無いといえば嘘になるが、三大欲の『性欲』が奥深くまで溺れるとそこからは『人』としての機能^{理性}が無くなる。特にサキュバスや吸血鬼には氣をつけないとな。体だけではなく心まで容易く落とすのだ。身を委ねたくなって委ねてはならない。

でも委ねると言ったらアレは凄かった。

バトルファツカーのエリイ。

彼女の口技は確実に快樂の底へ追い込んでくれる。アレに関しては彼女の好意で性技を受け取り、お金のやり取りなしでジュルジュルされたが……凄かった。

お金のやり取り無し。バトルファツカーの勝負ではない。時間も何も気にならないからエリイは、ゆつくりと、ねっとりとして、着々と、そして確実に昂め、追い込んでくれた。

頭が痺れてきた頃に「我慢してみても良いんだよ？」と笑いながら言ってきたから、くだらない男のプライドと共に耐えようとしたが数秒で簡単に崩れてしまい、そのまま快樂に身を任せてしまう始末だ。

やはりプロは違うね。しかもバトルファツカーの淫技は癖になると戻れなくなるし、ダメ男を多く製造しそうだ。しかもエリイはあの童顔で20歳だが、それでも主観的に見たら小さな子が手込めにするように笑みでの口撃だから、それに耐えられるなんて無理だ。そこでバトルファツカーとしての技量もあるのだから巧みに絞ってくれる。アレはもう耐えれない。無理だ。

ともまあ、人間の女性もバカにならないって事だな。

「さて、どこに向かおうか」

カジノを後にしてポルノフが出る。
何しようか考えていると…

「ぶひい！ 食べ物によこせ！」

オーク娘だ。

俺のレベルで倒せるか？ 逃げれると思うから、安全策を第一に考えて戦いは回避しよう。

「そーれ」

「ぶひい!?!?どうもろこし!?!?」

珍しく手に入れたとうもろこしだ。

茹でて食べようと思ったが身の安全が大事。

そして逃亡は楽にできた。

「さーて、このまま北にハーピーの村まで見に行こうかな」

あ、でもいまあそこ大変で変態なんだよな、

発情的な意味で。

無理はしないでおう。

いまは自身を強くするのが先決なわけだから…

「ブラ集めか。ブラバムからブラのホックとかを簡単に外す方法を教わったから何とかかなると思うが……」

日本でこんなことやれば犯罪。

RPGゲームならではの、ぶっ飛んだ所業だ。

「とりあえずさっさとどこかに逃げよう、まだオーク娘いるだろうし」

どうせハーピーの羽ですぐイリアスベルクに行けるし、安全に空から戻りますか。

フラッグ (海ノ雪旗)

レベル6 熟練度 5

この世界に来て5日目

ここまでの記録と共にポルノフの教会に祈りを捧げた▽

つづく

8日目　　レベリング中

　　8日目

　　試練の洞窟

ガシッ

「貫った！」

「え？」

ぶるん

「ひゃ!!」

でかーいッッ!!

説明不要ッッ!!

肩が凝りそうな大きさだな。

そもそも小柄な体に対して胸が三割を締めているから相当重たいはず。本人も「おもーい！ぱたぱた」と言ってるくらいだ。　　だけど豊満なあのおっぱいは男からしたらロマンの塊である。

まあ、それはそれとしてめっさ可愛いロリ巨乳の女の子を描いてくれたアレ○シさんは本当にいい仕事する。

あの人の絵はとても好きです。

「ちよ、ちよっと!!」

「しかしこれをブラと言っているのか……」

インプの胸に巻いてるこれ、ブラに分類して良いのか不明だ。

腹巻ではないと思うがなんて言うんだらうか？ サラシ？ でも胸を隠す（隠せてない）下着としてはブラに分類はされると思うし……まあブラバムの事だ。 これでも喜ぶだろ。

「も、もう！ そんなに私のおっぱい見たかったら言えば見せてあげたのに〜？ でえもお、せっかちなお兄ちゃんは可愛いから、許してあげ〜る」

そう言つて可愛らしくポーズをとり、垂れ下がっているを欲望の塊がゆさゆさと揺れる。 わざとよく見えるように揺さぶるそれはまるで催眠だ。 正直あれを驚掴みして欲望のままに貪りたい気分になれる。

「これは貰っていくよ、欲しがってる変態がいるから」
「えー！返してよー！」

罪悪感が湧き上がる。

正直下着泥棒は抵抗ある。

けどここはRPGゲームの世界だ、慣れよう。

「むむ、なら何かと交換してよ」

「？ ……じゃあ、おにぎり」

「えー？ 違うでしょうか？ 普通そこは、お兄さんの精子がいいなあ〜？ ほらほら、どう？ このおっぱい、柔らかいよ〜？ 欲望に身を任せて顔埋めて良いんだよ〜？ わたしがきもちよお〜く、してあげるから」

「魅力的な提案だけど現在豊満な胸に飛び込みたい候補がいるから、遠慮します……ねー！」

「むぎゅー！」

一步踏み込むとインプの顔に牛乳瓶を押しつけて受け止めさせると背を向けて退く。

「さらば、魅惑の子悪魔たん」

距離を取ったあと『導きの糸』を上には投げると糸は洞窟の外に伸び、そして意識は糸を通じて少し飛ぶ。

体が流される感覚から解放され、目を開けると洞窟の外に出ていた。

「さて、だいたいブラを回収した。 ……ナメクジ娘のブラはヌメヌメの内に渡しとくか。 大変洗いたい気持ちに襲われるが、ブラハムにこの状態で渡した方がいいだろうし」

ちなみに先ほどの『爆乳』……じゃないな。 インプの見た目は爆乳だけどゲーム内で判定される胸のサイズは確か『豊満』だったけな？ それでも充分なボインプだけど。 さてロリ小悪魔の通称インプ以外にも、お口が器用な小悪魔レミと、お手てが器用な小悪魔ラミにも回収しといた。 奪うのは楽だった。 オドオドびくびくして、クターと無気力で、俺は通り魔のごとくスルリと奪いました。 ボインプに比べてこちらの方がよっぽどブラっぽいな。

しかしインプの胸見ると本当に肩こりそうだな。 サキュバス族特有の風の魔法であのたわわは軽くしてと思うけど、あんなの激しく揺らしたら痛くてたまらないだろうな。 お魚海賊団もか。 てかア○キシさんのは仕方ないね。 どれも魅力的だけど、それ相応に伴うわけか。

「しかしMPの消費激しいけどビームライフルも強いな。 今の段階だとかなり楽」

ビームサーベルやビームライフルと言った初期装備だがかなり扱

いやすい。サーベルに関しては一度召喚すればSPは消費せず時間の限り振るう事ができる。あと無属性だからどんな敵にも通用するあたり扱いやすい。そのうち二刀流とか試してみよう。ちなみに学生時代の部活とかは中学で卓球部、高校で陸上部だったので体力面は問題ないと思われる。それが戦闘面で活かされるかは分からないが体は動く。

ただ卒業後はゲームセンターでスタッフのお仕事したりと学生のように部活など外で活動してた頃に比べたら少し体が鈍ってるかもしれない。あ、アルバイト自体は楽しかったぞ？ 休憩中なんかは上着を羽織ってスタツフTシャツを隠し、アーケードゲームの前に座って、こう… ウツキー！今年も申年イイイ！！って感じにエクバで遊んでいた。あ、申年関連は心の声で叫んで、表では静かにマナー良くやってたからね？

外でゲームを楽しむ時、マナーを守るのは常識である。
当たり前だよなあ？

～ ポルノフ ～
～ 昼 ～

「これ【斧】か？」

「ああ。何にどう扱うかわからないがな」

筆箱に入ってそうな消しゴムのサイズ。

斧の形をしたブラハムからアクセサリを受け取った。

「そーいやブラハムはエクストリームバーサスの職業知っても中身の

全てを知るわけでは無いのか」

「その通り。わたしはその職業の存在を知っても中身を知るわけではない」

「それなのにマキナ扱いされるマキブを持つてるとかめちやくちやだなあんだ。 実を知ってんじゃないのか？」

「これはたまたま見つけた物に過ぎない。 そしてとある残念な蛇からお高い情報を得たお陰でこのアイテムを知ったわけだ。 でも運命の赤い糸に選ばれた者だけの力、わたしは絶望した！」

「おまえ実はティエリアだろ」

「しかしこれを餌にしてブラをコレクトしてくれる運命の人が現れたわけだ！」

「いま餌つったなコイツ？」

「残念ながらこれはレアアイテムの一つ。 たとえわたしの趣味がブラだとしてもコレクターとして無償で渡すことは出来ない。 許せ」

「いや、許さないよ？」

「そんなわけでフラッグ君には【斧】ともう一つ【機関銃】のマキブを渡そう」

「無視されたし。 ……はい、確かに貰った」

「では行け、少年。 二つの山と言う名のロマンを支える薄い布を求めて!!」

「……」

おそらく毎回このテンションで見送られるんだな。

やはり変人だ、この人。

く イリアスベルク周辺 く
く 夕方 く

「15コストで『斧』言われても『ヒートホーク』くらいだよな？ ザクとかツダとか」

ビームサーベルと被ってるように見えるがヒートホークを試したところ『火属性』扱いで攻撃してるようだ。名前に『ヒート』が入ってるからだろう。でもたしかに原作も斧の刃に熱が帯びて、それで攻撃してるし間違いでは無いか。しかし序盤で火属性の高火力は嬉しい。命中率はビームサーベルより心配だがハーピやフェアリーなど機動力高い敵以外に挑めば良い話だ、困ってはいない。

「そして【機関銃】は『マシンガン』だな」

軽い武器だから片手で持てるし、しかもビームサーベルと共にマシンガンで追撃できる。威力は低いけどダメージ増加にぴったしだ。当然だが実弾。そしてエネルギー砲じゃないのでMP消費ではなくSP消費扱いはなるほど。

実弾や爆弾や近距離攻撃はSP消費

ビームや遠距離攻撃はMP消費

ビームサーベルはエネルギー源がビームだけど近距離攻撃扱いだからSP消費になるのか。

ややこしいけどこれ、面白いな。

「うがー！ かえせー！がおー！」

「はい、ソーセージ。これあげるから許して」

「お兄さんは良い奴だな！ がー！」

チヨロいな。

まあ食に忠実な生き物だからブラよりも肉なんだろう。

やり易い。

狼娘が肉に食らいついてる内に俺はそそくさと退散すると…

「あれはたしか…」

丘の奥をよく見たらルカさん御一行じゃないか。そして後ろにいるのはフェニックスの小娘だ。ほー、あの闇商売を止めたのか。行動が早い。そしてルカさんの後方に……イリアスだ。俺は彼女に姿見られない方がいいな。いまはロリアスだけどこの世界の人間をほぼ覚えてるからこの世界に存在しない俺が見つかる今後面倒だ。

だからいないフリ、いないフリ。

俺は俺の冒険を続ける。

断じてブラ集めに精を尽くすだけで終わらない。

マキブが欲しいから今を頑張ってるだけ。

目的はお魚海賊団に会う事。

やはりあの二人の漫才(?)は見てみたいからな。

「わんわん」

「おすわり」

「くうーん」

「では、それじゃねー」

「え!? 放置プレイわん!」

「因みに俺が居なくなる前に動いたらその首輪で舌を巻きつけて引き千切るぞ」

「あおーん!?!」

犬娘に対して別にそんなことするつもりはない。でもこのワンコに対しては虐めてくださいオーラが出てるので、ついやっちゃうんだ。

「ルカさん御一行がイリアスベルクに居るということは、宿屋使い辛いな。もしかしくなくとも今日は野宿か………んん?」

そう考えてイリアスベルクから離れると見知らぬ冒険者が現れた。しかしローブを被って姿が見えない。……地面を這う尻尾がチラリとしているが、もしや？

「どうも、こんにちは」

とりあえずまずは挨拶。もし悪党なら既に後ろで構えてるビームサーベルを展開して斬りつければ良い話だ。俺はフレンドリーに声をかける。しかし…

「その後ろに隠してる武器を下ろしてからコンタクトを取るんだな。まるで悪党だ」

バレていた。

「仕方ないだろ、こちらも挨拶した相手が悪党だったら先手必勝で挑むつもりなんだから」

「ほお…？ この魔王アリス・フィールズに向かって良い度胸だ」
「！」

ローブを剥ぐと表すのは小さなヘビの少女……いや【魔王】だ。

「と、言ってもこの姿で通じるかは別だが見た目に騙されないようにな」

「……いや、充分だよ。よくわかった。あんたは強い」

「ほお？」

イリアスベルクから少し離れたところから現れたヘビの少女、その名は魔王アリス・フィールズ17世であり、この世界の作品の無印であるキーマンの一人だった。

「まあ強いと言われて嬉しくない者はいないが……奇妙な奴だな、お主」

「それはモン娘視点の話かな？俺からしたら君達も奇妙そのものだけぞ」

「くくく、確かにな。それで？貴様の唐突なコンタクトの先には一体何があるのかな？追い剥ぎか？」

「そのつもりはないよ、ただ挨拶しただけ。そこでこちら辺うろついているのは己を強くするためにこちら辺で高めていたところだが……少し物足りないと思ってたところだ」

「ふむ……お主、腕は立つか？」

「こちらの奴らに負けるつもりはない」

「……手合わせ願おうか」

「俺にメリツトは？」

「己を高めたいのだな？ならばうってつけだ。私は強いぞ？」

「それに心配するな、これは殺し合いではない……それとも手加減を知らず、殺し合いしか出来なような軟弱者か？」

「挑発含めて言ってるなら後悔すんなよ？俺は弱くないぞ？」

「ならば私は強いぞ？」

次の瞬間俺はビームライフルで牽制。アリスは突然のビーム攻撃に反応して辛うじて回避する。蛇はよく動く生き物だがアレを回避するか。凄いな。種族的にファイターな奴だな。

「ヒートホーク！」

「むー」

アリスは近距離攻撃の対策に手を伸ばすと真つ黒な煙を出す。初めて見るがアレはおそらくブラインドの魔法、厄介な事してくれる。

「このっ！」

真つ平らな岩の上に立ち、ビームライフルを地面に当てて爆風を作る。しかし威力は弱く、ブラインドの煙は止まらない。意味無さない事を理解して身を引き、その場から回避するが片目だけがブラインドを浴びてしまい視界が悪くなる。

「次はコッチだ！」

そう言つてキラリと何が光る。

レイピアのように鋭い突剣だ。

変則かつ素早い動きの蛇が持つとなかなかの凶器に早変わり。

威力は無いが着々とダメージを与えるこの武器に俺は神経を更に尖らせて迎え撃った。

が…

流石に英才教育受けてるだけあつて抵抗も虚しく。

「zzzz……へえあ!？」

「起きたか。 案外抵抗力があるのだな」

「う…まだ、ね、ねえむりは、ふえああく、あ、ああ、だ、め、だ、ね、眠い…ぐう…んぐあ、ああ! おぎいろおおお!俺ええ!!」

「くつくつ、必死だな」

アリスは剣を納めてニヤニヤと笑っていた。

眠ってる敵に攻撃するほどじゃ無いらしい。

しかし…あかん、意識がぐらんぐらんする。

これが催眠に誘われる感じか。

やばい、このまま闇深くに誘われない、落ちたらすごく楽だろうし。でも目の前にモン娘のアリスだからな、無抵抗に眠りつくとか何されるかわかんねえ…

ゴンっ

「いてて…あー、まだクラクラする」

「くくく、自身を叩いて起こすか」

「あー、やめ、だめ、降参、無理、またスリープかけられたら確実に眠る。そうなると勝ち目無いから降参」

「まあいいだろう。実際ブラインドだけで済むかと思っただけがなかなか攻撃を凌いでくれる。こちらもう少しそちらの技量を見誤ったことになるな」

「初対面で敵の力量見抜けとか達人の域だから、悲観することは…：ふあああ、ね、眠気、が」

「攻撃はせん。そのまま一旦転がるのもよし。数分もすれば覚めるだろう」

「攻撃はせんといって、性的に襲わないとは一言も言ってないだろ、絶対何かある」

「くくく、バレたか」

やはりモン娘。

そうだろうな。

「まあいい。少し騒ぎ戯れていると目が覚めただろ？ ならば行くぞ」

「……………はっ」

今ので目が覚めた。

てか行くぞってどゆこと？

「イリアスポートだ。 あそこの道中は敵が強いからな、お主ほどの強者がいるなら多少楽になるだろう」

「……あー、なるほど。 もしかしくなくとも俺と手合わせ願ったのはイリアスポートの道中を共にする力があるか試すため？」

「理解が早いな、その通りだ。 力が下がってしまっただけは私もザコには敵わぬ。 しかし貴様なら突破も容易いだろう」

「……条件が一つだ」

「む？ なんだ、言ってみろ」

「俺の名はフラッグだ。 道中共にするならそう呼んでくれよ、アリス」

「!! …いきなり気安い奴だ。 普通ならとぐろで締めてるどころだが特別に許してやろう」

「はいよ。 そんじゃ今日は遅いし、一旦イリアスヴェルに戻るぞ。

早朝に切り抜ける」

「夜でも構わないぞ？」

「あんたは蛇故に夜行性だからだろ！ 俺は違うよ！」

こうして、まさかの登場人物（人？）と出会い、しばらく道中を共にすることになった。

フラッグ（海ノ雪旗）

レベル9 熟練度 8

この世界に来て8日目

ここまでの記録と共にイリアスヴェルの教会に祈りを捧げた▽

つづく

9日目　　道中

　　9日目　　朝

「ビートホーク！」

刃が熱を帯びると真つ赤になり、火属性の斬撃でラフレシア娘を斬りはらう。

「熱い!!」

「きやー!!」

　　こうかはばつぐんだ!!▽

「こちらも焼き払うぞ、ファイヤー！」

アリスも素早く”演唱”を済ませて敵を”炎症”した。

……ごめんなさい。

言いたかっただけです。

熱の込められた戦いが即冷却されましたね…

「アリスは前衛も後衛もできるから強いな」

「おまこそ、扱いが困難なマキナを上手く使って戦っている。相当慣れてるな？」

「仕組みと理論だけならそれなりに学はありますが、実際にこの力を扱うのはまだ一週間くらいでしてね、相当慣れているのは否定します…よつと！」

ラフレシア娘から伸ばされる触手を斬りはらう。　勝ち目が薄ま

る現状にラフレシア娘は戦意を失いつつあった。

「だが敵と対立すると時のその姿勢、ただ平和にボケていたとは思えぬな？」

「そうでもないさ！ 平凡と生きていた。ただこのマキブ達が力を貸してくれる。なんと言うか、元々あったイメージが更に深まると言うか、それを力にしやすい」

「ならそのマキナ^{マキブ}を通してあるべき強さを、最も重要な強さをフラッグに憑依してるのだろうか」

「…と、言うど？」

「道具にも意思があると言うことだ。お前に使われているマキナは応えている。それだけだ」

「なるほど」

宿っているのかな？

この形を通して。

ビームサーベルもビームライフルも、これまで宇宙などを駆けてきた戦士達の意味が？

あるのかな？

そうだな、ロマンスを求めるなら、あっても良いかもな。

もちろんマキブ頼りで終わらない。この世のシステム（レベル）も気にしつつ大事にしなければモン娘に食われる（意味深）未来に一直線だ、気を引き締めていたい。

死は隣り合わせ。

だが恐れ過ぎず、しっかりと備える。

そのための、下着集め……

あかん、言ってる悲しくなってきた。

「ところで我はそれをマキナと言ったが……上位変換された力か？

何かマキナとはまた違うモノを感じる」

流石魔王さま。

マキナの知識はあると思っただが見破るか。

「あー、コレはなんというかし、その、アレだ。選ばれた人にしか扱えない特殊な仕組みなんですよ。召喚魔法わかりますか？ それに少し似た奴です。魔物や魔獣を召喚するのではなく、武器を召喚する感じです。ただ機械仕掛けな武器ばかりなのでマキナと似た存在である事は変わらないので『比較的』マキナ師ですよ、この職業は」

「ふむ」

「召喚と言えども戦うのは自分の力です、だから戦士と変わりないね。

まあ、あまり模索しないでください、むしろ俺はアリスが魔王を名乗る方が不思議だ」

「む……それは深い訳があるのだ」

「そうですね。仮に本物の魔王だとしてもあまり街中とかで名乗らない方が良くもしれませんね。何を考えてるかわからない奴がいっぱいですから」

「それは分かっておる」

でもまさかこうして原作無印の主人公の嫁さんと隣で戦うとは思わなかったな。パラドックスだからあり得ないが彼女とのエンカウトには驚いたよ。声をかけたのは俺だけどき。

「お昼ご飯にしません？」

「そうだな、無理しても仕方あるまい」

「はい、サンドイッチ。沢山買つといた」

そう言ってアリスに渡すと驚かれる。

「今は旅仲間だからな、このくらいはいいさ。……尻尾振ってしま
うくらい嬉しかったのか？」

「なっ！　しょ、庶民の味に心躍らせる訳があるか馬鹿者、もぐもぐ、
おいしい♪」

「まだあるぞー」

「もぐもぐ、褒めて使わす、もぐもぐ、おいしい♪」

堕ちたな（確信）

く イリアスポート く

く 夕方前 く

「無事到着か、少し長かった」

「そうだな。　しかしお主の力が本物だったお陰で1日もかからず到
着だ。　朝早くから出たのもあるがここまで余裕に終えたのはやは
りお主の力だ」

「アリスが魔王だからだと思っけど」

「それもある」

「はは、そうかい（苦笑い）」

道中は正直レベル的にやや足りなかったが、職業の強さが充分足り
ていたからここまで無事到着出来た。　おそらく普通に下級職につ
いてたらここまでこれたか謎だったな。

「じゃあ」

「うむ」

「お疲れ様」

無事に到着した事で互いに握手を行い、その場で別れた。多分宿で顔を合わすと思うけどね。

しかし潮風が気持ちいいな。

街の空気は少し穏やかじゃないが。

……そーいや船は大丈夫だろうか？

原作では嵐がどうちやらこうちやらで船を出せなかった記憶だが。

「おや坊主？ 乗るのか？ なら早くしな、もう出るぜ。おっと、あと代金は払えよな」

「え？」

どうやら乗れるようだ。

だが確か嵐が起こってほとんどの船は途中崩壊してたはず。ならこれただの棺桶なんじゃ？

ドンっ

「いでっ」

「おらー早くしろ！後ろつつかえるだろ！」

グイグイ

「うおおお!!ま、待つ、ちよちよ!」

いつのまにか荒くれ者らしき人が数名現れ、俺は船の奥に押される。冒険の疲れで不意な押し込みに耐えれずそのまま甲板に流された。

「出航だー！」

「急げ！」

「イカリを上げろ！」

「うがアアアア！怒ったぞ!!」

「それイカリちやう!!怒りや!!」

「……」

マジかよ、乗っちゃったよ…

てかおれ未払いで乗り込んだし、船から下ろしてくれないかな？

「いまさら降りれる訳ねーだろ！ もう動くぞ！ 変なことしてないで奥にすっこんでな」

「ええ…（困惑）」

気づいたら船は港を離れて大海へ突き進む、逃げ場を完全に無くした。

「まあハーピーの羽を使ってここから飛べばいいよな？」

ならばばらく航海を楽しむか。

そんで嵐とかで危なくなったら逃げよう。

おそらく乗員も脱出用にハーピーの羽くらい持つてるだろうし。

「もうすぐ夕方か…」

それよりも疲れたな。

アリスがいたとしても道中は二人だけの冒険だ。

もう一人か二人いた方が圧倒的に楽だ。

そういう仲間と言えば、先程まで共にしていたアリスの仲間にはバ

ニースライム居なかつたな？ まだ仲間になるタイミングでもなかつたのかな？ まあそのうち見かけるだろう。

「あ、ハンモックだ、使わせてもらおう」

あー、なんか懐かしい。

ハンモックなんて子供の頃に乗ったきりだな。

逆に船酔いが怖くなると思うがおれは眠り込んだらまず船酔いは大丈夫だ。

船酔いは思い込みで気分悪くなることもあるからな。
気にしなければそんなに気にならない。

「……zzzz」

しかし船出するなんて大丈夫なのか？

いま夕方に差し掛かる頃やぞ？

やっぱりハーピーの羽でこの船から逃げ出そうか？

もしかしたらこの船は非合法で出された船だったりしてな。安
全面も何もかも捨て、命が惜しくない奴は乗り込め状態だったり……

「……少し寝てから考えよ。 20分だけでも良いから」

眠気と疲労には勝てない、それが生物。

でもこの選択肢を後で”後悔”する。

いま”航海”してるだけになってなあ!!

すいません。

言ってみたかつたんです。

◆?

えー、どうも偽名のフラッグです。
ハンモックに揺られて1時間が経過したころです。

「つて!! 寝すぎだろろろわわわ!!」
グシヤ

寝すぎたことに気づいて目を覚めますがバランスを崩してハンモックが一回転して放り出され、そのまま地面に頭をぶつけて完全に目覚めた。

痛い…

俺はギャグ漫画じゃねえぞ?

てか20分だけ睡眠と言ったのにこのありさまだ。
しかし幸いにもまだ嵐にぶつかってないようだ。

「…」

もしかしたらこのまま目的地に着くのでは?

そんな淡い期待が膨らむ。

とりあえず表に出て夜風に当たろうとした時だ。

乗客と乗員が騒ぎ出す。

「なんだアレは!!」

「なんだなんだあ!?!」

まさか嵐か!?!起きてて良かった!眠ったまま巻き込まれて溺死するところだった。

仮に嵐の中で目覚めても、風が激しいとハーピーの羽も安定して使えるかも不明だからな。

まず【ハーピーの羽】は悪天候だったり、敵意などを感じると羽が動かなくなる。ただ使用者がそれらを凌駕するほどの力を持ち合わせてるならハーピーの羽は動くのだ。でも安全な場所で使うことを強要されるので戦闘が始まったりする前に使うべきだろう。

とりあえず早めに離脱を…

「?」

あれ?

なんだあれ?

嵐じゃないな?

襲ってきたのは嵐じゃなくて……大きな船?

「………海賊船?」

「海賊船だ!」

「迎え撃て!!」

「馬鹿野郎!逃げるんだよ!」

「逃げるぞ!どう見ても小規模な海賊船じゃねーだろ!マジで大きな奴だ!!」

どうやら本当に海賊船のようだ。

望遠鏡覗いて見てる奴が言ってるからそうだろう。

「夕焼けを背に海を渡る海賊船か、なかなか絵になるな」

しかし次の瞬間：
何か投げ込まれた。

コンコン
コロコロコロ……

「え？」

プシューツ

「っ!？」

煙幕か!? 次々と海の中から投げ込まれる!

「けっほ! けっほ!」

俺は煙を払いながら煙の薄い壁に寄つ掛かり、投げ込まれた海を見渡すと驚きに直面した。

「え!？」

なんと錨イカリを持った人魚が海面から顔を出していた。それも一人では無く何人もだ。群れる人魚たちは煙玉が海水に触れないように船へ投げ込んでいる。

「まさかこの船に強襲かよ! けっほ!」

俺は濃ゆくなる煙幕から逃げるようにハンモックで眠った寢室に潜り込んだ。乗客は俺の飛び込みに驚くが、乗員の戦闘の騒ぎに怯えると近くにあった棚を押して扉を塞ごうとする。俺も手伝って防衛線を張った。

「お、おい、兄ちゃん、外はどうなってんだ？」

他の乗客が聞いてくる。

「海賊がこの船に襲ってきたらしい」

「!!!?」

乗客はそれぞれ目を見開く。しかし海賊と言う物騒な単語に恐れを抱くと震え始めた。まあその反応は間違っていない。内海とは言え地上よりも厳しい世界だ。荒くれ者の世界に生きるモン娘に打ち勝てるほど人間ってのは…弱い。

「この部屋で戦える者は？」

周りを見渡すが一人が…

「いない…」

と、ひとりの人間がその現実を突きつける。

「……ハーピーの羽を持つてる奴は？」

「イリアスポートで買えばいいと、言うよりか最近物流が途絶えてしまっただけで買えなかったと言う方が正しいか…」

「そうか……おれがそれなりに沢山持っている。一つのグループに一つ渡す、使ってイリアスポートに逃げるんだ」

「でもこの乱闘でハーピーの羽が使えかわからねえ」

「なら乱闘が薄いところで使えばいい話だろ。俺がこの部屋に入らせないようにする、その間に裏口からこっそり出てハーピーの羽を使うんだ。この部屋も時期にバレる」

「！」

「ほら！早く行く！海賊に捕まりたいのか!？」

俺はありったけのハーピーの羽を持ってない乗客に渡す。
しかし…

ドン！ドン！

「!？」

扉が叩かれた！

これはもうじき来るぞ！

「くっ、丁寧に配ってる場合じゃねーな！」

俺は悠長に渡すことをやめてハーピーの羽の束を投げて渡し、逃げるべき方向に指差して乗客を戦域から追いやる。

「いけ！早く逃げるんだ！この乱闘に女子供を巻き込むな！」

俺の声に押されて裏口から乗客は出て行く。

ドガラガシヤ！

「むむ！ここにお宝はあるか！」

「!」

大きな錨。

大きなたわわなお胸。

大きな人魚の尻尾。

海の荒くれ者『海賊マーメイド』だ。

普通に戦闘能力の高いモン娘。

今の俺は勝てるか？

いや、別に勝つ必要は無い。

ある程度あしらって俺も逃げればいい。

「お宝は無いよ、諦めな」

「それを決めるのは私だーうりやあー！」

海賊マーメイドは大きな錨を振り回して攻撃してくる。

船という陸に上がってるから今はこつちが有利だが、その分……

バキツグシヤ！

「ちよお!？」

しやがんで回避する。

空を切った錨が後ろの柱にぶつかり嫌な音と共に柱がへし折れた。

威力やばいやばいやばい。

当たったらひとたまりもないぞコレ。

「っ、火力は必要ないよなー！」

マシンガンを召喚すると海賊マーメイドの顔に乱射する。

もちろんモデルガン程度にだけ火力は抑えて怯ませることを中心に。

「うおっ！ やめろー！」

敵が怯んでる隙に俺は床をゴロゴロ転がり、ハンモックのネットを掴んでまとめる。

「これでもくらってな！」

「ビールライフルを敵の上に射ち放ち、天井にぶら下がっている空のランプを撃ち落とした。ランプは真下に落下して海賊マーメイドの脳天に直撃させた。

ゴチン！

「ぐえっ」

「それ、大漁だな！」

ハンモックネットを敵にぶん投げて海賊マーメイドの動きを拘束する。

「うわっ！次はなんだ！」

「前格」のライダーキック！」

エクバに良くあるライダーキックの真似事をして海賊マーメイドを転がすと俺はそのまま寝室を出て外に飛び出す。

そして外を見渡した光景に対して…

「うわっ！ 圧倒的ではないか!?!」

ちなみに圧倒的なのは海賊団であり、人間の彼らはコテンパンにされている。幸い命までは奪っていないが一箇所にとめられている。これが海賊に捕まると言うことか。

「まだ居たぞー！」

「！」

やばい、見つかった。

早く逃げないとな。

なんとか戦域から撤退してハーピーの羽を使わないと。

今の俺なんかでは海賊マーメイドに勝てない。

「アシエル”姉貴！ そっちに行きましたぜ！”

「なっ?!?!」

周り右して逃げようと思った瞬間だ。小さなナイフを片手に構えた青いサメの人魚が通せんぼする。俺は小さなタルを蹴飛ばすが、冷静に尻尾で振り払ったお魚海賊団の副長であるマーメイドがそこに居た。

「おおっと？ まだネズミがいたか」

ニヤニヤと語りかける副団長。

「それは忍び寄った曲者に対するセリフだぜ？ そんでおとなしく捕まるかよ！」

冗談交えつつ俺はマシンガンを放り投げるとアシエルはそれをナイフで弾く。俺は大きな樽を踏み台上の階に逃げ込みながらヒートホークを召喚して、すぐに他の敵から対応できるよう備えた。

「しかし、まさかここで”アシエル”に出会うとはな……………え？ アシエル??」

いや、待てよ？

もしかしてこの海賊団ってまさか…

「…」

「おお？　なんだ？　逃げないのかい？」

振り向いて確認すると下ではニヤニヤとするアシエル。

強烈に大きな二つの山も気になるが彼女がつけているバンダナを
確認すると…

「もしかして”おさかな海賊団”か？」

「お？　私たちを知ってるのかい？」

この反応は当たりだ。

こいつら、紛れもなくそうだ。

『おさかな海賊団』である。

だが出会い方がこんな過激的とはね…

少し残念だ…

「つて、逃げるぞ、俺」

しかし次の瞬間、一筋の刃に反応するとバックステップで回避しようとするが構えていたヒートホークは弾かれてしまう。

「いつてて…次はなんだよ…？」

そして目の前には…

「アシエル！　敵を追い込んだぞ！　こやつを挟み撃ちだ！」

「おいおい船長？ 私は下の階ですぜ？ 挟めないですよ」
「う、うむ、そうか。 なら……どう挟み撃ちすれば？」

悩めるアホの子に俺はとある場所に視線を向けながら言葉を挟んでみる。

「その胸で挟めば？」

「おお！なるほど！」

うん、アホだった。 間違いないこの子は”あの子”で間違いないだろ。 そんな副団長のアシエルはケラケラ笑いながら階段から上がってくるし。 余裕ですぬ姉貴、流石っす。

「ふふん！ ならこの胸で挟んでやろう！」

やった、剣技を捨てて胸で挟もうと迫ってくる。

これはチャンス。

「見つけたぞ貴様！」

「！」

奥の扉が勢いよく開かれた。

先ほどあしらった海賊マーメイドだ。

相当怒っている。

「覚悟しやがれ！」

そうやって錨をぶん投げる。

だがその錨は…

ゴチン!!!

「ぐえええええ！」

「あ」

狙いは外れて船長の後頭部に錨がぶつかる。

うわあ、あれは痛そう。

てか、痛い（確信）

そして船長はふらつきながら地に倒れて、懐からコロコロと何が転がった。

煙幕か？

「なっ！お頭！　なんで煙幕じゃなくて本物の爆弾を持ってきているんですか!？」

「きゆうう…」

返事がないただのアホのようだ。

その顔はかわいいに尽きるがそんなほのぼの要素は文字通り吹き飛びそうになる。　なんと懐から落ちた爆弾は揺れる船に流され、コロコロと転がる。　すると爆弾の導火線がとある熱に触れるた。それは俺が落としたヒートホークだ。　まだ刃に熱を帯びていた。　そして

カチツ

シユウウウ

「!?!?!」

導火線に火が灯される。

「ううう、んん？」

「お頭！早くそこから離れてください！」

「え？」

「爆弾が！爆弾が！！」

「!?」

アシエルは叫び声にお頭は反応する。船長は導火線に火が灯された爆弾に気づいたがその惨状を理解すると身が硬直して動けなかった。

「あ、ああ、ああ！！」

船長はアクシデントに慣れてないのか完全に固まっていた。錨を投げた海賊マーメイドは驚き戸惑い動けない。アシエルは動けないお頭の命に関わる事を理解したが、悠長に階段を登っていたから救出に間に合わない。

そして勢いよく消える導火線。

「ツツ!?」

俺はマシンガンを構える。しかし導火線を切ろうと思ったが狙い外し、もし爆弾に刺激を与えたらゼロ距離で爆発する。その危険性を振り払うように俺はマシンガンを投げ捨て、目の前のお頭を……いや、おさかな海賊団の「ボニー」を助けるべく俺は飛び出した。

「伏せろおおお!!!」

「!!」

次の瞬間――船の上で閃光が走る。

1人の人間と1匹の人魚が巻き込まれた。
その姿を副長は眺めて叫んだ。

「ボニーイイイ!!!」

副長の悲痛がこだました。

つづく

10日目　　揺れる船の上で

　　どこかの船　　

強烈な閃光と共に身を焼き尽くした感覚から一瞬にして意識を失う。もし意識を保った状態で焼き尽くされたら人は慣れない痛みと熱にやられ、精神的に襲う大きなストレスに耐えれず、一瞬で死ぬだろう。

そんな俺は人の限界は超えただろう脚力で船板を蹴り、無我夢中で飛び出した。

襲ってきた人魚を助けるために。

ああ、襲ってきたとかどうでもいい。

その人魚は無事だろうか？

爆発から庇うように抱きしめたが人間一人程度の壁で防げるか不安だ。無事ならいいが…

しかし俺はあそこで命を投げ捨てたか…

爆弾については自業自得なんだけど俺は居ても立つても居られなかった。そりゃ好きなキャラが悲惨な目に合う。それは心苦しいが、命投げ打つてでも助けたいのかと聞かれるとわからない。自分が大事だからノーと答えるかもしれない。

だが、やはりかな。

男としてくだらない部分が出たのかな。

女の子を助けたくてヒーロー気取ったのかもしれない。

でも、まあ、なかなか自分でカツコよかったなんて思う。

この世界に来て勿体ないことしたけど…

まあいいかな。

人助けではなく、人魚助けになったが、原作に必要なキャラが助かったんだ。

結果オーライとしよう。

愚かな事には変わりないが俺は少なくともこの行動は恥じない…

さて、目覚めたら次はどうなるかな？

そこは天国か地獄か…

または輪廻転生してどこかに覚めるか？

達成感と共に意識は…

◇

お嬢が爆発に巻き込まれた。

だが対立していた1人の青年が飛び出してその爆発から守ろうと庇った。

おかげでお嬢は軽傷。 ちよつとした火傷傷だが私たちは人魚ならその程度ならすぐに治る。 しかし大火傷負ってしまったら後遺症として残る。 マーメイドは生命力があるから大怪我も平気だと甘い考えはできないのだ。 モン娘は丈夫だが無敵ではない。

しかしお嬢を庇うように抱きしめて、爆発を背にして守った。 そのため青年の背中には大火傷を負ってしまったそれは血が止まらない。

爆発で吹き飛びながら気を失い、放り出された船板の上でピクリとも動かなかつた。 しかし呼吸はあり、まだ生きていた。

あの近距離で爆発を受けて不思議だ。 助かったお嬢は冷静を欠

いながらも皆に撤退を指示した。お嬢の慌てようを見た子分達は捕まえた人間から追いつきも忘れて撤退する。

襲撃した報酬は少々の食料を得たくらいか？

その時、お嬢は倒れた青年を連れ出そうとした。

気が動転した私は止めたがお嬢は「助けなければ!!」と振り払う。

船を襲った側としておかしなことを言うがお頭は言葉を止めずに言い放つ。

いつもの私なら怒るところだが「いつもわがままを言うが今回の今回は何がなんでも譲れない!!」とお嬢の必死な目を持って言われた。

子分にも急かされ、私がココでモタモタするわけにもいかないので了承した。

そして今はおさかな号の医務室。

そこにひとりの青年が苦しそうに寝ている。

「…」

この青年のお陰でお嬢が助かったのは確かだ。

お嬢は……【ボニー】は先人に託された金の卵であり、その卵の殻を台無しにしないように青年は身をもって守ってくれた。たしかに爆発から守ってくれたことで彼は恩人だろう。でもなぜ助けてくれたのかは不明だ。しかしそれは彼を救ってから問うべき。

そして【おさかな海賊団】として彼に恩を報いるべきだ。

「すまぬ、すまぬ！青年！」

「お嬢、落ち着いてください」

「っ、アシエル！ 我らおさかな海賊団は船を襲うにしろ殺傷は論外なのはわかっておるだろ！ 非常時にしても半殺しまで！ それなのに私は！」

「分かっています、だからこの人を助けますよ。まずは人に有効な薬で始めますからお嬢は離れていてください」

「わ、私に出来る事は…」

「後ろで見守っていてください」

「っ、ア、アシエル、本当に何も無いのか？」

いつもならめんどくさがるお嬢も今はこの人のために必死だ。
だから少しお嬢に出来ることを考えてあげた。

「……なら、この薬で”アレ”をやってください。前に座学で教えましたね？ それを完成させて持つてきてください。まあ”アレ”に関しては最終手段で扱いますが有るか無しかで」
「わ、分かった！」

お嬢は邪魔にならない隅の方に移動。
器を置き、そしてナイフを持って腕に斬りつけ始める。
どうやらお嬢も本気のようなのだ。

「わたしも治療を急ぐう」

それから青年の服を剥ぎ、背中を上にする。

酷い火傷だ…

これをお嬢が受けたら無事ではなかった筈だ。
しかしなぜ助けてくれたのか…

「いや、直すのが先決だ。よし…」

人の治療をしたことない訳ではない。

だがここまで酷い怪我の治療は初めてだ…

……正直不安だが先人から託されたお嬢の恩人だ。
救ってあげないと…

◇

波で揺らされる感覚が心地よい。

そして口元は鉄分の味で満たされていた。

吐血でもしたのかな？

少し苦いが、それが苦いと分かるのなら味覚はまだ生きていて、俺はまだ正常だろう。

力の入らない体は地球の重力に任せ、静寂な闇の空間に無防備で横たわる。

しかしそれはとても心地よく、気分が落ち着いていた。

ザバーン、ザバーン…

波の音…

波の…音??

目を開けて暗闇の世界から引き上がる。

ここは？ 一体…

そして出た言葉は…

「……………知らない天井」

すみません。

一度言いたかったんです。

しかしここは？

天国とか地獄とか死後の世界じゃないのは確かだ。

だって背中がヒリヒリしているんだ。

痛みを伴うのは生きてる証拠だるお？つてところ。

…しかし思ったほど痛みは無く、本当にヒリヒリとしている程度だ。いや、どういう事だ？ 確か爆発に巻き込まれたのは覚えていて…

もしやどこかにリスポンしたとか？

RPGゲーム特有の復活ポイント的なのが存在してるのか？

でもそれが”船の中”とはどう言うことだろうか？

もしかして時間が巻き戻った？

いや、それにしても綺麗に手入れされた部屋の中だ。俺が乗り込んだ船よりもやや豪華というべきか。だから違和感にすぐ気付く。

「…窓の外は海だな」

窓から見える大海。

海面は朝のお日様の光でキラキラと綺麗に反射する。

それよりもいま俺が寝転がっているのはベッドだ。俺がいた船の寝室にはハンモックしかなかった筈。なら本当にここはどこだ？ 再度周りを見渡すが内装も高価そうな物も置いてある。あの船にこんなのあるように思えない…

「…」

とりあえずこの部屋を出よう。

廊下に出れば誰かに出会えようし…

ガチャ

「んあ？」

「！」

運良く目の前に誰かがいた。

しかしそれは目を疑う。

金髪の長い髪、やや小さな体格に対して強烈に実っているたたわわが二つ、海賊の帽子と眼帯、そして何よりピンク色の綺麗な鱗を纏った魚の尻尾。

そう、マーメイドだ。

「え……………は？……はあ!？」

俺は思わず声を上げて後方へ素早く撤退する……………が、体の痛みが走り転倒して小さな机に頭をぶつける。泣きっ面に机の角は酷いです。

「痛ツツ!!」

「だ、大丈夫かお主!？」

目の前のマーメイドは心配してるのかこちらに寄り添いワタワタとする。

とりあえずこのマーメイドに敵意は無いようだ。

「いや、まだ少しフラつく…」

「それはお主がああ距離で爆発を受けたからだ！ わ、私を庇って、あんな近くで……………熱かっただろうに…」

「え？ あ……そういやあんた、あの時のマーメイドだな？ ええと……第一印象はアホの子だった」

「な！ ぐむむ、お主もアシエルと同じようなことを言ってくれる。

そんなに私はアホの子に見えるのか!？ これでも私はお魚海賊団の長であり、皆のお頭なんだぞ!」

「そうか。 ならあんたは生きていないとな。 だからあんな爆弾で死ぬとかマヌケ抜かすなよ」

「!!」

冗談のつもりでからかったがお魚海賊団のお頭は何か悩むと目に見えて元気をなくし、どこかコチラに負い目を作りながら話しかけてきた。

「その、爆弾についてなんだが…」

次の瞬間、帽子を脱ぎ捨て、地面に伏した。

「すまぬ！」

「……！」

「まさか人を大怪我させてしまうなんて！私は最低最悪な海賊だ！船を襲う時は極力相手に大怪我させないようにしてるのにこの有様だ！ あんな大火傷して、さぞかし痛かっただろうに！！ 本当にすまぬ！！」

「お、おい」

まさか土下座して謝るとは思わなかった。

「私は何しても構わぬ！ 殴ってもいい！ 切り刻んでも良い！ ぐちゃぐちゃに犯しても構わない！ 私はどうなってもいい！ だから仲間には報いらなくてくれ！！」

「お、落ち着け！ アレは俺が勝手に飛び込んでしまったただけだ！ 覚悟であんな事をやったまでだ。 その、あ、アレだ！ 変にヒーロー気取って助けただけだからあんたがそれほど負い目に負うことは無い！！ 頭を上げる、船長！！」

「…っ、許すのか？ この私を許すのか？」

「許すも何も俺が勝手に大怪我したんだ。 だからあんたのせいじゃ無い。 何度でも言う。 俺の怪我に関してはお前は悪くない」

「っ！」

「それにさ、助けた事についてはアレだ……人だろうと人外の人魚だ

ろうと”こいつは救いたい”と思って飛び込んだ。悪く言えばただの自己満足だよ。ほらヒーロー気取りたい男としての性でもある。だから気にしなくていい。そして今はこうしてお互いに助かって良かったと思ってる。それで良いじゃないか？」

「だ、だが、たとえ自己満足でも私は助けられたんだ、お礼しか無いのだ。ありがとう」

「…」

「私は先人に託されたのだ。だから簡単に死ぬことは出来ない。

もしあの爆発で航海できる身体ではなくなったら私は死んだのも同然だ。ホツとしたんだ大怪我負わなくて済んだと。その代わり助けた青年が爆発に焼かれていた。私は自分が憎い。私は何事もなく助かったと思ってる……うう、その背中は痛かっただろうに……」

「まあ……めちゃくちゃ痛かったのは確かだけど、脳みそが即座に意識を絶ったから死ぬような痛みは感じなかった。それに何となくだが、このマキブ達が守ってくれた気がしたんだ。だから大丈夫だよ。気にしすぎないで」

「うう、お主はとても優しい人間なのじゃ……」

「ありがとう。それよりも目覚めたらまさか襲われた奴らの船だし。ここは……君たちの船って事だよな？」

「う、うむ！ そうとも！ ここは我らがお魚海賊団の船だ！」

「へー、そりや立派だな」

「おうとも！」

さつきまで自分を責めていたが船の話をするとうざりだして元気になる。これだ。

これで良いだろう。

「内装も綺麗だし、良い船だな」

「おお！分かるか！ と、言ってもこれは譲り受けられてきた船だ。

だから私の力で手に入れた訳でもない。だが今は私の船だ！

次の世代のためにもっと良くしないと！」

「志は高く、素晴らしい姿勢だ。 あ、ところで俺の名前知ってるか？」

俺はフラッグと言う」

「自己紹介を忘れていたな。 私は【ボニー】だ。 これから長らくよろしく頼むぞ、フラッグ」

「ああ、よろしく……え？ 長らく??」

「お主はまだ傷が完治しておらぬ。 だからしばらくはここに居てもらう。 これは絶対じゃ。 このまま返しては私はお主に報いきれぬ」

「あまり気にしすぎなくても良いが、そこまで言うならばらくお世話になるよ。 航海に興味がない訳じゃないからな」

「おお！ なかなか度胸があつてよろしいぞ！ ならよろしく頼むぞ！」

「ではお嬢、泳ぎの練習の時間です。 行きますよ」

「うお!? アシエル!？」

「あ、どうも」

この船の副団長、アシエルだ。

青い肌にサメのように少し怖い目つき。

そのギャップに対してボニーに負けぬたわわの持ち主。

「しっかりと目が覚めた様だな。 二日は眠り込んでいたから心配になったが良かった」

「心配していたのですか？ アレは俺が勝手に飛び込んで大怪我しただけです。 それに襲う側と襲われる側で対立していたんですから、別にこうして助けなくてもね?」

「だがあんたは恩人さんなんだ。 放っておくのは無理な話だな。

それにそつちが勝手に飛び込んで助けたと言うなら、こつちも勝手に

救わせてもらっただけさ。 だからもうこの話は終わりだ」

「わかった。 じゃあ、ええと、俺の名前はー」

「フラッグだろ。 私はアシエルだ、よろしくな」

そう言っ互いに握手をする。

今は対立してる関係でも無いから互いに穏やかだ。

そして目の前で大きく揺れる胸、デカすぎ。

肩凝りそう…

「ではお嬢、行きますよ」

「うー、嫌じゃ…」

「泳げないマーメイドの海賊団はダメですよ。 それじゃフラッグ、ここを家だと思って寛いでくれ。 ただし、お嬢の様につまみ食いは勘弁だぜ？」

そう言っポニーを引きずり、小さなこの部屋から出て行った。

「……おれ、二日寝ていたのか」

道具袋を漁っ中身を確認する。

ちゃんと必要ないモノは残ってるようだ。

そしてハンガーにかけてある上着の胸ポケットを漁ると……

「良かった、無くしてないようだ」

マキブは一つも無くさず、上着の中にあった。

これ、ちゃんと収納する袋的なのが必要になるな。

「これのおかげであの爆発から生きのびたんだよな」

不思議なアイテムだが、爆発に巻き込まれた瞬間、このマキブによって護られた感覚はたしかにあった。具体的な説明できないが、不思議なアイテムって理由で今のところは片付けられるだろう。

「はあ……ふかふか」

なかなか良いベッドだ。

多分どこからか奪ってきたと思うけど彼女らは海賊なんだ、不思議ではない。

「……しかしこんなに早くもお魚海賊団に会えるとはな」

冒険して入ればどこかで会えるだろう。

そんな軽い気持ちを持ちながら会える日を期待していたが、まさかのエンカウント。

襲われる側で彼女達と出会った時は彼女らの顔をしっかりと判別出来なかったし。アシエルは分かっていたが、俺が爆弾から守った人魚がボニーなのは後に知ったりと慌ただしい出会いだ。

でもなんか満足したな。

2人を見れて。

「……しばらくお世話になるか」

逃げ出すために用意していたハーピーの羽を道具袋にしまい込んで、今一度眠りにつく。

まだ万全じゃない体を休めるため、しばらく揺られていた。

つづく

18日目　　おさかな号

　　18日目　　

大火傷を負い、何故か運良く…？　かな。
とりあえず一命を取り留め、救われた。

そしてこの船で介抱されてからもうすでに『1週間』が経過した。

目覚めてから2日間は体の痛みと戦い、そして5日目にはあの大火傷から完治していた。人の生命力に感動を味わった…と、言いたいが少し異常だな。何か人ではない治癒力つてのが備わってる用に思えるが気のせいかな？　これもエクバって職業の力だろうか？　まあ、助かったんだから細かいことは別に良い。デメリットがあるなら別だが今すぐ気にする事ではないだろう。

それよりも完治したのだからもうここでお世話になる理由も無くなったし、この船から出て行くことになるだろう…と、思っていたが俺はこの船に残っていた。

ごく自然とだ。

「フラッグさーん、これはなんですかー？」

「どこかで見たことあるね？」

「なにかの生き物？」

「それはうさぎの形に切ったリンゴだ。　そんでこっちは猫、牛、ポニー」

「すごいー！」

「へー！」

「頂きまーす」

「待て待て待て、何故我が入っておる!?　見た目からしてそのリンゴ

は豚だろ！」

「豚さんはひたすら食べるだけの存在なのでこれはボニーだ。ほら、隅の方には愛用の浮き輪が刻まれてるだろ？」

「なるほど、それはたしかにお嬢ですね」

「そんな問題か！ アシエルもこっそり笑うな！ もういい！ これ
は我の胃袋にポイだ！ もぐもぐ…」

こんな感じに俺はこの海賊団と馴染んでいた。

でも、ここにいるのは俺が駄々こねたからとかそんなのではない。

「さて、お皿は回収するぞ。 そんじや今日の夜の見回り班も頑張れよ」

「おう！」

「了解なのだ！」

もちろん子分達とはすぐに打ち解けた。

「どうやら俺のことは「ビーアーピーさんま」って事で丁重におもてなしをしろと指示を貰ったらしく、仲良くしてくれた。あと「それはVIPだよ」って発音を教えたが戦い以外では頭のお粗末な連中ばかりなのでうまくいかなかった。 諦めた。」

「そろそろお休みするぞアシエル…」

「お嬢、まずは歯磨きですよ」

「むむ…」

ボニーはまだ少しわがまま。

でも素直なので逆らうことはあまりしない。

多少なり抵抗したりはするが。

「歯は磨けよぼにー？ 虫歯になったら甘いお菓子は……無しだ」

「わ、わかつておるわいフラッグ！」

「……ふーん？ フラッグに対しては聞き分け良いですねお嬢？」

「!! ……き、気のせいだアシエル。ほ、ほら、フラッグも洗面所までついてくるんだ！」

「残念だが今日はお皿を洗う当番なので着いていきませーん」

「なっ！ うう、しゅん……」

「ほらお嬢、諦めて行きますよ」

「頑張つて一人で磨いといで〜」

ズルズル

「うう〜、フラッグの膝枕で歯磨きが〜」

「昨日やって貰ったじやないですか」

「今日もやってほしかったのだ……」

「やれやれ」

アシエルの姉貴本当に大変だな。

「さーてと……？ どうした？」

「フラッグ兄貴はお頭に甘いですね」

「そうだなー」

「……否定はしない。ボニーはなんというか、揶揄いたい分、甘やかしたやりたい、そんな感じ。あれだ、可愛がってるとも言っているわい」

「わかる！」

「ボニーの方が年上ですぜ？」
「まだ20数年だけどなく」
「でも俺の方が年上に見えない？」
「そうだなー」
「でもアシエルと同じくらいか？」
「それでも副長は何百年も生きてまっせ」
「改めて考えると人魚は長生きだな」
「そんな私も50年は生きてるかな？」
「でも見た目は人間からしてロリだよな」
「そうだなー、大きな人魚になるには個体差と強さで比例するからなー。あと”心”の強さ」
「心の強さ？ なら俺よりもチビのあんたらは心は強くないと？」
「そうだなー。 まだまだ幼げあるからなー」
「こらー！そこは肯定するな！ これからだよこれから！」
「でも数百年は成長がしばらく止まるのが人魚だから今はまだ体は大きくならないね」
「でも個体差はあるんだろ？ 現にやや大きな人魚もこの海賊団にいるし」
「そうだなー。 でもお胸は成長するんだぞー」
「確かに、私たちの血筋だとお胸の成長は止まらないね」
「うんうん」
「……なあ、それ身長伸ばす栄養が全て胸に行ってるから体が成長してないんじゃないか??」
「!!?!」
「!!?!」
「そうだなー」
「あと頭にも行かないから全てお胸に集約されてる感じ？」
「!!?!」
「!!?!」
「せやなー」

怪我人として扱われてた時からココの海賊団とはこんな感じに仲良く会話して楽しんでいる。 結構フレンドリーなところあるから

すぐ馴染めたと行ってもいいけどな。

だからこそ、俺はボニーに頼まれた。

『お、お主が良ければ、その…いつまでも、ここに居ても良いんだぞ?』『でも俺は海賊としての力は無いですよ?』

『構わん! それは追い追いつけて貰ったら良いのじゃ! それにお主は料理の資格がなろうと料理のスキルは子分よりも勝る腕!』

アシエルよりは少し劣るが』

『うん』

『それに光の暗号が分からずとも、戦いの腕前は周りの子分に引けは取らぬ力量! アシエルよりは少し劣るが』

『うん』

『だ、だからな、その、な? こう言っちゃ勝手だが、お主をここで離すには惜しいと言うか…あ、いや、でも! こ、これは我のいつものワガママである! だ、だからアシエルの様にあしらわれても仕方ないぞ!』

『…』

『…まあその、ここに来たのは我を庇って大怪我を負って、我が連れてきたに過ぎぬからな。その後をどうするかはお主が決める話だ。

だ、だが…』

『ボニー』

『な、なんだ?』

『お魚海賊団は良いところだな、だから俺も気に入っている』

『う、うむ。 そう褒められると嬉しいぞ…』

『だからもつとこの海賊団を知りたい』

『!』

『お邪魔じゃなければこの海賊団に入れてくれ。 この組織のために役立つ様に頑張るからさ、俺も一員にしてくれよ、お頭』

こんな感じにここに入ることになった。

この海賊団に初の人間の仲間の加入に驚いていたがお頭の半横暴

的な説明により俺はこの海賊団の加入が決まった。

大半は歓迎してくれたが、残りは不安がっていた。

まあそこは信頼で勝ち取るつもりでいた。

それからだ。

俺の加入に対して反発もなく『よろしくな』と歓迎してくれたアシエルから海賊団の掟やルールを学び、役割も渡された。

そのテストとしてまず家事だ。

海賊船の環境を常に綺麗に維持することを聞かされながら、掃除、洗濯、料理、食材の管理である。

ちなみに自分で言うが家事のスキルは高いと思う。カップラーメンで昼や夜を済ませる男でもあるが食べたいものがあるならキッチンに立ってやれるくらいには腕はある。出来る、出来ないの2択なら「出来る」と言えるレベルだ。

そのため料理は合格。

一人暮らしで慣れてる故に洗濯も掃除も合格。

そして最後に食料の管理だが、少しテストを受けたりした。どのリンゴが期限切れそうか？ お魚はどうやって保存を聞かせるか？ そんな感じだ。とりあえず持ち合わせてる知識と経験でアシエルに解答を続けると満足げに頷かれた。正直嬉しかった。

それから料理、洗濯、掃除、管理の四つの課題をこなした結果、全て合格ラインは超えていた。

だからアシエルは「これで私も少しくらい負担が減りそうだ」と笑っていた。

いや、マジでお疲れ様でっせ姉貴。

でも出されたテスト内容だが、管理以外は対して難しくも無かった。むしろ最低限出来るかどうか確認する程度のラインだったので簡単な言葉に尽きる。おそらく周りの子分が満足に出来てない

ただだろう……どれだけ真面目じゃ無いんだよ。だからテスト前に「せめてマシなくらいには出来てくれよ……」ってアシエルの小声を拾ったがその意味が理解できた。

だから俺は”力になる”って言葉に嘘をつかないためにもテスト後のアシエルに言った。

『これまで本当に大変でしたね。でもこれからは俺も力になりますから、よろしくお願いします』

そう言うときアシエルは目を見開き、そして心なしか感動してるか分からないが俺の助力に深く感謝した。それからアシエルにこれからは同じ土俵で助け合う仲だから敬語は無しの付き合いになった。アシエル姉御、マジ姉御。いや、やはり姉貴が良いかな？そこらへんどうしよう。

1週間経った頃にはアシエルとは良き関係を築いている。信頼は充分に勝ち取れたみたいだ。良かった。

で…

ボニーについてだが、ガミガミと言うアシエルからの逃げ場所として良く俺は扱われている。

あと愚痴の相手にされているところだ。

まあ別にそのためだけの存在として使われてはいないぞ？

普通に話し相手として会話する。ボニーからは夢を聞かされたりすれば、こちらからはボニーのこれまでの航海を聞いたりした。

そんでアシエルからこっそりとオヤツを食べたりと彼女の悪戯に合わせて楽しんだりもした。

あとサポートもする。

例えばそうだな。

ボニーはマーメイドなのに泳げない。それは本人もコンプレクスに感じてるが練習は中々上手く行かない。洗面器に顔をつけて

水に耐える練習もしてるが10秒も持たないのだ。アシエルはこの件で特に手を焼いていて、お気に入りとなった浮き輪から離れさせる事に苦勞している。

そこで俺はマーメイドの呼吸機関や慣れ方などを皆から情報を集めた。マーメイドは生まれつき自然と泳げるらしい。人間も地球の重力に慣れていくように尾鰭で泳ぐことは自然と覚えて行く。ボニーは海に慣れるための環境が無かったか、その機会があまり無かったか、故に泳げないのかもしれない。なんか過去にあつたのだろうか？

それはともかく、いまは海のお頭として立ち振る舞うのだから水に潜れて泳げないといけない状況下、俺はボニーが水に慣れるように試行錯誤した…が、直ぐにその解決法を思いついた。

それは…

「ぐくぐく……ぶくぶくぶく……」

「まさか洗面器の水を味付けするなんてねえ…」

「マーメイドの呼吸器官は肺に水に入るか入らないかで切り替わるだろ？あと魔力で酸素の関係を弄ったりしている。ただお頭はそれが不慣れだ。けど飲み水を飲むように体内に注ぎ続け、その過程で切り替えてもらえば後は自転車を漕ぐように体がそれに慣れるはず。あとは自然と海の中でも出来るはずと考えてる。実際にそうした子分がいたからボニーにも可能な筈だ。あと水に対して恐怖心があるならその意識をズラせば良い」

「それで洗面器の中の水をジュースのように味付けしたわけか」

「ああ。ジュースに顔を突っ込むのと、海水に顔を突っ込むのとは少し趣旨が違うからな。これなら飴と鞭を同時に出来るのでなかなか良くないか？」

「頭良いなあフラッグ！ でかしたぜ！」
「ぶくぶく……むぐつ？ むぐ！ むぐぐ」

「どうやら慣れてきたらしい。」

元々水の中で生活する生き物だからボニーは自分が思ってるよりもマーメイドである事をこれで再確認しただろう。アシエルも「マーメイドなら本能的にできる」と言っていた。ボニーはそれを意識するかの違いだったらしい。あと自信だ。でもこれでお頭として成長したのだろう。なんか嬉しいな。

「でも、本当はフラッグが応援してるからそこなんだよねえ」
「？」

「何でもないですよお嬢。あと目標まで五分です、頑張つて」
「むむむ……別に何分だろうと変わらないぞ。早く洗面器から解放してくれ、首が痛い」

「でもフラッグが出した課題ですよ。最後まで熟してください、お嬢」

「……し、仕方ないな、フラッグが望むなら後何分だろうと、何時間だろうと構わんぞ」

「……お嬢、やはりフラッグに対して私と聞き分けが違いますね？」
「っーぶくう!! ぶくぶくぶくぶく！ な、何を言ってるバガもガガぶくぶくブクブク!!」

こんな感じに彼女の成長は順調だ。

俺とアシエルはボニーの成長を共に喜びながら次の試練を与えているところだ。

すこしボニーの話が長くなったね。

ともかく！

お魚海賊団に加入して1週間が経過。

とても充実してるの一言だ。

もちろんボニーやアシエル以外にも子分達とも仲良くやっている。相変わらず掃除や洗濯など真面目にやらない子が多くてどうしようもない無いけど、いざ戦闘になれば頼もしいものだ。高等な種族のマーメイドとしてそりや強い。

だから俺も戦闘能力の高いマーメイドから個人の戦術と、連携する戦術を学んでいる。これが結構鍛えられる。海賊マーメイドは戦闘面が高いので相手にするとそりや大変だ。もちろんアシエルもボニーも戦闘能力が高く、アシエルかは絡めてで遇らう技術を教えてもらい、ボニーからは剣術では圧倒される毎日。毎回罰ゲームを課される。良く膝枕で歯磨きしてあげる罰ゲームが多い。

そんな感じに俺は海の世界で生き延びてきた海賊から手ほどきを受け、それに必死に食らいつきながら、このお魚海賊団で1日を生きていく。

「それにしてもフラッグは船酔い強いな」

「そうか？」

「ああ」

船酔いか…

もしかしたらマキブのお陰かもしれない。

無重力と言うユラユラした空間で戦ってきた兵器達。

それが俺に力を与えてる。

アリスの話が本当ならマキブのお陰なんだろう。

だがマキブ頼りじゃない。

俺自身も…強くなろう。

◇

キン！ キン ！ ガシヤ！！

「魔法が飛んできたぞ！」

「散開しろ！！」

「きゃー！」

「ちよ!?!」

火の玉がぶつかる。

そして当然のように熱い！

「フラッグ！大丈夫か!!」

「大丈夫。いま装備してる『ABCマント』で魔法は吸収した。

ほ

ら、相手が驚いてるうちにお得意の錨を投げちまいなよ」

「そのネタもやめろよなあ！」

そして放り投げられる錨だ。

いや、言われた通り投げるんかい。

でもすっごい威力。
タツノコ兵がボウリングのピンみたいに次々と弾かれてる。
見ている分は面白い。

ドンガラガツシヤーン

「負けるであります〜」

「撤退！ 撤退であります!!」

「なぜマーメイドの海賊団に人間がいるのですか!」

ザザザツ ザザザツ

「やったー! 海軍を追い払ったぞー!」

「わーい!!」

遠ざかる海軍達に喜ぶ我らお魚海賊団。

「危ねえ…間に合った」

「そうですー、間に合ったー」

こっそり忍び入った盗賊部隊も海軍の船から戻ってきた。

おお、今日の食料分はあるな。

「しかし小規模で助かった」

「うむ、あれは恐らく偵察クラスだな。 それなのにこちらを捕まえようとしたのか」

「おそらく近くに仲間が居なかったのでしょう。 だから偵察クラスで構成された小規模な軍隊でも捕まえようと来たのでしょうかね」

「人間の俺が居たから隙をつけた」

「うむ、そうだな」

「でもあまり無理しないでくれよフラッグ。 戦いは私はに任せてく

れたら良いからな?」

「そ、そうだぞ! お主は……そ、その、わ、わわ、私の、だ、大事な……ええと……そう! ……このお魚海賊団で大事な人間だからな!」

「ああ。 ありがとう、ボニー」

「う、うむ…… 当然なのじゃ!」

そう言つてボニーは帽子を深く下げて後ろを向く。 しかし口元が笑みんでいるのを見て俺は静かに笑いながら仲間を労り始めた。

さて、戦利品はと……

「やれやれ、お嬢はいつも猪突猛進で突き進むのにこんな時へタレなんですから」

「う、うるさいぞアシエル!」

後ろの方が少し騒がしい。

元気だなあの二人。

さて、おさかな海賊団に所属してから海軍との戦闘はこれで3回目
で、もう既に2週間近くが経過していた。 人は慣れる生き物だから船の上の生活にも慣れた。 もとより生活しやすい構造の船だから住み心地がイージーモードの船旅である。 でも海軍や海賊などと刃を交えたりと旅の全てが安全ではない。 でもこうして戦いに勝利し、ボニーとアシエルの漫才が毎度の様に漫才と言う名のやり取りが見られる光景がすぐにそこにある。

しあわせなんだろう。

だからこのお魚海賊団に入れてよかった。

「フラッグ『甲板長』こうはんちやう」

「んー、なんだい?」

「戦利品です!」

「そうですー、(っ)確認をー」

「了解、じゃあ……あれ？ メモ帳は？」

「こちらですー、どうぞー」

「ありがとう」

そうそう。なんか知らんけどいつのまにか”甲板長”になって少し驚いている。けれど元操舵手としての階級を今も引き継いでいるアシエルの方が何倍も偉いため、俺はその補佐に当たる感じの配置だ。ちなみに甲板長とは船全体の管理を行う存在。操縦や保守、在庫管理など子分を纏めたりとその長にあたる者だ。元々アシエルが甲板長だったが、ボニーの補佐に付く形になったので今は甲板長は名乗らずおさかな号の副団長的な位置に着いている。つまり2番目と言うわけだ。だから甲板長に収まらない。わかりやすく言えば…

【偉い】レベル

社長 (ボニー)

所長 (アシエル) ↑少し上くらい

係長 (フラッグ) ↑少し下くらい

社員 (海賊マーメイド)

【下っ端】レベル

組織図としてはこの様な感じだ。

アシエルの方が偉いけど、俺もそこそこ負けない程度に偉い感じ。それが甲板長だとさ。

「……………」

「どうしました?」

「いや……ただ、ちっぽけだなって思った」
「え?」

「あー、いやいや、俺の話だよ。この海に比べたらどうしようもなくちっぽけだなって」

「そうだねー、まだまだだねー」

「おおっと？ 結構ザツクリいくな」

「そうだねー、でもフラッグ甲板長はこれからだねー、だから堂々としてねー、私はそんなあなたについて行きたいからねー」

「……ありがとう、先輩」

「どういたしましてー。じゃあ戦利品確認したらー、後で疲れてるフラッグ甲板長のために…沢山沢山先輩の私が労ってあげるー」
「！」

海賊マーメイドの彼女はこちらの耳元まで背伸びする。

細い腕を首元に通して、どこか妖艶な笑みで囁く。

「それで…うううっんと気持ちよくしてあげるー、ねえ、どこがいい？ お口？ それとも…この大きなお胸で挟んで、ほ・し・い？ ふふっ」

ゆるい口調から溢れる吐息は耳たぶを弄び、そしてほんの少し彼女の唇が耳たぶに触れた。それだけなのに背筋をなぞられた様な快楽が一瞬だけ走った。そしてうちなる肉欲が蠢く感覚が後押しするかのようにゾクリと痺れが身体中に渡る。もん娘による魔性だ…

「……あとで決めるよ」

「わかったー。遠慮しないでねー」

「あ、うん。…ありがとう」

何とは言わないが、後で魅惑の山二つによってナニかが起きるとは言うておく。そしてそれに抗わない俺がいる。仕方ないね。男だもの。

「さてと、行くよ、先輩」
「そうだねー」

そんな俺

フラッグ甲板長はお魚海賊団で頑張ってます。

名前「フラッグ」(真名：海ノ雪旗)

レベル「19」

熟練度「29」

この世界に来て「25」日が経過。

ここまでの記録と共に。

お魚海賊団の日記帳に記録を残した▽

つづく

30日目　　～　おさかな号

～　おさかな号　～
～　昼　～

「よし、ボニー、準備は良いな？」

「う、うむ！　宜しく頼むぞ」

俺はマーメイド特有のちよつと冷たい手のひらを掴み、ボニーを海の中に誘った。そのまま重力に身を任せて海面へボニーと共に飛び込む。バチャーンと海飛沫立て、海面にぶつかった痛みと共に俺の体は勝つてに浮き始めていた。　やはり海水は浮いてしまいな。

「フ、フラッグ、離すではないぞ！」

「はいよ」

泳ぎの練習のために人間に助けられるマーメイド。　なかなかの構図だが苦手なのは仕方ない。　それは彼女の豊満なたわわ：もとい脂肪の塊がプカプカと力強く浮くため泳ぐ事に苦戦が強いられる。　そのため泳ぐごとを苦手としている。

「フラッグ、持って来たぜ」

「ありがとう、そんじやボニーこれを両手で掴むんだ」

「う、うむ！」

海面から顔を出したアシエルが重たい錨を持ってきたのでそれを受け取り、そしてボニーに受け渡すと重さで海の中に少しずつ沈んで行く。　よし、上手くいってるな。

「肺をマーメイドのに切り替え忘れるなよ」

「大丈夫じゃ、ボボボおぼぼ」

「すううううー！」

ボニーの手を掴んだままなのでそのまま俺も錨の重さに引かれ、海の中に沈んだ。

そして目を開ける。

開いた目は、海水によって侵入する……事はなく、ごく自然と海の世界で目を開ける事が出来た。なにこれスゴイ。すると…

「どや？ お渡しになった商品の効果は絶大やで？」

話しかけてきたのはアシエルではない。

一人の『行商人マーメイド』だ。

俺は頷くとポケットに包んでいた金貨を渡す。

すると行商人マーメイドは満足げに頷いた。

『深海のアクセサリー』は海の近くで戦うと海の方が持ち主にエネルギーを注ぐんや。そんで海のエネルギーを貰おうたちゆうことは海の中で目を開けることも可能やで。あと実は呼吸もできる……やけどオススメはせーへん。呼吸ができてても海水の塩が大量に口の中に流れ込んだりと大変なことになるからなあ。アイテム自体の改良をしない限りは使わんほうがええで。そこんところは気をつけや」

「コクコク」

とりあえず空気は肺に沢山詰めたからあとは自分の力で長く息を止めるだけだ。それよりもボニーがある程度海の奥に潜り込むと

アシエルは錨をボニーから回収してしまう。俺はアシエルの手を掴んでボニーから離れ『b』とサインを送って励ます。頑張れよ。

「…」

早速ボニーは浮き始めるがジタバタとして浮き上がる体を抵抗する。深海へと泳ぎ、奥へ奥へ潜る。すると無抵抗に浮いていたボニーの姿はもうすでにそこになく、真正正銘のマーメイドであることを俺たちに見せつけた。ボニー自身もこんなに泳げる事に驚いていたらしく、嬉しそうに泳ぎまわっていた。長く面倒を見てきたアシエルもこれには満足げに表情を作る。

そして俺は海の上で生きる海賊の生活で慣れたのか3分近くはその場で耐えていた。

まあ激しい動きをしなければこの程度な。

でもたまに陸が恋しくなるね。

「!? む、むぐぐっ…」

そんなこと考えていたら呼吸が苦しくなってきた。2分ほど止めた呼吸も苦しくなったので俺は海面に一旦撤退しようと思いい、上に泳ごうとしたがアシエルが俺の腕を掴み、そして頬を撫でる様に顔を固定する。

「(ちよ!? 息がヤバイから!?)!!?」

「そんなに驚くなよ。それにわざわざ海面まで浮く必要はないぜ?」

ニマニマと笑うアシエル。何か海の中でも呼吸するための手段でもあるのか? だが息苦しさに余裕ないため早く海面まで顔を出したい。再度上に泳ごうとしたらアシエルは俺の顔を固定すると顔近づけてくる。そして互いの口が合わさり合った。接吻

だ。俺は驚きにもがいてしまいそうになるがアシエルは解放する事はなく、空気が肺に入りやすいようにするため俺の顔を少し斜めに固定すると先ほどよりも強く押し付け、貪るように口付けを交わす。アシエルから沢山の空気が注がれると肺は落ち着き、口からゴボボと溢れると充分に空気が注がれた事を確認したアシエルは満足げにゆっくり離れる。

「なかなかお熱いなかやな、お二人さんは」

「っー！」

「やれやれ、何恥ずかしがってんだ？」

行商人マーメイドに茶化されると恥ずかしさが膨れ上がる。アシエルからはケラケラと笑われる。俺は行き所に行く感情をちよつとした怒りに任せてアシエルの頭に軽くチョップしようと思っただが。

「おつと？」

「！、！」

流石マーメイド、簡単に逃げやがる。

俺はビームサーベルを二つ取り出すと出力を圧縮して一気に放射する。ジェット噴射のようにビームサーベルが俺を押し、アシエルに接近する。アシエルはこの裏技に驚くが直ぐ様真下に泳いで俺の接近から逃れる。だめだ、全然勝てない。

俺は諦めてビームサーベルを投げ捨てながらアシエルを睨む。

「……」じー

「そんな睨むなよ。とても可愛かったぜフラッグ、ごちそうさまだ」

俺はわざと腕を組んでピイツと不機嫌なフリをする。

タツノオトシゴみたいにプカーと海面を浮いてると？

ガシツ

「？」

「……何イチャイチャしておるのだ、フラッグ。私はこんなにも頑張っておるのに」

ジト目で不機嫌なボニーに足を掴まれていた。

「フラッグが見てくれないと我はうまく泳げないのじゃ。なのにアシエルとイチャイチャしよって……妬ましいぞ」

そう言つてボニーはぎゅつと抱きしめる。大きく柔らかな胸が体に押し付けられながらボニーの接近する顔に逃げれず、彼女の口に奪われる。

「んんん〜」

「!、!!」

本日二度目の接吻だ。

激しく啜るボニーに俺は目を白黒させる。

流石、もん娘だ。性技に関しては男を骨抜きにする力を当然のよう備えている。むしろぶりつくようにボニーから熱く啜われてしまつてい、快樂に抵抗のない人間の俺は身体中に心地よい快樂の波が行き渡る。

や、やばい……これは……力が抜ける……

ま、待て……こ、これ以上は……

「乙女の嫉妬やな。兄ちゃんは罪な男やで」

「やれやれ」

「……やれやれ、って副団長の姉御や、尻尾の先が揺れてまつせ」

「!? ……ち、違うぞ!!」

ちなみにマーメイドのヒレの先がピクピクと小刻みに動くのは怒りの近い感情の表しである。それはボニーと無抵抗に接吻をうける俺の行動に対して反応してるのはたしかだ。

つまり…

これは『嫉妬』してる事になる。

「いやー、ほんまに罪な男やな兄ちゃんあんは。あたかもその中に入れてほしいわ。そんでたんもりとあたかも兄ちゃんの事を可愛がつてあげたいわな。お金のやり取りなしで隅から隅までお釣りがくるくらいになあ」

「……フラッグはうちの団員だぜ?」

「それでも兄ちゃんならウチの事も受け入れてくれると思うんで? だってわざわざ海の中まで潜っておたくらの団長さんの練習に付き合っただけでるんや。人間なのにわざわざよ? それでも付き合っただけでる兄ちゃんあんは本当に優しい人や。それだけ優しい人。そんな人を独り占めしてるあんたらには妬いちゃうなあ」

「……」

「うちはアシエルの姐御と相当長い付き合いやからわかるけど、もしアシエルの姐御が異性に好意を寄せるとしたら、それは相当魅力的な男やないとあり得ない事やで? ここまで言ったら後は分かるやろ? うちも妬ましい限りや、アシエルの姐御」

「……”ミンク”」

「なんや?」

「私はサメの一族としての僅かな生き残り。だから繁栄させるにも男が必要だ。だが繁栄すると言っても私は……」

「分かってる。アシエルの姐御も女や。それくらい分かる。だからちやんと立派な男を選ぶんや。大昔言ってたよなあ? 強く

て、カツコよくて、優しくて、素敵な殿方の、そんな人の遺伝子をお腹に貰って子を産みたいってなあ。数が少ないからこそ立派な一族を残したいって」

「……」

「応援してるで、アシエル。もし兄ちゃんから愛を貰って、子を産んだら見せてや。待ってるで」

アシエルに向けたその顔はまるで未来に進む友人に向ける表情だ。

行商人としての顔ではなく身内に対する応援だ。

「……ミンク」

するとアシエルは柔らかく笑う。

行商人マーメイドのミンクは首をかしげる。

「実はな」

「？」

「私はフラッグからもう貰ってるぜ？」

「」

お腹をさすり出したアシエル。

ミンクはパカッと口が開いたマヌケ面を晒す。

「ケケケツ、良い顔だなミンク」

アシエルはイタズラ成功とばかりに馬鹿にする。

ミンクは少しだけ考えるとアシエルに不機嫌な表情で訴える。

「なんや……繁栄がどうちやらこうちやらは演技やったんか、悪いやつちゃ」

『私の男』を横から取ろうとしたからだ。　久々に良い顔が見れて気分がいいねえ」

「まあ…ええで、そのかわり良い事を聞いたわ。　とうとうアシエルが決めた男が出来たって事や。　だとしたらこんな顔見せてしもうても別に構わへんよ」

「…でもちゃんと子供は見に来いよ？　可愛い子を見せてやる」

「ええよ、その時はお祝いの品を持ってきてやるわ。　九割割り引いてな」

「タダじゃないのか」

「冗談や」

懐から先ほどフラッグから受け取った『深海のお守り』の料金である金貨をアシエルに返す。

「兄ちゃんに渡したアクセサリーはお祝いとしてあげたる。　ほな、うちは次のお客さんを見つけないで行くわ」

最後にボソツと『本当に羨ましい』と言って行商人マーメイドは去っていた。

重たい荷物を持っているが、マーメイドはなんともなく海の奥へと消えてゆく。

「まあ…別にフラッグが認めればミンクもその輪に入っても良いけどな。　現に…お嬢もフラッグから”受け取ってる”からね。　あとほかの団員も数名ほどだが隠れてフラッグを襲っているようだねえ。　恐らくもう既にお腹にフラッグの子がいるだろうな…」

「あ…ああ、ボニイ……そ、それ以上おオボボボボ、深い、この…池…！」

あ、ここ海だったわ。

「ふふふ、フラッグのバカモノ。この程度で終わると思う事では無いぞ♡ ……むむ、お腹の奥が疼いてきたぞ。ふふ、このまま襲うか」

「やれやれ全く、そのままだとフラッグは溺れますよお嬢。もし海の中で襲うならまずはマーメイドとしての力を充分に発揮しなければ人間は海の中で満身に空気を得れないですよ。そうなる襲われるところじゃない話だ」

「そうか、ならマーメイドとして恥ずかしくなく泳げるようにならないければな。フラッグのためにな」

「やれやれ、相変わらずフラッグのことになるとやる気が違いますね、お嬢」

「うむ、私はフラッグの事がー」

「オボボボ!!!ガバは…アアア…」

「っ!! や、やばい!!」

おさかな号の下で二匹の人魚と一人の青年は、お昼前に楽しいひと時を過ごす。

フラッグの口から溢れる無数の泡は、この先の未来の数を表してるようだった。

名前【フラッグ】（真名：海ノ雪旗）

レベル【26】

熟練度【36】

この世界に来て【30】日が経過。

ここまでの記録と共に

おさかな号の個室で日記帳に記録を残した▽

つづく

32日目　　～　おさかな号

～　おさかな号　～
～　夕方　～

どこまでも広がる大海、そして潮風が気持ちいい。夕焼けの海面をこのまま眺めているのも良いが俺は一つの実験を行う。海面上の周りに何も無い事を確認すると俺は【大筒】のマキブを装備して、熟練度38である2000コストの兵器を腰に召喚した。

「出力は良好」

腰に装備している兵器を触り、手応えの良さを確認すると俺は撃ち放った。

「ヴエスバー！」

ビームライフルよりも濃縮された強大なエネルギー砲は銃口から勢いよく飛び出した。海軍のタツノコ兵の半分サイズを締めるだろうビームの大きさはまるで射撃の暴力。その威力に耐えれず俺は後退してしまう。

「こ、こいつは、強力過ぎる…」

実はいまのヴエスバーは全力全開で放った訳ではない。出力の半分程度で撃ち放ったのだが、それでも海面を掻き分けて突き進むビーム砲の威力に変な笑いが出てくる。しばらくはこれをメインウエポンとして扱う事になるだろう。コマンドはF91のサブ射撃なんだけどね。でも俺のメインウエポンだ。

「お、やってるなフラッグ」

「アシエルか、料理当番どうした？」

「他の奴に任せてるぜ。しばらくは煮込むだけだからな、火の当番くらいはできるだろう」

「それでも仲間の料理スキルが心配なのは俺がココの海賊団に染まってきたから？」

「そうだな、仲間の不真面目さを理解してる証拠になってるぜ」

「おいおい、嫌な証拠だそれは」

ケラケラと笑いながら冗談を叩き合い、俺は腰に装備していた兵器を解除する。

「いま腰から消した兵器だが、すごい威力だったな」

「あれは『Variable Speed Beam Rifle』って名前だ」

「な、長い名前だな」

「そうだな。だから略して『ヴェスバー』と呼んでいる。こいつは威力、濃度、速度を好きに調節して扱えるんだ。ちなみに先ほど放った一撃は全てを半分以下にして撃ち放っただけの砲撃」

「え、マジか。ちなみに何のマキブを扱って召喚したんだ？」

「【大筒】だよ、ほら」

ポケットからジャラリと取り出し、アシエルに見せつけた。

「銃よりも銃口が大きくて、いかにも破壊の一撃を放ちそうな形をしてるだろう？」

「頼りになるな、それは」

「だろ？ てかそうであってくれないと困るぞ。何せ俺の強さは

マキブ頼りだからな、人間って生き物の力だけじゃどうもな…」

「そう悲観することないぜ。フラッグの頑張りは理解してるからな。……夜の床の上ではもう少し頑張ってくれてもいいだぞ？」

「っ、あのなあ!?! 人魚の名器を相手にどうにかしろってそれ難題だ

から！ 貧弱一般人ピーポの男にそれ求められても喘いで墮ちるしか無いんですがそれは…」

「そりゃ私はもん娘だぜ？ 男を貪ってなんぼだ」

「……とりあえず貪るにも夜だけにしてくれ。 精力尽きてしまったら免疫力無くなるし、海の上で最悪病気で死ゾ」

「わかってるよ。 だからちゃんと精がつくもの食わせてやってるじゃん。 栄養学の知識ある私に任せな」

「あー、うん、そうだね。 ありがとう……」

そのあと練習中のマキブをいくつか召喚して試行錯誤する。 となりに喋り相手のアシエルを添え、海面を反射させる夕焼けのひと時を過ごした。

あとオレンジ色の夕日に照らさるアシエルは綺麗の一言に尽きる。
姐御マジ美人。

◇

く ポルノフ く
く 昼過ぎ く

ナタリアポートの近くでおさかな号は身を隠し、俺はしばらく自由時間をもらうことにした。

ひさびさにハーピーの羽で飛んで来たのはポルノフ、変態の香りがある街だ。

……いや、自分で言っていてあれだけなんだよ変態の香りって。

それはともかくココに用があるとしたら一つだけ。それはブラバムに会うことだ。もちろん交換のためのブラは持ってきてる。そこそこ量だ。なんせ海に生きるもん娘は人間を珍しがって嬉しそうに俺の事を狙ってくる。その度に返り討ちにしてブラを手に入れたりしているのだ。なので内海では俺自身が餌である。

あと海のモン娘のブラはレア度が高いらしくブラバムに喜ばれる。最後に頂いたのは「布」だったが、これは後に「ABCマント」として扱える事を知った。魔法耐性が人間の身としてはかなり重要な装備であつて、始めてブラハムを有能だと……は、思わない。こうなったのはコイツのせいであることを忘れずに。

さて、今現在俺の熟練は”2000コスト”の域までたどり着いた。

つまり「X2」の”マント”が扱える訳だ。

感情を処理出来ないゴミが乗る機体の武装とは言え『魔法ダメージを無効化』してくれる優れモノであり、単発の魔法はまず怖くなくなった。これだけでもかなりありがたい。しかしまだエクバ自体の熟練度が低いので一回の戦いでの使用頻度は一回程度で終わる。

恐らく低コストゆえにリロード時間が長期的な感じだろうか？

熟練度をもっと上げればリロード時間も短くなり、もっと効果が上がるだろう。楽しみである。

「ブラハム、来たぞー」

ブラジャーを畳んでいる金髪に声をかけると勢いよく振り向く。

「待っていたぞ！少年!!」

「俺は20歳超えてんだけどな」

「さて、早速だが見せてもらおうー」

「スルーかよ」

ちなみにアシエルとボニーのブラはまだ渡していない。普通に

嫌だからな。 何というか：俺や嫁さんになるお二人方じゃん？

アシエルに関しては何んか産む気満々だし、ボニーもなんか「立派な奥さんに！」と張り切っている。 それは二人の愛から来てるのだと思うと俺は嬉しくて仕方ないし、その二人の温もりを支えるブラをコイツに渡すのは正直嫌である。

しかし前にアシエルが「お前が強くなるならこのサラシは託すぜ？」と渡そうして来たのを俺はそれを止めた話がある。 それは気持ちの整理が付いたらと言って「待て」して貰った。 アシエルからはいつものようにやれやれと言われてほんの少し恥ずかしかったのは内緒。

ともかく！

ブラハムに二人のブラを渡すのは嫌だ！

ちなみに子分のマーメイドのブラは良い。

あいつらは同意の上を求めず襲いかかってきたからな。 ボニーとアシエルは『交わる』だが、子分は『襲う』だった。 まあそれがもん娘なんだろうから俺も納得しなければならぬ現状に諦めつつ子分の性的虐待を受け止めていた。 基本的に襲われっぱなしだったが何人かブラは剥ぎ取ってやった。 せめての反撃だ。

しかしこれがもん娘である。

繁殖のために命を宿したい生き物。

そうして生まれた存在だからこれが普通。

やつらは”有無”言わせず”産む”からな！

すいません：

言ってみただけです。

◇ 数分後… ◆?

「ではこれを渡そう」

「これは……”旗”か？」

「そうだ。何故旗なのかはわからないが青年、君なら使いこなすだろうー」

「はいよ」

【旗】の代名詞といえば【ドラゴンガンダム】だな。これほどわかりやすい物はない。

あと【ベルガ・ギロス】の【ビームフラッグ】も旗として使えそう
だ。

「それとこれも渡そう」

「？」

渡されたのは……蒼い玉。

中身は空っぽのように感じるが、これに何かエネルギーが込められ
そうな…

おや？ 何か薄く書かれている。

これは…

「ええと、Shooting drive system:??」

∴

∴

∴∴∴∴∴∴∴
は??

◇

∴ おさかな号の作戦会議室 ∴
∴ 夜 ∴

さて、俺はブラハムとマキブの交換を終えるとナタリアポートまで
ハーピーの羽で飛び、おさかな号に戻ってきた。そのタイミングで
買い物の仲間も戻って来たので流れるように荷積の作業を手伝い、そ
して貯蔵庫を潤す。

ナタリアポートは大きな港町なから海軍に見つかる可能性が大き
い。長居する訳にも行かないので早々に錨を上げ、帆を張って潮風
に乗り、再び大海を進軍した。

「コレで、準備が出来た。」

「大海賊ロザの秘宝だっけ？ それを取りに向かうのか？」

「うむ。 大海賊ロザの血筋を引いている我が取りに行くのだ」

「もしお嬢が手に入れたら海賊の間では凄いことになるぜ」

「なるほどね。 でも其処って海軍の嚴重警戒地として配備されてんだよな？ 俺たちなら突破はできると思うが本格的に海軍から

マークされてしまうぞ？」

「別に構わぬ！ 海賊とは！ 正義を自重する奴らから欺きながら大きな歴史を作り上げるのだ！」

抜き取った剣を上に掲げてボニーは叫ぶ。

夜ですよ、静かにな。

「そんな訳だぜ、フラッグ」

「お二人もやる気満々だな。 そんじゃあとことん付き合いますか」

「うむ！ では我は明日に向けて寝るぞ！ だから、その…フ、フラッグ、寝室までついてこい！」

「残念ボニー、俺はアシエルと貯蔵庫の最終確認だ、お一人で寝てどうぞ」

「なっ!? うううう、フラッグのアホう…」

「今日はもう寝てしまつて、明日は早めに起きて俺を起こしに来てくれよ。 貯蔵庫の管理表の記載に時間かかるからさ、寝るの遅いわけよ。 寝過ぎさない様に頼んだ」

「!!…むむ、フラッグが言うなら仕方ないな。 あとそもそも本来なら団長にそんな事を頼むのはご法度だが…いや、良いだろう！ つ、妻が夫を起こすのは普通だと本に書いてたからな、うむ！」

少し恥ずかしがるように胸を張るボニーに対して「ガダッ」と音を鳴らすアシエル。

「なっ…！ 本嫌いのお嬢が本を読んでしかも知識を得ただと？ これは嵐が来るか…?？」

「おい、アシエル、それはどう言うことなのじゃ!？」

「いや、お嬢ですよ…?？」

「むう〜!」

ジト目で睨むボニーだが腕を組んで少しムスツとするが、今日は落ち着いてるのかすぐに冷静になって次を語る。

「私も好き嫌いしては母親になる者として育まれる子に示しが付かぬ。 だから私も成長せねばならないのだ。 そのため妻としてどう立ち回らなければいけないのかとか、その知識が欲しから苦手な本を読んだのだ。 なかなか勉強になったぞ」

「…：やれやれ、お嬢はフラッグの事になるとやる気が違いますね」「うむ、それについては否定はせぬ。 しかし前の私ならワタワタとして誤魔化そうとしたが今では私の頑張りをフラッグに見てほしいのだ。 だから隠そうとはおもわぬ」

キリツとした表情でこちらに言い放つが、少ししおらしくなり始めると胸元で指をツンツンとして何か言い出そうとする。

「だ、だからフラッグ、その…：な？ わ、我はまだまだな海賊だが…でも！ 必ずフラッグにとって立派な海賊になる！ もちろん母親としての知力も足りぬ。 我はまだまだ色々と未熟なのじゃ。 だから立派なお嫁さんになるまで我の子供は待つてほしいのだ」

「えっ?」

そこまで覚悟決めているとは思わなかった。 もちろん頑張っているのは知ってる。 けどそこまで考えてくれていた事に俺は嬉し

さと恥ずかしさに少し頬が熱い。でも、嬉しいな。

「ああ、わかった。待ってるよ」

「うむ！　ありがとうだフラッグ!!　そ、そのわかり時が来たら元気な子を産むぞ!!　約束だ!!　で、ではお休み！」

そう言つてボニーは奥へ消えるが、途中ドアの入り口でピタリと止まる。忘れものか？　するとボニーはムーンウォーク(?)のような動きだがビデオが巻き戻ったかのように先程の位置にピタリと止まり、そして海賊の帽子を尾びれに引っ掛けてこちらをチラリと眺める。すると覚悟決めたようにボニーは頬を染めながら俺の顔を両手で固定して、こちらの腰を落とさせる。

身長差がなくなると…

唇に柔らかい感触を得た。

「！」

「ふふ、お休みじゃ！」

そして奥へ逃げた。

その時の彼女の顔は自前の尾びれに負けないほど赤く染めていた。

「……」

「やれやれ全く、妬いちゃいますね」

「や…やばい、何あれ。めちやくちや可愛かったし、柔らかかった。

あかん、やばい」

「語彙力どうした？　しかし前まではコッソリとフラッグにイチャついてましたが、今では私の前でも堂々としますね。お嬢が成長してることになります、どうも複雑な気分だぜ」

「そのヤキモチ夜にぶつけないよな？」

「さーてね？ 因みに……今の私の鮫肌はヒシヒシとしてるぜ」
「いやヒシヒシじゃねーよ、作戦前なのに身が持たんからやめーや」
「お断りだねえ、海賊は奪ってナンボだ」

獲物を狩る目つきのモン娘こわいです。

この後、軽く絞られた。

◇

次の日、早起きしてサンドイツチを沢山作ると子分たちに配り、サンドイツチを片手に朝と昼を全部使って念入りに準備する。

サボり癖の多い海賊マーメイドも作戦の為になると真面目に準備をしてくれる。段取りの大事な時こそメリハリ付けてしつかりやってくれるから、こういう時は頼りになる。

まあ、いつも真面目であってくれたら助かるが、それは慣れたからまあいい。

そして時が来た。

「作戦、開始」

真夜中の海、月の光だけが頼りなこの時間に大海賊の洞窟までやってきた。海軍はここを警戒区域としてそこらに軍船が漂っているが、今日は数が少ない。それを突破するところから始まる。

さて、魔法を巧みに扱える海賊マーメイドが数名ほど気づかれないよう海の上で動かない海軍の船を囲い、海面から手を伸ばし撃ち放った。

ピューーン!!!

ピューーン!!!

「ひえええ!? おぼけ!!」

「な、なんでありますか!!」

赤く弾ける炎の塊。

濃度が高い『ファイア』の魔法を撃ち放つとそれが光となり、真っ暗な海を明るく灯した。

海軍からすると突然現れた炎は怪奇現象に見えなくもなく、海軍は驚き戸惑い全体の機能が一時的に麻痺する。

その隙に海軍の船へお魚海賊団が乗り込んだ。

「縄で確保しろ!」

「「うらー!」」

「ぎゃー! やめろです!」

「いや〜!!」

連携力の高い海賊達は次々と海軍一人一人を順調を押さえつけてゆく。

「お頭! もうこっちは大丈夫でっせ!」

「お頭は奥へ!!」

「うむ! アシエル! フラッグ! 行くぞ!!」

「あいよ」

「わかった」

ボニーとアシエルを先頭に盗みの得意メンバー、その下つ端を連れて海に飛び込んだ。俺は小舟に乗り込み、海に飛び込んだアシエルと仲間が引っ張って海を渡る。後方では不意打ちが決まり優勢に立ち回るおさかな号と、攪乱を受けてまともに機能していない二隻の海軍の船が乱闘していた。

だが1時間もしないうちに建て直されるだろう。

その前に『大海賊ロザのお宝』を手に入れ、さっさとスタコラ決めなければならぬ。

「到着だ! 急げ!」

「行くぞ! アシエル、フラッグ!」

ボニーを先頭に洞窟の入り口に飛び込むと外の騒ぎに今頃気づいた海軍が慌ただしく姿をあらわした。

「なっ! 敵ですか!」

「外の騒ぎはこれにありますか!」

タツノコ兵とうみうし兵の二人。 厳重警戒地として有名なこの

場所にまさか襲いかかって来るとは思わず出鼻を挫かれたようで、驚き戸惑っている。

俺はトリガーを引いた。

「当たらなくても牽制になる」

既に召喚していたビームライフルで先制攻撃を行い、タツノコ兵の武器を弾く。隙を見た子分達がタツノコ兵に飛びかかり、メタメタにしてくれた。

ボニーとアシエルはウミウシ兵を容易く無力化。

流石、強いね。この二人。

「うわあ！人間だく、襲っちゃー」

「ガーベラストレート！」

騒ぎに便乗して襲い掛かってきた”マダコ娘”を回避しながら腰に備えていた刀を投げて触手を貫く。刀を蹴り飛ばし、刀に固定されているマダコ娘は蹴られた衝撃で後方の岩まで吹き飛ばした。

胴体は貫いてないので命に別状はないが、岩に突き刺さった刃に固定されて動けずにいた。

しかし…

「覚悟するです!!」

「!?」

安息をついてると岩陰に隠れていたタツノコ兵が槍を構えて勢いよく飛びかかってきた。不意をつかれたので俺はビームサーベルの召喚に追いつかず、ガーベラストレートの鞘で咄嗟に防ぐ。しかしレベル差は無情であることを容易く教えてくれる。俺は受け止

めきれず吹き飛ばされた。

「フラッグ!!」

岩に打ち付けられた。

かなり痛い。

ボニーの悲痛がよく聞こえる。

「次はお前らです!」

相当腕の立つだろうリーダー格のタツノコ兵と牽制するボニーとアシエル。真面目の中でもとても真面目な個体もちゃんといるんだなど感心しつつ、痛みに耐えながらめり込んだ岩の中体を逸らし、腰に備え付けられたマキブに手を伸ばしてトリガーを引いた。

だが…

「ふん!」

タツノコ兵は即座に反応すると槍を斜めに傾けてビーム砲を受け止めながら後方に逸らした。

「なっ!?!」

いや、嘘だろ?

いまのビーム兵器だぞ?

しかも放ったのはヴェスバーだ。

咄嗟に放ったからビームの威力は下がったがそれでも低出力のヴェスバーはビームライフルの3倍の威力はある。それほどにF91の兵器は強力過ぎる。本来なら20機なんかで収めて良いものじゃない機体だ。しかしエリートクラスのタツノコ兵はグフカスタムに乗るノリスみたいな器用さで捌き、そしてかなり冷静だ。

「殺さぬよう威力を抑えたとは言え、それでもしつかりと胴体を突いた筈ですが…？ 人間なら一撃であります」

「俺はちよいとシステム的に恵まれてな…」

それはマキブに良くある【補正】と【根性補正】によりHPが『1』残ったのだ。

しかしタツノコ兵の一撃は確かに戦闘不能にする威力は充分であり、不意打ちから放たれたその一撃は人間なら気絶まで一撃だろう。その上相手は”中章”の敵キャラであり、まだ”前章”程度の俺なんかで相手出来るわけでもない。けどこの世界はターン制バトルではなくリアルな駆け引き。そしてこちらは多彩なマキブで絡めては多い。

まだ完全に負ける訳でもないさ…

「まあいいです、どうせもう一撃加えて戦闘不ですから…：ね！」

力強く飛躍するタツノコ兵。

一気に間合いを詰められる。

ビームサーベルを召喚する暇もなく、ヴェスバーの迎撃手段も取れず、刀のガーベラもマダコ娘で使ってしまった。

援護に遅れたアシエル達の顔に焦りが見える。

しかし俺は不思議と冷静だった。

まだ腰に持っていたビームライフルを構えて、別のトリガーを引いた。

「ビーム十手!!!」

「!?」

ビームライフルから突然斜めに飛び出した刃はタツノコ兵の槍を防ぐとスタン効果が現れ、タツノコ兵の動きが止まる。俺はビームライフルで槍を逸らしてタツノコ兵に接近すると首元を掴んで逃げれぬよう固定する。そして充分に出力が上げられたヴェスバーの銃口は既に射ち放てる状態となっており、銃口はタツノコ兵に向けられていた。

血の気が引くタツノコ兵に…

「倍返しだ」

ゼロ距離射撃のヴェスバーはタツノコ兵の腹にクリーンヒットする。俺が槍で吹き飛ばされた時以上の勢いで吹き飛ばされたタツノコ兵は壁にぶち当たり、軽く岩盤を作ると海軍の帽子を落としながら地面に落ちる。

気絶する寸前で力なくこちらを睨む。

「く、っ、お前、なかなか、か、やりや、が、る、で、あり、ま…す…」

槍を手元から落とすとタツノコ兵は戦闘不能に落ち、気絶してその場に倒れた。

そして…

「…………ゴフツ」

「ニフラッグ!?!」

「ニ甲板長!?!」

無理した体に鞭打った代償か。
危険な冒険故に最近慣れたはずの吐血だったけど、今回ののはなかなか効いた。

俺は軽く意識を失った。

名前「フラッグ」（真名：海ノ雪旗）

レベル「28」

熟練度「40」

この世界に来て【35】日が経過。

ここまでの記録は

作戦開始前の個室で日記帳に記録を残した▽

つづく

32日目 大海賊の洞窟

～ 大海賊の洞窟 ～
～ 夜（奇襲中） ～

さて、この世の回復アイテムってのは凄い。傷を治す力が強く、特に先程使われた高級薬草は痛みが直ぐに消えた。高級薬草の成分が体の中で活性化しているのが良く分かる。傷も塞がった。ボニーとアシエルに作戦の続行を告げると進軍を開始。あのエリートタツノコ兵が最後なのかそれ以上に強い敵は現れない。残りの海兵や便乗して襲って来るもん娘達をボニー達が打ちほらい、お魚海賊団はお宝が隠されてる部屋までやって来た。

俺は後方支援。

先程の件でかなり心配されてるな……俺。

それはともかく最深部にたどり着いた。

そこにあつたのは宝だ。

「ボニー、あれじゃ無いか？」

「間違いない！これが大海賊ロザの秘宝が入ってるというお宝箱に
違いない！」

「やりましたね、お嬢」

「うむ！ここまで長かった！お魚海賊団を立ち上げ、ここまで数年
かかったが海賊女王ロザの子孫としてやっと辿り着いたぞ！」

「これで私も先代に良い報告もできそうです。まあまだ老衰するつ
もりもありますね」

「とりあえず開けちまおうぜ……武器は構えとくけどな。パンド
ラボックスだったら嫌だぞ」

「心配するではない、これは間違いなく年季が入った普通の宝箱だ。

さあ！中身を晒せ！海賊女王ロザの宝よ!!」

「気合いを入れて宝箱を開ける。
すると中には禍々しい色のした刃がちらりとみえる。
原作同様に宝箱の中は武器だ。」

「おお！ 海賊女王ロザの秘宝は武器の可能性もあると聞いたが、これは……素晴らしい！」

「武器か、財宝かとおもったけどな」

軽い棒読み。

原作を知ってるが一応知らないフリしておく。

「いやいやフラッグ、これは海賊女王ロザの子孫が見つけたと言う実績が大切だぜ？ 中身が多少残念でも海賊女王ロザが隠した物を海賊見つける。しかもその子孫が見つけたのだ、この上なくでかい功績なんだぜ？」

「まあ、そうだよな。俺たちのお頭であるボニーが見つけた、これで充分だな。 そんじゃサツサツとここをおさらばしようぜ」

カランコロン！

カランコロン！！

カランコロン！！！！

「！！」

洞窟の奥から騒がしく音が響き渡る。

「フラッグ甲板長！ 敵が空き缶トラップにかかりました！」

「ああ、聞けば分かる。 そんじゃあ導きの糸で脱出するぞ！ 準備しろ！！」

俺は【布】と【火薬】を扱い、地面に何かに設置する。
すると大きく膨らんだ『サンタさん』が現れた。
そのサンタさんを宝箱のある部屋の入り口に押し出した。

「な、何でありますか!?!」

「しよ、召喚魔法!?!」

「召喚獣には気をつけるであります!」

「ええ! 何するかわからないわ!!」

現れた謎のサンタさんに驚き戸惑い、手を加えるか躊躇しているタツノコ兵とウミウシ兵。その間に俺とボニーとアシエルと数名の子分が手を握り合い、そしてアシエルが『導きの糸』を上投げる。サンタさんが追いかけてきた海軍を邪魔してるお陰で俺たちは洞窟を脱出した。

そして時間差のサンタさんは……爆発する。

「ぎゃー!」

「タツノコちゃん!?!」

焼きタツノコが出来上がった。
やったぜ、バーニイ。

◇

く 洞窟の外 く

よし、上手くいった。

ほぼ初見殺しとばかりにタツノコ兵達の退きに成功、俺たちは欠けることなく脱出できた。

懐中時計を確認するアシエルの情報によると最初の奇襲から40分が経過していた。すこし時間を食ったが、いきなり現れたエリートだろうタツノコ兵を相手に時間かけたのが痛かったか。

ともかく俺たちは外で抑えてくれてる仲間達と合流して嚴重警戒地の海域から逃げよう。

「なっ！ やばい！」

俺は海軍の船で戦っている仲間が追い込まれてる姿を確認すると立ち上がってヴェスバーを構える。

「フラッグ！ 船の上で立つと危ないのじゃ！」

「いやいや、仲間が危ないから！」

腰から出力を抑えたヴェスバーを撃ち放つ。

敵によって船から海に押し切られてる仲間を助けるべく、俺は横槍を入れて邪魔する。

そしてヴェスバーの砲撃でなんとか救出には成功した。

これで海に落ちず…

あれ？

あ、そういや…

「よく考えたらマーメイドだから海に迫られて落とされようと構わな
いのか……つとーうわわわ!!?」

バランスを崩した俺は　バシャーン　と音を立てながら海に落ち
る。

「海水しょっぺええええ!!」

「な、何をやっておるのだ…」

「まあまあお嬢、彼の美点だと思ったらいいじゃないですか。　ほら
フラッグ、息を吸つときな。　このまま海の中で連れるぞ」

「はい!?!」

アシエルは俺を抱き寄せると海の中にそのまま潜り、尾びれを動か
して一気に海中を突き進んだ。

「普通はこうした方が早く突破できるんですよ」

アシエルは得意げに話すと力強く尾びれを動かし始めた。

は、早い…

水の世界を得たマーメイドの身体能力に関心しながら俺はお魚海
賊団に連れて行かれる。　息が苦しくなった頃に顔が海水から出さ
れ、俺は海賊船に乗り込む。

「けっほ、けっほ……この移動がメインになるな俺は慣れが必要だな、
けっほ」

「皆の者！　撤退だー!」

「閃光弾を撃て!」

お頭の帰還に気づいた仲間は緑色の閃光弾を夜空に射ち放ち、戦闘
中の仲間知らせる。　戦闘中の仲間は閃光弾に気づくと煙幕弾を

取り出して海軍の船の甲板に投げ打つ。爆ぜると煙幕が溢れて敵の視界を奪う。

「撤退だ!!」

「いそげー!」

次々と退路を確保したところから逃げる海賊団はおさかな号の船に戻る。

「大量大量」

「やったぜ(UC)」

ちやつかりと海軍から物資を盗んだ海賊マーメイドも戻ってくる
と生存確認のためにまず号令をかける。

「よし、みんないるな!」

「はい! 姐御! 大丈夫です!」

そして一人欠けることなく人員が揃うとボニーは『面舵いっぱい!!』と大声を上げる。

仲間は舵を回しおさかな号は海軍船を背にした。

▽ △

夜も穏やかな内海。

しかしとある海域にて二つの組織が突撃する。

「逃げられるであります!!」

「こちらも面舵いっぱい!」

海軍は逃げるおさかな海賊団を追いかけようと船を早急に動かす。あまり離れすぎるとハーピーの羽で逃げられるからだ。しかし動けば早いのは恐らく海軍の船、このままでは捕まってしまうことをボニーは分かっていた。

「くっ、思ったよりも立て直しが早いな…」

「むう…アシエル、それなら大砲を使うのじゃ?」

苦い顔をするアシエルを見てボニーは大砲で迎撃を提案する。しかし大砲を撃つにも船の側面を海軍に向けなければならぬ。そうなると思いつかれる可能性もあれば、砲撃が効果的かも不明だ。そもそもおさかな海賊団は砲撃戦を得意としない。アシエルはこの暗闇でどうするか考えるが良い案が思いつかない。海軍の船に爆弾なり細工できたら良かったが人的資源の足りなさ、工作員が居ないので出来なかった。

ただかき回して、隙について逃げるだけでは甘かった事を後悔している…

「フラッグ甲板長!?!」

「甲板長!?! 何を!?!」

おさかな海賊団に取り付けられた見張り台へ見上げた子分達の声を聞いてアシエルも見上げる。フラッグが見張り台の上に身を乗り出してとある武器を構えていた。

「フラッグ!?!」

「な、何をしておるのだ!？」

下から聞こえる仲間の声を聞き流しながらフラッグは深く呼吸する。

「練習はした……あとはやるだけ……」

召喚されたマキブは細ながい頭身をもつビーム兵器であり、普通のライフルとは形がちがう。何故なら今から行うのは射撃ではなく『狙撃』だ。汎用性の高いヴェスパーではなくもつと『狙い撃つ』ことに特化した武器である。

「二段チャージ完了、あとは……」

息を止めて集中する。

スコープを覗き込み、トリガーに指を引つ掛けて準備は完了した。彼が狙うのは、大型の海軍船ただ一つ……

「……っ、暗くて敵わんな……」

真夜中の暗黒に包まれたこの場所は目視で捉えるには困難極まらない。軍艦の光で何となく位置を把握できるが的確に狙うことは大変難しい。

短く過ぎて行くこの時間も長く感じて仕方ない。

だがこのままでは海軍に捕まるかもしれない。

そんな危機からどうにか救いたい気持ちで溢れる。

「頼む……出てこいッッ」

その想いに対して……

本当の意味で『光』が差す。

「！」

そしてフラッグの思いが届いたのか夜を照らす『月』が雲から現れた。次の瞬間、海軍の船が目視確認できるほど光った。まるで青年を手助けするかのようには、お月様はこの一帯を輝かせる。大好きなこの海賊団のために力を尽くす彼のためだけの『月光』はいまこの瞬間だけ青年を助ける。

「ツツー！」

息を大きく吸い、血を巡らせて活性化。いまを研ぎ澄ますこの集中力はこの世界に来て初めてと言うほど。これが狙い撃つと言うことかと、興奮と緊張感を抑えてスコープを覗き込み指に力を入れる。

「！」

全ての世界がスローになった。
何もかもが最大限に定まり、指は動いた、

「狙い撃つぜえエえ！」

月をバツクにしたフラッグはトリガーを引く。
耳を劈く轟音が銃口から放たれた。

ズバーーン!!!

「「?!?!?」
「「」」

銃口からは目にも留まらぬ速さで撃ち出されるた閃光は海軍の船に迫り来る。

「な、なんでありますか!?!」

「何のひかりい!?!」

「!! こっちに来ー」

誰かが驚きを発する。

しかしそれよりも先に…

チュドーン!!!

バキバキバキバキ!!

「「うわああああ?!?!?!」
「「」」

マストの根本から高さ4メートル辺りを一つの閃光が破壊するが、その衰えを知らず…

チュドーン!!!

バキバキバキバキ!!

「「きゃああああ?!?!?!」
「「」」

更に後方の船にその閃光は伸びた。

船の生命線であるマストはメリメリとへし折れ、海軍はパニックを起す。

「う、うそ!?!」

「あわわわ！」

「マストが折れるでありますー!!」

「消化作業を急ぐであります!!」

おさかな海賊団を追いかけるよりも大変な事が起きた。半壊した船が沈まぬよう海軍達は泣き喚きながらも消化作業などを急ぐ。まだ無傷である残りの船が遅れながらもおさかな海賊団のおさかな号を追いかけるが……悪夢はまだ終わらない。

ソレは再び放たれようとしていた。

「shooting drive system!!」

フラッグの周りには青色の鎖のようなものが渦巻く。しかしそれは彼を縛るのではなく縛られていた性能の限界を解放している証。そのためデュナメスのスナイパーライフルの二段チャージは即座に溜まり、銃口を船のマストに合わせるとトリガーを引いた。轟音と共に再び放たれた閃光は三隻目の船のマストをへし折り、またチャージを開始するが青い鎖がその効果を増幅させ、二段チャージは溜まる。そして同じように別の船に狙いを定めてトリガーを引いた。

道中でエリートの方ツノコ兵から受けたダメージの量はフラッグを容易く追い込んだが、それは生命危機を感知した”shooting drive system”のマキブを発動するのに充分だった。

その結果、何十倍と言う形で海軍に返上した。

「よ、四隻も……!」

「こ、甲板……長?」

「す、すげええ……」

おさかな海賊団はおさかな号の見張り台から放たれた光景にしばらく声を失っていた。それもそうだ。狙撃一つで敵軍にこれだけのダメージ。それを4発も与えた結果、海軍に半壊以上の損傷を負わせた。もう追ってこれないだろう。

「これがエクバ…」

アシエルは呟く。

これまでこんな攻撃見たことあるのだろうか？
まさか遠くから海軍の船のマストを壊すなど思いもしなかった…

「……はっ!? こ、これはいかん！ 皆の者！ 呆けてる場合じゃない!! 早く逃げるのじゃ!!」

ボニーはハツとなり指示を仲間に下す。

お頭の声に反応した仲間は海賊船を動かしてこの場所から逃げ出す。

それを他所に鮫肌の震えが止まらないアシエルは後方で半壊した船達を眺めていた。

「フラッグ、お前って人間は……」

アシエルは首が痛くなるほど上を見上げて一仕事終えた彼の姿を見る。ちょうどフラッグもマキブの召喚を解除して見張り台から顔を出し、仲間を上から見下ろしていた。そんな海賊仲間はフラッグに歓声をあげており、それに応えるべく彼は手を振り返す。

そしてアシエルと目があつたフラッグはふんわりと笑い…

アシエルに『b』と指を立てていた。

「ツ〜」

アシエルからすると今の彼はとても魅力的に見えたらしく、いつも引き締めていたその頬が強制的に緩み、寒い夜風の中で顔が熱くなる感覚にとらわれる。

仄かに疼く子宮と胸の高鳴りを誤魔化すため、アシエルは『b』とフラッグに返す。

それでも『女性』と言う生き物は運命を感じずにいられなかった。ましてや彼女は男を貪る”もん娘”だ。ならばこの出会いに高鳴りを抑えることなど無理であった。

——ああ、やっぱりそうなんだ…

——私に遺伝子を託してくれる人間は彼だ…

「…」

私はこの人の子を産もう。

そして彼の遺伝子で子孫を作ろう。

彼なら絶対に喜んでくれる。

だから絶対に産んでやる。

私の求めた人間が現れたんだ。

ここで逃すのは海賊として…

また、ひとりの女性として不出来だから…

そう決めるとアシエルは溢れる想いを一旦胸中にしまい込み、仲間に指示を出して戦利品確認と洒落込んだ。

◇

「「かんぱー！！！！」」

「「イエーイー！」」

「「宴だああああ！」」

海賊は宴は好きだ。

いや、荒くれ者はいつだって宴が好きだろう。

それはロリ巨乳で溢れてる海賊団でも同じで、皆は楽しそうにブーストドリンクを片手に掲げて盛り上がる。

もちろんこの海賊団の団長であるボニーを中心に騒ぎ出した。

あと宴の料理は豪華だ。

俺とアシエルは傷を治すと早速料理場に立ち、いろんな魚介類からお肉、炒め物、果物を使ったデザートなど、騒ぐための宴に丁度良いものをテーブルに揃えた。いや、まあ、しんどかったぞ？ あんな慣れない乱闘後の料理なのだから精神擦り消つての包丁さばきは危なかったが、アシエル姉貴は流石で終始冷静にこなしていた。あまりにも危なかったからアシエルに場を譲らされて俺は盛り付け係してた。眠かったけど頑張った。

その結果もあって今回の作戦で食と共に話が盛り上がった。そこに一人一人が海軍と武器を交えた武勇伝を話しながら冗談を挟み、皆で気分良く歌っていた。

あと大目玉としてボニーが手に入れたお宝の闇のサーベルを見せびらかした。大海賊ロザの秘宝を得たことに仲間の歓声が湧き上がったりと盛り上がりは最高潮、これでおさかな海賊団は海賊業界から一躍有名になるからだ。盛り上がらないのはおかしいのだろう。

さて…

しかしあの作戦から一睡もせず宴の準備のために働き続けた。

正直限界はそこまで来ている。

「眠い……」

それなりにこなしてきた長い航海により最近はずいぶん心地よくて仕方ない潮風を浴びながら、大仕事を終えた体を揺れる船に委ねていた。

あと横から二つの山も揺れて…

「ここにいたかフラッグ」

「あふえ…え？ あ、アシエルか、どうした？」

「随分眠そうだな？ まあいいさ。とりあえずフラッグを労ってあげようと思って探したぜ」

そう言つて隣に座るアシエル。

マーメイドの青い尾びれは朝のひざしによりキラキラと輝きとても綺麗だ。

「フラッグのお陰で私達おさかな海賊団は大きな功績を残し、内海では一躍有名だ。その分海軍に目をつけられやすくなると思うが、まあそれは構わないさ」

「はは、そりやまたスリリングな航海になるな」

「まったくだな。でもそれだけ危険視されると言うことは海賊にとつて誉高いものさ。しかし私たちは義賊のつもりなだけだねえ」

「賊つてだけで印象は違う。諦めよう…ふあゝあ、ん、っん……」

「本当にお疲れさんだな？」

瞼が落ちてくる。

だめだ仮眠取らないともうこれはしんどいな。

だから……

少し弱音が飛び出でしまった。

「俺……き……」

「？」

「今のところマキブ頼りだ。でも一番弱い種^{人間}族だから何か強力なモノに頼らないと酷く苦しい現状で、それこそマキブが無ければ何にも出来なかった。エリートクラスのタツノコ兵相手には初見殺しで勝てたけど次はそうかもわからない。そう考えるとなんか情けなくなってくる」

「おいおい、そんなこと言うなよ。フラッグは良くやつてるさ。」

「……ただ今は疲れすぎて弱気になり過ぎてるだけさ。でも、お前はおさかな海賊団に必要な存在だ。わたしが保証するぜ」

「……ありがとう、そう言ってくれろと」

体が傾き……ぽふん と倒れ込む。

「助かる。 ……ああ……ひどく眠いや……」

「おいおい……随分と甘えんぼうだな？」

アシエルの豊満なお胸の中へ顔を突っ込むように倒れ込み、その柔らかなさを今だけ独り占めする。その肌はマーメイド故に冷たいかと思いきやとても暖かく、力を抜いていつまでも溺れていた気分になる。種族的劣等感……それを拭うように人間よりも遥かに強いマーメイドへ継るごとく俺は無意識にアシエルの腰に手を回してしがみついて……

意識はそのまま落ちた。

「やれやれ……まったく。 無防備な状態でもん娘を相手に身を委ねるなんて、少し命知らずだなフラッグ」

「すう……すう……」

少し呆れながらもアシエルはニンマリと笑みんでいた。
労るように頭を撫でられたが、その手つきは優しさに満ちていた。

ちなみに。

半日くらいで目を覚ましたがそこはアシエルの部屋だった。

しかし下半身の衣類は剥がされていて、それ判断材料に状況把握が完了した俺の顔を見たアシエルは満足気に「甘えん坊だからずつとしがみついていたぜ」とわざわざ言葉を残してくれた。

彼女は紛れもなくもん娘だった。

委ねるとはそう言うことなのだろう。

学んだ。

名前「フラッグ」（真名：海ノ雪旗）

レベル「29」

熟練度「43」

この世界に来て【36】日が経過。

ここまでの記録は

別の疲労と共に日記帳に記録を残した▽

つづく

38日目　　内海

　　おさかな号　　

「フラッグ甲板長、何か流れてきますか？」
「？」

　　仲間は海面に指を向け俺を呼ぶ。
　　何かの木箱でも流れてきたのかな？

「どうしたフラッグ？」

「アシエルか。　　仲間が木箱拾い上げてな、いまから中身を探る。
海水に触れてるから火薬箱じゃないと思うが」

「とりあえず開けるにしても用心するんだね」

「そりやそうだな。　　総員、武器を構えて」

　　海賊とかはこのように襲ってくるケースがあるので、ゆらゆら流れてくるタルは箱は注意するに限る。

　　そして流れてきた木箱を甲板に近よる。　　俺は死神が機体が使っている【ツインビームサイズ】を肩に担ぐ。　　攻撃速度が早いため素早く接近戦の対応が可能だ。　　念のためヴェスパを腰に備えながら鎌をの先端を木箱の隙間に引っ掛け、蓋を開けた。

　　すると…

「うう……うう」

「……………は？」

　　中身から現れたのは人間ではない人外の女性だった。　　背中から翼が生え、長い尻尾も付いており、白くて綺麗な肌、異性に飢えてる

男を魅了する様な瘴気を漂わせる。

「おいおい、これは驚いたね」

「サキュバスだよ！甲板長！」

「だな」

そして何より俺は見たことあるキャラクターだった。

「しかし気絶してるな、どうしたんだ？」

「アシエルの姐御とフラッグ甲板長、どうしますか？」

「とりあえず拾ってしまったからな、部屋で介抱してあげよう。本

当に気を失ってる様だし、普通に運悪く流されてきたのかもな」

「まあここで海に戻すのはねえ」

「じゃあ連れて行くぞ」

「はーい」

木箱の中で力なく倒れているサキュバスを背負い、俺は救護室まで連れていこうとした。

「!?…ツツ、つつ、や、やば…」

「フラッグ、あまり無理するな。人間の身でありながらサキュバスに触れすぎるのはやや危険だ」

アシエルの言う通り。サキュバス特有の甘くて脳を痺れさせる様な香りは俺の気分を惑わせる。強制的に性欲を高められる感覚に襲われて、脳内がまともに動かずふわふわと痺れている。あまり長いことこのサキュバスと密着はしては危なすぎる。

自分はこの海賊団のもん娘に美味しく頂かれてるから不思議と耐性がついてるので、背負う程度では情けなくアヘアへ狂う事はないが、首筋に柔らかく伝わる二つの山は大変心地が良い。

「あー、早く連れて行こう…」

本格的に気分がおかしくなる前にな。

ー それからしばらくして？ ー

「そう言う訳で私をこの海賊団に置きなさい！」

「いや、なぜそうなるのじゃ」

「貴方達が拾ったのよ！ なら拾った生命に責任持つべきね」

「でも【エヴァ】はあのまま木箱に流され続けてもしぶとく生きてる気がするよな？」

「そりや簡単に死ぬつもりは無いわ。 一応ハーピーの羽を持ってからいざとなったら安全な村に飛び込むけどね」

「でもサキュバス故に人が住む村の近くに動けないのが理由だよな？」

「せめて飛ぶとしたらイリアス神殿くらいか？」

「まあそうなるわね。 でもハーピー羽はもったいないから使いたく無いわね……」

「勿体ないって、ハーピーの羽は手に入りやすいぞ？」

「そうなると本当に生活追われてんだな」

「そうよ！ サキュバスって事でここまで人生追われてるわ！ 別に命を奪ってまで人を襲うつもり無いのに危険な敵だつて追い払われる毎日。 時には優しい人にも出会い、住まえる場所も提供してくれたりと親切だったわ。 お礼に快樂もプレゼントしたりと上手く共存はしてた時もあったけど、もん娘であるわたしが原因で自身にも他者にも迷惑をかけてしまう。 わたしは一つの場所に住まえない……なんでなのよ。 何で……」

「……」

「……」

そんな身の上話を聞いたアシエルとボニーは悩ます。
そして俺は勝手ながらこんな提案をした。

「なあエヴァ、それだけ色んなところに転々としてるなら色々経験してるよな？　職業的な意味で」

「？　まあ、そうね、どれも半端だけど色んな事はしてるわ。　…それで？」

「なら逆に俺はエヴァをおさかな海賊団に引き込みたいと思うんだが……アシエル、どうよ？」

「そうだねえ、悪くは無いかと思うぜ。　話を聞く限り転々としてたエヴァさんは色々と出来そうだからね。　職業的な意味でさ」

「入れるにはいい人材だと思うぞ」

人では無いから人材って言葉は合わないかもな。

「ここら待てい、私がココのお頭だぞ、勝手に話を進めるでは無い」
「おっと失礼。　じゃあボニー、ご決断を」

そう言っただけ俺はエヴァの隣をボニーに譲る。　エヴァは「え？　貴方じゃなくてそちらのお頭？」と少し驚いていた。　まあボニーはこのような形なりだからそう見られて仕方ない。

「なんか失礼な事を考えられた気がするがまあよい。　ではまずお魚海賊団へ入る前にエヴァには面接から始めるじゃ」

「え？　…め、面接？　…この状態で？」
「うむ」

「海賊団加入に面接を挟むって凄いなオイ」

「まあまあ、お頭に任せましょう」

それからエヴァをどうするかの話になった。

結論から言うとエヴァをおさかな海賊団に加入する事になった。

まあ、航海は初めてか？ 船酔いはするか？ どのくらい職業に

手をつけれるのか？ って感じに重要な点を聞いてる限りボニーは

賢くなったと思う。 組織を束ねる長として成長したことがよくわ

かる面接だった。

「それじゃこれからよろしくね。 ちゃんと働くから三食昼寝付きは
約束してよ？ あとたまに彼を夜ちよろつと貸してくれたら嬉しい
わ」

「こ、こら！ フラッグの我のだぞ！」

「あら？ 私もこれから一員じゃない。 だから私も彼を共有しても

おかしくないでしょ？」

「ぶつちやけると夜のサキユバスは怖くて仕方ないんですがそれは。

し、絞られる…」

お布団の上で死ぬのは嫌ですよ俺。

「別に好きで吸い殺したりはしないわ。 それにこれからあなた達のお仲間としてこの船で生活するからそんな目には合わせない、約束する。 まあ…でも、わたしはサキユバスだから精はたまに頂かないと」

「…どうにかなりそうわね？」

「！」

妖艶な笑みでこちらを見てくる。

背筋がスツと舐められる感覚に襲われた。

これがサキユバスに狙われるって感じか。

そして俺の中ではもん娘から頂ける快楽を知った雄の性が反応する。彼女に『食べられたい』『吸われたい』『貪りつきたい』と欲望が湧き上がって来た。力が抜けそうだ。なんとかポーカーフェイスを突き通してるけどエヴァには丸わかりだろう。にんまりと笑みんでいるのがなによりも証拠。

「仮に襲うにしろ気を付けてくれよエヴァさん？」

「もちろんよ。病みつきにしてあげるから」

「た、ただでさえ夜のアシエル意地悪なのに淫魔までもが参加とか、なにそれ怖い……」

「フラッグの快楽に揉まれる姿が可愛いのがいけないねえ。甘やかしながら虐めたくなるねえ」

「あら、それは楽しみね、ふふ。どんな顔をして淫魔の性技に狂われてくるのかな？」

「……う、本当に怖い……」

こうして、職業的意味でも、夜のサキユバスの意味でも、経験豊富で頼りになりそうな仲間がお魚海賊団に加わったとき。

「……う、本当に怖い……」

はい。

今夜、エヴァに美味しく食べられました。

「ふふっ、ちそうさま。またお願いするわ」

さて、淫魔のエヴァは『精子と快楽』のギブアンドテイクとして夜の時間でたまに俺を悶えさせる話になったが……いや、サキュバスかなりヤバイ。そのために特化している種族と言う事が体を通してよく伝わり、それは堪えるなんて容易く放棄したくらいに……凄かった。

あと彼女は攻めるのが好きみたいだ。けど貪欲で食い意地が強いからさつきと出させて食べようとする。だから槍のように快楽を突きつける感じで悶えることになる。それがエヴァとの営み。

ちなみに人魚のボニーとアシエルの場合だと、愛でたい異性には柔かな性技でゆったり狂わせようとしてくれる。高められた快楽は恍惚に染まった吐息として溢れ、全て委ねたいほどに心地よく、じんわりとした快楽を心身に注いでくれる。だから毎日大変な航海の中でも安らげる時間と場所があるため、精神的にも性的にも解放されて男としての要求は満たされる。幸せ。

ただ雰囲気^{フレイ}つてのは二人の中である程度決まっている様でボニーからは「このお胸の餌食にしてやろう！」と賊と捕虜のシチュエーションを自然と生みながら夜を愉しむ。でも最後に「き、気持ちよかった…か？」とか「我は満たされたが…お、お主は？」のように男の要求を満たせたのか気にかけてくれる。どこまでも尽くしてくれる女性だった。

ちなみにアシエルは「今日も悶えるんだな」や「少しは堪えろよな？」とボニーよりもニヤニヤしつつエヴァを除いて他の子よりも意地悪な触れ方で夜を愉しんでいる。でも「明日も頑張ろうな…？」とか「お疲れだな。このまま眠ると良いぜ…」って最終的にはしっかりと甘えさせてくれる姐御はマジ姐御だ。おっぱいの付いたイケメンってこの事を言うのかな？これがアシエルだ。

さて長々と説明したが今の話をまとめると、淫魔は電気を体に流すごとく快楽の渦に誘うとしたら、人魚はスポンジのように柔らかく包んでゆっくり溺れさせる感じであろう。DMにはどつちらも効果

抜群だろう。

ちなみに、他の子分にも襲われてる。

味付け多いね。

：

◆？

さてエヴァをお魚海賊団に引き入れて数日後…
作戦室でこんな話から始まる。

「海軍からおさかな海賊団の旗を取り返したい？」

「うむ、フラッグと出会う前に海軍との乱闘で奪い取られてしまつてな。そろそろ取り返したいのだ」

「海賊王ロザのお宝を見つけた私達の噂が内海で広がり、一躍有名な海賊団となった。しかし旗を奪われたままの情弱集団じゃ示しがつかない。そんな訳で奪い返したいところだ」

「なるほどね。じゃあ…殴り込みと行くのか？」

「まあそうしたいけど海軍の本拠地に居座る「リヴァイアサン」が物凄く強くてな、私達では太刀打ち出来ない。フラッグの強力な職業を持つても今の力じゃね…」

「じゃあどうすんだ？ リヴァイアサンは避けるつもりで奪うのか？」

「まあそうなるでしょうね。 作戦としてはまずリヴァイアサンが留守のタイミングを狙って一気に攻め込むか、または乱闘で気を引かせてる内に忍び入って空かさず盗み取るかのどちらかだねえ」

「前者はまだしも後者はだれか失いそうで嫌だぞ…」

「俺は前者が賛成だな。 リスクなくやれそうだから」

「まあ普通はそう考えるけど前者については希望論による作戦立案だ。 リヴァイアサンの留守は滅多にないだろうから、それまで時間かかる作戦だ」

「…手っ取り早く取るなら後者になるな」

「まあな」

「あ、でも、俺とエヴァなら堂々と中に入って取りに行けるかもしれないな。 まさかおさかな海賊団に人間や淫魔がいるとは……あ、ダメか、俺は海軍に一度見られてるな。 絶対報告されてる」

「そうなんだよねえ、フラッグがまだ身元バレてなければ良かったが無理な話となったからそれは無理だねえ」

「じゃあ中央突破になるのか…」

「こればかりは仕方ないのじゃ。 だが我らは嚴重注意地点を突破し、大海賊の洞窟を一夜も掛けずに攻略した海賊団！ 周りからは一躍有名になった海賊ぞ。 コソコソとやるのは少しみっともない気がする」

「その通りですねお嬢、名を馳せる事も考えるなら中央突破で奪い取るまでだ」

中央突破か…

ボニーはそうであって良いがアシエルはもう少し冷静な立ち位置に居てほしかった。 けどおさかな海賊団に賭ける熱意は間違いなので、名を馳せるならの行動なんだろう。 後からやってきた程度の俺が彼女らの方針を曲げてはならない。 なら今は尊重するまで。

「ハイリスクだが今のおさかな海賊団はそうしないとまらないよな。
ああ、俺も全力尽くしてやろう」

「うむーフラッグが居るなら私も頑張れるのじゃ、頼りにしてるぞ!!」
ボニーに信頼寄せられながら俺も『b』つとサインを送ると廊下か
らひとりの淫魔がやって来た。 エプロン姿の彼女は…

「ご飯できたから上がって来なさい」

「おお、もうそんな時間か」

「ありがとうエヴァ、俺が料理当番途中抜け出してしまったから助
かった」

「本当によ、まったく。 作戦会議なら大きく空いた時間にしなさい
よね」

「悪かったねエヴァさん」

「まあいいわ。 それより早く上がって来なさい、今日はシチューを
作ってみたから」

「間違っても蟬の抜け殻とか入ってないよな?」

「失礼ね! 普通のシチューよ。 それともジャイアンシチューがお
好み? ならフラッグのだけ蟬の抜け殻入れてあげるわよ」

「やめてください死んでしまいます」

軽く漫才しながら俺たちは食堂に向かった。

しかしこの数日間だがエヴァも適応力高いのか海賊団として働け
るようになっていた。 エヴァは主に俺と同じで海賊団の生活環境
を支える役だ。 料理や掃除、在庫確認や調達とか。 でも原作同様
エヴァはいい加減な性格をしているのでたまに仕事が雑である。

あとエヴァってサキユバスの村の元住人で村長の芋鼻肩に真っ向
から反発して、それで芋畑に対してテロレベルで放火したよな? 本
人は「そんなにはやってない」と言ってたけど恐らく違うな。 この
性格ときた確実と言えるほどだろう。 でもまあ最近のエヴァも海
賊王なら一攫千金狙える事を知ると今の海賊生活に力入れている。

というかエヴァに関してはサキュバスの中で特に貪欲なハンダリー精神を持ち合わせていて、困難極まりなくとも夢見ることに抵抗が無い。それに今はそこ都合が良い。可能であればこのままやる気持続させてお魚海賊団の骨にさせよう、そうしよう。

そもそもエヴァがおさかな海賊団に居座れる理由がまず俺の存在だろう。当然ながらサキュバスは男性の精子を糧としている。

そして俺はおさかな海賊団の一員として長らくこの場所で渡り続ける。つまりサキュバスの好物である『精子』を提供する存在がこの海賊団にいるため、彼女にとっても都合良いのだろう。

しかしギブアンドテイクとは言え、あまり淫魔の性技によって狂わされ過ぎて何かの拍子で理性を壊さしちゃ話にならん。けれどエヴァ曰く『そんなことはしない』と言うが『あなた』から”お願いするまでは壊す様なことはしない”らしい。なにそれ怖い…

エヴァがとは言わないが、淫魔にはあまり信用を置いてると床上で命共々吸われて寝首狩られてる恐れはある。アルマエルマも言ったけどサキュバスってのは風のように気まぐれな生き物。そこは気をつけないとならない。

だから夜の営みに関してはアシエルやボニーの人魚達が一番安全なのだろう。床の上で営むにしても2〜3日に1回程度だから夜はそんなに俺の体は酷使されずに住んでいる。その代わり昼間とかたまに欲情したりされたりで襲われてる時はあるが、サキュバスに比べたら安全だ。

先ほども説明したように柔かな快樂で包み込むやり方だから命の危険に晒されることない。

まあ……たまに理性が崩壊することもあるがそれは仕方ないとする。最近のボニーはなにかと悩殺気味だから。もん娘が相手なんだから仕方ないのだろうしそう言う素質があるのだろう。実際に可愛くてアホの子で健気で頑張り屋で志は高く、それで…ええと…ともかく上げるとキリが無い。俺はそのくらい心も体も奪われている様だ。

「フラッグ、見てみるよ。 あれ敵の海賊団だぜ。 こっちを狙ってる」

「……え？ ああ、そうか、旗が無いからおさかな海賊団ってわからないやつもいるのか。 しかし、ご飯の前に迷惑な客だな」

「うむ、シチューが冷める前に打ちはらうぞー！」

「二「了解」二」

ダダダッ

「……エヴァは無理に戦う必要ないぞ？」

「いや、それは無理な話ね」

「？」

「私は今シーフだから、敵から盗めるうちに盗むのよ」

「ああ、なるほどね。 前の乱闘でエヴァをチラッと見たがそう言うことか。 じゃあ適当に参加して、シーフとしての仕事終えたら隠れてるよ」

「言われなくても」

エヴァは口元を布で隠して探検を装備。

翼と尻尾を消して動きやすく形作った。

しかしシーフは軽装備。

戦いにあまり向かない状態だ。

「……あとさ、危なかつたら言えよ？ みつともなく叫んでも良い」

「え？」

「仲間である以上、助けてやれるから」

淫魔は信用しすぎないと言った。 でも共に海を渡る仲間なのでから助けるのは普通だよ。

「あら、格好付けてくれるの？ ならその時は頼もうかしら」

「あいよ」

俺はエヴァと拳をコツンと合わせてそれぞれの役目を全うするため表へ乗り出した。

テーブルの上に並べられたシチューの湯気を残して敵の船に乗り込んだ。

つづく

40日目　　海軍本部

　　おさかな号　　
　　昼　　

特に知能は高くないが龍の種族として戦闘能力が高いタツノコ兵。あと知能は高くない生き物だが兵の数は多く、このモン娘は人海戦術を得意としている。まあ知能は高くないが火を吐いたり、槍の扱い長けているため油断ならない生き物であることは確かだ。ただし知能は高くない。

そんなタツノコ兵は軽く平和ボケしている。

そして自分が兵であり、賊と戦う役割がある。しかしあまり真面目で無い個体が多い事が欠点だろう。

故に、先制攻撃を貰いやすい。

と、アシエルが言っていた。

「行け…サイコジャマ」

正門を守るタツノコ兵の上を通る小さな物体。それはファンネルの様に飛び交い、決められた位置に停止すると紫色のエネルギーが放出、タツノコ兵達まとめて包み込んだ。

タツノコ兵達は音もなく痺れて地に伏してしまう。

「アベベベ」

「し、痺れ、びれ…」

「な、なんであり、ま、すか？」

一応この技も当然だが初見殺しとして働く。

気づいてない時点でやりやすかったが、なかなか強力だな。

なんせ今は静かな夜。 ビームライフルやバズーカなどで音を立てると周りに警戒されてしまう。 だから音もなく敵の動きを封じられるサイコジャーマーは最適解であり、正門を警備するタツノコ兵は音もなく無力化を受けた。

計画はバツチリだ。

「ええと、フラッグ甲板長、このタツノコはどうしますか？」

「当然だが殺傷は論外だ。 眠らせるか、マーメイドの歌で恍惚に落として動きを止めて。 この作戦は1時間もかけるつもりもないからな」

「そうだねー、じゃあそうするねー」

仲間はタツノコ兵を完全に無力化させると俺は念のため腰に愛機のヴェスパーを装備し、マントで装備を隠す。

顔もマスクをして顔バレを防止する。

「アシエル、武器庫や倉庫どこだと思う？」

「見たところ本部の中だな。 外には配備されてない」

「おーけ、なら次は入り口のウミウシ兵だ」

タツノコ兵とは違ってウミウシ兵は真面目だか夜中でも勤務も全うする。

いやしかし、可愛いなあ、ウミウシ兵は。

真面目なキャラ設定だからこのもん娘に関しては完成度高く感じる。

でも……ウミウシ兵の目の中に移る☆星を見ると、何というか……

学園都市にいる某メンタルアウトのレベル5を思い出すのは俺だけか？

でもお胸もデカイし、色々と噛み合うと言うか……

アレ○シさん 絵師さんもしかして少し意識してる？

「真夜中だから大人しいな。 昼間なら電撃戦で奪わないと辛かったろうね」

「だな。 でも相手は人海戦術が主流だから壁を作られた辛い事この上ないぜ」

「もしリヴァイアサンが来たら教えろ。 俺が相手する」

実際に原作でもリヴァイアサンはめちやくちや強い。

強力な全体攻撃、そして凍結で行動が制限。

明らかに今の俺たちでは勝てない。

けど初見殺しの塊であるエクバならと考える。

「……フラッグ」

「？」

「フラッグには策があるし、どんな敵に対しても適応力が高い。 私たちが相手するよりもフラッグの方が可能性が高いからリヴァイアサンを任せるが……本当はやらせたくないぜ。 でも今の私たちがじゃ敵わないから……」

「俺はエクバの力を使う事で上手く逃げれるから相手するって話。

死ぬために相手する訳じゃないぞ？ まあ、奴と会わないことが第一なんですけど」

「でもその時は無理はしないでくれよ？」

「当たり前だ。そもそもアシエル達と会う前は一人で旅していたんだぜ？ 逃げる事については心配ない」

「はは、そうかい」

俺の冗談に笑うと少し肩の力が抜けたようだ。

「もう、何イチャついてるのよ？ 私を余所者にして」

「おおっとエヴァ？ 拗ねてるの？」

「何言ってるの、そんな訳ないでしょ？ ……とりあえず私はどうするの？」

「シーフを極めてるからエヴァは耳は良いはずだ。あとサキュバスだから生き物の風も感じ取るのは得意だろ？ だから先行して人気がないルートに案内してほしい」

「でも倉庫が分からないとどうにもならないわよね？」

「確か中には人間の商人がいるから其奴らから聞けば良い。エヴァが快樂で墮とせば早いと思う」

「なるほどね。だから私も連れて来たのね」

一応アシエルもシーフを極めているが現在職業が違う。なので現在はシーフのエヴァによって情報収集しようと考えている。あとサキュバスとしてお得意の性技で性別関係なく情報を引き出せたら非常に楽だ。

「倉庫の場所を暴いたらエヴァはハーピーの羽で即座に撤退だ、良いね？」

「わかったわ」

それから役割を再確認して作戦開始。まず本部の扉のウミウシ兵もサイコジヤマーで無力化した。そのまま真正面から侵入者するがまず誰も居ない。

暗闇の廊下を見渡しながら奥に進むと聞き耳立てていたエヴァが反応する。

「！ 静かに…」

「……足音は？」

「二足歩行……」

「人間だな」

「ビンゴ、じゅる」

そう言うとエヴァはサキュバスとして人を墜とす楽しさを感じながら人間に襲い掛かり、目立たない隅の方へ獲物を押し込んだ。サキュバスだから魅力して情報を引き出すにも時間はかからないだろう。

「そーいや海軍の飯はマズイって聞くけど……どうなんかね？」

「クソマズらしいぜ」

「あ、はい」

原作同様に飯はダメらしい。

ちなみにルカさんは道中でウミウシ兵に負けると海軍の料理人として扱われる。しかし評判は良く、前章を切り抜けてきた実力を持つから戦い参加すれば兵として戦線に向かったりする。そして夜になれば性的に弄んでくれる。しかもウミウシ兵とか言う可愛い生き物によ？ もん娘相手に敗北したとは言え比較的幸せな終わり方をしている。大方残酷な結末迎えるからたまにはいいよねこん

感じなものも。

「おまたせ、倉庫は二階らしいわ」

「はえーなオイ」

「魔眼だけで簡単に吐いてくれたわ」

「下級サキユバスの割には器用だな」

「あら？　魔眼は基本中の基本でサキユバスの嗜みよ？　試しに受けてみる？」

「いま狂わされなら作戦パーだ、やめろ」

それから俺たちは二階に進む。

しかし中の警備はガバガバだった。

そのまま階段近くの倉庫を見つけた。

順調過ぎて逆に怖い。

「フラッグ！あつたぞ！お魚海賊団の旗だ！」

「あら、良かったわね。　あまり私の出番無かったじゃない」

「二階に倉庫ある情報を得ただけでも違うよ。　だからエヴァは必要だった、ありがとう」

「!!…そ、そう？　まあ、褒められて悪くないわね……………おや？　これは何かしら…」

「長居は無用だ、行こう」

エヴァが何か盗んで袋に詰めてるがとりあえず俺は扉から顔を出して廊下を確認する。　だれもいない。　俺は指でサインを送ると

アシエルとエヴァは倉庫を出る。

そして窓を見つけた。

「どこに飛べば良いかしら？」

「イリアスポートだ、急げ」

エヴァは胸の谷間からハーピーの羽を取り出すと窓の外にハーピーの羽を空に掲げた。合流場所であるイリアスポートに念じるとエヴァの体が浮遊して、その方向へと風圧を残しながら先に姿を消した。

俺たちを残して。

「つて、アイツ自分だけ飛びやがった」

「手を繋ぎ忘れたな」

「よし、ならアシエル、お手を拝借」

「あいよ」

マーメイドだからアシエルの手は水々しく、少し冷たいがこの体温は好きだ。

その事を再確認ながらイリアスポートにイメージし、念を込めた………瞬間だった………

——脳裏には飛んでくる氷の刃

「!!？」

俺はハーピーの羽を放棄するとアシエルを抱きしめて真横に飛んだ。突然の行動に目を白黒させるアシエルだが彼女は俺たちが立っていた場所を通過する氷の刃に目を見開く。

そして何者かか呟く。

「避けたか…」

体を軋ませるような威圧感が襲われたが辛うじて足に力を入れて真横に飛べた。しかし階段から転げ落ちる。一段一段を肌や肉を傷つけながら一階まで転落するが俺はアシエルを傷つけまいとしっかりと頭を抱きしめていた。

「うう、ぐあああつ!!」

「フラッグ!？」

さらに言えば通過した氷の刃だが、ほんの少し触れた冷氣だけで肩が凍りついていた。

かなり痛い。

「っ、このっ」

俺は気合を振り絞って立ち上がるが一斉に襲うダメージに体がよろける。アシエルに支えられながら立ち上がるが、後ろからとつもない威圧感が襲いかかる。

俺たちは階段の上を見上げた。

「!!」

階段から照らされる月明かりは一体の海龍を包み込んでいた。そして見下ろす瞳は強者である事を証明する。俺の生存本能が『危険』だと知らせていた。

「リヴァイアサンっ!」

「真夜中のネズミは人間とマーメイドか、なるほど」

「……侵入がバレてたのか」

「一階から卑しい波動を感じてな、目を覚ましたのだ」

おそらくエヴァの魔眼だろう。

そんなことも分かるのかこの海龍は…

やはりこいつヤバすぎる。

「っ、ごめんっ!」

俺は咄嗟に判断したからアシエルに謝る。

「っ!? 何を!」

俺は腰に装備していたヴェスバーをぐるりと後ろに半回転、そのままアシエルに撃ち放った。

「っ! フラッ——!」

ヴェスバーを受けたアシエルは本部の外へ吹き飛ばされる。ヴェスバーの濃度を高くしたので爆発することなく体を打ち込だ。

「太い丸太が体に当たったイメージだ。」

「一人……いや一匹逃したか」

「ぜえ…ぜえ……つたく、正義の海軍ご不意打ちかよ」

リヴァイアサンはこちらを強く睨みつける。排除するためだけの眼差しは恐怖を騒ぎ立たせていた。さらに周りを見渡せばタツノコ兵が待ち構えていて、俺は絶対絶滅の危機であることがよくわかる。しかし体の震えは痛みには耐える震えであり、まだ屈したつもりは無い。

「まだだ、まだ終わらんよ！」

「覚悟は出来たか？」

「…」

俺はビームサーベルを取り出してそれに応える。

「戦うつもりか？ その状態で？」

「不利なのは理解してる。あんたは強いし、俺は手負いだし。正直、この状態で立ち向かうのはアホの極み…」

「なら投了しろ。今ならただの盗っ人で済む。そしたら死刑は免れるぞ？」

「もしここであんたに歯向かって戦ったら俺の命はそれまでってか？」

「そうだ。理解してるならそのマキナを放棄しろ。そして仲間の

事も吐いてもらう」

「……」

「たとえ拷問による苦痛で吐かずともこちらは男の人間が最も抗えない快樂で吐かせることも可能だ。これまで何人の益荒男も堕ちてからなら。男として惨め受ける前に投了したらどうだ？」

「そのためのウミウシ兵ってか？ そりゃ魅力的な拷問だけど投了の選択技は無い。俺は生き延びさせてもらう」

「そうか……ならその命、ここで沈めてやる！」

「っ！」

リヴァイアサンは槍を構え、階段から飛び降りるとそのまま襲いかかってきた。

剛体を兼ね備えた一撃。

しかしリヴァイアサンは初手を間違えた。

全体攻撃をせずに単体攻撃してきたお陰で俺は命を繋ぐことができた。

「ゼロシステム発動!!」

「!？」

単調な攻撃なら『誘導切り』で逃げる事が可能だ。俺は脳内に

入ってくる情報を頼りに銃の軌道を予測する。そして大きく後ろに回避しながら俺はとあるマキブを二つ上に投げる。するとリヴァイアサンのトライデントがF91の取り外したビームシールドに触れて爆発が起こり、目を眩ませる。シールドの爆発と衝撃波を利用して後方に飛びながら着地、ビームライフルを両手で構えしつかりと狙いを定める。

「っ！」

回避時にビームシールドと共に投げたもう一つの爆弾：または「スーパー・ナパーム」が重力に従って落ち始める。その瞬間を逃さず俺はトリガーを指を添えて銃口を合わせる。

全てがスローに見える。

これは必要な一撃だ。

外す事は許されない。

それを理解してる脳みそは物凄い勢いで働く。

キュ
???????

Z

イン!!

脳裏に電撃が走る。

何かが『今』だと訴えた。

「！」

トリガーを引く。ビームライフルの銃口からビームが飛び出す。その一撃はスーパー・ナパームに着弾するとリヴァイアサンを包み込むほどの大爆炎を起こした。

「サイコジャマアアアアア!!」

「!？」

炎上スタンを上書きする様に行動を封じる。

「おまけダア！」

ビームサーベルを投擲。

強制的にダウンを取ると俺は後方に走る。

メイン、射撃CS、格闘CS、特格、特射、キャンセルルートが許される限りマキブを解き放ち、俺は必死な思いで撤退する。

リヴァイアサンを押し退いた光景にタツノコ兵たちは驚き戸惑うものだから俺は海軍基地かは逃げ切る事ができた。

ハーピーの羽を使い、イリアスポートに飛んだ辺りで…

意識を失った。

つづく

42日目　　ポルノフ

　　ポルノフ　　
　　昼　　

「どうしたと言うのだ少年!?　その片腕は!？」

ブラハムは俺の片腕に巻かれた包帯を見て驚き声を上げていた。

「昨日の真夜中に無茶してこうなった。　とある親玉から放たれる水によって凍傷を受けてな……治療が間に合わなかったら腕が危険だった」

「今は大丈夫なのか？」

「大丈夫。　しばらく安静を言い渡されたし、戦いは避けてる。　さて、溜まりに溜まったブラを持ってきた。　とりあえずマキブを寄越しな」

「おお！　これは下級サキュバスのブラじゃないか！　好意を抱くよ！」

「そんでこれが一反木綿娘のブラで良いのかな？　生地か薄くてすつごく軽い」

「いい潮風の香り。　そして素肌に絡み合うこの心地よさ。　あえて言おう……素晴らしいとー！」

「いつもと変わらず同じセリフじゃねーかよ」

それからブラハムにもん娘のブラを渡すとお礼とばかりにマキブをいくつか貰い受けた。　回数を重ねるごとに奇妙なマキブを渡される。　するとその一部の中に何かとてつもないオーラを漂わせている。

「なんだこの丸い奴は?…なんかのコアエネルギーか？」

「すまぬがそれはわからない。だからいつものようにそのマキブと心を通わせてみよ。そうすればそのマキブの正体が何か浮かぶの
だろう?」

「……」

手のひらに乗せたマキブに意識を注ぐと頭の中に行くつか単語が
生まれる。

光子……

集光……

GN……

放出……

半永久……

って!? はあ
!!!??

「これ【太陽炉】じゃねーか?!?!」

俺は手元から落としそうになったマキブを慌ててキャッチする。

「む? 何だそれは?」

「かなりヤベー代物だよ! うわっ…お前なんてモノを集めてんだ!?

前も【宇宙の心】って名言をそのまま名前にしたマキブも渡してくれるくらいだし。 お前存在も含めて本当にヤベーな……」
「気づいたら持っていた始末だ。 まあ少年がそのマキブと心通わせることが可能ならそのまま持って行くがいい」

ちなみに【宇宙の心】ってマキブがなければリヴァイアサンの攻撃を”ゼロシステム”で避けられなかったから貰っていて良かった。

しかし脳みそに毎秒情報を流し込んでくれるため、頭がパンクしそうで仕方ない。 俺の中ではゼロシステムの稼働時間は2秒も無い。もしステータスの『精神力』って数値が高かったら10秒以上耐えて使える可能性がありそうだな。

てか、それよりも受け取った【太陽炉】だよ。

さつきも言ったけどこれかなりヤベー代物だ。

……冗談抜きでガンダム馬鹿ができそう。

「あと【網】に【クナイ】か……どう見てもゲルマン忍法です。 本当
にありがとうございますました」

「クナイと言うよりかは平たくトンがった投擲物だな」

「見た目がクナイっぽいだけで、ほかの形でも扱えそうだ。 一応『G
Nダガー』って技は【短剣】のマキブで応用してるがこのクナイのマ
キブでも同じ事やれそうだ。 汎用性が広くて助かる」

「エクストリームバーサスの職業を使いこなして何よりだ」

「一応お前のせいだからな？」

「許せ、少年。 私は我慢強い性格だ」

「うるさい。 部屋の片隅でブラでハスハスしてろこの変態仮面」

俺はまだ動く片方の腕だけでマキブを袋に仕舞う。 そして本当にハスハスし始めたブラハムに別れを告げる。 俺は家を出るとハーピーの羽を上に掲げイリアス神殿に飛んで行った。

＼ イリアス神殿 　　＼
　　＼ 昼 　　＼

「うふふ、これで私も海賊よ!!」
「そりゃ良かったな」

俺がポルノフで変態と物々交換してる間にエヴァはイリアス神殿で職業の転職を行なっていた。そして今のエヴァは海に生きる荒くれ者の雰囲気を漂わせている。

そう、彼女は【海賊】の職業に就いたのだ。

「まさか海軍本部へ忍び入った時に『特定海洋寺業許可証』を盗み取っていたとは思わなかったな」

「何かお宝の香りがしたからね。だからあの時役目を終えても引き下がらず付いてきたのよ」

「結果オーライだけど俺は酷い目にあっただぞ？ 見ろよ、この腕。

数日はまともに動かない」

「それを言うなら私だってイリアスポートにハーピーの羽で飛んだのは良いけど後ろには誰もいなくて大変だったのよ！ しかも時間帯が夜だから急にサキュバスが襲ってきたのだと勘違いされてそれはもう大変でね！」

「でもお仲間が回収してくれたじゃねーか」

「…まあね。そして船に戻ったら重症のあなたが倒れていたわね……」

昨日のことを思い出したのか、転職で嬉しがっていたエヴァの顔は暗くなる。そして彼女の視線は俺の片腕に巻かれた包帯だ。

痛々しく巻かれている。

「っ……ハーピーの羽を使った時、私一人だけ飛んじやったからフラッグとアシエルは置いていかれた。そしてリヴァイアサンに出会って片腕に重症を負ってしまったのよね？ 更にわたしが魔眼を使ったからリヴァイアサンに感づかれてしまった。そしてフラッグが酷い目に合った……私が悪いわよね……」

「それは気にするなって言ったじゃん。アレは予測不可能だった。それにリヴァイアサンが魔眼を感知する程の実力があることを凶り損ねていた俺の敗因だ。それにハーピーの羽は仕方ない。あんたは今まで一人で行動してたんだ。連隊行動が慣れてないのは仕方ない」

ぶつちやけエヴァは悪くない。そりやハーピーの羽で脱出する時に一人で飛んで俺たちを置いて行ったのは悪いけど、俺たちもモタモタせずに飛べば良かったのだ。

『お手を拝借』なんて格好つけずにサツサとね？

そうやって油断してた俺の責任だ。
だからこちらは自業自得である。

「これを機に俺もエヴァはもう間違わない。そして俺も間違わない。それで良いじゃねーか」

「……何であなたはそんなにもん娘に対して優しくできるの？」

「そりや同じ生き物だからだよ。サキュバスと人間は違うけど同じ世界の空気を吸ってる仲じゃねーか。俺は気にしない」

「……へんな人ね。お人好しな人間は色々見てきたけど貴方は今までと少々違うわね」

「バーカ、どちらかといえばお前の方が変だよ。なんだよ、芋が嫌いになったから畑にテロレベルの放火で騒がせたとか、かなり野蛮じゃねーか。お前本当にサキュバスのかよ？」

「失礼ね！ 私はサキュバスよ！」

「ええー、これから海賊として生きるらしいしなあ？ やってることがサキユバスとは思えねえ」

「それは偏見よ！ ただ男を吸うだけがサキユバスじゃないわよ！ まったく…フラッグのソコと視野の狭さと反比例してるじゃ無いの？」

「ここに来て下ネタか。でも下ネタを扱ってるから流石にサキユバスではあるな」

「あなたのサキユバスの基準はソコなの!？」

やることは終わったので俺たちはおさかな号がナタリアポート付近に滞在してるのでナタリアポートに飛ぶ事にした。ちゃんとエヴァは俺の手のひらを掴み、ハーピーの羽を使ってくれた。

「一応、お礼は言っとくわ…」

「え？ なんだって？」

ハーピーの羽を使う瞬間、エヴァは何か呟くが瞬間移動によって耳元が風を切ったため、うまく聞こえなかった。

　　〵 おさかな号の自室 　　〵
　　〵 夕方 　　〵

「……………はあ……………腕がまだ痛い……………」

エヴァとおさかな号まで戻った後、俺は大人しくするため個室に

戻って安静にする事にした。因みにエヴァは海賊の心得を子分から教えてもらっているところだろう。多分途中飽きてくるかもしれないが俺には関係ないな。

コンコン

誰だろう？

だれかお見舞いかな？

おれは「どうぞー」と言うと扉が開かれる。

「久しぶうな、フラッグ」

標準語とはかけ離れた方言で挨拶と共に、大きな風呂敷を背負っているマーメイドが現れた。

「行商人マーメイドの”ミンク”じゃないか、どうしたんだ？」

「凍結によって痛んだ腕を治すための道具をちょうど持つとうてな？」

「それでアシエルの姐御に呼ばれたんよ」

「ああ、そう言う事な」

「と、言っても治りを早うするためであって大したことはなか。でもせっかく来たんやから使うで」

そう言うのと風呂敷から何かの入れのを取り出した。フタを開けるとクリームが詰められていた。これを塗って治すと言うことかな？

するとミンクは俺のシャツを指で突いて何かを訴えていた。

「腕だけではなく肩まで塗ったぐらんとあかん。上は脱いでもらわんとな？」

「ああ、なるほど」

俺はミンクの言葉に納得すると大人しく上を脱いで肌を晒す。
アシエルとボニーに肌を見せるのは慣れたがまた別の子に見せるのは違った恥ずかしさがある。それとマジマジと見られて少し落ち着かない。

「フラッグは今海賊やからとどこどこ傷を負ってるなあ。せやけどこの力強い体や、うち好みやで」

「そりやどうも」

この世界に来てから随分と傷は増えた。

斬られたら血は出るし、刺されたら血は溢れる。

けれどこの世にはステータスの概念があるためそんな簡単に死にやしない。傷は負うことにならないが敵とのステータスを大きく備えてるなら甘い程度に槍に突き刺されてもキントツと弾いたりする。しかしステータスに大きく差が出るならそれは豆腐に包丁を入れる如く容易い結果となる。

慢心しない。

「ふふふ、そんじゃ使うで」

「……………てか、あんたが塗るんかい」

「アシエルとボニー、そして子分らはなんか忙しいからなあ。だからウチがやるんやで？ 因みに許可は貰っとる」

「……………いや、最後のは嘘やな」

「あはは、せやで？ ……バレてもうたか」

「ふーん？ なるほど？ つまり、行商人にが嘘言うのか、これは信

頼に欠けるな―?」

「うっ…そ、それを言うのと痛いなあ…でもこれは扱う量が決まってるから今回は私に任せてほしいわ」

「わかった、任せる」

「あら、すんなりや」

「ミンクが薬の適量を知ってるなら任せた方がええからな。それ以外はない」

「ほんまにかあ? 実は下心あるんやろ?」

「さあて、それはどうやら」

「ふーん? でもお金払わなやつてあげへんよ」

「別に構わない。そこら辺はアシエルとボニーが優しく包んでくれるから」

「それでもウチのは特上やで? 我慢強い奴から早漏まで、金貨に見合った快樂を送ってやれるプロやで? なんなら貸切料金でいつまでも天国を見せてあげれるで? ほれほれ♪」

そう言うとミンクはムギユウウと胸を背中に当て、押しつぶしてくる。ほんのり冷たいけどすごい柔らかくて、なにより綺麗な褐色が良い感じにエロスを引き出す。確かにこれはお金払ってまで欲望を解き放ちたい柔らかさだ。

毎度のことだけどア○キシさんいい仕事する。
ありがとうございます。

「背中に当たるその感触は柔らかくて気持ちいいけどお金は払わんぞ」

「別に構わへんよ。その代わりさっきの嘘付きは忘れてくれたらありがたい限りや」

更に押し付けてくる大きな欲望の塊は理性を揉みくちやに解してくれる。胸だけですごい威力だな。でも残念。ボニーとアシエルによって散々同じやり方で理性を崩してくるからその手は耐性付いてしまっている。

え？

男としてそれはどうなのかつて？

何言ってるんだ！

おっぱいに勝てるわけ無いだろ！

いい加減にしろ！

「ほな、兄ちゃんの理性の強さがわかったところやし、戯れはこの辺りにして塗るわ」

「ああ」

ミンクは手のひらにクリームを乗せ、そのまま俺の腕から肩へと塗りつける。冷たい感触を味わいながらミンクは丁寧に伸ばしていく。すると肉体の内側から痺れが広がった。クリームは即効性であることを教えるかのようにヒリヒリと肌が落ち着かない。特にリヴァイアサンの氷結によって凍傷した皮膚の至る所が荒れる。俺は片目を閉じて痛みに耐えとミンクが背中をトントンと叩いて落ち着かせる。

「大丈夫や、時期に収まる」

「これは……っ、なかなか……」

でも確かに傷が治されていく感覚はあった。

「す、すごいなコレ……痛みが引いていく。太陽や空気に晒すと痛かったのに……」

「その薬はマーメイドが大火傷負った時のために使うクリームなんよ。それで人間の場合やとなぜか低温火傷に効く訳。原理は分からへんけど効き目が良好過ぎるんよ」

しばらく丁寧に塗ってもらっているといつのまにか痛みが引いていた。クリームも自然乾燥したのか肌にベタつきが無く、傷だらけで皮膚が荒れていた腕は綺麗になっていた。

「あ、あれ？ な、治ってしもうたか……」

薬を持ち込んだミンクが驚いた声を上げていた。

「おいおい、治すためじゃなくて治癒力を高める感じでは無かったのか？」

「そうなんやけどフラッグはんの肌が特別なのか塗るだけで治ってしもうたわ。フラッグはん、あんた人間よなあ？」

「人間だぞ？ ほら、ミンクのせいで下半身が反応してる。正常な男性の持つ生理現象だ」

「ウチを女と見てそうならモン娘としてうれしゅうなあ。

まあ、そこは置いて話す戻すけど、普通はこんな風に即効性で治らんよ？ 兄ちゃんはなんか特別なんかいな？」

「分からん。人間であることは周りと変わりないぞ」

だが俺は他所の世界からこの世界に降りたった人間だから、この世界の人間と何処か性質が違ったりするのだろうか？ 他にもエクバって謎の職業に就けた異様な人間だし俺はどこか周りと違うのかもしれない。

断言はできないがその可能性は少なからずあるな。

「でも治ったならまあいいや、コレでまた働ける」

「ここに尽くすその心は立派やけど、今日くらいはおとなしゅうしくんやで？」

「まあそりやそうだな。 じゃあ俺は一眠りする……なんか疲れたからな」

「ほなら子守唄歌おうか？ マーメイドはそれなりに歌が得意からな」

「モン娘の近くで無防備に寝るのは危険過ぎないか？ あとお金は払わんぞ」

「まあ待て、今は商人のミンクじゃなくてただのミンクとして心配しとらんよ？ お金のやり取りはせーへん」

「……じゃあお言葉に甘えてもっ」

「ええよ」

そう言う俺は寝転び、そのまま寝息を立てようと思ったが……目を開けて顔を覗き込むミンクを見る。

「……………」

「……………どうしたん？」

「……………」

「な、なんや、ねん？」

俺は眠ろうとしてた体を起こしてミンクと顔を合わせる。

「なあ」

「！」ビクッ

「……………何が目的？ 行商精神旺盛なあんたがメリット無しにこんなサービスする訳ない。ミンクとはそれなりの付き合いがあるから分かるぞ？」

「……………別にそんな事はなかよ」

「本当にか？ ならこの部屋から出なよ、商売は終わったぞ？ それとも……………行商人マーメイドとは関係なしにして用でもあるのか？」

「!! そ、それは……………」

「……………」

俺はジーツと見つめる。

するとこの空気に耐えられなくなったのかミンクは口を開いた。

「…………ただ」

「？」

「ウチは…………アシエルが妬ましいと思っただけや…………こんないい男を捕まえてしもうて。昔馴染みの私を放っておいてよ？」

「…………それで俺を横取りしようど？」

「べ、別に横取りなんてせーへんよ。性的に襲ってもフラッグはアシエル達によつて愛が刻まれとる。私の体に溺れることはありえへん」

「そうか…………ならミンクは何がやりたいのかな？」

ミンクは行商人マーメイド。行商人という事は信頼が重要なため、このような行動は慎む筈だ。もし人間を快楽に落とし、そのまま得意様にするなら有効な手段だが俺に対しては効果は無いだろう。そのためミンクが俺に起こすこの違和感で仕方なかった。

だから俺は…

怒らずに聞いてみた。

「…………そのな…………笑わんといて欲しい」

「…？」

彼女のヒレはペタンと下がり、元気の良さを落としていた。そしてミンクは口を開く。

「少し寂しかっただけや。私は行商人マーメイドやからお客を作り、店主として接する。当然それは商売やからお金と商品のwin-winなやり取りで接する関係線、人とは距離を作るんよ」

「……」

「せやからウチはあまり人とノーマルな付き合いは無い。いつも店主とお客やねん……そして気づいたら私は誰かに優しくしてもらえる存在が一人も居なかった。それに海で人間は珍しいからあんたと出会った時は久しい人種と思ったん」

「だろうね……人間が海賊で生き残れる世界じゃないからな」

「せやで。大体モン娘に襲われて壊滅してるところばかりや。そんなんだからウチはあまり人間との関わりも薄れ、ただの行商人マーメイドで生涯を終えてしまう。なあフラッグ……マーメイドって誰かに愛されたい生き物や。それは優しい男なら運命と思うんよ。この人に尽され、そして尽くしたいって考えるんよ」

「……」

分からないこともない。

ボニーも、アシエルも、俺の微々たる活躍だけで一気に惹かれて距離を縮めてきた。いつの日だったか忘れた満月の夜、ボニーは『フラッグの残りの生涯は全て私に託して欲しい』と言っていた。そして淫らかに絡み、貪り愛、俺の精子をボニーに注いで次なる子孫を残した。

そして大海賊の洞窟の攻略を終えた数日後にアシエルも続いて俺を求め、互いに貪り合う。一度『人魚の名器を味わってみないか?』と誘われて注いだことあるが、この絡み合いによってアシエルも偽りなくしかと受け継いだ。

まるで下手なエロゲーに登場する『既に異性からモテモテな状態の主人公』みたいだが、マーメイドは運命の人を見つけるとすぐに求め、愛を欲するようだ。

そして

目の前で悩めるミンクはつまり……

「ナタリアポートは人間と人魚は仲良くしとるけど、それ以外の場所やと普通はマーメイドってなんやかんだで強力な生き物やから敬遠されがちなんよ。そんで人を襲うモン娘に変わりにないんや。でも、そんな事関係無しにフラッグはこの皆んなと接する。泳げないマーメイドを軽蔑せず、泳げるようになるまで付き合うくらいにな」

「ボニーの事か……」

「ウチはそんなフラッグを見て妬ましかった……その優しさをわたしにも分けて欲しいって、思ってたんよ」

「…」

「海の上で生きて、海の上で仲間を束ね、海の上で強敵と渡り合い、海の上に飾る旗を海龍から取り戻した……こんなに強くて優しい海の男が今この世におるか? いや、おらへんよ。でも今ウチの目の前におるんや。……だから……ウチも、皆んなが好いとるあんだが欲しいんや……」

「……ミンク」

「いや、なんも言わんといて、ウチはずるいだけや。ボニーとアシエルの姐御は運命の赤い糸を引いたんや。ウチはそこにヌケヌケと入り込もうと思つた卑怯者や」

そう言うとき手のひらを伸ばして俺を制止する。

しかし伸ばされた手は震えていた。

そして顔は怯えに染まっている。

「……たしかに、やってる事は卑怯だ」

ドロドロの昼ドラで言えば泥棒ネコな女だ。

卑怯であると伝えたい。

その言葉を受けたミンクは目元に涙を溜め込み耐えていた。

言ってしまった気持ちに後悔を抱き始めたようだ。

「でもな、一つだけボニーとアシエルにはこんな話を取り付けられるんだ」

だが俺は穏やかな声でミンクに呼びかける。

ミンクは涙を溜めた目を開かせ、こちらに注目する。

「もしフラッグの事を心から尽くし、そして尽くされたいモン娘がいたら『拒まない』でとせ」

「……ほ、ほんまに？」

「ああ。でもそのモン娘は海限定で、作る子供はお魚海賊団のために尽くすモン娘のみだつてよ話だよ」

「……そ、そうなんか？」

「ああ。 てか現にアシエルやボニー以外にもお魚海賊団の海賊マーマイドに性行求められて精子を取られてるぞ、確か5匹くらいに」

「!!？」

「一部は上手くやられた。 疲れてるところを襲う奴と、自室で深く眠つてるところと、疲れを労わるためにさりげなく奪っていた奴もな。 残りは普通に欲してきたっけな？ まあ、そんな訳で俺はボニーとアシエルの嫁さんでもあるが、それは第1番目としてだ。 それ以外は第2番目って形でも構わないから欲しいと言って求めている……今のミンクのような？」

「!!」

先ほどまで腕と肩にクリームを塗っていたミンクの手を掴んだ引き寄せる。 怯えに染まっていた目は薄まり、驚きと複雑に溢れる喜びに染まり始めていた。

「女性が求めてくれるってのは男として嬉しい事でもある、だから構わないさ」

「あ……」

行商人マーマイドである事を忘れた瞳、そして柔らかく触れている胸から伝わる鼓動は激しくなる。

「でもそのかわり、お魚海賊団に行商人として尽くしてくれるか？」

「!、!!、ツ〜!!!」

そういうと先程まで怪我人だった事にも関わらず、ミンクは構わず飛び込んで唇を食ってきた。

待ちに待った愛しき人を奪うために。

俺は治った片腕をミンクの腰に回して受け止める。

それからしばらく人魚と絡み合っていた……

名前〔 フラッグ 〕（真名：海ノ雪旗）

レベル〔 32 〕

熟練度〔 49 〕

この世界に来て〔42〕日が経過。

ここまでの冒険は

行商人魚に生命を宿したあと個室で日記帳に記録を残した▽

44日目　　おさかな号

「なあアシエル、俺一つ聞きたかった事があるんだがおさかな海賊団って義賊みたいなもんだろ？　同業の海賊、または違法な船しか襲わないってさ」

「まあな、それがどうした？」

「俺とおさかな海賊団が初めて顔を合わせた出来事を覚えてるか？」

「アシエル達は海賊として襲ったが、その船に俺が乗っていた事」

「ああ、確かそれは一ヶ月以上の話だな」

「うんうん。それで俺は普通の客船に乗っていたんだ。　あ、もち

ろん他の一般客も居ただけどよ、その船は」

「ああ、言いたいことはわかるぜ。　でもあれはどっからどう見ても

”違法な船”なんだよな」

「なぜに？」

「フラッグと出会った丁度その頃、謎の現象により海が大荒れしていた。　だから物流も途絶えてしまい、海の荒波が静まるまでは船を出さないようにしてたんだ。　けどたまに大馬鹿な連中も居てな、無理やり船を出して海を渡る奴らもいるんだ」

「マジか」

「しかしその船は輸送艦として公式に許可も取らず、国から認められてない船だったんだ。　ちなみに国から認められると船の外側には番号が書かれている。　しかしフラッグの乗っていた船は偽物の番号で刻まれている事を確認した。　それで私達は違法な船と見なし

て合法的に襲ったんだ」

「なるほどな、そういう事があるのか。　まあ確かに麻薬とか危ない物を搬送する船が出さないように取り締まる必要があるな。

……あれ？　そうなると一般客が乗っているのはどう言うことなんだ？　てか、俺が乗ってた船って……」

「まあそこも疑問の一つだな。　まず一般客だがあれは知らずに乗せ

られて居た可能性が高い。まあ知っていて乗った奴もいるが大体は金出せば船に乗せてやる荒くれ者が多いからな。あとそう言う船に限って金が安いからねえ？ 疑う前に乗るんだ」

「まあ、わからんこともない」

「それでフラッグが乗っていた船だがあれはただの素人が動かしてる船だな。航海士はいると思うが戦闘兵はザコだらけ。まあ一応あんなのでも商人などの物資を安い金で運送してるようだが、侵入禁止区域の海域を知らずに堂々と渡ってる時点でそいつらは事業から認可のない非公式な船だ。普通はそう言った商業は船の全体的な安全面のチェックを受け、合格ラインを得たら安全な航海が比較的保証されてる『ルート』を教えてもらう。それで魔物を寄せないお守りなど支給される。しかしそう言った支援や情報を得ないで航海に乗り込んだとしたら、そりゃ私たち海賊にとってエサだな」

「ああ、そういうこと…」

「ちなみにフラッグはどの口だい？」

「んん？ ああ、俺はイリアスポートで船を眺めてたら後ろから押されるそのまま乗船してしまい、降りるタイミングを逃した悲運なパターン」

「おいおい、ハーピーの羽で逃げれば良かったんじゃ無いのか？」

「長旅で疲れてたからな。あと船旅も味わいたかったから船の揺れに任せてハンモックで眠った。そんであんたらに襲われると乱闘になりハーピーの羽が機能しない。そうして逃げ遅れた訳だれ

「ははは、それは災難だったな！」

「てか一般客に戦える奴がいなかったから俺が時間稼ぐ形で逃したんだよ。ほら、ハーピーの羽って少しでも争い事の空気を感知すると羽ばたかないだろ？ だから俺が足止めして一般客がハーピーの羽が扱える場所まで時間稼ぎしたんだ。ちゃんと逃げれたかは知らんけどな」

「私たちは見てないから上手く逃げてくれたんじゃないのかい？」

「じゃないと困る。」

俺が戦った意味も無いからな。

だって中章のモン娘を相手に旅を始めたばかりの俺が戦ったんだ。その時の相手はバカだったから助かったけどステータスは俺の何倍もあるモン娘だ。アレと対面すると言うのはある意味自殺行為なんだよ。

「違法な船とかはともかく、今はこうしてお魚海賊団に襲われたからこそ俺がここに居る訳よ。結果オーライだ」

「その切り替えは良し」

「ちなみにアシエル達が襲ったその船どうなった？」

「お嬢が撤退を命じたから食料と物資だけ頂いてあとはノータッチだ」

「さいですか」

こうして今頃聞いた話だけどころちゃん理由があつて襲いかかったらしい。彼女らは紛れもなく義賊のようだ。それが再確認できた。

「フラッグ、ここにいたか」

「？」

声に振り向くとそこにはボニーがいた。

「お嬢？」

「どうしたのか？」

「うむ、アシエルもいるなちようど良い。今後の方針について話があるんじゃない」

ボニーは俺の隣に座る。

するとアシエルと二人で挟むような形になる。

たわわとたわわだ。

おっぱいがいっぱいとはこの事だろう。

「我が海賊団は海賊王の宝も手に入れて、おさかな海賊団の旗も海軍から取り返した。恐らく内海でやれることはやっただろう。だから次の目的は【外海】の世界に挑むことじゃ！」

「！……とうとう外海か。生半可な力では通用しない世界だな」

「うむ。我らは何度か外海へ出たことがあるが内海よりも凄まじい場所じゃ」

「え？ 出たことあるのか？ 其処って海軍本部が管理するデカイ水門を潜って進まないと出れない世界じゃないのか？ 今は閉められてるけど」

「これは一年前の話じゃ。海軍が水門を開けた瞬間、我らおさかな海賊団はその水門を一気に潜り抜けて外海へ出たことがあるんじゃないよ。追ってきた海軍とは夜戦に持ち込ませた。視界が安定しない闇の中を利用して姿を眩ませた」

「そりゃ、すげーじゃん」

「あの時は特に大変だったねえ。指示を出すために甲板を走り回ったもんだ。そして舵を握って逃げ回ったものだ」

「正直アシエルがいなかったら捕まっていたと思うのじゃ」

「それは想像できる。それで外海に出たあとどうしたんだ？」
「……………」

そう言うと二人は黙り込む。

「……………もしかしてボコボコにされたとか？」

「……………うむ」

ボニーが白状した。

「外海の連中は特にヤバイからな。私とお嬢はともかく当時の子分

は戦闘面で頼りなかったからな。　それで『いつかく娘』が出てきた時はそりやお魚海賊団は半壊したもんだ」

「アレは強かった。　なんとか逃げれたが次は嵐の中に巻き込まれてな。　子分達の半分は戦闘でボロボロだった。　船も冗談抜きでひっくり返りそうになったりとした。　なによりもお嬢と私が先陣切っていつかく娘と戦ったが私は重症を負って指揮系統は機能不可、お嬢だけで嵐を凌ぐことにした」

「……めちやくちや危なかったじゃねーかよ」

「ああ、本当にな。　それから嵐を凌ぎ終わるとハーピーの羽を使つてすぐさま内海に戻ることにした。　それからしばらくは内海でロボロになったお魚海賊団を修復してたねえ」

「うむ。　命が助かって良かった」

「しかしなんで外海に？　内海よりも危険なことでは有名なんだろう？」

「大海賊ロザの話は外海にもあると情報を得てな、誰かに取られる前に我らが取りに行こうと考えたのだが……」

「偽の情報だったと？」

「うむ……」

「そりや災難だったな……」

「それからしばらくは内海でお魚海賊団を鍛え上げ、たまに出くわす海軍を撒きながら生きてきたんじゃ」

「なるほどな」

「それからフラッグと出会った感じやな」

俺との出会いを嬉しそうに語るとボニーは横に寄つ掛かつて抱きしめてきた。

「フラッグ、我は深海よりも深くお主を愛しておるぞ……」

愛を囁きながら甘えてくる彼女の愛らしさに頭を撫でてあげる。

彼女の綺麗な髪の毛が手に絡みつく。　そしてとなりのアシエル

の尾びれは少しだけピクピクと動いていた。

「アシエルは甘えて来ないのか？」

「どちらかといえばフラッグが甘えてくるだろ？」

「だってアシエルのお胸にダイブすると何故か疲れが取れるからな。

流石、お魚海賊団の七不思議の一つ」

「やれやれ、そんなの不思議でもないよ」

ほんの少しだけ呆れられたがこれからもアシエルのたわわに実つた二つの山にダイブする事をやめるつもりはないぞ。

「そんでき、もう外海には行かないのか？」

「あれから強化された今の私たちなら何とか外海でもやっていけると思うが、水門は海軍が昔よりも嚴重に管理している」

「だから別の手段を考えねば」

「ぐむむ」

二人は悩めるが俺は既に方法を考えていた。でもそれは海賊船でなんとかしようとしてる彼女達だと思いつかない内容だ。

「俺に考えがあるぞ、二人とも」

「なぬ！本当か!？」

「どうするだ？ 海軍をどう欺くんのだ？」

「海軍は関係ない。 陸から行けばいい話だ」

そう、海から外海に行くのではない。

陸から外海に行けばいい話だ。

ゲームシステムを付いたやり方だが、プレイしていれば誰もが一度は不思議に思う出来事を利用する。

そして

その方法とは…

◆？

　　＼ おさかな号の会議室　　＼
　　＼ 45日目　　＼ 昼　　＼

「まさかポルノフってやらまで『我』がハーピーの羽を使って船を呼び寄せるとはな」

「この船の所有権はボニーにあるからな、簡単だろ？」

流れとしては…

俺がボニーをポルノフに連れて行く。

← ボニーがハーピーの羽で来れるようになる。

← ボニーがポルノフまでハーピーの羽を使う。

← おさかな号はポルノフ付近の海まで飛ぶ。

← ポルノフから外海に出る事ができる。

以上だ。

これはゲームシステムを上手く扱った裏技だ。

しかしボニー達はポルノフまで来た事ないので俺の存在がなければこのやり方はなかっただろう。一応イリアスヴェルクまで行けば船は南に停留してたと思うが遠いので最寄りのポルノフにしたのだ。

しかし変態が集まる街。

美女（ボニー）の香りがしたとはしやぎ出した数名の変態が編隊を組んで入り口まで追いかけてきたのは予想外だった。

そのため俺は直ぐにボニーを抱えて逃げたものだ。あんな連中に汚されてたまるかってんだ。

『そのお姫様だっこ、好意を抱くよ』

ちなみにブラを頭に付けたままコイツもやって来た。

期待を裏切らない変態の極みに少しだけ感服した。

「しかしこうして安全に外海に出られたのじゃ！ 新たな冒険の始まりだぞ!!」

ボニーはまた外海に乗り出せたことに大はしやぎだ。

子分も一緒にはしゃいでいる。

「フラッグの案によって安全に外海まで踏み出せた、感謝するぜ」

「でもそれは一度外海に出たことあるアシエル達だったから可能なやり方だぞ？ もし外海に乗り出してなかったのならハーピーの羽はポルノフにボニーが飛んでも船は飛ばなかっただろうし。だからこれは過去に君たちが奮闘したおかげさ」

「……そうか、私たちは外海の世界から情けなく逃げただけでは終わらなかつたんだな」

「そうだよ、だから良くやったよ」

一年前に外海まで乗り出した彼女達の苦労は無駄では終わらなかった。こうして安全に外海へ進む事が出来たのだから。

「フラッグが居なかったら出来なかったかもな」

「そんな事ないさ。陸に上がっていればこの方法は思いつくよ」

「でも私たちは海で生きてるから海からまた外海に向かおうと考えていた。でもフラッグが居たから海以外での方法を思いついた。

だから改めてこう思う……フラッグ、お魚海賊団に居てくれてありがとう」

「あ、ああ、俺も……あの船を君たちが襲ってくれてありがとう？」

「はは、なんだいそれは」

「いやー、だってえ？俺は君たちに襲われなかったら出会えなかったじゃん？つまりそういう事だよ」

まさかのエンカウントだが、あれは運命のように感じる出会いだ。爆弾で大怪我したりとハプニングがあったが俺はそれを苦い記憶にはしない。

「じゃあとりあえず、ハーピーの羽を使った時におさかな号が外海に停留するポイントを探そうか」

「そうだな、移動先は多ければ多いほど困らない」

「じゃあ北のほうに行ってみる？それとも東？」

「地図を見る限りだと東にある『マギステア』が良いだろうね。北に行く和外軍がウロついてる可能性があるからな」

「その前に『ロストルム』まで行こう。あそこは廃墟だけど昔は盛んに賑わっていた町だったからハーピーの羽で向えるポイントだ。

海に近いからな」

「なるほどな。なんなら陸の隠れた拠点としてロストルムにお魚海賊団の基地を作るか？」

「おお！それも面白いな！」

でもロストルムは毒沼だらけだから拠点として扱うのは無理だろう。環境も最悪だ。

「まあ陸の拠点は余裕が出来たらで良いさ、今はポイントを作り上げた方がいいからねえ」

「とりあえずアシエル、外海に面した有力な場所が今こら辺にある『ポルノフ』と、北東に『ヤマタイ村』だ」

「他には更に北に行つて『ゴールドポート』も良いと思うぜ」

「そんで南は……『サバサ』かな？」

「それなら『サン・イリア』もアリだな。南と言うよりかは中央の海だが」

「じゃあ西は『マギステア』だな。先ほど言った『ロストルム』からそのまま東に向かえば『マギステア』付近の海域に出れる」

「よし、航路とポイント作りは良い感じだ」

それからもアシエルと小1時間は外海の航海をどうするかの話し合いになった。世界地図に印をつけながらもポイントを作り上げ、海軍と出会わないルートも考えたりと順調だ。

途中エヴァも暇つぶしにやってきたので彼女も交えて話になった。すると外海から『サキュバスの村』にも行ける事を聞いた。その近くには『貴婦人の村』もあるのでそこもポイントとして含めた。

「よし、じゃあ今日はお祝いと行こうぜ」

「それねらアシエル、料理はどうしようか？」

「肉にしよう。保存期限も関係してくるからな」

「なら肉を使ったシチューはどうよ？」

「それは良いな。なら早速仕込みと行くか」

「おけ、決まりだな」

「……相変わらず主婦力高いわね」

「二だろ?? ……それじゃあ!今日の晩飯は夫婦の共同作業と行こうではないか! あっはっはっは!」

アシエルと並んで会議室を後にする俺たちは上機嫌に昂ぶっていた。それから夜ご飯はいつもよりも一段階美味しい料理となってボニーと子分達の喉を鳴らした。

名前「フラッグ」(真名:海ノ雪旗)

レベル「33」

熟練度「50」

この世界に来て「45」日が経過。

ここまでの冒険は

寝る前の個室で日記帳に記録を残した▽

50日目　　外海

外海、それは内海とは違う激しさ持ち合わせ、過酷すぎる環境の恐ろしさを海賊達に教える。

生半可な船では直ぐに崩壊してしまうほどの嵐が当然のように襲いかかり、己の技量を凶り損ねた者は完膚なきまでに打ち崩され、外海の恐ろしさを知らぬ愚か者は必ず荒波に飲まれて絶望することになる。

そのような世界を覚えながら苦しさに立ち向かい、いつしか外海の大波と共に世界を渡れる力を得るだろう。

そんな悪環境の中で今宵もまた、海の荒くれ者達が争いあつていった。

「お頭！　悲報です！　砲撃戦はこちらが押されています！劣勢です！」

「なぜだ!?　あちらの船が搭載してる大砲の数が合わないだろ!？」

「分かりません！」

「お魚の骨を旗にした新参の癖に!!　悔しい！でも感じちやう!!」

「感じてる場合か!!　早く相手の船の後ろを取れ！　位置的にはこちらが有利なんだぞ!!」

「次の砲撃きます!!」

「またかあ!!」

チユドーン！

チユドーン!!

「フラッグ甲板長！ ブーストドリンクです！」

「ありがとう。あと両腕塞がってるから飲ませて」

「え!?! あ、は、はい！」

現在外海にて海賊と砲撃戦となっている。あちらは多量の大砲を備えており、こちらはその半分の砲しか積んでいないので砲撃戦は不向きだ。そもそもお魚海賊団は敵の船に乗り込んで強襲するやり方が得意なため砲撃戦をメインに戦わない。なので大砲の撃ち合いは常にこちらが一步遅れている。だがそんなお魚海賊団はそれを補う手段を持っている。

それは俺自身が砲撃戦を行う事だ。

「行け！ 『マイクロミサイル』！」

俺の上に二つ召喚させるとミサイルが発射される。威力は高く無いが多量に放たれる弾幕は驚異となり、敵の船だけではなく賊達にも攻撃を与える。さらに俺の両肩には『試作3号機』が使用する武器が担いでおり、長距離の攻撃が捗る『フォールディング・バズーカ』と『マイクロミサイル』を次々と撃ち放って敵船にダメージを与え続けていた。

遠距離攻撃だが実弾属性であり、実はコレSP扱いだ。なのでSPが切れると味方がブーストドリンクで回復してくれる。因みに両手塞がってるので子分が代わりに飲ませてくれるので助かる。

「甲板長、ドリンクです。…あ、あーん！」

「あーん、ぐくぐく…」

良くあるエネルギードリンクの味だ。

なんだか懐かしいな。

「プハー、なかなか美味しい」

「え、そうなんですか!? わ、私たちは辛くて仕方ないのですが…」
「え? そうなの?」

ブーストドリリンクの味はマーメイド達には不評みたいだ。人間と人魚はどこか味覚が違うのか? またはコイツらの舌がお子ちゃまだからかな? ボニーもあまり辛いのは好みじゃ無いからそこら辺どうなのやら。

まあそんなことよりも今は戦闘に集中だ。もつと弾幕を撒いてボニー達を援護する必要がある。いま彼女達は海の中を泳いで敵の船に強襲しようと機会を伺っている。なので俺とアシエル達でしっかりと突破口を作らないとただの消耗戦で終わってしまう。敵の城船を制圧すればこの海賊戦は終わりだ。

「フラッグ! 一気に砲撃するぞ!」

「了解だ、アシエル:よし、装填完了。いつでも放てるぞ!」

「打ち方よーい!!」

アシエルは指を上に掲げて一本ずつ折り曲げる。指でカウントを終えた瞬間、アシエルは「放て!」と力強く叫ぶと子分達は大砲から砲弾を放つ。他の子分達も次々大砲の中に入り込んで砲火、敵の船にダイナミックエントリーする。見慣れた光景だがアレって実際は大丈夫なのだろうか? 度胸溢れる子分達の危機管理能力を疑いながら俺も攻撃を開始する。

「いけ! 『大型収束ミサイル』!!」

一斉に放たれる砲撃は敵を怯ませる。激しい一斉攻撃によって敵の指揮系統を麻痺させるとボニー達は待ってましたとばかりに強襲乗船を行い、一気に敵の船の制圧を開始する。

アシエルも援護に回ろうと海の中に飛び込み、俺はひたすらおさかな号で仲間と共に砲撃戦で叩き込む。あまりやり過ぎるとフレンドリーフアイヤーしてしまうのでタイミングを測りながらも攻撃の手は緩めない。

「お主がお頭か？」

「そうだが何か？」

「我は大海賊ロザの子孫、名はボニー。其方の首を討ち取らせてもらうぞ」

「へっ！ 子孫だがなんだか知らねーが上等じゃねーか！ 来い！」

「よし！参るぞ!!」

お互いのお頭同士は剣を引き抜き、戦いが始まる。

剣撃による勝負はボニーが優勢になり敵大将に引けを取らない。

「うおりゃあー!!」

「うー！ぐぐつー！こ、こいつ!!」

海賊の間では『お頭 対 お頭』の一騎討ちが主流であり大体はこうして戦い合う。そしてこの時のボニーは誰よりも強く、アシエルすらボニーには勝てないほどだ。マキブをフル活用すれば俺も負けることはないが、未だに剣同士で交えた勝負だとボニーには勝てない。

その腕前によって皆から尊敬を抱かれてる。

今のボニーは強くてかっこいい皆のお頭だ。

「はあ!!」

「なっ?!?!」

お、上手いな。

浮き輪を敵大将にぶつけるとそのまま輪つかの穴に剣を通して敵のお頭に一撃斬り込んだ。

「コイツっ!!」

がむしやらに反撃してきた敵大将の攻撃、だが冷静なボニーは鞘で受け流すと肘打ちでタックルして体制を崩し続ける。

「ならば!こいつでも喰らえや!!」

「あまいぞ!」

敵大将は足元に壊れたタルの破片を飛ばして反撃するがボニーは尾びれで地面を叩き、畳返しの要領で足元にある木板を浮かせて盾にした。そのまま木板を敵大将に弾き飛ばすと敵大将は木板を両断。

「見えたぞ!」

ボニーは腰にあるもう一つの武器を掴んで薙ぎ払う。

「フラッグ直伝『スクリューウェブ』じゃ!!」

パリーン!

「なっ!!?」

敵大将の剣をスクリューウェブで粉々にした。ボニーの武器破壊に敵大将は苦虫を噛み潰したような顔で腰からもう一つの武器を取り出すが、ボニーは愛剣の『闇のサーベル』を投げて阻止する。敵大将の取り出した短刀は投擲された闇のサーベルにより弾かれてしまい丸腰になる。ボニーは間合いを詰めて敵大将の胸倉を掴むと腰に力を入れて地面に叩きつけた。

「うおお!!」

「ぎよえええっ?!?!?」

叩きつけられるとマントが首元から剥がれる。ボニーは甲板に刺さっていた闇のサーベルを回収すると剥がした敵大将のマントと海賊帽子をサーベルの剣先に引っ掛け、真上に掲げる……

「討ち取ったり！ 我らお魚海賊団の勝利じゃ！」

仲間に勝利を叫んでいた。一騎討ちのお頭を守っていた良い仲間も勝利の雄叫びを上げ、敵の子分達は戦意喪失する。こうして久しぶりにエンカウントした海賊相手に対して俺たちは勝利したのだ。

「本当にうまく戦うよなボニーは」

ボニーのバトルセンスは今のロリ状態なアリスを超えてるだろうな。

ロリアリスは多芸だけどいま現在はボニーが強い。

これは間違いない。

「あと他に言うならば……」

「あははは！あははは!!」 ジタバタ

「笑いすぎだろ」

先ほどの『うおお』は魚の『うお』で掛けて、『ぎよえええ!』は魚の『ぎよ』の意味を理解したエヴァは笑い転げている。

さて、戦後処理だ。

まず敵の海賊の旗を燃やしてしまう。

命を奪うことはあまりないが男の場合は…

まあ、察してくれ。

あとは財宝と食料に家具。

もう何でもかんでもだ。

「海賊らしく頂いて行く!」である。

そしておさかな海賊団はいつも通りお祝いだ。

「フラッグ! 今日も活躍したのだ!」

「おつかれボニー、カッコよかったぞ」

「うむ」

ボニーと飲み物を乾杯する。乱闘後に生き残った祝杯は美味しい。あまりお酒は飲まないけどこういう時は少しだけ頂いている。

「そういえば敵から宝の地図を手に入れたよな?」

「うむ。 その地図は『昇天の羽』と聞いておるのじゃ」

「昇天の羽？ どういう事？」

「わからぬ。 だがアシエル曰く『天使の姿が拝めれる』との事じゃ。
地図自体はまだ数十年前で最近らしい」

天使……か。

「……………因みに場所は？」

「北の雪山の方とか言っておったぞ」

「……………北、か」

北、雪山、天使……

これは、つまりあの場所を示しているのか？

「で……………行くの？」

「もちろんじゃ!!」

即死と昇天の対策無しに向かうのか？

そりやまた大変だなあ……

フェニックスの羽を買い溜めしとくか……

◇

西の外海
54日目 昼

外海はいつも荒れてるが今日はとても落ち着いている。しかし今日まで外海のもん娘や同業である海賊から日夜連日海上戦を繰り広げて皆は疲弊していた。嵐も襲いかかる外海の恐ろしさを感じながら激戦区からなんとか西に逃げ延びた。

しかし外海に関してだが：

いや、もう、簡単に死ぬる。

内海がとんでもなく優しい事がよくわかる。

終始冷静な判断を下せるアシエルが居なければ壊滅していたところだろう。船長であるボニーも戦うだけなら頼りになるし、士気も上がったりと根性面でならこの海賊団は乗り切れるが、船を操る関係上アシエルが居ないとおさかな号が沈んでいただろう。その上で俺の存在は欠かせなかった。おさかな号のこの船は砲撃戦に向かない船であり、速度を考慮した強襲型である。つまりおさかな海賊団は船に乗り込んで戦うのが得意と言う事。故に俺がエクバの職業で多彩に遠距離攻撃が可能だから船同士での砲撃戦は引けを取らないでいた。しかしビーム兵器は俺の魔力が弱すぎて船に傷付けることはあまりできなかったが、実弾属性の武器は被害を広めやすく試作3号機のマキブが猛威を振るった。なので俺も働き詰めである。キツイです。

てか皆きついです。

なので夜は襲われなかった。

いや、夜は夜でデザートは別腹感覚に襲ってくるときはあつたけど、今日それが無かったのは最後の海賊戦の時が理由。ボニーとア

シエルは敵の毒ガスにやられてしまった。しかも厄介なことに神経が麻痺する毒ガスであり、多少なり治療は出来たものの自然回復を頼りにしなければならぬ。今日は二人ともあまり動けないだろう。

だが幸運な事に海は快晴で、波は穏やか、周りに敵影無しで、布団を干せるくらいに晴々としている。無人島から果実を回収したりと食い繋ぐ事ができる。子分達が平和だとほのぼのしていたが、それは盛大なフラグとなった。

「人間では無いか！ お主を貰うぞ！」

「ふあ!? ビ、ビーム十手！」

「アベベベベ!!」

なんとマンタ娘が襲いかかってきた。俺が船に乗り込む最中に海中から飛び出して攻撃したが、単調な拳だったのでビーム十手で防いで咄嗟に蹴り飛ばした。しかしまた飛びついてきたのでF91のビームシールドを投げて拒否する。船に何とか乗り込んだのだが先回りしていたかのようにおさかな号に上陸していた。そして…

「お主！ 私の花嫁になれ！」

「それを言うなら花婿だろ！」

「む、そうか！ なら婿だ！ 私の婿になれ！ さも無いと船ごとメイルシユトロームで海の底に沈めるぞ！」

「疲弊してるこの船になんてこととしてくれるんだお前は!?!」

マンタ娘の大津波とか洒落にならない。

なんとかマンタ娘を落ち着かせる事にした。

その結果…

「メイルシュトロームは勘弁して欲しい。そのかわり一騎打ちで白黒付ける提案を出す」

「む？」

「俺が負ければお前の物になる。ただし俺が勝てば諦めろ。それで決めよう」

「ほお？ それは面白い。だが人間如きがこの大海を制する覇者に務まると思っておるのか？」

「俺は弱いけど、俺に力を貸してくれる武具達は強い。それを使い熟すのは大変だけど、そこを超えれば大海の覇者なんて強さは関係ない。 負けないさ」

「ふん、たまにお主のような無謀な輩も現れてはなすすべなく打ち倒される愚者も珍しく無い…が、その物言いは期待したくなるでは無いか。 よかろう受けて立つ。 せめて余興程度には奮ってみせい」
「よし決まりだな」

なんとか話を取り付ける。

でも決まったのは良いが…

「無謀だ！」

「何を考えておるのじゃ!？」

「マンタ娘のメイルシュトロームは危険すぎる。 船なんか簡単に沈んでしまうだろう。 しかし狙いは俺一人でこの船では無い。 ならば取るべき選択はコレだよ」

「し、しかし！ 一人で戦うなど！」

「マンタ娘は一人で来ることを望んでいる。 もし約束を違えてしまいうなら身栄えなくメイルシュトロームを放ってくるだろう。 それに…腕の立つ戦闘員のほとんどは前日の毒ガスが響いている。 お

さかな海賊団の中でまともに動ける奴はいない」

「くっ、せっかく昨日を乗り越えたのに……」

「む、無念なのじゃ……」

「……」

そして、約束の時……

「待たせた」

「簡単には倒れてくれるなよ?」

「大丈夫、ガンダムはそう簡単に落ちない」

「?」

俺は一人で近くの小さな小さな孤島に降り立つ。

目の前には海面に足をつけて立つマンタ娘だ。

俺はマキブを召喚して臨戦態勢に入ると、マンタ娘は戦いを始めた。

「では行くぞー!」

マンタ娘は開幕お得意のメイルシウトロームを放つ。なんの準備も無しに放ったという事は予め力を蓄えていたのか、やってくれる。迫り来る大波はやはりおさかな号に被害を与えられるほど避けることができない攻撃である。そしてこれに耐える事が出来なければ即おしまいだ。しかし俺は回避を考えず目を閉ざして『太陽炉』のマキブを胸元に添えた。強く念じる。

「フラッグ！」

ボニーとアシエルが叫ぶ。

人間一人を容易く飲み込む大津波だ。

マーメイドじゃない生き物がこれに飲まれて無事では済ま無いだろう。

「展開！」

俺は予め展開してた『シールドビット』で受け流していた。

「む？ 耐えたけど？ ただの人間ではないな」

「トランザムツツ!!」

俺の体は薄い紅色に染まり、視力や聴力が研ぎ澄まされている。

体の底から湧き上がるこの感覚は何事にも素早く行動が移れる気分だ。 少しでもチリチリする。

ちなみにゼロシステムの手段もあつた。 この場合だと思考力や判断力を急激に底上げして、敵の攻撃などを凌ぎ切れる力を得るが、誘導など関係ない流しゲロビの如く襲いかかる全体攻撃のメールシュトロームから逃れる力はない。 ならばここは何もさせない怒涛の攻めで押し切るのみ……

「今日は本気モードだ！ 惜しまないよ！」

「！」

紅く染まった体は高速で動くことにより残像を作り上げながらマンタ娘に接近する。 見たことない現象にマンタ娘は戸惑うが水の

刃を飛ばして迎撃する。だが俺は『ダーミー隕石』を召喚するとそれを踏み台にして回避する。踏み台にしたこの動作はとある強化アクションに繋がる。その結果懐にある『赤い彗星』のマキブが密かに輝いた。

「知ってるか？ 赤くて三倍って言葉を？」

「なにを!？」

「このトランザムは色々と能力を三倍にしてくれる。そこへ更に三倍の速度を投入したらどうなるかと言う事だ！」

急降下の落下蹴り^{ゼイドラ特格}でマンタ娘に突撃する。あまり早さに驚いたマンタ娘は腕を交差させて攻撃を受け止めるが最終的に力負けして吹き飛ばされてしまった。おさかな号からはマンタ娘を相手に力押しで勝てたことに驚きの声が広まる。そりや速さ^{トランザム赤くて三倍特格}速さ力のトータルから放たられる威力なんだ。同じ身長差ならマンタ娘相手でも押し込める。

「ぐぬう、やってくれるツツ！」

「耐えるのか…！」

マンタ娘に関しては外洋の海に住まうそこら辺のもん娘よりも5倍の体力を持つてゐることは原作ゲームのプレイヤーとして知ってたがタフすぎる。可能ならば先程の一撃で仕留めたかった。まもなく時間制限で体からトランザムと赤くて3倍が消えてしまいレベル差が出てしまい、その上身体に反動が出てしまう。ゼロシステム終了後の頭痛よりはマシだが…いや、ゼロシステムも使う時が来るだろう。出し惜しみで敵う相手じゃない。

「外海の覇者は伊達じゃないな…！」

汎用性が効くお気に入り魔法1000ダメージ打ち消しのヴェスバーとABCマントを召喚してそれを羽織ることにした。本当はシールドビット貫通以外100ダメージ打ち消しが安定だけど次の使用にまだ時間がかかる。いまはこれで凌ぐしかないだろう。

「強いなお主！　今までであった人間の中で強い！　ふふふっ！　強い男は好きだぞ！」

「そりやどうも」

軽口を叩きながら俺はドダイを蹴り飛ばすとガンダムXのハモニカ砲を射ち放つ。ドダイによって視界が遮られたマンタ娘はハモニカ砲のビームに反応できずに直撃した。ダメージを確認しつつバズーカを取り出してそのまま海面に落ちる。しかし足をしっかり海面につけると…

俺は海の上に立って浮いた。

「甲板長!？」

「海の上に立っていますよ！」

「す、すごい！」

「なんでー!？」

「アシエル、あれは…」

「お嬢の考えてる通りだと思います。あれはエクバの力では無い。ミンクから購入した”人魚のお守り”がフラッグの体に流れる”あれ”を引き金にして海に立っているのでしょうか？」

「っ、その件はフラッグに黙ったまままだ良いのだろうか…?」

「そうですね、いずれ明かさなければなら無いでしょう。 ”あれ”

に関しては致した無いとは言え黙ったままでいるのは良くない。

いずれフラッグ自身も違和感に気づくでしょう。　なら、私たちの口から打ち明ける必要があるでしょう」

「フラッグ……お主は……」

「フラッグうゝ！」

「頑張って甲板長!!」

「負けないで！」

「がんばれー」

「ふん、モテモテだな」

「ああ、かわいい部下達だろ？　はあ…はあ…」

「だがその部下の前で貴様は負けてしまうぞ、この程度で息が上がってるようならな！」

「そんなあんたもヒレに元気が無いぞ。　どうした？　最初のメイルシュトロームで息切らしたか？　もしそうなら外洋のモン娘にしちや大したことねーな」

「っ、あまり調子に乗るなよ！人間！」

俺はヴェスバーで攻撃するがマンタ娘は海の中に回避する。

さつきから俺は海水から出たり入ったりして攻撃してくるマンタ娘とひたすら攻防を続けていた。　同じことの繰り返しだが長期戦ゆえに動きが鈍り始めていた。　だんだんと重なる疲労に集中力が下がる一方。　これは危ないな…

「(でも挑発は受けてくれた、なら後はゼロの二秒間がハマれば……)」

俺は余計なマキブをパージしてビームサーベルだけを持つ。
脳みそを働かせてマキブの『宇宙の心』をリンクさせて準備した。
後は敵の攻撃を………感じろツツ!!
測るんだ！ タイミングを！

「どこを見ておる！沈め！」

「っ…今！」

マンタ娘の殺気を感じた瞬間『ゼロシステム』を発動した。やはり使い慣れないマキブなので頭が痛むが、それを耐えながら背後からの攻撃を回避する。しかし拳にエネルギーを込めたマンタ娘の攻撃は俺の左肩を掠めた。ゼロシステム時の被弾による倍加ダメージが入るが歯を食いしばって浮遊するマンタ娘の下に潜り込む。

「貫ったぞ!!」

「なんだとっ!!?」

クリーンヒットした思った攻撃は左肩を掠めるように拳が通る。予測不可能な回避はマンタ娘の思考を止め、その懐はガラ空きとなってしまう。俺は体を大きく捻りながらビームサーベルを真下から振るい、マンタ娘の腹に力一杯打ち込んだ。

「ぐぬううツツ!!?」

渾身の一撃を入れられたマンタ娘は真上に斬り飛ばされる。サーベルなのにまるで打撃を受けたような痛みが体を襲われ、今のマンタ娘は無抵抗に打ち上げられた魚の様だった。夕日が見え始めるその空からマンタ娘は俺を見下ろし、俺もマンタ娘の目を見る。

「落ちろ！蚊トンボ!!」

大海の覇者から受ける洗礼に決着をつけるため、ビームライフルを真上に掲げ…

「!」

トリガーを引いた。

バキューーーン
!!!!

大海に映る ラストシューティング。
綺麗な夕日の中央でソレヘ光った。

名前【 フラッグ 】（真名：海ノ雪旗）

レベル【 39 】

熟練度【 54 】

この世界に来て【54】日が経過。

ここまでの冒険は

マンタ娘との一騎打ち前に
この日記帳に記録を残した▽

つづく

54日目　　～　おさかな号

マンタ娘との一騎打ちは俺の勝利に終えた。

しかしラストシューティングにて打ち上げたマンタ娘は抵抗なく重力に引かれて落ちる。その下には俺が居て、そのままビターン！と音を立てて海水に打ちつけた。めちやくちや痛かった。しかもマンタ娘にのしかかられてる重さで海に溺れそうだったり散々だった。うつ伏せのままドダイを召喚して、まだ動く片腕でドダイを掴んでそのまま気絶してるマンタ娘を背中に乗せておさかな号に向かった。背中に張り付いてるマンタ娘を剥がそうにも力が出ないし、片腕やられてるためそのまま移動していた。

その代わり背中に伝わるマンタ娘の胸はゼラチンのように柔らかく、ボニーやアシエルのような健康に張り詰めた肌とはまた違った柔らかさだ。要するにスゴーク柔らかい。しかし溺れそうになる瀬戸際なのでその感触も存分に堪能する気はなく助けてもらうのに必死だった。もったいない。

それから仲間を迎えられると小舟で引き上げられた俺は仲間から賞賛を受けた。大海の覇者であるマンタ娘を討ち倒した偉業は海賊の業界で初めてらしく、それがおさかな海賊団である事を子分達は喜ぶ。その上ただの人間が討ったその下剋上に皆は興奮気味だ。

「いててて…」

「無理しすぎだねえ」

さて、勝手に宴と盛り上がる子分達を他所に俺はアシエルから治療を受けているところだ。ゼロシステム時にマンタ娘の拳が俺の腕を掠めたが、被弾倍加ダメージの原作仕様が働いていたのか深い怪我を負っている。マンタ娘の攻撃力の高さも窺えたりと俺の腕の酷さが窺える。人間って本当に脆いな。

「しかし片腕を損傷するだけでマンタ娘を相手に勝てたのはすごい事だな」

「うむ、大海の覇者を人間が倒すなんて今まであったか？」

「ぶつちやけマキブ様様です」

謎の職業『エクストリームバーサス』と明らかにマキナの上位変換である『マキブ^{魔機武}』のお陰だ、俺自身はそこまで強くはない。俺から『エクバ』と『マキブ』を取り上げたらただの雑魚に早変わりだろう。一応現時点での熟練度は50超えてるから『2500機コスト』の技や兵器が扱えるようになってる。しかしこの辺は使いこなすのが非常に大変であり、未だに『2000機コスト』の兵器ばかりを使ってる現状だ。

まあ性能を原作忠実に引き出せば大体はF91だけの武装で充分だからな。UCの30年後とは言え『ヴェスバー』が軽くインフレしてる。見本も言ってたけど「コイツは、強力過ぎる…」って言葉がよく分かるくらいに。

「なあフラッグ、お前は勝てた。それは良かったかもしれないが……怖すぎだ」

「相手はあのマンタ娘、どうなるかと思ったのじゃ…」

「…」

マンタ娘は外洋のモン娘では最強クラスだ。そんな敵に対して“ただの人間”が相手にして勝てるなんて思うだろうか？ 職業によつては勝てないことも無いだろう。しかし普通なら一対一で戦うことはありえない組み合わせである。

「フラッグが弱くない事を知ってるさ。甲板長として認められて敵

しい航海を支えて来た。けれど、それでも…お前は人間なんだ」

「ああ……そうだな」

アシエルは俺を『人間』と言う。

やはりそうだよなマーメイドからしたら。

人間ってそのくらいなんだ。

「我はお主を否定したくない。お主の努力を、強さを否定したくない。でも理解はして欲しいのじゃ。フラッグと言う存在を失うには大きすぎる。だから…」

「わかってる。わかってるよ。俺は人間で朽ちるに容易いさ。

そこは俺自身がよくわかってる。今回のような事は、致し方無いにしろ気をつける。だから君たちを心配させすぎた俺を許してくれ、
団長」

ああ、辛いなあ…

なんでこんなに脆いのか。

俺が人間じゃ無ければこうはならなかったのだろうか？

もちろん二人は悪く無い。

俺が逆の立場なら恐らくそうなる。

けど俺は…

それで心配されるなんてなんか嫌だ。

でも俺は人間を捨てるなんて出来ないし、したくない。

このままが良い。

だけど二人以上には慣れない。

この世界の主人公ルカの様に秘めた力天使は持ち合わせてなんかいない。

マンタ娘はたまたま初見殺しが活きた。

でも次は上手くあるとは思えない。

原作ゲーム同様対策されたらおしまいだ。

あとはプレイスキルの問題。

それはつまりこの世界では種族値の問題。

人間の種族が外海を超えた世界で立ち向かえる訳がない。

だから俺の強さはハリボテ。

職業のエクバはただの飾りなんだ。

「フラッグ、もし今回のような事がまた起こすとしたら有無言わせない強さを持ってくれ。お前にとって無理難題でもそれが絶対条件だ」

「アシエル、それは本当に無理難題だな…」

「けど、そのくらいをフラッグに求める。外海に出た今、お前は強くないとならない。過酷を強いることになるな…」

「構わない、俺はこのエクバと共にもっと強くなる。約束する」

アシエルから治療を終えてそれぞれの役割に戻る。

ボニーからは今日はもう無理するのは許さないと言われて大人しくする。

気づいたらもう夜でお星様が出ている。

子分達は明日の準備に取り掛かろうと室内でドタバタと動き出した。

「……」

ゼロシステムで被弾した腕が上手く動かない。

しかも掠めた程度でこれだ。

やはり脆いよな…

「っ…」

足りない。
足りない。
足りない。

レベルリングすればいい話ではない。

不安だ。

外海まできた俺にこれから何ができる？

今回はたまたま強敵を倒せただけの話だ。

俺はもうそれを何度も言っている。

紙一重なこの弱さに有無言わせない強さってなんだ？

「はあ、リヴァイアサンの時と言い、やはり…」

考え事をして…ガコン と音がする。

「!?」

船の側面に取り付けられた小舟から音が聞こえる。

誰かいるのか!?

俺はビームライフルを構えて下を確認すると。

「待て！ 撃つな！」

声を出して静止したのは外洋のもん娘だ。
しかも、俺はそもん娘と再び出会った。

「は？ え？ なんてあんたがココにいるんですかねえ？」

「そ、それは我が知りたい！」

つい数時間前に聞いた声。

現れたのは一騎打ちした”マンタ娘”だった。

彼女は俺を手招きして近くに寄せる。

俺はビームライフルを閉まって小舟を見下ろす形で顔を出した。

「もしやお前付いてきたのか？」

「違う。小舟に放置されておったのだ」

「放置？ え？ ……いや、まて。もしかして子分はあんたを小舟の中にぶち込んだまま忘れてたとか？」

「わからんが恐らくそうじゃないのか？ 目覚めたら小舟の中、そして上を見上げれば星とお月様、周りには誰もいない。大海の覇者に対してそのまま放置プレイときた。こんなの生まれて初めてだ…」

まったく、子分達の仕事の甘さはどうにかならないのかな？ 戦闘ではすぐ頼もしいのにそれ以外はどこか抜けてるから困る。まさか小舟にマンタ娘を放置してしまうとは考えもしなかった。

「まあ良い、むしろ助かったというべきか。ボロボロな状態で海に流されていたら大変だった。ほかのモン娘に見つかったらどうなっていたか…」

「マンタ娘を襲う奴なんていつかく娘以外におらんやろ」

「そうとは限らんぞ？ 大海の覇者だとしても戦いの敗北者としてボロボロに弱り果てた姿を晒してしまったら、それはチャンスとばかりに捕食する奴もいる」

「治安悪いな外海」

「管理されてる世界な訳が無い。 敗者はそうなる運命なのだ」

マンタ娘が言うと言葉の重みが違うな。

「とりあえずどうするの？ もしやまた戦うとか言わないよな？」

「安心せい、そんな事はせぬ。 そもそもこんなに消費してるのだからその力は無い」

今のところは安全のようだ。
ほっとした。

「とりあえず周りに見つかったら大変な事になるからお引き取り願っていいですか？」

「そうじゃな。 目も覚ましたし、ココからこっさり出て行くのが普通じゃろうが…ふふふつ、今その優先順位が変わったのじゃ」

「何故に？」

待て、嫌な予感がする。
しかし遅い。

マンタ娘の目がキラーンと光り、俺は一瞬だけ身を硬直させた。
それを逃さないマンタ娘は空かさず腕を伸ばしてこちらの服をガシツと掴んだ。

「ほっ」

「それなのじゃっ」

咄嗟の出来事に反応できずマンタ娘の腕力によって小舟の中に招かれる。

ふわりと浮かんだ体は無重力に従い、そしてマンタ娘の上に落ちた。

「んぐっ…」

「ふふっ」

痛みはない。

むしろ、むにゆううん、と柔らかい感触。

そしてこの感触には詳しい。

ボニーやアシエルなどから味わった事あるこの感じは間違いない。

俺の頭はマンタ娘の大きなお胸に挟まれていた。

「どうだ？ 大海の覇者の胸は柔らかいだろう？」

「……………え？ なにこの状況？」

でもマンタ娘の言う通りたしかにアシエルやボニーよりも豊富な胸より柔らかい。思わず力を抜いて味わいたいくらいに絶品だ。このまま埋もれていたい欲望に掛けられるが俺はこの状況がかなり危ない事に焦り始める。しかしそれは杞憂だった。

「安心せい、命を奪おうなど考えておらぬ」

「……………何がしたいんだ？」

俺は警戒しながらも胸の中に沈んだままマンタ娘に問いかける。

「お主は確かフラッグと言っておったよな？」

「あ、ああ……」

「そうか、なら単刀直入に言おう」

「？」

「我はお主に惚れたぞ」

「……………は？」

「聞こえぬか？　なら、もう一度だけ言ってやろう。　我はお主の強

さに惚れたのだよフラッグ」

「なっ……」

お主の強さに惚れた……偽りなき瞳から発せられる言葉に対して俺は何故か呼吸が苦しくなり始める。胸の中に沈んでいるからではない。言葉に対して心拍数が嫌に高まる。

「いや、待ってくれ。俺はそんなに強く無い。この強さは職業ゆえの賜物で、これが無ければ俺は海の藻屑となっている。だからあんたが評価する程の人間じゃ無い」

「そんな事はない、お主は強い。何せ大海の覇者を一人で相手するなど今までなかったことだぞ？　お主が今就いてる職業よりも強い職業に就いた他の人間が我に立ち向かった事もある。だが一人で立ち向かうような益荒男など一人もいなかった。だがお主は一騎打ちの戦いで全力を持って我を倒してくれた。これに意味があるのだよ」

そう言うとマンタ娘は包帯を巻いた腕に触る。

「いッ……」

「おおと、痛むか、すまんすまん。　だがやはりこの腕を犠牲にした痛みはとてつもない事だろう。　それでもお主は食いしぼり、海を制する我を海から引きずりあげた。　勇猛溢れる」

この腕を傷つけたマンタ娘の拳だったが、今は俺の腕をその手で優しく撫でる。

心なしか痛みが引きはじめた。

「お主の渾身の一撃により空に打ち上げられた我は力なく見下ろしていた。その時に見えたのだ。銃を空に伸ばしていたお主の瞳は強者の眼光に染まっていた。狙われていた我の胸の奥はグツと燻られたぞ?」

マンタ娘は賞賛しながら包帯に巻かれたこの腕からそのまま俺の頬に手を伸ばして優しく触れる。気持ちが沈んでいた顔がスツと持ち上げられてマンタ娘と目が合わさる。綺麗な海の色をした眼で吸い込まれそうさ。

「……俺は……」

「フラッグ、弱さに恥じるものは悪いことではない。種族故に劣等感を感じるのは悪いことでもない。だが忘れてはならぬ。皆がお主を頼りにするのは力では無い。我に立ち向かうほどの心を持ち合わせた勇士だからだ」

「……勇士……か」

「お主は強い生き物だ。我が面を合わせてそう言うのだ、間違いない」

常に俺の強さはマキブ頼りだと思っていた。

俺が戦えるのはエクバがあるからだと考えてた。

でも『強い生き物』から「強い生き物」だと告げてくれる。

こんなにも嬉しい言葉があるのだな。

「……そうか、ありがとう。君はそう思ってくれるんだな。嬉し
いよ」

「堂々としている。男なら己の全てを誇れい！」

「!! ……ああ、わかった、わかったさ。俺は一騎打ちであんたに
打ち勝った。大海の覇者を気取ってる井戸の中の蛙を倒した。
これで良いだろ？」

「はっはっは、そうだ、それがお前だフラッグ。だが…井戸の中の
蛙は流石に調子に乗ってくれるな？ ふふふっ」

ニヤリと笑うマンタ娘の雰囲気が一変する。

「今から蛙のように潰されると言うのに、な」

そう言うとマンタ娘はグツと俺を押し退ける。しかし怪我人であ
ることを理解してるのか雑には扱わずむしろ優しく、しかし手際良
く体の位置を変えるとお互いの体制が逆転した。俺が下で、マンタ
娘が上。これは本当にまずい。しかし包帯に巻かれた片腕なら
上手く機能せず、更に小舟の中なのでうまく体が動かせない。抵抗
力が無い俺はマンタ娘に馬乗りにされて押さえつけられている。
そしてだんだんと恐怖心が巡る。

「ふふふっ……」

「っ」

マンタ娘は服の中に手を滑らせると腹を、愛撫して下半身をなぞる
ように触れる。ただそれだけなのに体じゅうがゾワゾワと痺れる。
ああ、今もん娘に狙われている。

「忘れてないと思うが我は人間の男性を襲うもん娘。これから何が起こるのか分かるな？」

上に跨るマンタ娘は妖艶に笑みを浮かべている。上から降り注ぐ月明かりは彼女を幻想的に包み込み、ヒレの一枚一枚が蒼白く発光をしていた。覆い被されれば簡単に飲まれそうな彼女の体は恐ろしくも美しさを感じさせ、こちらを覗き込む彼女の眼は妖艶に染まっている。妖艶な彼女に対して男性のザガは激しく高揚していた。

「これから強者であるお主の子種を宿し、強い子孫を残させてもらう」

これからの行為のためこちらの衣類を剥がそうとするマンタ娘。

だが……俺はマンタ娘の腕を掴む。

「待てよ……」

ゾワツ…

「!？」

ゾワツ…

「敗北者のくせに勝手なコトをするなよ」

何かに怯える表情を見せたマンタ娘。

しかし俺は構わず彼女の背首に腕を通すと力を込めて引き寄せ、互いの額と額がぶつかり合う。

眼と眼が数センチで、唇と唇が数ミリ、吐息が混じり合う。

「もし俺と交わるなら条件がひとつだ」

「っ」

少しでも動けばお互いの唇は触れ合う距離。

そんな事は気にせず自分でない自分をマンタ娘に吐き出す。

「お前が育む強き子孫はおさなか海賊団の枝となれ。それが条件だマンタ娘……！」

この時、俺の体から謎オーラが放たれていた。それは身の毛がよだつプレッシャーとなつてマンタ娘の体を蝕んでいる。しかしそんな状態に気づかない俺だが、謎の昂ぶりを吐き出しながらマンタ娘に強く訴える。

そのプレッシャーに飲まれたのかマンタ娘は……

「ッ、ッ、はは、く、ははは……！」

目を見開くマンタ娘は呼吸を荒くしながら笑い始める。

濃ゆく互いの吐息が混じる。

二人の心臓の音が小舟の中でうるさく鼓動していた。

「いいだろうッ、くれてやるッ！　くれてやるさッ!!　我とお主の証をこの月明かりの下で育ませてやるッ!!」

興奮する様にマンタ娘はこちらの名前を呼ぶ。

「今から、お前を、襲うぞ、フラッグ……！」

月明かりを舞台にした交わりは外洋の大海如く大荒れを起こす。

その小舟からは『紫色のオーラ』が溢れていた…

名前〔 フラッグ 〕（真名：海ノ雪旗）

レベル〔 40 〕

熟練度〔 55 〕

この世界に来て〔54〕日が経過。

ここまでの冒険は

大海の覇者に強き子孫を託した後
個室で日記帳に記録を残した▽

つづく

56日目　　外海

　　西北の外海　　

　　マンタ娘の一騎打ちから数日後のことだ。

「は、はくしよん！……寒っ!!」

昨日の夜は軽く発情したエヴァによってしつぱり絞られたのでやや疲れ気味。体力の関係で俺は午前中のお仕事をサボるため、見張り台に逃げた。北に近づく毎に寒さがハッキリとしてきたので薄着ではくしやみを耐えれない。防寒着を個室から持ってきてくれれば良かったと航海しながら後悔してるところだ（激寒）

「ふえつつくしゅん！」

アホ（激寒）なこと言ったら余計にさむくなってきた。

何やってんだ俺は……

不安定な睡眠を諦めて周りを眺める。

「んあ？　何だあれ？」

水平線の先で小さな物体を見つける。

海面に浮かぶものと言えば船だろう。

俺は5日ぶりの他の船を見つけた。

「確認するか」

俺はデュナメスが使用する『スナイパーライフル』を召喚してスコープを覗き込む。別に狙い撃つつもりは無いぞ。ただこのマキブは倍率スコープが搭載されてるから遠くを覗き込むのに丁度良

いのだ。ダブルオー系の武装を望遠鏡代わりに使うなんて随分と贅沢だけど気にしない。

とりあえず俺は最近寒く感じてきた空気とともにスコープの中に写される船を確認する。船の側面には何も番号は書かれて無いがとても立派な船だ。密漁船でもなければ違法な船でもない。てか大陸から離れたこの外海に密漁船とか死ぬ気かよ、笑っちゃまう。もちろん海賊船の可能性はあるが船の見た目からしてそのような感じは無いから少し判断に困る。

もし海賊船でも無いのならあの船は手練れの冒険者達が乗ってる船って事になるだろう。

仕方ない、サボるために見張り台へ逃げたがアシエルと早速判断を問うか。

「おーい、アシエル」

「？」

ピューーーーン

シユタツ

「つとと」

「やれやれ、見張り台から落ちてくるとは随分な登場だねえ」

「網を掴んで降りるより早いし。それよりも10時の方向を見ろよ、何か船が見えるぞ」

「？」

アシエルは自分の望遠鏡を胸の谷間から取り出して、示した方向を覗き込む。

すると…

「おいおい、なんであの大国の船がこんなところにあるんだ？」

アシエルの言う『あの大国』とは何のことだろうか？ 海軍では無いと思うが一体？

「あれは海戦向き船じゃないからドンパチする事はないと思う。そのためこちらから何もしなければ安全だと思うが…あまり接触はしない方が得策だねえ」

「そうか。でもなんだろうな？ あの船の進行方向から見ると北に行ってるみたいだし、俺たちと同じだぞ？」

「だな。でもあの船とは距離を取りながら遅れて行こうか。何がわかるか分からないからねえ」

アシエルは警戒を呼びかけながら子分に指示を出す。あまり寒い海域には居たくないが仕方ないな。安全策を選んで寒さは耐えよう。今日は暖かいポトフでも作るか。

「因みにあの船には人が乗ってるのか？」

「お？ そうだが…なんで人だと分かったんだい？」

「アシエルは『大国』って言ったからな。だから人なんだろうって思った」

「そうか。まあ、隠すことでもない。たしかにあれは人が乗っている。てか、人が主流で動かしてる命知らずな船だな」

「人間でこの外海に来てんだ。それほどに腕が立つ連中なんだろうな。……で、あの船はどここの国の船だ？」

「あれは【サバサ】の船だな」

それほど大きくないサバサの船を眺めなら教えてくれた。

「サバサか。しかしこんなところに何の用だ？」

ふさ、ふさ…

ぱら、ぱら…

「おおや？」

「雪だな。じゃあ今日はやはりポトフだな」

「突然何のことかわからないが賛成だな、…って事で言い出しつぺのフラッグが作れよ」

「作るのはいけど冷たい水で野菜洗うの嫌です。マーメイドなら水の温度は気にならないんだからそこだけ頼むよお」

「やれやれ、困った旦那さんだ」

本格的に北の外海に踏み込んだ俺たちはサバサの船と距離を取りながら目的地に向かう。しかしサバサの冒険者はこんなところに来て何がしたいのか？ 外洋のモン娘と命張り合いながらの航海に見合う価値ある冒険でも見つけたのか？

だが…

「なーんか忘れてるよな俺？ サバサから何かやってくる件について、なんかあったよな？」

小さなイベントなんだけど、ちよつとした驚きがあったよな？ ……まあ、覚えてないってことは大したことではないってことなのか？ とりあえずこの件は保留でいいや。

じゃあ大根のポトフ作るぞく。

「芋はやめてよね！」

「ポトフはそもそも芋だろうくに」

「だめ！」

ポトフ関連でエヴァと一悶着ありそう。
おさかな海賊団は今日も平和です。

◇

＼ 雪越えの洞窟 〉
＼ 57日目 〉 朝 〉

夜が明けた冷たい朝、とうとう目的の場所に辿り着いた。そしてここは30年前に北西の海に落ちてきた『天界』………つて事実は俺達プレイヤーだけが知る事であり、ボニー達にとっては未知なる大地

だ。 外海の環境に立ち向かえないと当然この先はお断りな場所だ。 そしておさかな号も海岸に寄せて停めたが、その隣は崩壊した船が無惨に流されそうになっている。

「ボニー、アシエル、これって…」

「うむ、前日に見つけたサバサの船だな。 上陸と共に壊れておる」

「この船に砲塔は搭載されてないな。 船の作りからすると漁船でもない。 甲板はかなり丈夫だから外海の激しさには耐える仕組みだ。 そうなるとただ海を渡るための船だな」

「じゃあサバサはこの大陸に手慣れの冒険者かまたは調査団を派遣して調べさせようとした感じか？」

「おそらくそうなるな。 しかしこの壊れようだと上陸の間際に敵から船ごと襲われた可能性があるぜ。 乗組員は船を捨ててギリギリ逃げたと思うが…」

「骸はないな。 なんとか逃げたんだろう」

「この船の行方も気になるが我等もここから先は未知なる世界じゃ、気を引き締めるぞ」

「わかった」

俺たちは実力のある者だけの小編成で向かう。

今回は俺とボニーとアシエル、そして数名の子分で組んだ6人編成による探索だ。

因みに連れてきた『子分』はどんな子かと言うと…

「……入り口から嫌な空気だ」

「そうだねー、ここは楽にいかないねー」

「全滅は嫌だぞ、おれ」

「そうだねー、でも私がいるから安心してねー」

「はい先輩、頼りにしてます」

この子の名前【リリツタ】だ。

俺ことフラッグ甲板長の下で働いてくれる子分の一人だ。

ちよくちよく登場してると思うけど『語尾を伸ばす話し方』をする海賊マーメイドだ。主に戦利品の整理や、おさかな海賊団の会計課を務めれるほど頭が良い。海賊としての経験が長く頼れる先輩だ。元々は【海賊】の職業だったが現在は【マスターシーフ】として支援している。

それでこの子は五人姉妹だ。

【ラリッタ】は長女

【リリッタ】は次女

【ルリッタ】は三女

【レリッタ】は四女

【ロリッタ】は末っ子…のように、この順番で生まれてリリッタは2番目のおねーちゃんな訳だ。それでこの姉妹は全員おさかな海賊団に所属していて、それぞれの役割を持っている。

「うおおお!!」

「気合入れるのは構わないけどそこで鉄球ぶん回すなよ? お前の投擲まじて危ないんだから」

「えー? そのマントで防げないの?」

「ABCマントは『魔法ダメージ』を防ぐだけで物理は防げないの! もしレリッタの攻撃に当たれば俺は粉々だるおお?」

こいつの名前は【レリッタ】だ。

姉妹の中では4番目である。

戦闘能力の高い【メガファイター】として前衛で活躍する。マーメイドにしては腕力があり、良く武器をすっぽ抜けさせてしまう。しかし投擲する時の一撃がバカにならないので【鉄球】を扱わせた職業を進めた結果メガファイターになったのだ。最初は乗り気じゃなかったがこの職業で戦う内にすっかりハマっている。まあボニーに続いて強力な前衛として立ち回ってくれるから助かる。ちなみに頭はまだ良い方だと思う。

ちなみに、レリツタはボニー達よりも先に俺が出会った海賊マーメイドだ。

さて、どのタイミングだったか…
まあいいか。

「ルリツタ、準備できたか？」

「はい！できました！」

「じゃあ、今回も頼りにしてるぜ先輩」

「いえ！むしろ頼りになるのは甲板長です！」

この子の名前は「ルリツタ」だ。

姉妹の中では3番目である。

元気で優しい女の子って感じた。 おさかな海賊団には回復専門の仲間が数名配属されており、その中でルリツタはナースの上位互換である【医師】の職業に就いている。 マーメイドなのに生まれつき魔力が無いことをコンプレックスにしていたが、アシエルの勧めでナースに就いて仲間を助けることを選んだ過去を持つ。

しかしSPが重要な医師の職業に就いてのにブーストドリンクが辛く感じるらしく、あまり使用出来ない。 そのため俺が牛乳や蜂蜜などを混ぜて辛さを抑えた味を作り上げてる。 仮名で付けた『甘味ブーストドリンク』を好んでSPを回復してる子だ。

「では出発じゃー！」

「「おー！！」」

寒さに負けない元気の良さで俺たちは奥の洞窟に歩き出す。

1 編成 1

Level 39 フラッグ (エクストリームバーサス)²⁵⁰⁰機の熟練度

Level 40 ボニー (海賊)

Level 44 アシエル (海賊)

Level 36 リリツタ（マスターシーフ）
Level 35 ルリツタ（医師）
Level 34 レリツタ（メガファイター）

六人とも上級職だから簡単には全滅しないと思うけど、あまり戦闘にならないければ嬉しい。アイテムにも限りがあるからあまり消耗しないように進みたい。

でも、この先の入り口は確か……

「むむ？　これはなんじゃ？」

「……結界、ですかね？」

「なんと！　この先に入れないと言うのか！」

そう、雪越えの山は結界が張られて入れない設定だった。とあるフラグを解除するまでは白兔が待ち構えていて、ルカ御一行を入れさせなかった。最終局面の場所だからいきなりは入れないのだろう。……あれ？　そうなるかとサバサの連中はどこに潜ったんだ？　もしかしてハーピーの羽で引き返したとか？
いや、でもここまで来て逃げるようなひとたちとは思わない。

「お頭！　こちらに獣道ありますよ！」

レリツタが道を見つけたようで叫ぶ。まさか正規ルートを無視して入り込むと言うのかな？　そりゃこの世界はゲームだけど、マップは一マスとか、戦いのルールはターン制限とそんな概念は関係ないからね。常に俺たちの目の前は自由だ。

「よし、奥へ進むぞ！」

「皆、慎重にな？」

警戒を解かないように山登りを開始する。ボニーを先頭に列を

作って歩き出す。朝の日差しを浴びながらのハイキングかもしれないが、俺は予めビーム兵器を取り出しながら最後列で行く。どんな敵にも対応できるように準備していた。

ゴゴゴツ
ゴゴゴツ

「!!?」

「なんだ!?なんだ一体!?!」

突然激しい揺れが起こる。でもそれはこの山ではなく『世界の何処か』から全体に響き渡る感覚だ。もしかしたらこの世界のマナが歪んでると言うのか？

ゴゴゴツ
ゴゴゴツ

「つ、次はなんじゃ?」

「お嬢、敵の群れかもしれません」

「いや、そんな気配は………なッ!? お、お前らア! 雪崩が来るぞ!!」

「!!?」

さっきの揺れにより雪山に衝撃が響き渡ると大雪崩を起こしてきた、最悪だ。

飲まれたらひとたまりもない量だ。

「アシエル！ ハーピーの羽は動かないから走れ！ 飲まれるぞ！」

「くっ」

俺はアシエルの手を掴んで走り出す。

ボニーや子分も雪崩から必死に逃げる。

「む！ あそこにちょうど窪みがあるぞ！」

「ナイスですお嬢！」

「はやく！はやく！」

子分が見つけた窪みへ入り込む。少しぎゅうぎゅう詰めだが入りそうだ。しかもぎゅうぎゅうに詰まっているお胸が沢山の中に入るのか。ある意味天国だな。呑気に考えながら俺も急いで入り込もうとした、次の瞬間だった…

ズボツ

「!!？」

足元が崩れてしまった。

「ニフラッグ!!？」

「うおあああああ!!?!？」

重力に従って落ちる感覚を得る。

「おいおいおいおい!!？」

どうやら俺の走った場所に穴が空いていたようだ。上を見れば人間がスツポリ入りそうな穴が空いているのを確認する。しかし雪崩によって即座に穴が塞がれてしまい、朝の日差しが閉ざされてしまった。それよりも落下が危ないッ！

「ッ！【アンカー】!!」

俺は引つ掛けれそうな部分を見つけると”下格闘”に良くある”アンカー”を飛ばして引つ掛ける。地面とキスを免れるためにぶら下がろうとしたが…しかし、勢いを殺せない。次に初代ガンダムが使う『盾』を目の前に召喚した。落下の衝撃を控えるためと、空気抵抗を作り上げるために。あと少しだけでも浮遊感を得るため両腰に装備してるヴェスバーを展開して真下に撃ち放った。

「止まれエエ!!」

アンカーを強く巻きいて落下の威力を最大限に殺す。

キュルルルル…

カチツ…

「……………？」

アンカーのワイヤが閉まる音が聞こえると次に感じるのは完全な浮遊感。

下を見れば地面と激突20センチだった。

「ハ、ハ(ええ……………」

ギャグ補正があるならそのまま地面に正面から落下して大の字で

終わったと思うけど生憎俺にそんな能力は無い。

「し、死ぬかと思った…」

死ななくても最悪は複雑骨折だ。とりあえず全てのマキブを解除するとアンカーが消え、軽く落ちる。余裕で着地した後地面に横たわった。

「なんとか地面にオネンネを凌いだな…」

V2の『光の翼』が使えたら飛行なんて楽なはずだがそこまで便利なマキブは無い。他にもフルバーニアンの『バーニア』も持ってない。今の俺に飛行性能が搭載されたマキブは一つもないのだ。

「まずは生存報告しとくか…」

俺はビームライフルを召喚して落ちてきた穴に目掛けて放つ事にした。

◇

雪崩が静まると窪みからお嬢はすぐに飛び出した。しかし穴がある場所は分からず、雪崩によって積雪は思ったよりも高く張り詰めていた。フラッグの落ちた場所を見つけるのは困難だ。

ピューン！

ピューン！
ピューン！

「なっ!？」

「これは!？」

「甲板長のビームライフルですよ！」

少し離れた場所から伸びる光線は確かにフラッグが使うマキブだ。

「い、生きてたのか！ よ、良かったのじゃ……」

「お嬢、フラッグがそう簡単にやられませんよ」

「そうですよお頭！」

なんて言うけど私も心配で仕方なかった。

だが自分がいる前で取り乱すには行かない。

私はフラッグの安全を知ると心の奥底で喜びながら雪崩で積もった雪を掻き分ける。

するとそれらしき穴を見つけた。

「こんな細い穴に入ったのか……」

「こ、これは、入れないですね……」

「む、胸が邪魔で入りません！」

たしかに邪魔で入りそうに無い。

生まれて初めて胸が大きなことに悔やむ。

「フラッグー！ 生きておるかー！」

お嬢は穴に顔をつっ込んで叫ぶ。
すると？

> 生きてるぞー！ でもあまり声は出すなー！ 敵に襲われるぞー！

「お嬢、変わってください」

私はお嬢を下げると穴の中を見下ろした。
するのヒートホークを灯がわりにするフラッグの姿が見られた。

「フラッグ、導きの糸を落とすから使え！」

> 待ってアシエル。実はちょうど持ってた導きの糸を使ってみたが、なんとそれが使えない。

「なんだって!？」

「おそらく結界の所為で……? ……ツ!!

何かに気づいたのかフラッグはその場から急に回避行動を起こした。

フラッグの立っていた場所は氷が広がる。

まさかモン娘に見つかったのか!?

「アシエル！ サバサの連中が辿った場所を探せ！ もし生きてるならそこから洞窟に入った可能性がある！」

「フラッグ!？」

「それと、もし10日経っても俺を見つけれなかったらナタリアポートまで来い！俺は山から脱出できたらハーピーの羽でそこまで行く！そのつもりで頼むぞ！」

「！」

それだけを言うとフラッグの声は途絶え、魔法の爆発音だけが洞窟内にこだまする。

聞き慣れたビームライフルの音が広がり…

そして静まった…

「ッ、お嬢、一旦戻りましょう」

「な、なぜじゃ!? この穴を大きく開けて入れれば良いのではないか!？」

「下には氷の魔法で鋭いトゲが張り詰めています。このまま落ちるのは得策ではありません。せめてロープを下ろすか、またはサバサの連中が山の中に入ったことを考えて別の入り口を見つける事です」

「しかし！」

「フラッグは強いですが、そう簡単にはやられません。だから私達も無茶な行動は避けて、そして彼と無事に合流しなければならぬ。いいですか？」

「ッ…フラッグ！こんなところで倒れたらただではおかぬぞ！」

お嬢はそう吐き捨てると先ほどの獣道を進む。

私達はフラッグの生存を祈りながら一旦おさかな号に戻って行っ

た。

◇

「……撒いたか？」

まさかいきなり 氷の魔女 が襲ってくるとはな。

頭に電撃が走ったような感覚が無かったら今頃は愉快的な氷のオブジェとなっていた。

さて…

「頂上を目指すか……」

ボニー達がもしこの洞窟に入り、奥へ進軍してくれるならば必ず頂点にある『シロクマの村』に到着するはずだ。

あそこは安全だからな。

「または出口を目指すか……」

だけど結界の所為で出れるとは思えない。

ならば奥へ進んで脱出するのが得策だろう。

「いま手元にあるアイテムは1日分の食料か。ケチれば2日は持ちそうだな」

モタモタしてられない。

死活問題に関わるなら急ぐしかない。

「……」

そしてひとり旅か…

何気に久しぶりだな…

いつもは周りに愉快的な仲間がいるのに…

「一人だとこんなにも不安なのか、忘れてたな」

出来るだけ寒さを防ぐためにABCマントを羽織り、ヒートホークを構える。少しだけあったかいし、松明を代わりになってくれる。

あと火属性だから戦いやすいだろう。この場所ではこの方が良いな。

「そうだ、矢印刻むか」

俺は壁に矢印を刻み、お魚の絵も作る。

これで俺が進んだ方向を知ってくれたら良いがな。

「あと、もん娘との戦闘は極力避ける……」

そして『天使』が現れたら絶対に戦うな。

昇天に耐性が無い俺はすぐに力尽きるからな。

タツタツタ…

「!？」

誰かの足音だ！

天使兵か？

シロクマ娘か？

それとも氷の魔女か？

まずは落ち着け……

俺には一応『ミラーージュコロイド』がある。

次の使用にかなり時間がかかるけど使いどころを間違わなければ必ず危機を乗り越えられるはずだ。

ここからは賢く、立ち回れよ……

俺は人間で、朽ちるに容易い。

だから、なんとか生き残るようにするんだ。

∴

∴

あれから1時間が経過。

しかしもう何時間も経過してる気分。

不安で仕方ない。

気を抜けば心が負けそうだな。

このまま天使兵辺りに身を任せて、そのお胸に挟まれてしまえば幸せに果てれるだろう。

まあ、肝心の天使兵はまだ見てないけど。

チユドーン！

「！」

戦闘音!? もしかしてアシエルか!?

いや、まて。

俺はそれなりに奥へ進んでいるし、音のした方向は俺が進もうとしてる場所だ。　ボニー達の姿は見てないし、後ろから追い抜かれたことも無い。

そもそもこんな短時間でここまでくるか?

いや、それはありえない。

もしかしたらこの戦闘音はもん娘同士の争いかも知らない。

だがシロクマ娘は穏やかな生き物だ。

氷の魔女も好戦的では無いはず。

そもそも氷の魔女はシロクマ娘と共存してるから争いは無いな。

そして残りの天使兵も争いは好まないだろう。

ならやはりアシエル達か?

その希望はあるがしかし…

「……」　チラッ

俺は息を殺して乱闘の場所を覗き込む。

そこにいるのは…

「氷の魔女……いや、ほかに誰かいる!？」

その先には氷の魔女がなにかを掴んでいた。
それは…

「その精气、奪ってやろう」

「あ…ああ…あ…」

「ぐぬう！ 氷が邪魔で、動けぬ！」

人間が…いる、だと??

「(もしかしてサバサの派遣とでも言うのか!?)」

一人の男性は屈強そうな戦士だ。

おそらくバトルマスター辺りだろう。

しかしソイツは氷の魔女の念力によって持ち上げている。そして氷の魔女の両手はバトルマスターの下半身に伸ばされて、手のひらで転がすように優しく愛撫する。しかし凍てつくような冷気を纏いながら魔力を放っていた。これを受けるバトルマスターは白目で真上を見上げながら恍惚していた。

「あ、ああ…きき、気持ち…いい、ああ」

「まで！ 耐えろ！ もしまたー」

もう一人の仲間が叫ぶ。

しかしそれも虚しくバトルマスターは目を見開いてガクンガクン

と体が飛び跳ね、そして…

「ア、ア?!?!
!!!?!
ア……………
……………
……………
……………」

「…………最後に心地よく果てたな。 さよなら」

そして氷の魔女は男を投げ捨てる。
幸せそうな顔をして死んでいた。

ああ、酷い事だ…

「次は女、お前だ…」

「っ!!」

氷の魔女は人間の女性に目を向けた。 その女性は氷によって腕と足が壁に貼り付けられ、身動きが取れずにいた。 いろんな忍具が足元に転がっている。 どうやらあの女性は『くノ一』のようだ。

しかし封じられた手足では何もできない。 どうすることもできないクノイチに氷の魔女は息を吹きかける。 するとクノイチは体を震わせて息苦しく呼吸し始めた。

「あ、ああ、か、はっ…」

「寒いかな? 寒いかな?」

「は、ひゅ、あ…あ、が…あ…」

苦しく震わせる。 死期が近づくことを悟り始める。 もう何もできない。 氷の魔女によって全てが吸われて終わってしまうだろう。

あのクノイチはここで冒険を終えるようだ。

「……………」

俺は、そして、どうする？

まさか…

何かしようとしても思わないよな??

「……………」

俺はここまで見つからずに逃げ延びている。

だから俺は何も見なかったように済ませ。

ココを去るべきだ。

ボニーとアシエルが俺を探しにくる。

だから俺は無事でいなければならぬ。

なら何もしてはならない。

「……………」

冒険に死は付き物だ。

だから都合のいい事なんて無い。

生きるか、死ぬか、その二択だ。

そしてあの冒険者は『死』の選択技に辿り着いてしまった。

ただそれだけなんだ。

だからクノイチにはその覚悟もあるだろう…

それだけだから…

それだけなんだからさ…

俺は何故このビームライフルをあの水の魔女に向けているのだ??

「じゃあ、人間。ここまで来たのは賞賛に値するがココで終わりだ、安らかに終えろ」

「…あ…ああ…」

「仲間の跡を辿らせてやる。さよなら」

「み……………んな……………」

「……っ」

俺は…

次の瞬間…

トリガーを引かなかった…
氷の魔女に撃たなかった…

「……」

俺はビームライフルを腰に仕舞ったのだ…

その代わりに【ハイパー・メガ・ランチャー】をお見舞いした。

「くたばれエエエえ!!!」

ビームライフルの何倍も破壊力を持ち合わせたZガンダムの特殊射撃による砲撃は氷の魔女を吹き飛ばした。

つづく

57日目　　雪越えの山

　　雪越えの山　　
　　朝？　　

「生きてるよな!?　おい！」

ハイパー・メガ・ランチャーを地面に落とすと役目を終えたように消える。氷で壁に張り付られてるクノイチを助けるため俺は駆け寄る。念のため3本の旗を投げながらヒートホークを召喚する。大きく振りかぶり、クノイチの体を蝕む氷を叩きつける。

「気を持たせろ！　せっかく飛び出したんだ！まだ死ぬんじゃねーぞ！」

「お、お前…は？」

「それはあとでだ！　ここを切り抜ける！」

しかしヒートホークではなかなか破壊活動が捗らない。ならばと思い不要になったヒートホークを氷の魔女に投げ飛ばす。直撃して熱に焼かれて苦しみ出す氷の魔女を他所に俺はABCマントをクノイチの頭から被せる。しっかりと肌全てを覆い隠してから腰に常時装備してるビームライフルを片手に構える。次にビームサーベルを取り出すとブーメランのように回転させながらクノイチに投げつけると俺は投げたビームサーベルに向かってトリガーを引いた。

『『ビームコンフューズ』!!』

拡散するビームの波はクノイチと張りつめられた氷に浴びせられ、一定の威力を保ちながら破壊される。ABCマントによつてクノイチは攻撃を受けない。ちなみにビーム兵器によるX線の害は生物に無く、ビーム兵器のほとんど『無属性の魔法攻撃』に変換されるから人に向けて安心である。なんとというか、この世界のシステムに合わせて都合が良い。

「うう……」

「しつかりし…ツツ!？」

つ、冷たい。そして心なしか体が軽すぎる。まるで生気を奪われて中身を無くしたかのようだ。だがクノイチの心臓はまだ動いてる。まだ生命は機能しているのだから再び息を吹き返せる筈だ。

「くつ、まだ人間がいた……なにツ!? アガガガ、か、体…が!？」

先程投げた3本の旗はドラゴンガンダムの主力である『フェイロンフラッグ』であり、それに引つかかると氷の魔女は体が痺れてしまう。

そりゃ初見殺しな技だからな。まさか側の間を通ると痺れるなんて思うか? 残念、エクバだから出来る所業なんだ。

「…はあ…はあ……助かった…の、か?」

「かもな。いきなりで悪いけど背負うぞ。苦しいかもしれないが、逃げるために走るからな」

「う…す…すまない……」

「構わんさ! 俺は腹を括った!!」

一刻もこの場所から離れるために俺はクノイチを背負う。彼女

の道具袋を回収する暇もなく走り出した。まだ痺れている氷の魔
女を横切り、そして亡骸となったバトルマスターを通り過ぎる。

「……どうか……生きて……くれ……」

「っ」

勝手に頭へ入り込む『何者かの想い』を拾いながら保険のために
シールドビットを展開する。リロード時間とかどうでも良い。
今はなりふり構ってられないのだ。

「くっ、逃がさん!」

即座に詠唱を開始すると数秒も経たずに魔法を放てる体制に入っ
た。

さすが氷の魔女だ。

詠唱速度もバカにならない。

「サイコジャマー!」

残りのMPを振り絞りながら氷の魔女を囲う。

「ふん、麻痺ならもう効か………なっ!? バカな!? 詠唱が!」

氷魔法を使うための精霊、またはエレメントはサイコジャマーによ
り妨害を受けてしまい、氷の魔女の魔法詠唱は解除されてしまう。

そう、この兵器は麻痺が喰らわなくとも詠唱妨害としてかなり有効
なのだ。外洋に出て初めて知った。低コストだろうと2000

機を軽く見たら痛い目に会うことがよく分かる。サンドロツクの『ゼロシステム』と言い、エクシアの『トランザム』と言い、それぞれの長所を引き出せばこの職業は2000機の強さだけでも最強クラスにのし上がる。MPやSPの消費量は馬鹿にならないけどレベル差を簡単に埋めてしまう。

「『アイアン・ネット』だ！ そのまま絡まってるー！」

ゲルマン忍法が扱う網を片手でぶん投げて氷の魔女を抑え込む。ダメージはともかく鈍足効果が高い。これによって俺たちを追えない。

「片手で…あのような投擲を…見事…」

「網は訳あって良く使うからな」

船に乗って海賊しているとそれなりにな？ だから両手で扱わずとも投げ慣れている。そこらへんはクナイを扱う忍者として投擲の技量は気になるところなのかな？ てか喋れるくらいにはまだなんとか生きてるようだ、少し安心した。

コロコロ…

コロコロ…

「うおっと、急ぐぞー！」

俺は氷の魔女から背を向けて再度逃亡を始める。その場から魔法も使えず、そして追いかける事ができない。しかし氷の魔女は遠距離攻撃は可能だろう。氷柱を放つくらいには容易いはずだ。しかし…

「そのくらい計算積みだ、バーカ」

コロコロ……ピカーン！

「なっ!？」

ドカーン！

足元まで転がったハンド・グレネードが起爆、氷の魔女を吹き飛ばした。

◇

く シロクマの里（頂点） く

「さむさむ……いらっしやい。ここはシロクマの里さむさむ……」

「え？ シロクマの里、さむさむ？」

「うん、シロクマの里さむさむ、だよ……さむさむ……」

どうやらシロクマの里さむさむまで来たようだ。と、言うことは雪越えの山の山頂までやって来たのか？ 生きのびるのにかなり必死だったけど、気づいたらここまでやって来てたのか。

「さむさむ……その子はっ。」

「ええと、寒くて動けないんだ」

「さむさむ……なら奥のコテージを使って、とても暖かいから。さむさむ……」

「ありがとう」

「はあ……はあ……す、すまない……」

「気にするな、そして喋るな、体力を使う」

「……はあ……はあ……」

随分弱り果てているな……

俺は原作知ってるから雪越えの山で暖かく休めるポイントまで歩みを止めずここまで来た。生気を失いつつあるこのクノイチを助けるために休んでる場合じゃなかったからな。このまま冷え切つて朽ち果てる可能性を考えると命削つてまで足を働かしたよ。

そして気づいたらその場所に到着した。

まあお陰で『安全に休める場所』と聞いた足がガクガクと嬉しさに笑っている。でもまだダメだ。ちゃんとコテージまで責任持つて女性をエスコートしないと。ガチャ

「！」

扉を開ければ部屋の中はたしかに暖かい。コテージの天井に張り巡らされた赤い魔法陣が目立つが、多分アレがあるからコテージの中は暖かいのかの？

だがそれよりも驚いたのは……

「!!?」

「なっ!! なっ!!?」

そこに『天使』が居たことだ。

「ああ…お迎えが…来た…のか」

「だからあまり喋るな、無駄に体力使うだろ」

天使の姿を見たクノイチは耳元でつぶやく。
天国に招待されたとも思ったのか?

「あの…その人は?」

「冷たくて死にそうなんだ」

「それは大変ですね、ならこちらに来てください」

事態を察した天使に招かれる。部屋を開けると暖かそうな寢床に誘われた。ベッドとか大層なものでは無いが地べたよりもマシだ。俺は今にも崩れそうになる足を踏み縛り、クノイチを寢床に寝転ばせると…

「ああ…き、寒いつ…ああ、ああ…ああああ!! 嫌だ!嫌だよ…:助けて、助けて…!」

「!?、
!?!?」

クノイチは悶え苦しみ始めた。重くて仕方ない瞼を開けると何かを必死に探し、俺の姿を捉えると手を震わせながら伸ばしてくる。呼吸を荒げながら涙を流していた。恐怖から逃げたくて仕方ない表情は彼女の危険を知らせる。

「その手を掴んであげてください」

「…え？ あ、ああ」

俺はクノイチの手を掴むとそれは氷のように冷たい。
すると呼吸が更に激しくなる。

「寒い…寒い……さむ…い……さむい……よお…」
「っ」

俺は道具袋にある何かでこの症状を抑えれないか考えるがブーストドリンクなんかで治ると思えない。
すると天使が声をかける。

「この人の生命が氷点下に襲われています」

「え？」

「この場合はただ温めても命は救われません。白魔法でも無意味でしょう」

「なっ!？」

「ですが生命は生命で温めればこの方は氷点下の闇に溺れず救われます」

「だったらどうすれば良い!？」

「肌と肌を合わせて温めてください。そこらへんは人間のあなた達がよく詳しいかと思えます。何せ天界から堕ちた天使の私に完璧な答えはありませんので」

そう言うと天使は去り、扉をしめて部屋から出て行く。

「…」

俺はクノイチの鎖かたびらや籠手などの軽防具を外す。ポロボロのインナーも脱がせると白く染まっていく肌が見えた。元々白いかと思いきや、触れると俺の手までが侵食する。それは体を氷に変えてしまう恐ろしさを見せつけていたが、熱で打ち勝つほかあるまい。

「酷い^{むじ}ことを…」

すると扉が開く。

天使は何かを持ってきた。

「ただのお香です、気にしないでください。それよりもその方に早く生命の温もりを」

「あ、ああ…」

天使はお香を焚く。

その間に自分も服を脱に捨てて下着姿になる。

「マインド」

「！」

天使は魔法を使うと俺の精神力を高めてくれた。

「私は治療は専門外ですが、これだけはやらせていただきます。あとはあなただけです」

「っ、ありがとう」

「いえ……それでは」

天使は俺たちの衣類を勝手に持ち込むと出て行った。
何するつもりだろうか？

いや、それよりもこっちが大事だ。

「もしあんたが心に決めた人がいても、今は許せよ……」

下着だけを残して互いに裸となった俺は毛布をかき集めるてクノイチとともに覆いかぶさる。

全体の肌が触れ合う。

「ああ……ああ、はあ……はあ……」

クノイチは温もりを得ると俺にしがみつきはじめた。首筋に爪が食い込むが『マインド』の魔法で高められた精神力によって些細な傷みだ。今の彼女に比べたら大した事では無い。むしろ好都合だ、そのまま強く抱きしめている。

「……はあ……はあ……ああ……あ……」

ほんの少しだけ身長が高い俺が彼女を包み込むつもりで抱きしめ続ける。冷たい吐息がしばらく続いたが、だんだんと苦しさに飲まれた体の震えるは収まり始める。別に体の震えが無くなった訳じゃ無いが落ち着きは見せ始めていた。

「……ああ……あつた……た……か……」

首筋に食い込んでいた痛みは少しだけ薄れる。　　どうやら力が抜けてきたようだ。　　隣の樽に置いてあるお香の効果も聴いてるのか心身共にリラックしていく。　　しかしなんだろうこの香り？　　ふわふわとした気分に含まれる。　　天使が持ち込んだから天国のようにふわふわとしたとかそんな感じだろうか？　　心が安らぐのはたしかな話だ。

「……すう……すう……」

いつの間に眠り込んだらしい。

だけど安定した呼吸は彼女の無事を教えてくれる。

そう思うと俺も急に疲れと眠気が襲いかかる。

「ああ、眠いな、凄く眠い……」

ボニー達と逸れてしまい、長い時間を逃げ隠れを続け、休憩も取らずに気を張り巡らせ、もん娘とエンカウトしたら直ぐに逃げ延びる。　　その繰り返しだった。

「すう……すう……」

ここまで大変だった。　　この女性を助けるためになりふり構わずマキブとSPをフル活用した。　　歩けないクノイチために背負い続け、どうにかしてシロクマの里までたどり着こうと生き延びることに必死だった。　　限界は来てただろう体に鞭を打って動かし続けた。　　正直に言う足に感覚は無い。　　ここまで動けたのは異常に生存本能が働いたのかもしれない。　　そして安全に休まれる場所を見つけると脳みそは体を休めようとするため睡眠欲が一気に湧き上がる。　　お陰で鉛のように重たい。

「おやすみ……」

俺は寒さに震える彼女を抱きしめて惑の眠りに落ちた：

◇

「お嬢、この印は」

「うむ！ 絶対フラッグのだ！ おさかな海賊団のマークがついておるー」

「丁重に矢印まで……」

「つまりフラッグは山を突破して出口を見つけようとしておるのか？」

「でしようね。 この洞窟に留まってるよりは出口を見つけた方が早いことを考えた上で行動でしょう」

「そうか……あまり無理はしてほしく無いがこの状況では仕方あるまい。 早く見つけるぞ」

「はい」

おさかな号に戻ると即座にメンバーを再編成した私達は抜かりなく準備を終わらせた。

そして小さな穴場を見つけた私達はそこを掘り進め、安全に洞窟内に入る事が出来た。 正規ルートでは無いが賊の私たちにそんなの関係ない。 突入できるならどこからでも構わないのだ。

「フラッグ……」

凍えていないか心配だが、彼は賢い。

だからどこかでうまくやってるだろう。

もしかしたらサバサの派遣達と合流して抜け出してくれてるかもしれない。

もしそうなら一人のフラッグよりも安心出来る。

「なんだっていい…」

生きていてくれよ…

つづく

58日目　　雪越えの山

　　シロクマの里　　
　　朝　　

あたゝらしい、あゝさがきたゝ
きぼうゝの、あゝさがゝ

……つてことなので、たつぷり12時間くらい眠った。でも今の時間は朝ではないかな？　時計が意味を成さない航海にて時間感覚は身に刻まれている。　今現在の体内時計からするとおそらく昼くらいだと言っている。　お腹もすいたし。

さて

次に機能するのは嗅覚であり、ふんわりと漂うお香は微かに鼻を擦っている。

次に『さむさむ…』と声が聞こえる。

聴覚も機能し始めたようだ。

最後に機能するのは体の感覚だが、急に異性を刺激する感触が胸元から足の先まで伝わる。　全身に密着する生暖かい温度と柔らかな肌触りはつい抱きしめたくなる。　そして何故か目の前の何かを抱きしめてやらなければならない使命感が再び湧き上がる。

深い眠りに誘われるためだけにこのコテージに来たとは思えない。記憶ではどこか恥ずかしいシチュエーションの中だったはずだが、一体俺はどんな風に眠りについたんだろう？

「んっ………んんっ？」

「………へ？」

目を開けてその正体を確かめる。
するとそこには女性がいた。

「……」

「……ええと？」

下着をつけたままあとは肌を晒すだけ。
ほぼ丸裸な姿で腕の中に収まっている。

「お、おはよう……」

「……」

まず出てきた言葉がこれである。
俺は一体何をやってんだ？

コンコン、ガチャ

「失礼します。 おや？ ちょうど起きましたか」

「？ ……あ、天使さん」

「とりあえず服はここに置いときます。 こちらの方は清めましたの
でどうぞお着替えになつてください」

「あ、はい」

天使のお力だろうか？ 服が綺麗になっている。 ともかくこの
まま素っ裸は今となって恥ずかしい。 それに久々に人と触れ合っ
て心が紅潮してるところだ。 一旦会話できる姿勢に持ち込みたい。

「……確か君は」

「お目覚めで安心してた。　とりあえず衣類を着てから話さない？」

「？」

「……な？」

「……う、うん」

　　こういうシチュエーションは大体頬を引つ叩かれるが目の前の女性
は頬を染めながら毛布を包め取って肌を隠した。　……！　いや
いや、見惚れとる場合じゃないだろ。　動揺を隠しながらも笑みを崩
さず、タオルで汗を拭いてからそれぞれ着替えに移った。

◇

「さむさむ……」

「さむさむ……」

「コテージがシロクマ娘だらけだな」

「そもそもここはシロクマの里って名前が付いてるくらいだからな」

外を見ればシロクマ娘だらけ。

あとは氷の魔女が一人だけ奥の方で見える。

天使はコテージのキッチンでスープを作ってる。

「……ココは氷の魔女までいるのか」

「シロクマ娘とは共存関係に当たるらしい。だから見かけることも珍しくない」

「……」

「複雑か？」

「いや、そんな事はない。この世は弱肉強食の世界だ。弱者は当然過酷な世界に耐えれず最後は敵に討たれて幕を閉じてしまう。そんな私は氷の魔女に今の弱さを思い知らされた。複雑な気持ちもあるが、情けない自分が許されない。私はあそこで終わってしまうほどの者だったことを知ってしまうとな……」

「……」

「私は死んでいたのだ。あの場所で助けられなかったら無念を抱いて死んでいたのだ。全身は凍結してしまい、死後も止む事ない吹雪の世界で魂は永遠と凍えてしまう。あれは救われな闇だ。抜け出せない暗闇なんだ」

視線を落としながら自虐的に力なく笑っている。

語っている出来事を思い出しながら体を震わせながら片腕で自分を抑えていた。

「私はどんな状況でも心が負けないようにする訓練を施されていた。しかし氷の魔女に命の炎を冷たく染められてしまえばそれな何の意味も成さない。私は怯え、苦しみ、生にしがみつき、生命の暖かさを求めた」

「……」

「手を伸ばせばそこに有る。絶対零度の暗闇を照らししてくれる生命の暖かさが見えたのだ。それを与えてくれたのはあなたであることは確かだ」

「ただ肌を重ねて温めただけだよ。天使さん曰くこの方法で救えると言ってた。……それでその、まあ、なんというか、突然知らない男と床を一緒にして悪かったと思ってる、はい」

「!! ふふっ、気にしないでくれ。私はそうしてくれた事で救われてるのだ。情けなく背負われてる時、もしこの人の背から離れてしまえば死と共に凍りついてしまう……その恐怖を隣り合わせにして怖かった。床に横たわった時も、この人が離れてしまえば私は一生氷の檻から出られないと同じ気持ちだった。このような残酷な運命を辿らずに済んだのだから……」

「……」

「命を救ってもらった事に私は感謝している。だから……ええと、な、名は何と言うのだ？」

「そーいや自己紹介はまだだな。俺はフラッグ」

「フラッグ……か。私の名は【シヨウキ】だ。フラッグ、助けてくれてありがとう」

「気にするな。俺はシヨウキが助かって良かったと思ってる。だがこれだけは一つ言うよ」

「？」

「シヨウキは弱くない」

「！」

「君は知ってるか？ 氷の魔女から生命を奪われてからどのくらい時間が経ったのか？」

「い、いや…」

「俺は敵に出くわさないように隠れながらゆつくりと進行して行つた。その状態でシヨウキを背負っていた時間は役三時間だ。君はこれだけ耐えたという事だぞ？ もし心が弱かったら誰かから触れてもらおう事で生命の暖かさを得続けても全身は凍りついて死んでいたはずだ。だからシヨウキ、あんたはよく頑張ったんだ」

「！」

彼女は少しだけ驚くと…

張り詰めていた表情が綻び…

「ありがとう」

嬉しそうに笑みんだ。

そんなはこの言葉が嬉しかったのか？

「アツアツの所失礼します。アツアツの人参スープを作りました」

キッチンの奥から天使が二つのお椀を持ってくる。

スープの中味を伺うと具材は人参だけだが美味しそうな香りがしている。

「体が温まります、召し上がってください」

「はい、感謝していただきます」
「…」

早速、手を合わせてひとくち口の中に含む。
野菜と塩で味付けされた温かなスープだ。
お腹よりも心を満たしてくれる。

「…」

「……もしかして忍者だから人から与えられる食べ物は無理とか？」

「！」

「そこらへんは仕方ないかもしれないけどまず食べないとまた死ぬぞ」

「……いただきます」

シヨウキも頂き始めた。警戒しながらもひとくち飲むと更に食らいつき始める。安全だとわかったのか、お腹が減っているのかは不明だが、確かに心の奥底から暖かく満たされた。

…

…

さて、十分に冒険続行できるくらいまで状態が良くなると俺は早速シロクマの里を出発することを考えていた。その道中にシヨウキも一時加入が決定した。バラバラで行く理由が無いからな、手を組めるなら行くべきだろう。新たな仲間を加え、いざ進もうと思ったその瞬間だ。

入り口から6名ほどの冒険者が現れる。

いや、冒険者では無い。

海賊であった。

それは凄く見覚えがある愛しき人魚達の姿。

俺は荷物を雪の上に落として駆け寄る。

「ボニー!? アシエル!？」

俺は叫ぶと二人は反応する。

しかし再会の喜びは後ろの仲間を見た事で青ざめてしまった。

「ルリツタ!? レリツタ!？」

俺の叫んだ二人は大怪我を負っていた。

しかもルリツタは回復要員だ。

その彼女がやられてしまってるのなら大変問題になる。

「フ、フラッグ!!」

「ボニー! 後ろの2人は!？」

「かなりひどくやられたのじゃ……敵が強くて、それで……ぐっ……」

ボニーもフラつく俺は急いで肩を貸した。腕がすごく冷たい。あと……これは折れてるのか？ だとしたらボニーもかなりやられている。まだなんとか動けるアシエルに聞いたところ回復アイテムも底をついていた。とりあえず仲間をコテージに招き入れた。まず二人の出血は止めなければならない。

「アシエル、かなり無茶したな？」

「数人程度ならともかく5人連れての団体行動だ。やはり隠密行動は無理だった。だから大体は戦う羽目になるがココのやつらは強くてな……全滅しなかったのが奇跡だ」

「そうか……」

「だけどフラッグが行く先に印をつけてくれたからな、一日もかけずに頂点まで来れた。ありがとう」

「いや、こうして来てくれたのだ。俺は嬉しいよ」

嬉しい再開だけど現状は最悪。アシエルの手当でだけどころかなるのか心配だ。ルリツタとレリツタの血まみれで、その体はただ休むだけでは治らない。至る所に凍傷も見あたる。マーメイドであるため簡単には死なないことが幸運であるが、死に追い込まれてしまうのも時間の問題だ。つまりこの苦痛は命絶えるまで続くわけであり、精神的に追い込まれて死ぬことは珍しくない。生命力が高いことが良いわけでもないのだ。

もんむすは体が強くも『心』はそこまで強くないから。

「なあ、アシエル、ちゃんとした場所で傷の手当てを施さないとダメだ

よな？ 医療技術を持たない俺でも分かるぞ？ ……どうしたら良い？」

「……おさかな号に戻ればまだなんとかかなるがハーピーの羽も機能しない。あと導きの糸に戻れないのは分かってるよな？ なら私がココで力を尽くさないと…」

回復アイテムがもう尽きそうな状態なため満足な治療が出来ない。それにアシエルは船医であつてもここまで酷い傷は治療出来ないのだ。

「あ、姉御……」

「レリツタ、喋るな…」

「私たちはもう良いよ……ここまでひどくやられて……医療のアイテムも底を尽きはじめてる……だから、私達のお頭を……」

弱々しく笑いながらお頭の治療を推薦する。

アシエルは無言になつてしまった。

「レリツタ、私は平気じゃ……両腕が凍結で動けないだけで、そのうちの片腕が折れてるだけじゃ。まずはお主らの命が大事じゃ」

「ですが……無理ですよ……わたしも、あと2日も経たないうちに命尽きます……自分で分かります……よ……」

「っ…」

「はは……は……マーメイドであることを恨むなあ……」

先ほども言ったがマーメイドは生命力がある。人間にとって致命傷レベルの傷を背負っても生きている事がほとんどだ。だから人間のようにスナリと命を絶つことができず、残酷に苦しんだ状態を味わいながら長い時間をかけて死ぬのだ。

「……お嬢……私は、お嬢を治療します」

「なっ!? そ、それはダメじゃ……ダメじゃ!」

「わがまま言わないでください。医療のアイテムも底を尽くレベルです。子分たちに使ってもほんの少しだけ生命を繋ぐだけで解決にはなりません、だから……」

「……………つ、アシエル……だが、我は子分を見捨てる事は出来ぬ……」

ボニーは治療を拒否する。

それを聞いたアシエルは拳を握りしめる力が強いため血が流れ出した。

「ツツ、いい加減にしてくださいお嬢!!」

「!」

「お嬢! 仲間を切り捨てなければならぬ瞬間もあるんですよ!
今がこの瞬間です!!」

「っ、い、今まで仲間を失うことは無かったのじゃ! だから今回もそんなことは許さないだ!」

「ならどうすると言うのですか!? 仲間に治療を施しても完全には治らない! するとお嬢の両腕が使い物にならなければどうやってこ

の場所から生き延びるのですか!? ここは今までの場所よりも比べものにならないダンジョンです! そんなところでまともに戦えないなら私もあなたも死ぬだけですよ!」

アシエルも仲間を救いたい気持ちは大きい。

だが感情論よりも効率を考えてこそその副長の役目だ。

それを全うするためアシエルは心の奥に押し込めて仲間を見捨てる選択技を取った。

「何か……何か方法が無いのか!? 我らも無事にここを出て! そして仲間全員を救って抜け出せる答えは!」

だが認めきれない未熟な船長は叫ぶ。

副長の言葉は理解してるが仲間を見捨てきれない彼女は残酷な道を取れなかった。

だから……俺はそんなボニーが更に好きになる。

「方法ならあるぞ」

「!!?」

無意味なヒートアップを止めるために俺は言葉を挟んだ。

「ハーピーの羽が使えないのはこの山にある結界のせいだ。だからその結界を解いて使えるようにする。そして解くためには奥に進む必要がある……事をここの天使さんから聞いた」

「はい、言いました」

「!!」

いつのまにか天使さんが現れる。

「どうも迷えし訪問者。 私は名はありませんが彼から天使さんと呼ばれています。 あとサメの人魚さん、気持ちわかりますがあまり騒がないでください。 外のシロクマ達が怯えます」

「っ」

「天使さん、あなたの言葉が正しいなら結界を起動してる仕掛けを止めることで解除されるんですよね？」

「ええそうです。 先ほど言った通りです」

「はい、ありがとうございます」

再確認もできたから準備オツケーだ。

俺は荷物を持って扉に手をかける。

その姿を見てボニーは悟る。

「フ、フラッグ!? ど、どこに行くというのじゃ!?!」

「結界を解除するため奥に向かう」

「!?!」

「お主一人で行くつもりなのな!?!」

「二人じゃ無くて二人だ。 いま外に一人のお仲間がいるから大丈夫だ。 俺もその人も万全な状態だからこのダンジョンに遅れは取らないよ」

「だ、だがお主は人間だ!」

「……人間だな、たしかに俺は人間だ……」

「弱くて仕方ない種族。」

男ならモン娘の餌食になるだけのエサだ…

繁殖力だけが取り柄の生き物。

「でも、それがなんだよ？」

「！」

「前の俺なら深く考えていた。いや、今も考えている。けど俺は人間でもそうしなければならぬ事があるならそこに種族の差を持ち込んでしまいたくはない。それでも心配だと言うなら今からその考えが変わるように証明してやる」

ABCマントを取り出し、ビームライフルはいつもどおり腰に装備する。

「アシエル、今から1時間ペースでハーピーの羽を動ける子分に使用してくれ。それでこの山から抜け出せたらそれは結界が解けた証拠だ。俺が丸ごと救う」

「！」

ボニーは固まっていた。

代わりにアシエルが叫び出す。

「ま、待て！ 待つんだフラッグ！」

「こっちは任せろ。 だからそっちは任せた」

「頼む！お願いだから勝手に行かないでくれ！また離れ離れになる、なん…て」

「天使さん、毎回申し訳ありませんがお仲間を頼みます。 大事な人達なんです」

「わかりました。 お気をつけて」

俺はまだ何か言ってるアシエルの声を無視する。 外に出ると年がら年中寒がつてるシロクマ娘を掻き分けながら山頂の入り口まで駆ける。 すると足音に気づいたシヨウキがシロクマ娘の腕の中から出てきた。

「ごめん、待たせた」

「構わぬ。 では早速参るぞ」

「ああ、仲間のために急ぎたい。 手伝ってくれ」

「無論だ。 私はフラッグに救われた。 ならこの恩は返そう」

俺はシヨウキの言葉に頷くとコテージで休んで軽くなった体を動かし、結界の解除へ急いだ。

つづく

58日目　　雪越えの山

　　雪越えの山　　
　　昼　　

「――とまあ、そんな感じで俺はマーメイドの海賊団と海を漂ってる訳さ。　なり行き半分だがとても充実してるよ。　潮風浴びながらの航海は非常に楽しい」

「海か。私もこの大地に向かうまで外海を渡ってきたがかなり過酷な環境だった。　案の定そこで一人が脱落したけどな」

「え？　もしかして……死んだ？　フェニックスの羽で生き返らないほどに……か？」

「え？　あー、いや、そうじゃない。　命は絶っていない。　もん娘に連れて行かれたんだ。　セイレーンって鳥のもん娘に気に入られてしまつてな、仲間の一人が歌で恍惚に染められてフラフラとセイレーンに抱きついてしまうとそのまま空彼方まで連れられてしまつた」

「なるほど、お持ち帰りされたのか」

「そういうことだ。　まあ、死んではないと思うが冒険者として終わつたかもな」

「こんな世界だ。　弱ければ吸い殺されるか、絞られて適当に捨てられるだけ。　それでお持ち帰りにされたなら行先で廃人に染められるか、飼い殺しにされるか、または生涯をそのもん娘に注ぐかどれかだな」

「後者は比較的幸せな終わり方かもしれないが己を極めてきたものを否定することになりうる。私が男として産まれたならそれは嫌だな……」

「シヨウキって負けず嫌い？」

「別にそんな事は無いが、ただ育てられた形が敗北を許さないのだ」

「と、言いますと？」

「そうだな、フラッグには言っておこう。私は『アサシン一族』として育てられた娘だ。仕事を必ず全うするため命を落とす事は許されない。だから性別問わずに敗北は許されないのだ」

「なるほど、アサシン一族か。確かサバサ王家を守る約束事が昔から結ばれていて、それは初代から続いているとかだったな。律儀だね」

「ふむ、詳しいな？」

「まあな。内海を渡ってる時期に一度だけサルーンに行った事あるからな。それでアサシン一族の話聞いたことあるんだ」

「なるほどな。無論、フラッグの言う通りだ。私はサルーンから派遣されたアサシン一族の娘であり、サバサ王家の密命で雪の大陸に侵入を試みたのだ。外海で一人脱落しながらもなんとか渡れたが結界に阻まれるアクシデントもあった。だが洞窟に入れる小さな抜け道も見つけたからそこから侵入した。だが残った3人の仲間はずっと倒れてしまいこの有様だ……」

「だがここまで来れたということは仲間は皆強いって事だよな」

「ああ。前衛としてバトルマスターと拳聖の二人。後衛に吟遊詩人と魔法少女の二人。最後に戦闘以外で支援も果たせるようにレンジャーの私も含めて五人だ。皆、選ばれた精鋭だ。謎の大陸を調べるために組まれた最高のメンバーと言っても良いだろう。だがあまりにも敵が強すぎたため、精鋭の組み合わせでも無残に散ってしまったがな…」

「仕方ないとしか言えなよ。だってココは本当に次元が違うからな。俺も踏み込むまでそれは分からなかった。一度だけ氷の魔女と本気で対立したけどあまりにも力量が違った。マキブは初見殺しが効きやすいから良いものを俺自身が弱い。種族的に押しつぶされる以上は逃げる事を選ぶようにしたね」

けれどもここまでやってきたおさかな海賊団のメンバーは良く渡り合ったものだ。しかしその代償として仲間二人は瀕死、ボニーは両腕が凍結して使い物にならない。アシエルと残りの子分も半分以上消費してる有様。しかもまだ中間地点であり先は続く。どここれ以上進む事は不可能。しかし俺を探しに後を追ってきた皆は欠けることなく生きてくれて良かった。

だからこの洞窟の結界を消して皆を救わなければな。だが、焦り過ぎるなよ。俺は強くない。確実に役目を全うするため何事も慎重に動け。だが大胆かつ冷静な動きも忘れず進むんだ。

瀕死の仲間についてはアシエルが命を繋いでくれるから少しだけ猶予はあるけど、それでも早ければ早いほど仲間を救えるのだから。

「…フラッグ、止まれ」

「！」

行先に氷の魔女か。

どこか行ってくれたら助かる。
だけど動く気配がない。

「シヨウキ、数秒隙を作れ、俺が動きを止める」
「わかった」

特に打ち合わせはない。ただ返事をするときシヨウキは飛び出して氷の魔女を背後から忍者刀で切り裂いた。氷の魔女はシヨウキの奇襲に気づくと魔法を展開する。

「いけ！サイコジャマー！」

魔法の演唱を解除させるとスタン状態にした。そのまま俺はレッドフレームの『ガーベラストレート』を投げ飛ばして氷の魔女を貫く。鈍足効果とスタン効果で動きを制限すると勢い良く氷の魔女と間合いを詰めると25機特有の前格蹴りの真似事で突き飛ばした。シヨウキに指で支持をすると俺と一緒に離脱した。

タツタツタ

「逃走は成功。一気に距離を離すぞ」
「ああ」

倒す必要は無い。
無事に逃げれたら良いのだから。

「!？」

「なに!？」

氷の魔女から逃げ延びた。

しかし逃げた先でとある敵キャラと出会ってしまおう。
とうとう現れたか。

「む!？」

「ふえ!？」

「なに…?？」

「あらら?？」

「これは…?？」

五人の天使兵だ。体は俺よりも小さいが、たわわ実ったおっぱいはボニーやアシエルと同じレベルだ。とても柔らかそうで、五人に囲まれば簡単に埋もれてしまう樂園は男の性を無条件で擦ぐつてくれること間違い無しだろう。

「まさかこのタイミングでボニー達と同じ絵師さんのキャラが立ちはだかるとはね!？」

「え、えし、さん?？」

「え?？ あー、いや、こっちの話だ」

「そうか。 ……むう」

「?？」

俺の言葉よりもショウキは天使兵達を観察する。

「……羨ましい…」

そんなショウキの視線はやや下の方を見ており、ボソツと呟いた。何に対する言葉なのか理解できるが俺は余計な事は言わないようにノーコメントでスルーして武器を構える。目の前の天使兵もそれぞれ個性的な武器を構えて対立する。別に痛々しい事はしないと思うが快樂による拷問で心を落とすつもりだろう。

でもそういうのはやるのが単純で逃げやすいから助かる。し

かし少しでも施される快樂に身を任せてしまつたらその沼から抜け出せないだろう。俺は快樂の耐性はないに等しい。しかも樂園を見せることが得意な天使の性技なんかは論外だ。興味があつても絶対に受け止めてはならない。

「シヨウキ、わかつてるな？」

「ああ」

倒そうと思わないこと。

突破して逃げること。

相手にすぎないこと。

これらを楽しく守つて全速前進だああああ!!

「行け！『ファンネル』！」

両手をバサつと広げるとABCマントからファンネルが次々と現れて天使兵の周りを囲う。

『『ミラージュコロイド』!!』

「消えた!？」

「うそ!？」

「何者なの!？」

「それよりもこれは何だ!？」

「絶対何かあります!」

いつもながらマキブつてのは初見殺しの塊だ。それは実際にゲームをプレイしてる時も同じだ。ありえない挙動や性能はいつも初見プレイヤーを苦しませてきた。それはどんな時も変わらない。目の前の天使達のように。

ピュン ピュン！
ピュン ピュン！

「！！！！」

無数のファンネルが天使兵達に過激に襲いかかる。さすがハ
マーン様のキュベレイ^{2500機}が扱うファンネルは質と量が低コストの機体
達と桁違いだ。しかし俺が扱えきれないと、MPの量は馬鹿にな
らないことが欠点であり、放ったファンネルの数は五体を相手にする
に足りない。しかし攪乱する他は充分足りているようだ。

「きやー！」

「痛い！痛い！」

「払って！早く早く！」

「これはどうしたら！」

「もう！ちよこまかと！」

ピュン ピュン！
ピュン ピュン！

「隠密行動流石だなシヨウキ」

「あれだけ攪乱したのだ、切り抜けるには容易い」

俺たちは駆け足で天使兵達から遠ざかる。

上手くいったことに喜びを得ながらハイタッチを誘うとシヨウキ
は少し驚くが納得するようにハイタッチしてくれた。

ええやん。

「しかしエクバと言うのはやはり凄いものだな。

多芸な魔機^{マキ}武^ブに

よってどんな状況も切り抜ける事が可能だ。 あと答えたく無いなら構わないがそれは最上級職なのか？」

「え？ あー、いや、まだ最上級職ではない」

「まだ？」

「何というか、この職業に最上級とかは存在しなくてな。 どこまでも伸びる練度と共に強さが変化していく。 それで最近になって俺はこの職業の半分のところまで極めたから……ええと、恐らくエクバの職業を最大まで極めた時の半分の強さって感じかな？ そのくらい」

「なつ、まだそれで半分だと…!？」

「ああ。 でもその分使いこなすのに多大な修練が必要だ。 大海のごとく深く果てしなく幅広い職業だから両手を伸ばしても全て掴めきれない」

それはアーケードゲームに何枚も何枚もクレジットを落として試行錯誤を繰り返して行くかのような。 失敗して、キャンセルもトを見つけて、対策を作って、愛を深めて、台パンして、何回も何回も揺さぶられながら繰り返すだけ。 それは変わらない。 だから俺は何度も繰り返して行くだけだ。

◇

幾度なく敵を退け、ここまでやってきた。

多少アイテムや気力を消費したが追い込まれるほどでもない。

「これが仕掛けか」

「この台座にある赤い玉を隣の台に移せば解除されるようだな」

俺は赤い玉に触れ、持ち上げる。案外軽くてビックリしたが眺めてるとその中に吸い込まれそうなほどのエネルギーを感じる。長時間触れてると何か起こりそうなのだ俺は急いで隣の台座に移動させた。

ガコン……………パリン!!

「!」

幻聴かと思うような音が聞こえたがこの洞窟ごと包み込む何か割れる音がした。

もしかしたら恐らく…

「!! 見ろよ、導きの糸が色を取り戻している。　どうやらこれで機能するようになったのかもな」

「だとしたらこれでフラッグの仲間を救われる事になるか」

「ああ。　これでアシエル達はこの山の外に出て海賊船に戻れる。　そうすれば薬品や物資が豊富に充実してる船の中で治療が可能だ」

「そうか。それはよかった」

彼女は言っていた。 ショウキ達の仲間はまだ派遣されるために集ったメンバーであり、指令や役目のために団結しただけであってそれほど仲間意識が高い訳では無かった。 しかしフラッグたちは掛け替えのない仲間として繋がっている。 難しいけど誰一人欠けることなく歩んで欲しいと切実に願ってくれたから彼女は俺の事を喜んでくれた。 良いやつだよ。

「さて、ショウキ。 君はこの先に行くのか？」

「ああ、大陸調査とし派遣されたからな。 だから私はこの先に行く」

「そうか。 あまり一人で向かって欲しくないけど」

「心配は有難い。 だがアサシン一族として役目を全うし、引き受けた仕事を果たすべきなのだ。 だからこの場所で燻ってられない」

「ははは、昨日まで死にそうになったのに使命がある限りは止まらな
いんだ」

「う、そ、それについてはもう感謝しきれない程だ。 だから絶対に必ず、この恩は報いらせてもらう」

「じゃあそのうちサラーンにでも出向いて――」

キュイーン！

「!!」

脳裏に素早く何か走る感覚。俺は足に力を入れるとシヨウキの可憐な体を強く抱きしめながらそのまま押し倒した。シヨウキは「な、なにを!？」と少し赤くして驚くが、俺たちが立っていた場所には冷凍ビームが通過する。シヨウキはそれを見て目を見開いて横を見る。俺も腰に構えているビームライフルを取り出して冷凍ビームの主に威嚇した。

「っ、不意打ちとは随分な挨拶だな!」
「!」

「躲したか。なるほど、貴様はなかなか厄介な人間のようだ」

俺たちを攻撃した正体はシヨウキを死に追い込んだあの氷の魔女だ。もん娘は似たような見た目しているが俺にはわかる。強い執念を持ってこちらを追いかけてるのだからこの氷の魔女は間違いない。あと足が火傷してる。俺が転がしたハンドグレネードのダメージだな。

「わざわざここまで追いかけてきたのか？ 魔女のくせに肉体労働とは、苦勞なこった」

「このまま逃げられては癪だからな」

「そうかい。冷たいのにお熱い追っかけで心温まるよ、ありがとう」

「……その余裕面、絶対零度の快樂に墮ちながら崩してやろう」

「やってみろ。氷の魔女という存在は対策済みだ。アーケード画面に映る台バンシイ如くいい加減見飽きたぜ。行け!サイコ

「ジャマー！」

手を伸ばすと浮遊する小さな物体が氷の魔女を囲い込む。

「ふん！」

しかし氷の魔女は手を払うと冷気が広がり、浮遊する物体は凍りついて地面に落ちる。

「愚かな、二度同じ手にー」

「行け！『サイコジャマー』!!」

「!？」

再度俺のマントから浮遊する物体が氷の魔女の周りを飛び交う。

するとジャマーは発動された。

氷の魔女の動きを止めてしまう。

「な、なんだ、と？」

「一度仕掛けを見られてる敵に対して誰が真面目に同じこと繰り返すか。俺はそんなに愚かじゃ無い！」

今飛び交わしたのはただのファンネルであり、本物のサイコジャマーは後から出した。どうせ対策くらいはしてるだろうからこちらもその上を踏んで対策させてもらっただけの話だ。しかしファンネルは強力だから残しときたかったけど致し方あるまい。

「シヨウキ、洞窟の外に逃げるぞ」

「なに!? そんなことしたらフラッグは!」

「仕方ないだろ。生き延びるためだし」

「!……わかった」

シヨウキが気にしてるのは俺がおさかな海賊団と合流できなくなるからだろう。もし俺がこの洞窟から出てしまえば『導きの糸』は『スノーヘブン』方面の洞窟入り口に登録されてしまう。

洞窟を出ないで導きの糸を使えばおさかな号が止まっている方面の入り口に戻る事が可能でありそのまま仲間と合流できる。だがこのまま外に出てしまえば導きの糸を使用してもおさかな号側の洞窟入り口には戻れないだろう。システムの関係でそうなる。だが生きていればまた会えると信じてるから、俺は迷わなかった。

「退くぞ!」

ベルガ・ギロスの『シヨット・ランサー』を撃ち放って逃げる。

ゆっくり飛んでいくランサーは氷の魔女へ直撃するとスタン＋スタン効果で強制的にダウンさせてしまう。俺たちはその隙に洞窟の外に出た。

「逃げれたのか?」

「それはどうだが……」

俺は洞窟の入り口にフェイロンフラッグを投げ、あからさまなトランプを仕掛けながら洞窟から離れ続けた。

「……追いかけては……無いな?」

「恐らくあの洞窟からは出ないだろう」

しばらく様子を見るが出てくる気配は無い。
強敵から逃れた事を知ると力が抜ける。

「これで抜け出せたか……」

「おつかれシヨウキ。そしてついに新大陸だぞ」

「そうだが、しかしフラッグ、お前は……」

「それは大丈夫。10日後にナタリアポートまで行けば会えるだろうし。いや、2日くらいは経ってるから後8日経過すればナタリアポートだったかな？ とりあえず俺はそう言葉残してるからどうかして会えるだろう」

「そうなのか？」

「そう約束取り決めてるし。アシエルが覚えてるならの話だけだな。まあ細かいことはどうにかするさ。それよりも奥に見える街まで行こうぜ、ここに立ち往生しても仕方ないし……あとお腹空いた……」

「！ そうだな」

俺とシヨウキは雪越えの山を背に向けて街の方に向かった。

つづく

60日目　　スノウヘブン

　　スノウヘブン　　
　　60日目　　

ブロロロロ!!

雪原に敷かれた雪を巻き上げる大きなパンジヤンドラム……では無いけど迫り来る正体にぶつかれば大怪我してしまうだろう。そんな事を考えていると街の入り口が見えてきた。徐行してブレーキする。

キイ、キイイイツ!

ブロロロ……ガチャン…

「どうも、こんちわーす。　観光に来ました」

「な、何者、だ?」

「え?　これかい?　これは『ゲドラフ』って奴が扱うタイヤなんだけど、それに乗って雪道を移動してたんだ。でもこんな入り口でこのタイヤ転がしていると邪魔だよな。　ごめんね、今消すから」

「い、いや、そう言うわけでは…」

俺はタイヤから降りると役目を終えたことを悟ったそのマキブは消えてしまった。　なかなか乗り心地が良かったな。　今まで海ばかりの生活だったから陸で試すチャンスも無かった。　そのためやっと今回このスノウヘブンの道程で使用した訳だ。

あと楽しかった（小学生並の感想）

しかしアサシン一族のシヨウキは足が早く、タイヤの速度に負けな
い走りで驚いた。 そんな訳で俺のマキブとシヨウキの生脚による
競争が始まったが、アサシン一族の脚力はバカになりませんでした。
そんなこんなで夢中に競争しているといつのまにかスノウヘブン
に到着していたこの頃、入り口にいる天使兵に質問されてる状態だ。

「ほ、本当に人間なのか？」

「なんだ？ 人間見たことないの？ ガオー」

「いや、そう言う訳でない。 あとそんな鳴き声をしないことは理解
済みだ。 私が驚いてるのはまさかこの大地に人が踏み込んでくる
とは思わなかったただけだ」

「…つてことらしいぞ、シヨウキ。 つまり俺たち一番乗りじゃん。
バンザーイ」

「別に一番を競い合ってる訳ではないが、王家の命を受けてここまで
来れたことに喜びを感じてる」

緊張感の無い会話に天使兵は少し苦しむ。

いつのまにか天使兵は武器を取り出していたがそれを収めると本
格的に会話と言う形に入った。

「見たところ賊ではないようだがココに何用だ？」

それでも警戒心むき出しで話す天使兵。

そりや人間がここまで来るとは思わなかったからな。

これは彼女らからしたらイレギュラーなんだろう。

「私は大陸調査のため内海からやってきた。 別に荒らすつもりは無

い」

「なら隣の奴は？」

「俺は海賊だよ。でも平穏な村を襲うつもりは一切ない」

「……本当か？」

「本当だよ。てか、なーに言っているんですか。こんな貧弱一般人ピーポの俺たちが天使を相手にして勝てるわけが無いだろ。立ち向かうだけ無駄ですしおすし」

「…そうには見えないがな」

「えー？俺たち人間だよ？雑魚だよザコ。天使の様に果てしなく高貴な生き物に比べたらクソザコナメクジだぞ？俺たちって」

「だがお前はどこか違うな。人なんだが、人を超えた何かに成り得る可能性を秘めてる。なんとも言えないが、人を超えた人になりそうな…雰囲気だなか。そしてとなりの少女、お前もだ」

「？」

「お前も死線乗り越えた眼をしている……」

「なっ！そ、そんなことも分かるのか？」

「ただの街案内キャラと思いきやスペック高すぎィ！」

「テンションが高くて逆に危ないなこの人間は……」

この天使兵は一味違うな。おっぱいの面積が広いだけじゃなく

て見る目も幅広いようだ。地上落ちたとは言え、地上に生きるどんな種族よりも勝る存在として天界で暮らしていたからそれも当たり前か。

「まっ、でも、俺たちが何者とか、可能性の獣とか、いまは良いさ……」

服についた雪を払って天使兵の前まで歩く。

「とりあえず、俺はあんたに聞きたいことがある」

「……なんだ」

俺は今一番大事な内容を告げるために真剣な表情で天使兵の顔を見た。雰囲気の変わりようにシヨウキは無言になり、天使兵も警戒心を深めながら真剣な表情で耳を傾ける。この街の入り口からこれまでにならないほど緊迫した空気から俺が切り出した言葉は…

「お腹空いた。どこかご飯食べれるところ案内してくれ」

「……………は？」

◇

「天使の村でヤマタイのうどん食べれるとすごく幸せなんですけど！
ズルルルル」

「むぐむぐ…」

カフェの隅っこな備え付けられたテーブルに俺とシヨウキは座り込み、何かお腹満たされる温かいものを頼んだ。しかしここはエクレアやカフェなど甘いものしか売ってない無いが、まあ別にそれでも良かった。しかしやはり温かい食べ物がいい。ここは寒いし、満たされる食べ物ってのは温かいものだ！…とか、そんなことを考えてると商人天使が初めてスノウヘブンにやって来た人間に驚いた。それで気前が良いのか歓迎の証としてヤマタイの村から仕入れて来たうどんをプレゼントしてくれた。

それから醤油も商人天使から借り、数分だけキッチンを借りるとうどんを湯がく。ただ醤油を薄めただけのスープを作り、良くあるぶっかけうどんが完成。しかしこの懐かしい香りは食欲を唆らせる。箸がないのは残念だが、デザートで使うフォークを借りて、いざ食べると……

「ああ、温まった心がびよんびよんするんじやく」
「むぐむぐ…」

人類が編み出した食の有り難みを感じつつ、ちよつぱり嬉し涙を流しながらズルズルと啜る。

スイーツを食べてる天使達の空間と場違いな食事を味わっていた。

「それ美味しいの？」

ひとりのキューピッドが訪ねて来た。

まさか淫欲ピッドの天使が訪ねて来るとは思わなかったが、俺はう

どんを口の中に頬張りながらコクコクと頷く。 試しに食べかけの器を渡すとキューピッドは器を受け止め、フォークで食べ始めた。

すると…

「んん〜♡ 美味しい」

なんか好評だった。

するとほかの天使達も興味を寄せて集まってくる。

あ、シヨウキの奴はほかの天使達に食われまいと一気に食べた。た。

ずるいぞコイツ。

「美味しい…」

「うん、良いわね」

「へー、うどんってこんなに…」

一口ずつ食べ、それぞれ感想を述べる天使達、どうやらうどんは好物の枠に当てはまりそうだ。

喜ぶ姿はまあ良いけどさ…

「ごくん……………これが、うどん。 中々美味しい…」

そしてスープまで飲み干された。

「あの……………それ、俺のぐいはん……………」

「?……………あ……………」

「……………」 ぐう〜

ヴァルキリーが最後食らってしまった。俺は3分の1しか食べておらず、残りの3分の2は天使達によって全て食われてしまい、ともにありつけなかった悲しみを背負うとお腹の音が抗議を立てる。やってしまったと気づいた天使達は慌て始める。代わりにスイーツを食べてくださいと考えてテーブルの上に次々と集められる。

「その、ええと……」

「ご、ごめんね？ 人間さん」

「あははは……罪な事したかしら」

「い、いや、良いですよ……気にしないで」

とりあえずお腹を満たすため新しいスイーツから、食べかけのスイーツをフォークで刺し、胃の中に入れていく。少々甘たるく感じるが紅茶やコーヒーもあるようなので、甘さを控えつつ頂きつつ食べた。

因みにキューピッドの食べかけたエクレアに食らいつくと頭の中が一瞬だけピンク色の瘴気に包まれてクラつときた。ほんの少しエクレアに付着してたキューピッドの唾液が体に馴染んだのか？ 恐ろしいな淫欲ピッドは…

「あ、甘たるい……」

「ファイト！」

「頑張れ！」

「食べさせてあげましょうか？」

なんかよくわからないが応援される俺。少しずつ満腹感に充される。すると天使達はスノウヘブンにやってきた俺たち人間の存在に興味を示し始める。うどんも興味を持ったがやはり俺たち人間が優先的なんだろうな。

「どこから来たのですか？」

「他の大陸から」

「君はどうして来たんだい？」

「冒険心」

「あなたにとってうどんってなあに？」

「和の心」

「好きな子はいるかい!？」

「心に決めた子ならいる」

「まあ、でしたら是非ここで式を挙げてください」

「祝福で満たされそうですね。考えます」

「…………ふん、穢れた生き物め……」

「同じ土を食ってるじゃねーか、仲良くしようや」

「面白そうな人ね」

「俺の仲間も面白いゾ」

「そういうえば隣の子は彼女さん？」

「ぶっ……」

「いや、ただの道連れだ」

「あなたは寒い時はどうするの?」

「金!! (で温かい食べ物を買う)

暴力!! (的な運動で体を熱くする)

S〇X! (靴下を履いて暖をとる)

「ソ、ソックス? ああ、靴下ね」

「履くだけで違うからオヌヌメ」

「ねえねえ! もう卒業した?」

「三回くらい (学歴的な意味で)」

「え? (困惑)」

「は? (威圧)」

そんなこんなで質問責めだ。まるで学校に転校生がやってきた時の状況と似ている。落ち着いてごはん(スイーツ)食べれなくて

困っている。

ガチャ

チリンチリン

「おい、その穢れた生き物、ラナエル様がお呼びだ」

「んー？ 偉い人か？」

「ただの代理であるが偉い人には変わらぬ。ツベコベ言わずについで来い」

なんか雰囲気悪いな。

でもとりあえず従っとくか。

「シヨウキ」

「ああ、行こう」

入り口にいた天使兵ではない別の天使兵が俺たちを誘導する。

ノシノシと外を歩かされてる状況なので、周りを見渡すせば人とは大して変わらない日常を過ごす地に堕ちた天使達。アリの巣を眺めてサボってるキューピッドや、戦闘訓練している天使兵。シロクマ娘とさむさむしているヴァルキリーも微笑ましい。チラチラと人間の俺達二人を観察する天使達に手を振って返す。

「くらー！ 変なことするな！」

怒った天使兵は口ウソクの火を俺の首筋に当てる。

「あちい!!」

まさかこんな仕打ちを受けるとは思わなかった。

「オイオイ!? 後ろ髪燃えてないよな!？」

「?…心配ない、大丈夫のようだ。何故か焦げてないがな。よくわからんがそのロウソクの火は我々が扱うものと違うらしい」

「このロウソクは精神的な痛みを当てるために焼く拷問道具だ。物理的な干渉は無い」

「いま俺は拷問されたのかよ」

「無駄口は良い。変なことしないで歩け」

「はいはい」

「『はい』は一回だ! この穢れが!」

そういうとまたロウソクの火を首筋に当ててくるので俺は腰に常時備えてるビームライフルを掴んで銃口から斜めに刃を展開した。

バチバチバチ!!

「!？」

ロウソクの火の根元に『ビーム十手』が突き刺ると火はかき消される。

「お話し合いの前に勝手な私情で人を傷つけるの辞めないか? 俺、そういうの嫌いだぞ?」

「っ！ 穢れた生き物が！ やはり刃を抜いたか！ やはり人が野蠻なのは変わりないな！」

「いやいや、先に刃を向けたのはお前だろ？」

「黙れ！ 失敗種族が反論する気か！」

この天使兵はかなり人のことが嫌いなようだ。

「シヨウキ、行こうぜ。 アレが案内される家らしいし」

「……」

無言で頷くと一緒に歩くシヨウキ。

放置決められた天使兵は目を見開いた。

「お前らあ！ 私を無視か!？」

「ところで代理の方とコンタクトを取ってどうするの？ サバサから派遣されましたって正直に言うのか？」

「そこは真面目に言う、隠さずとも問題ない。 下手に隠して戦争の火種にもなったら困る。 仮に出て行けと言われたら従うさ。 ただ調査のために来たからな」

「もうすこし調べたいとか思わない？」

「個人的にその気持ちはあるが重要なのは課せられた使命を無事に果たすことだ。 私が生きて調査記録を持ち込めばサバサ王家とアサシン一族の関係はもつと深まる。 それにサラーン様もお喜びになる」

シヨウキの揺るぎない目的を語られ、俺は彼女を応援しながら肩を叩く。

まだ後ろの天使兵がうるさいけど、まあ良いや。

「ここが村長代理の居る家かな？」

「みたいだ」

コンコンとノックすると扉が開かれ、ひとりの天使に招かれる。

この天使は後ろの人間嫌いな天使よりも柔らかそうだ。え？ もちろん表情の意味も含め、聖母を漂わせるお胸の事も柔らかそうだと感想を残したんだよ言わせんな、恥ずかしい。とりあえず事情を説明すると奥に招かれた。とてもあったかい部屋だな。

「こんにちは、私は村長代理のラナエル」

「こんにちは」

「突然の訪問で申し訳ない」

「いえ、大丈夫です。人がやって来た報告はたしかに驚きましたが。

……とところで貴方達を案内する筈の天使は？」

「ロウソクで首筋を炙って来たから逃げて来てきました」

「人間嫌いなのだな」

「そうでしたか。それは大変誠に申し訳ありません。あの天使にはしっかりと言っとききます」

「別に良いですよ。人嫌いな生き物は珍しくないし、俺たちは気にしてないです」

「それよりも話とは何だろうか？」

「はい。対した内容ではありませんが、あなたたちはなぜこの大陸に来たのですか？」と、言う質問です。この大陸に来る途中の洞窟

には結果も張っていた筈ですが……どうしたのですか?」

「そうだな。　まず宝の地図を見つけたところから説明しよう」

「え?　宝の地図?」

「ああ、手に入れた宝の地図には『昇天の羽』と書かれていてな、俺も含めた海賊の仲間はそれがなんなのかを見たくてやってきたんだ。

故に冒険心。　時間をかけてこの大陸に来たのは良いが、洞窟の入り口に張られてる結果には阻まれるアクシデント。　だが色々あって洞窟の侵入に成功。　しかし解除する必要があるが出て来たので解除した。　それから致し方ない理由に追われながらここまでシヨウキとやってきた、マル」

「なるほど、貴方は海賊なのですね。　あまりそういう風には見えな
いのが率直な感想ですが…」

「俺よりもお頭が海賊っぽさ出てると思うけど今現在は怪我を負って治療中。　出てこれない状態だから証明できないな。　因みに俺たちは義賊って奴でね、他人に不幸を撒き散らしながら美酒で幸福を飲むような下郎とは違う。　ただこの大海にロマンを抱いたアホで楽しい連中って事さ」

「それでも同じ賊です。　世間的に刻まれたイメージは簡単に拭えませんが」

「知ってるさ。　だからここでは比較のお利口さんにしてる」

「……敢えて警戒の目を浴びろうとは、変な人ですね」

「その方がそちらは安心するでしょう?　入り口の天使にも俺のこと

は異様な存在と見なされてる。もちろん他の天使も同じ事を考えてる子がいると思う。だからここで『俺は無力な生き物です』と言っても怪しい。だから今のうちに敢えて警戒線を張っておいても俺は良い……と、伝えときます」

「わかりました。貴方の事はお望み通りマークしておきますね」

「はい、了解です。では、次はこの子だ」

「私の名はシヨウキだ。30年前に突然現れたこの大陸を調査するため派遣された」

「なるほど。たしかにそれが普通でしょう。そしてその後はどうなさる予定で？」

「この後は調査記録をまとめて帰るだけだ。あと……ここまで来る途中倒れてしまった仲間も弔いたい。洞窟に仲間の亡骸があるなら地に返してやりたいのだ」

「なるほど。わかりました」

「そんでラナエルさん。単刀直入に聞くけど、俺たちは厄介者かな？」

「……どうしてそのような？」

「いや、なんか良くあるじゃん？ 『人間は危なっかしい！ 近寄るな！ 平穩を乱すな！ 出て行け！』って感じに思われてるのではとすこし考えてた。エルフとかマーメイドとか、その部類が主にそうだし。俺は人間である事を気にしてる」

「いえ、そのような事はありません。ですが平穩は乱さないでココ

もそうであり、他も同じです」

「じゃあココの宿屋を使ったりとしばらくスノウヘブンで滞在して良いですか?」

「構いません。旅人が望まれる街として機能してるかわかりませんが心行くまで体を休めて下さい」

「ありがとうございます」

「……私もこの街で一旦休まろう」

「だな。正直に言うとな俺もお布団で眠りたいな。あの洞窟で精神削り過ぎてテンションがおかしくなってる」

「シロクマ娘はともかくあそこは氷の魔女から野良の天使までウヨウヨとしています。人間の身でありながら良く生き延びましたね」

「いや、私は死にそうになった方だ。でも彼に命救われたからこうしてここまで来れた。今の命は彼のために」

「おい待て、シヨウキ。そこまで重い話は無かったと思うぞ?」

「冗談だ」

「おいゴリア、さっきのタイヤですり身にしてやるぞ」

俺たちはラナエルに頭を下げ、村長宅を後にするとそのまま宿屋に向かった。天使の羽のようななふかふかのお布団に飛び込んだら体が浮いた感覚に襲われる。

やはり天使ってすげー。

う
う
う
う

61日目　　スノウヘブン

　　スノウヘブン　　
　　61日目　　

天使が沢山な街、スノウヘブン。

常に雪が降っている大地であり、本当の意味で肉体を得た天使達にとつて過酷な土地である。しかし30年の年月を掛けて住める街に変えられた彼女達の強さは本物だろう。またこの街に住まう天使達は皆強い。戦闘慣れしていないにも関わらず元々備わっている力ほどの種族よりも凌駕する。故にこの大地は過酷だ。俺もショウキが乗り越えてきた雪越えの山にも結界を貼り、侵入者を退ける。仮にその結界を越えたとしても雪越えの山に彷徨くもん娘は並ではない。種族問わず弱者は容易く朽ち果てるのみ。

そんな大地だから、原作ゲームではとあるちょっとしたサブイベントに驚きがあった。

何せスノウヘブンには『人間』が一人だけ住んでいるのだ。

その人間に話しかけるとバトルファツカーのミニゲーム的なサブイベントが始まる。

しかも中章の終盤なのでレベルが高い。

それ相応の強さを見せつけてくれる。

だが天使の街に^{普通}バトル^通ファツ^のカー^{人間}がいる。

このギャップに少なからず驚きはあった。

そんな記憶があるこの街に俺は足を付けているのだが、違和感がある。

「この……家だよな？　多分」

ゲームと同じ街づくりではないが、そう言った面影はある。　イリ

アスベルクに住んでいるバトルファツカーのエリイの件もそうだけど、何となく原作ゲームの中身と街の並びは何処となく似ている。だから俺が今立っている目の前の家は恐らくだろうと思つて眺めていた。疑問を晴らしたいため近くにいた天使に「この家に人が住んでたりしますか？」と聞いた。

しかし返つてきた答えは「NO」であつた。

「居ないと言うこと…か」

スノウヘブンのバトルファツカーはいない。

そもそも人間はこの街にいない。

門番の天使さんの反応からもそれが伺える。

ならばそのバトルファツカーは何処にいるのか？

ああ、それは案外近くにいた…

「なあ、シヨウキ。 あんたもしかしてバトルファツカーだったりする？」

「ん、そうだが？ なぜわかつた？」

「シヨウキが氷の魔女に襲われた時、忍具が散らばつて居てな。その時に淫具らしき物が混ざつていたことを確認した。もしかしたら性的な分野にも手を出してるのではないかと思つたんだ」

「そうか、そういうことか。 たしかに私は修行がてらにバトルファツカーとして挑戦を受けている者だ。 ちなみに私は『レンジャー』の職業以外にもう一つ『淫流くのいち』の最上級クラスの職業も使える。 そのため性的な戦闘も得意な方だ」

「なるほどね。 ただの趣味では終わらなかつたんだな」

「本当は淫具も持ち込むと小回りが効かないから置いて行きたかったが、旅で必要だからな」

「……と、言いますと?」

「高レベルなもん娘ばかりで『男』は特に大変だ。いくら肉体が強くともオスとして抑えれないモノが当然ある。溜まりに溜まった肉欲がもしもん娘に向けて暴走されてしまつては支障が出てしまうからな」

「なるほど、淫流くのいちのスキルを持ちながらも、旅をサポートするレンジャーとして『ソツチ』も管理してたのね」

「うむ。まあ、手で本気を出せばどいつも直ぐだがな」

「ただでさえ淫流くのいちは器用のステータス近いのにそれ耐えられるわけないだろ良い加減にしろ」

さて話を戻そう。

今一度確認だが彼女の名前は『ショウキ』であり、これはコードネームでも無いようなので真名だろう。そして現在の職業は『レンジャー』であるが『淫流くのいち』の職業もある程度極めている。あとバトルファッカーも修行がてらに挑戦も受けている。それからアサシン一族の娘で、組織の上に『サラーン』って長が存在している。

ここまではショウキの素性。

そしてここから先は彼女の経緯を辿る。

彼女はアサシン一族と長き繋がりを持つサバサ王家の命を受けて大陸調査を行なっている。調査先は30年前に突如現れた謎の大

陸だ。腕が確かなメンバーで編成され、外海に派遣された。だが道中で仲間が次々と脱落、残るはシヨウキ一人。そして俺とのエンカウントは瀕死の状態だった。死線から起き上がって歩み止めない彼女は『スノウヘブン』の街に到着した。いつか朽ちていった仲間を弔いたいと考えている。

…うん、間違いない。

彼女で間違いないだろう。

「やはりお前は原作なんだな」

「何かいったか？」

答えを言おう。

彼女はシヨウキの名前を持った人物。それで原作のストーリーとは無縁のキャラ。ストーリーの終盤に現れるバトルファッカーとして主人公ルカさんの挑戦を受ける役目を持っている存在だ。ゲーム画面にはちゃんと専用のアイコンと会話もあるキャラクターであり、決して村人その3とかではない。

「それにしてもレンジャーか…」

彼女の現在の職業はレンジャーだ。

現在は淫流くのいちではない。

仲間になるときは淫流くのいちの筈だ。

しかしシヨウキはスノウヘブンに来る前に氷の魔女相手に死を彷徨って始めていたところから始まる。間違はなく死にそうになっっていたりとルカさんと出会える話どころでなくなる。とんでもなくイレギュラーだ。

それにあと思い出したことが一つ。

原作ゲームのシヨウキはルカさん御一行がスノウヘブンに到着す

る『数年前に来た』と言う話だった筈。しかしこの時点で原作とは【別】の展開となっている。ここまで来るとイレギュラーと言うよりパラドックスってやつだろう。まあ何が起きてもおかしくない沢山の世界だからこんな事もあるんだろう。そもそも俺がおさかな海賊団と出会っている事もイレギュラーだ。

あれ？ そうなるとルカさん御一行は“船”を借りるイベントを起こせるのか？ まあ、白兔がなんとか修復して元の形に戻すだろう。パラドックスの行き着くところは基本同じだから海軍ルートも、海賊ルートも何が起ころうとそこに変わらないだろう。

「シヨウキ、君はこれからどうする？ とりあえず村長代理のラナエルさんからはこの街の滞在を許されてるけど」

「フラッグ、私は体を休めたらサバサの方に戻って報告を済ませる」

そりやそうだ。

彼女はそのために来たのだから。

己の弱さも知ってココに留まるのではなく、生き延びた自分の役目を果たそうと行動を移すに決まってるよな。

もう彼女は原作から外れている。

「それで、その…お前はどんなんだ？」

「え？ 俺か？ ……そうだな。まだしばらくはココにいます」

「そ、そうか……」

「？」

シヨウキの話は大体済んだの良いとして、次は俺がこの後どうするかだな？

雪越えの山で逸れた時アシエル達に「10日経過したらナタリアポート」と告げてる。もしこの事を覚えてくれてるならおさかな海賊団もナタリアポートに向かつてるかもしれないのでそこで合流しなければならぬ。

もしかしたらまだおさかな海賊団は雪越えの山の北口に船を停めてる可能性もある。俺が戻って来ると信じて停めている可能性もある。だけど導きの糸の関係で北口に飛んで戻れない。もし船が停泊してる場所まで向かうならスノウヘブン方面の南口から入って、そこからまたシロクマの里を抜けて、俺たちが最初に入ろうとした北口まで切り抜けることだ。

だがあの洞窟の中には俺の何倍も強いもん娘がうじゃうじゃいる。死線を隣り合わせにしながら再び中を突き進むのはリスクが高すぎる。そもそも今回は本当に運が良かったから切り抜けた話。あと船も停泊中にもん娘に襲われる危険性はあるからそこに居座ることは無いだろう。そのためスノウヘブンから向かう判断は無い。

だとすると？

ナタリアポートの合流を考えて残り7日間俺はどうしようか？

ハーピーの羽も全然動くので先に戻るのもありだがこの空いた期間を何かに活用できないか？

「天使、兵…か」

ここは地を這う種族よりも遥かに凌駕する天高き種族として君臨する天使達が集まっている。

「やはりめっちゃくちゃ強いんだよな？」

マンタ娘を思い出す。

強者から得られるモノってなんだろう？

「…」

もしもよ？

もしこの者達から手解きを受けたら

どうなるかな？

「……」

俺は人間に対して可能な限り友好的な天使を求め夕日に照らされた雪街を歩き出す。夜はとても寒くて仕方ないが夕焼けのオレンジ色は幻想的に街を照らす。元天界として浮いて居たこの大地の光景は眼が奪われそうだ。

ザツ、ザツ、ドサツ

ザツ、ザツ、ドサツ

「？」

今この時間で誰かが雪かきをしている。俺は音のする方向に目を向けるとひとりの天使がスコップを持って雪かきをしている。その天使は白銀の鎧を纏っており、白くて美しい肌を晒している『ヴァルキリー』だった。

「もうすぐ夜ですよ？ この時間で雪かきは大変じゃないかな？」

「？ あら、あなたは……うどんの子？」

「え、なにその覚え方…」

「覚えてないかしら？ 私が最後の一口を食べてしまった天使よ」

「…あ、そういやそうだったな。美味しそうにラストシユーンティングしてたっけな？」

「う…そ、その…あの時は申し訳ないことをしたわ。なにかお詫びをさせてくれないかしら？ 出来ることの限りなんでもやるわ。例えば…肉欲を満たすとかでも特別に構わないわ」

「なにそれすごい魅力的なお誘い」

「ヴァルキリーが魅惑的なお願いを受けられるようです
どうしますか？▽

—————

(選んで下さい)

▷何も願わない
絞って下さい
罵って下さい
挟んで下さい
太もも下さい
彼女を下さい
強くなりたい

—————

おいおい、選択技の半分以上が変態かよ。

あと彼女を下さいつてそれは願うものなんですかねえ??

――――
(選んで下さい)

何も願わない

絞って下さい

罵って下さい

挟んで下さい

太もも下さい

彼女を下さい

▷強くなりたい (ピツ

――――

ヴァルキリーは戦いのスペシャリストだ。

彼女から得れる強さがあるだろう。

無理なら無理で仕方ないかもしれないが、こんなにも強い者がいるのだ。

願わない訳にはいかない。

「強くなりたいの？ それはどうして？」

「俺の所属する組織の周りはマーメイドだらけなんだ。それで唯一人間が俺だけなんです。それで種族故に周りよりも劣ってしまう。だからと言って『仕方ない』で終わらせたくないんだ」

「……」

「そして俺には愛する人魚が二人いる。その者のために強く有りたいと思ってる。少しくだらないかもしれないけど、男として強い人間でありたい。そう考えてる」

「そう、あなたは愛する者のために。それはとてもいいわね。うーん、でも、私は誰かに教えるなんてやったこと無いから…」

「そうですか、わかりました。なら他を当たります。すいません、声をかけてしまつて」

「……いや、待って。少しあなたの眼を覗かせて」

「？」

「じつとして」

ヴァルキリーは俺の頬を両手で優しく包むように触れる。天使のすべすべとした肌と手のひらが頬が触れただけなのにまるで愛撫されたような感覚に頬が痺れる。しかしヴァルキリーは気にする事なくこちらの眼の中を覗き込む。無表情なんだけど普通に美人さんで整った顔だ。少し恥ずかしい気持ち湧き上がるがおとなしく見つめられているとヴァルキリーはなにかを頷いた。

「もういいわ」

「…あ、うん。その、それで？」

「受けましょう、そのお願い」

「！」

「あなたには可能性があるわ。秘めている」

「秘めているって？」

「人間の更の上に上を行った」何か」としか言えない。それは言葉にし辛いけど、あなたはもう一段階上を目指せる可能性を持ち合わせてる。新しいモノにね」

「!!」

それから俺はヴァルキリーから施しを受けることになった。

新たな可能性とは何か？

ハッキリとしないが強くなれるのだろう。

それは天に羽ばたかれる賜物か…
地に堕ちたままで終わる藻屑か…

明日からそれがわかるようだ。

◇

く おさかな号 く
く 昼 く

シロクマの里で必死に仲間の治療を施していると子分達が報告して

きた。　どうやら外の結界が解除されたようだ。　フラッグが結界の仕掛けを解いたお陰で導きの糸が使えるようになったのだ。

私は子分と急いで大怪我を負った仲間を背負い、導きの糸を使って早速この洞窟を抜けた。　おさかな号と合流すると行く先は海軍の目が遠いサルーンだ。　あそこはアサシン一族が多く、いろんな秘術も持つており、武器や戦術も含めて医薬品などの改良も進んでる場所だ。　そんな感じに街として一歩先に進んでいるところだ。　あと海と街が近いのでおさかな号の行き来も行いやすいのが利点である。

ちなみにおさかな号は所有権である私がハーピーの羽を使うことと一緒に移動する。　もちろんお嬢もおさかな号の所有権を得てるのでハーピーの羽を使えば移動できる。

まあ、それはいい。

ともかく私は仲間にサルーンの街まで行ってもらい、凍結で荒れた肌に効果の高い特効薬のお使いを頼んだ。　おさかな号にも薬は置いてるがここまで酷い怪我は一度街に戻って念入りな治療が大事だ。

でもこんな時『エリクサー』ってアイテムがあればこの上なく助かるのだが簡単には手に入らない。　私は無い物ねだりを辞めて治療に専念する。　時間はかかるが重症を負ったルリツタとレリツタの命は必ず助けてやれる。　お嬢の両腕もだ。

ただ一つの心配といえばフラッグだ。

彼は大丈夫だろうか？

仲間がいると言ったがそれはサバサの人たちだろうか？　信頼できる出来ないはともかくあれだけ過酷すぎた洞窟に潜り込んだのだ。　仲間が何人居ようと関係ない。　彼は生き延びただけそれは運が非常に強く味方したからだろう。　私もお嬢も仲間も誰一人欠けることなく中間地点まで逃げ延びた。　これも運が良かったからだ。

でも今の実力では耐えられないダンジョンであるのは確かだ。

しかもフラッグは人間だ。耐性もなければ生命力もマーメイドに劣る。彼の持つマキブは強いけど、あらゆるものが致命傷として受ける可能性が高い生き物だ。それでも彼は賢くて、適応力も高いから私たちの航海にも付いて来た勇猛な人。それでも心配してしまう。

でも仲間として……

私が惚れた男として信頼する必要がある。

だけど…

無理な事はしないでほしい。

だからお願いです神様。

天使様でも良い。

もし私たちが目指したあの場所が『昇天の羽』が実際にあり、天使が存在する神聖な場所なら、フラッグを守ってください。

どうか……

お願いします……

私の大好きな彼が無事でありますように…

◇

スノウヘブン
67日目

雪かきしてたうどん好きのヴァルキリーに強くなりたいた願って一週間が経過した。希望通り俺はヴァルキリーからお願いを聞いてもらい、新たな可能性とやらに踏み込むための訓練が始まった。

まず天使の加護により祝福を受けた衣服に着替えることになった。スノウヘブンで過ごす時は殆どこの格好だった。それから戦闘訓練が始まる：かと思つたがそんな事は無かつた。

ヴァルキリーから魔道に長けている天使の元に案内された。するとそこには数名の”トリニティ”の天使達が待っていた。ヴァルキリーは彼女達に訓練を引き継がせると「まずはこの場所から」と言つて去つていく。たまに様子を見にきてくれる。

それでリーダー格のトリニティの天使は俺を家の床の真ん中に書かれてる魔法陣に座らされる。可能性つてやらを引き出すための精神訓練に近い事をすると言明を受けた。それからトリニティに囲まれながら俺は眼を閉ざして心の奥にある何かに触れさせらる。最初はパツとしない時間が過ぎていく。途中、眠りそうにもなつた。少し焦りを生み出しながら何日も繰り返すと少しずつ『流れ』が見えてきた。

次に『無重力空間』に引き込まれると神秘的な波が心を浸水する感覚に襲われたりもした。その時にマキブもカタカタ揺れて共鳴したりと俺に寄り添う。息苦しくなってきたタイミングで眼を見開くと夕日が見えてる時間になつていたり、数分だけ感じていた時間も既に数時間近く経過していたりとかかなり集中していた。汗の量も酷かつた。

何せ精神訓練と共に『今まで』の『不安』と『焦り』が必要以上に心を揺さぶるから。何度も言つてるが『種族故の弱さ』が言い訳に

して邪魔をする。生まれ育った身故に致し方ないとは言え余計な感情から溜まりに溜めてしまうストレスと情けなさが俺を圧迫する。しかしそれらを抱えながらも人としての形を捨てたくない自分は強さの追求を諦めないでいた。

この訓練が自分を少しでも変えてくれるだろうか？

不安を抱きながらもヴァルキリーが用意してくれたこの訓練を止めず、同じことを繰り返した。すると頭がおかしくなったのかわからないが不死鳥のようなオーラを纏ったナニカが頭の中に現れる。まるで俺を見定めているようだ。迫り来る謎の威圧感とプレッシャーに締め付けられ、頭痛が激しくなり、心臓を抑えながら首元を抑えて苦しんだ。限界まで来ると椅子に座って静かだった俺の体も異常を示す。息が荒くなり、高熱に魘されたように酷く苦しむ。

この時、トリニティによる聖母のような抱擁が精神を緩和させる。

多分このために居たのだろう。何せトリニティは罪を浄化し、正しき方へ『導く』役目を背負ってる天使だ。俺が間違えてしまった可能性の道に進まないよう正常に導いてくれてるようだ。なので彼女達がこの精神訓練に適任であるようだ。

しかし柔らかな抱擁を受けるだけ甘い甘い天国に導かれてしまう快楽は、ただの一般人が味わうと我慢ならず即座に昇天するだろう。俺は精神訓練による精神的苦痛を相手してたので緩和されながらいいレベルで心地よさを味わっていた。そんな感じにさりげなく何度も天国の抱擁を味わいながら訓練を続けてとうとう『可能性』とやらの目覚め始めたのだ。

俺の中には言葉では言い表せない新たな感覚が巡っていることを理解する。だが処理しきれない昂りが続いていた。――自分が怖い。なんだ？ なんなんだこれは？ これが可能性なのか？ そんな感じに多大なストレスを抱えて身体がどうにかかなりそうで仕方なかった。

だけどその不安もトリニティ達に拭われる。

いつのまにか6人になっていた。

まるで安定剤を飲む量が増えたかのようだ。

それから言葉に言い表し辛い可能性とやらを引き出し続け、何ども繰り返し、そしてとうとう体に馴染む。最初は慣れないプレッシャーとストレスに苦しんでいたはずだがいつしか何とも思わず、それを『力』にしていた。するとトリニティのリーダーが不意に「終了です」と下された。

そして五日間続いた精神訓練は終わりを告げた。

魔法陣も擦り切れるほど発動していたようだ。

もう、だらしなくらいに脱力した。

トリニティは常に微笑んでいるけど一緒に喜んでくれた。するとひとりのトリニティが人間としてこの精神訓練に耐えたことに感服していた。この頑張りを称えて何かご褒美を与えたいと言っていた。俺はご褒美と言うより訓練に付き合ったことで感謝一杯だったからご褒美を求めるのはおかしいのでは？なんて言ったがトリニティは「頑張りし者に褒美を与えたい」と言う。

どうしようか考える。

すると訓練に集中してた故に軽く禁欲状態だった事を理解してたトリニティが「溜めすぎはいけません」と柔らかく微笑むとそこからは早かった。トリニティの十八番といわれる『快樂の十字架』が始まる。精神的疲労が大きかったため反応出来ず、気づいたら難なくトリニティ達に抱き上げられていた。そこからは果てしなき天国に誘われたとだけ言っておく。凄すぎて何を言ったら良いかわからないくらいに凄かった、はい。

あ、それと同時に進行に伝えることが一つ。

精神訓練中の俺を他所にショウキはサバサに帰った。使命を果たすため、あまりスノウヘブンにとどまらず、別れを告げるとハーピーの羽で去っていった。つまりバトルファッカーとしては残らない流れになった。もうパラドックスだな。まあ、俺がいる時点で既にパラドックスだからなんとも言えない。

さて：

そんなパラドックスな俺自身も新たに目覚めた感覚と共に待っていたヴァルキリーと再び対面する。精神訓練によつて鈍っていた体を慣らしながら彼女から手解きを受けた。久しぶりに握るビームライフルは少し重かった。

そして戦いの感覚を取り戻したあと本格的に模擬戦を行う。ヴァルキリーは「本気で来て」と言つて相手してくれた。俺もここまで付き合つて頂けるヴァルキリーに感謝しつつマキブをフル活用して戦う。ただしトランザムやゼロシステムを無しにして挑む。

ビームサーベルを構えて特攻すればヴァルキリーは剣を構えて攻撃を凌ぐ。油断ならない攻防の中でヴァルキリーに一発でも攻撃を当てようと奮闘する。しかし格がちがうのか簡単にいなされる。

天使の羽でいなされたりとするが諦めずに食らいついた。

回数を重ねてヴァルキリーも徐々に攻撃を激しくしてきた。もしこれが模擬戦ではない『本戦』としたら俺は冒険を終わらせてしまうことになる。強敵相手に危機的状況が続く模擬戦でヴァルキリーの一撃が打ち込まれようとしていた。これは本気の攻撃だ。手加減してるため死ぬ事は無いなこれを受けたら普通なら『お終い』だろう。

どうする事も出来ない？

いや、違う。

そんな事は無い。

俺には沢山のマキブがある。

それらを活かしてどんな強敵も薙ぎ払ってきた。

たしかに今回は天使格で戦闘に特化したヴァルキリーが相手だ。

外海のモン娘なんかよりも桁外れに強い。

だけど…

『仕方ない』で終わらせたらもう戻れない。

それは嫌だ。

もう種族的劣等感を言い訳にしたくない

「ツツ!!!」

俺は約束した。

アシエルやボニーに『有無言わせない強さを身につける』と話した。

それを目指そうと考えたんだ。

なら、そうやれ、俺。

俺なら、今の俺なら可能だ。

なら、もっと考えろ。

もっとももっとももっと考えろ。

考え続けて終わらせるな。

そこでピリオドを打つな。

エクバの如くキャンセルルートを作り続けてるんだ。

止まるんじやねえぞ。

止まんねえ限り道は続く。

みんなの団長もそう言っていた。

そしてそれはボニーも同じだ。

彼女も止まらないからみんなのお頭になった。

俺だってそんな彼女の道を見て行きたい。

お魚海賊団の先を見守りたい。

そのためには……終わらせてはならない！

俺にはこんなにも沢山のマキブがあるんだ。

反則的な力を持つものから、突破口を作ってくれる物まで、ありとあらゆる兵器を使える特権がある。

海のように深き量だが、関係ない。

もっともっと理解してゆけ!!

理解を高めて扱えよ！

オレよ!! 昔のオレよ!!

もっと必至になってこの職業を乗りこなせ！

「苦痛も！痛みも！弱さも!!」

「!!」

「ガンダム」なら負けないんだアア!!!」

キュイイイーン
!!!!

沢山の天使達がギャラリィとして模擬戦見ている最中で俺は柄に無くて叫んでいた。

俺の体は紫色のオーラに包まれて気味が悪く溢れ出す。

それはとてつもない量のプレッシャーとなってスノウヘブンを侵食する。

道具袋からは今装備してるマキブまでもが俺の叫びに反応していた。

サーベルからライフル、マシンガンにバズーカなどが頭の中に激しく巡り行く。しかしまったく苦しくはない。むしろ気持ちよく全てが構築される。何が最善なのか？ または何をどうすればもっと良くなるのか？ 頭の中は落ち着いているが心は激しく昂っている。でも恐怖はない。

今は「エクバ」を乗りこなそうと支配してる気分だ。

ヴァルキリーもプレッシャーに一瞬たじろぐが戦士として下がる姿勢は許されない。

目の前にいる人間を……フラッグを討つために思考を切り替えて踏み込んだ。

疾風のような動きはすぐに俺を斬りつけるだろう。

だがそんなヴァルキリーの動きがゆっくりに見え始める。

これも人間の可能性を引き出した力なのだろう。

だから戸惑う事なく俺はこの新感覚に身を任せながらマキブを召

喚してヴァルキリーの特攻に挑んだ。

そして彼女の鎧を砕いた。

：

：

一矢報いた。

けど模擬戦は負けてしまった。

鎧を切り崩されたヴァルキリーが模擬戦で本気を出したのだ。

だが周りの天使は人間相手に本気を出した事で驚いている。

そんな俺は今雪の上に打ちのめされている。

でも、不思議と落ち着いている。

今は紫色のオーラは出てない。

でも、心が紅潮していたことが確かだ。

「これが……俺の……【新しい型】……か」

すごく落ち着いた。

この気分で俺は雪の上で倒れる。

この敗北と共に味わっていた。

とある世界でこんな言葉を残した者がいる。

『新たな可能性を見出した人類』

この様にイレギュラーな人類の事を：

無重力空間で生きる者達はこう言っていた。

——「新人類」——

その名を【ニュータイプ】と……

名前【フラッグ】（真名：海ノ雪旗）

レベル【50】

熟練度【60】

この世界に来て【68】日が経過。

新たな力を得た後、この記憶を忘れないため
スノウヘブンの宿屋で日記帳に日記を残した▽

つづく

69日目　　ナタリアポート

　　ナタリアポート　　

　　69日目　　

元天界と浮かんでいた大陸に住まう天使達と一週間を過ごしながら、俺は人の可能性とやらを見出す訓練も受けたお陰で「ニュータイプ」って種族に変わることが出来たのだ。もう種族的劣等感は無く何もかもが軽い。

しかし天使達はすごいな。

彼女達は俺の中にある可能性とやらを簡単に見出した。

最初にスノウヘブンの門番の役割を持つ天使さんはこちらを見ただけで何かを見出し、更にショウキが死線をくぐり抜けたことも見て暴いた。ヴァルキリーも同じく瞳の中を覗くだけでニュータイプの可能性を見出してくれた。

ヴァルキリーってのはただの戦士かと思っただけどそれは俺たち人間の浅い考えで、ヴァルキリーに限らず殆どの天使からしたら普通に分かってしまうのだろう。いまは地上に堕ちたことで本来ある筈の力が弱まっているだけで、人間程度の視点では計り知れない。

そもそも天使の在り方は決まっている。

彼女達は見分け、正しき方向へ導く。

天国へ魂を導いたり、悪を正したりと。

それが天使なんだろう。

「スノウヘブンの天使兵さん、商人の天使さん、トリニティの方々、村長代理のラナエルさん、そして望みを受けてくれたヴァルキリーさん、本当にありがとうございます」

愛する者達のためこの力を存分に振るいます。

寿命が短くすぐに老いてしまおうとも、パラドックスでこの世界が

滅んでしまおうとも、俺は愛する者のために最後まで添い遂げることをあなた達天使に誓う。

ザザツ

「まさか！」

「居たのじゃ！」

「……え？」

あの綺麗なヒレ、やや小柄な体に対してたわわ実った欲望のメロ
ン。

ああ、間違いない！

「アシエル！ ボニー！」

「!!」

「!!」

役10日ぶりに顔を合わせた俺たち。

ナタリアポートの中央にあるマーメイドの像の近くで俺は愛しき彼女達の名前を叫んだ。咄嗟に言い放った約束を覚えてくれたのか信じて来てくれたようだ。俺は感無量に満たされ、小腹を満たすためのノアパンの袋を強く握り締めてしまう。

ものすごい勢いで迫り来るピンク色のヒレを持った俺たちのお頭は大きく手を広げて正面から突進してきた。ノアパンの詰まった紙袋は真上に放り投げられ、俺は強く尻餅をついてしまう。だがそんな痛みよりも腹部に強く顔を埋めて泣きだすボニーの姿が心を痛めた。

「来てくれてありがとう、待ってたぞ、ボニー」

「う”う”う”、このお、ばがあやあろ”う”う”う」

ガダガタと震えて泣きくじやるボニーの頭を抱きしめながら優しく撫でる。

服は涙でぐしょぐしょだけど血で染み付いた痛みよりもそれは優しい。

「フラッグ…」

「アシエル」

尻餅をつきながらボニーを受け止めてると横から副長が声をかける。

その顔は嬉しさよりもやや怒りに染まっている。

「お前には色々と言いたい事がある。 本当に色々と言いたい事が山ほどある」

「だろうな…」

「あんたが理解してるのは知ってたさ。 だけど、まずは、言わせてくれ」

「？」

「ありがとう。 お陰で仲間は一人も欠けることなく助かった」

「良かった」

「そして生きていてくれてありがとう」

そう言うときアシエルは肩の後ろに回り、屈むと俺の首に腕を回す。

アシエルは頭を俺の肩に押し付け、震える。

「怖かった……怖かったんだ、お前が居ない時間が……」

「……」

「でも、信じてたから、10日後に約束したナタリアポトに来た。そしてお前がいた……よがっだ……ほんどうに”い”……うう」

「美人さんからこんなにも心配されるなんて俺は罪な男だな。本当にありがとう、アシエル。俺は、なんて幸せすぎる人間なんだ……」

後ろから抱きしめて泣きだす彼女の頭を余っている片手で撫でて抱きしめる。

ああ、こんなにも心配させてしまったのかと震える手から感じる。

これはもう絶対に離れる事が出来ない。

俺は心配に心配を重ねすぎた彼女達に深く深く謝りながら深く深く感謝を続ける。

そしてどれだけ愛されてるか再確認できる至福の時間、俺はこの瞬間を心に刻んでいた。

ところに……

「むむむ！」

このムードをぶち壊してしまう空気を読まない一匹のもん娘が乱入する。

「むむ？ お前たち、もしやおさかな海賊団だな！」

「？」

一匹のタツノコ兵が現れたのだ。

え？ なんで海軍がナタリアポートに？

「その青いヒレ、ピンク色のヒレ、そしてビッグなおっぱいを持ち合わせる妬ましい限りのわがままボディの海賊団！ 間違いない！ みんなの者！ 掛かれー!!」

「ふあ?」

まさかの海軍とエンカウントである！

ええ!?

あんたらナタリアポートじゃなくて普通はマルポートにいるんじゃないのか!?

てかやばい!

ここで人海戦術は危険すぎるだろ!?

「……って、思いましたが、今の私は一人武者修行の旅、仲間なんて誰も居ません」

「…」

「…」

「…」

ひゅー、と寂しい風の音が通り過ぎる。

チャキ

カチャ

「え？ な、なんでありますか？」

無言で武器を構える二人。

特にアシエルの鮫肌は鋭く立っている。

「……………アシエル」

「はい、お嬢」

「……………もしかしてわたし、何か間違えましたか？」

「間違えてるし、待ちが違えてるぞ」

「こいつを叩きのめすぞ」

「わかりました、お嬢」

いつの間にか泣き止んだお二人は武器を構えてタツノコ兵に突貫する。

「まで！二人とは卑怯ですう！」

「うるさいぞ！焼きタツノコの刑だ！」

「許さないねえ？ 許さないねええ？」

ああ、可愛いけど可愛そうなタツノコ兵は悲鳴をあげる。

でも空気を読まないあんたが悪いんだ。

怒った海賊相手に勝てるわけもない。

「あまりやりすぎんなよ」

俺はとりあえずノアパンの袋詰めを拾い上げる。

二人がやりすぎない様に見張るため、しばらく後ろで見守ることにした。

◇

　　おさかな号

　　夕方

「ルリツタ、レリツタ！」

「フラッグうう！」

「甲板長さん！」

「ああ、全くもう！　血まみれだったからすごく焦ったぞ！」

両サイドから抱きしめられ、片方ずつ片腕で抱きしめてあげた。

しかし力強いからそのまま海に落とされそうだったけど、その代わりに二つのたわわな果実に挟まれて役得である。　ひんやり柔らかくてでもあつたかい。

「フラッグのお陰で助かったと聞いたんだ！　ありがとう！　ありがとう！」

「ううう、甲板長さん、怖かったです」

「わかってる、わかってるよ。　アシエルたちから散々思い知らされたからな」

ナタリアポートでボニーとアシエルに同じ事をやった様に二人の頭を撫でて落ち着かせる。

すると隣からひとりのサキュバスが脇を小突いてきた。

「まったく、私の留守番中にあなたは何やってるのよ」

「いやー、まあ、なんか色々不幸が続いてな。なんとかしぶとく生き残ってやった」

エヴァのやれやれ声も10日ぶりに聞けたお陰でお魚海賊団のおさかな号に戻ってきたと思いきや知らされる。

はあ、やはりココはいいなあ。

雪越えの山でひとり寂しく逃げ回りながら進んでいるよりも断然暖かい。

今抱きしめてる二人のマーメイドの涙で服が湿って暖かいのもあるけど、海水被るよりも不愉快じゃない。

「さてお頭、この後どうするっ..」

合流出来たのなら旅の続きだ。

雪越えの山にロマンを求めるのは一旦終わり。

また腕を上げて探索すればいい。

ボニーにそう聞くと少し斜め上の回答だった。

「そりやもちろんフラッグが見つかったのじゃ！　そして我が子分も無事に復活したのじゃ！　今からパーティを開くぞ！」

「わーい!!」

「パーティだ!!」

「アシエル姐御とフラッグの手料理だー!!」

「やったー!!」

「シヨウキさん、フラッグ甲板長の料理美味しいですよ！　楽しみにしてくださいね！」

「う、うむ..」

「お魚！お魚が良い!!」

「お肉だ！ お肉が良い!!」

「私なんでも良いよ！」

「楽しみー!!」

と、皆メシに忠実だ。喜びすぎ。

「おいおい、俺を祝うんじゃないのかよ？　なんで俺が作る羽目になるんですかねえ？」

「まあまあ、これがコイツだぜ？　このくらいは知っていたら、フラツグ」

「うん、知ってた」

諦めたのでアシエルの後ろを付いて行く。

「じゃあ何から始めますか？」

「ナタリアポートで新鮮なお魚を仕入れたんだ。値段はやや張ったが豪華にお刺身と行こうか」

「じゃあ俺はフルーツポンチでも作るとしようかな」

「またノンアクセントな…」

「でもコイツなら気にしないだろ？」

「ああ、知ってる」

10日ぶりの再会もほどほどに俺は早速料理を開始しようとキツ

チンに向かうことにした。

「シヨウキ、なんか好き嫌いあるか？」

「いや、特にない」

「そうか、じゃあ楽しみにしてろよ。久しぶりの料理だけど味の保証はする」

「わかった、楽しみにしてる」

「じゃあ、また後で」

「ああ」

好き嫌いはないようだ。

じゃあ存分に腕を振るうとしよう。

…

…

……………え？

「うええええ!!? なんで!!?」

「なんだ、今頃気づいたのか」

まだ記憶に新しい彼女に対して驚き戸惑う。

「え？ まじ!? ほ、本物…?」

「ドウモー、フラッグⅡサン、淫流クノイチ、デス」

「アイエー!? ナンデー!? ショウキナンデー!」

おさかな号の木箱の上に座ってるショウキが俺の反応に対してクスクスと笑っていた。緑色の髪に、小柄で可憐な体、そして少しペツタンこな胸も含め、たしかに彼女はスノウヘブンで別れを告げたショウキだ。てかなぜここに？

「最後のは余計だ」

「ええ…: どういうことなの?」

「そうだな、話すと少し長くなる」

「ああ、そう…: それならお茶だすからキッチンまで来て。料理しながらで悪いが話を聞きたい」

木箱から飛び降りると音も無く着地する。

まるで忍者だ。

…: 忍者?」

「ショウキ、今の職業は何か聞いて良い?」

「今は淫流クノイチだ。報告を終えた後レンジャーとしての役目はないからな。極めてる途中の職業に変えたのだ」

「あ、はい」

確か原作ゲームでは淫流くのいちの練度が2だったけ？

たしかに半端だな

とりあえず俺は彼女をキッチリの中に招いた。

◇

く おさかな号のキッチン く

りんごの皮を剥きながら、俺はサバサ王家に長年使えてるアサシン一族のひとり、シヨウキから話を聞いていた。

彼女がどうしてお魚海賊団にいるのか？ その質問は隣でお魚を捌いているアシエルも一緒に説明してくれた。

まず、おさかな海賊団のレリツタとリリツタが重症を負った上に、凍土地帯の環境に慣れないせいで肌の凍結が進んだりとかかなり酷い状態に悪化していた。

マーメイドは海の生き物だが、陸に上がることは可能だ。しかし陸に上がるにも耐性や慣れが必要であり、また空气中に水分が無いと肌が乾燥してしまう。そのせいで少しの傷も致命傷になりやすい。アシエルやボニーはサメの一族だったり、海賊王ロザの末裔(?)だったりと個人の個体が強いので水のない悪環境も、水分補給さえすれば耐えられるらしいがそれ以外のマーメイドは苦しくて仕方ない。

そのため凍土地帯で陸に上がったリリツタとレリツタ場合、簡単に言えば『防御力ゼロ』の状態で活動してたようなものだ。ゲーム画面からしたらなんともないけど、現実味ある話にしたらそりゃ……ね？ 無理に決まってる。

だから俺はシロクマの里まで後から追いかけて来たアシエル達に
対して『無理しすぎたな?』と言ったのだ。

そもそもマグマの上を進軍する人間はいると思うかい? あれは
ダメージを引き換えにしたRPG特有の『設定』で守られてるだけで、
実際に命知らずな事をしようとは思わない。

俺なら「b」って腕を構えながら下半身から上半身燃やされて消え
去りますね。

さて、話がそれた。

ともかく大怪我を負った仲間を救うため、アシエルはアサシン一族
が住まうサルーンに向かったのだ。 あそこは色々と発展しており、
医学も例外なく発展してるらしい。 さすが前章では最後の村だ。
ゲーム中でも鍛冶屋にはお世話になったくらいだし。

それでサルーンの医者の方も借りながらアシエルは数日かけてレ
リツタとリリツタを治したらしい。 お陰で完全治癒だ。 だがサ
ルーンの医者曰く「人体の凍結が進んでいたら命失われてた可能性は
高い」と話されたらしい。

サルーンの人たちはアサシン一族なので生命を刈り取りやすい部
分など、モン娘も例外なく人体については特に詳しいからこ
の話は信用性が高いとの事。 そのためもしシロクマの里でア
シエルの懸命な治療が無かったら仲間のお亡くなりもあり得たと言
われたようだ。

俺も結界を解除しようとして行動を起こさなかったら最悪の事態に
なっていた事は確かである。

良かった、強引に行動起こしておいて。

しかしその代償として二人には心配させた過ぎた。

でも俺のやったことに後悔は無い。

その後の俺はスノウヘブンにシヨウキと向かい、そしてシヨウキは
一日だけ滞在するとサバサまで報告に向かった流れだ。

俺はその後のシヨウキは知らないが、彼女はサバサの報告を終える

と一旦、自分の故郷であるサルーンに戻ったらしい。するとサルーンには珍しくマーメイドを見かけた。ただ俺は自分の仲間をシヨウキに自慢してたので「もしや?」と思ひ声をかけたらしい。するとそのマーメイド達は俺から聞いていた仲間であり、海賊だった。

それから彼女は伝を使い、腕が確かな医者を紹介した。その医者によって仲間は救われたようだ。因みに治療費はシヨウキ持ちであり、おさかな海賊団は無償だった。アシエルは「何故?」と困惑してたが「あなたの仲間に命救われたから」と告げたとの事。

それからサルーンに滞在していたおさかな海賊団をよそに、しばらく休暇を得ていたシヨウキは自分の弱さを再確認して考えていた。すると滞在していたおさかな海賊団とはいつのまにか友人のように接しており、色んな話を聞いたらしい。その結果、外海の厳しさに耐えながらいろんな地方に向かう海賊団と話を聞き、シヨウキは考えた。

—— お魚海賊団に入れてくれないか？

シヨウキのスペックの高さはアシエル達も共にする事で理解しており、ボニーも心強い仲間が増えると聞いてその話に食いつく。そのかわり一年間は必ずおさかな海賊団として活動する事が条件に加え、シヨウキもそれを了承する。互いに約束を結び合うと、彼女はおさかな海賊団として航海の旅に仲間入りした。そして今がある。

しかしここら辺は原作の修復力が働いてるっぽいな。原作ゲームならシヨウキはスノウヘブンに留まって『自分を鍛える』ために残った。だがパラドックスなこちらのシヨウキはお魚海賊団と旅する事で『自分を鍛える』と考えた。

鍛える場所は違えど彼女の目的は原作ゲームと同じらしい。

さーて、この後どうなるのやら。

「とりあえずシヨウキはおさかな海賊団として加入してくれた。早速だけど、何の役目を受けてもらう?。」

「まずテストだ」

「?」

「シヨウキ、あんたは料理、洗濯、掃除、食料管理は出来るか?。」

「できる」

「よし、合格だ。これからはフラッグ甲板長の元についてくれ」

「加入当時の面接を受けた俺より早くないか?。」

「これだけできるなら良いさ。あとは戦闘面でも役に立つなら最高の仲間だ」

「だってよシヨウキ。あ、ちなみに俺は甲板長の立ち位置で、アシエルが俺の上司って感じた」

「ふむ、そうなるとフラッグは偉いのだな」

「別にそんなんじゃないよ。アシエル達に頼られてるならなんだって良いさ。とりあえずこれからよろしくな、シヨウキ」

「ああ、よろしく頼む。雑用から戦闘、または夜伽までフラッグの為ならなんでもやろう」

どうせ最後のは冗談だろう。

そう思ったが尾ビレがピクピクと動いたアシエルの包丁が止まる。

「ちよいと待ちなシヨウキ？　前者はともかく後者は聞き逃せないねえ？」

サメの鋭い目つきがシヨウキをやや不満げに睨んでいた。

「そう言えばフラッグは君たちのだったな。　こんなに強くて頼れる男を……羨ましい」

だがシヨウキは怯まずにつぶやく。
するとアシエルはなにかを考えて言い放った。

「シヨウキ、もし彼が欲しいなら……いや、これは後で話そう」

「今じゃないのか？」

「そうなるとアサシン一族として決断しなければならぬぞ、シヨウキ」

「どういう事だフラッグ？」

俺は彼女の身分を知っている。
だからしっかりと決断してもらわなければならないのだ。

「…」

りんごの皮を剥きながら思い出す。

いつだったか夜の話、俺はボニーとアシエルに愛を刻み、そして子

孫を託した。二人に生涯の全てを捧げることを誓った。そう言った意味では夫婦となった。だから俺は他者と容易に体を重ね会い、同意の上であっても交わることは許されない。

ただ一つ、条件を付けての上でそれは許される…

「わかった。後で聞こう」

「それがいい」

空気を読んだシヨウキは一旦この話題を引き、潮風を辺りにキツチンから去った。

少し複雑そうなアシエルに声をかける。

「さて、どうするかな、シヨウキ」

「私としてはあまり愛人増やされたく無いけどな」

「でも俺はアシエルとボニーが一番だから」

「知ってるぜ、この色男」

「魅力的ですいません」

「ははは、こやつめ」

生々しい話だけど、とても重要な話。

それらは一旦保留にした後

おさかな海賊団はパーティに洒落込み

夜まで騒いだとき。

名前【フラッグ】（真名：海ノ雪旗）

レベル【50】

熟練度【60】

この世界に来て【69】日が経過。

どんちゃん騒ぎなパーティが片付けた後
俺は久々の個室で日記帳に記録を残した▽

つづく

69日目　　～　おさかな号（夜）

～　おさかな号の自室　～
～　69日目　～　夜　～

ガチャ

「ああ、久しぶりの俺の部屋だあ」

この部屋は甲板長になった俺が使う事を許された個室だ。ベットとダンスと小さなテーブルが備え付けられてるだけ。あとは外が見える窓が見えるくらいか。広さ的に畳4畳程度であり、一人部屋ってことが良くわかる。

休憩時間は大体この部屋で過ごしてる。集めたマキブをベットの上に広げながらこれまでを思い返したり、日記帳にここまでの記録を日記として残したり、海の気候が穏やかなら昼寝したりと自由性は高い。

だが夜になればたまにおさかな海賊団所属の海賊マーメイドが入ってくる。長い航海で溜め込んだ情欲をスツキリさせるために「労わる」とか、ただ単に交じり合いたいとか何かしら理由を持ち合わせて俺に会いに来る。そうすればもう異性同士の営みとして重なり合い、最後まで絡み合って朝を迎える。

もちろんボニーやアシエルともこの部屋で夜の営みを過ごすのが、今上げた二人以外の者を刺すと特に五姉妹で3番目であるルリツタとの絡み合いが多い。彼女は素直でやや控えめな性格だけど、性欲に關しては姉妹の中で一番高く、我を忘れたようにもん娘らしく襲ってくる。こちらの唇を奪い合う事になればその後の彼女は貪欲に求め続け、気持ちよく夜を遂げる。そんな感じに180度変貌する彼女は素敵だと思うが、全てが終わると素の彼女に戻り、部屋から逃げるように撤退するのが毎度のことだ。

あとエヴァに関しては勝手に部屋へ潜り込むと手早くちよろます。そんな俺は眠り込んだままで気づかないことが多い。それで体がやや怠かったり、逆に体が軽くなったりと半々だ。一度だけエヴァが寝込みを襲う瞬間を捉えたが、不意に襲う淫魔の快樂には抗えなかった。頭に電気が走った感覚に飲まれ、視界が真っ白にチカチカとする。そして気づいたら朝まで気絶していた。あれは軽くホラーだった記憶。たまに夢の中でも襲ってくる。さすがサキユバス。

これだけ聞くとこの部屋は愛の巣のように聞こえるけど、俺が休むための部屋だ。

勘違いはしないでほしい。

コンコン

「？」

—— ショウキだ、良いか？

「いいぞ、入っても」

ガチャ

「フラッグ、話がある」

「そうか。とりあえずこっちにこいよ」

ショウキは部屋に入るとベットまで誘導してすわらせる。

俺は椅子を持ってきてショウキと向き合う形で座った。

「副長が教えてくれた。もしフラッグを愛したいなら生涯の全てをおさかな海賊団に注ぎ、共にする事を聞かされた」

「そうか」

「だがフラッグ、私はアサシン一族の一人であり次期アサシン一族の長を継ぐ必要がある人間だ。更に言えば今の長であるサラーン様からも大いに期待されている身であり、それは私にとって何よりも喜びである。だからおさかな海賊団に身を置く事は叶わない」

「うん」

「……………と、言うのが普通の話なのだが、そんな私に船長がとある提案してくれた」

「提案？」

「おさかな海賊団に”一年だけ”力を尽くすなら、フラッグを襲って構わないとな」

「……………はい？」

「こほん…………少し話変わるが、船長と副長は私の事を恩人と言ってくれたのだ。フラッグがああ雪山の結界を解除する際、私が同行したことで助けてくれたとな。私としてはむしろ助けられた側なのだが、船長達は失ってはならない愛する男に力を貸してくれたことが大きな恩となっている。さらに言うとなら私も結界の解除を手伝い、そして解除した事で瀕死の仲間が助かったとも副長が言っていた。色々都合よく偶然が重なるが、それでも船長達は私に大きな貸しを作っていることになったのだ」

「ああ、そうなのね」

「一年という短い時間だが、それでも愛し合えることが許されてる。……まあ……なんだ、そ、そう言う訳だから……」

「？」

「わ、わたしは今からお前を襲うぞ」

「……………え？」

「……………」

「ふあ!? ……なんか展開早すぎないか!?!」

俺は椅子から立ち上がり、早まるシヨウキを抑えようとするが相手は最上級職の極忍だ。

素早い動作に反応できず、気づいた時には小さな吹き矢が俺の体に刺さっていた。

「!」

視界がグラリと揺らぐ。

足の力が抜けてしまい前に倒れてしまう。

しかしシヨウキに支えられる。

「すまない、少し手荒なやり方で」

「ええ……………これは……………」

「その、なんだ？ ……待てなかったと言うべきか……………ともかく覚悟してくれたら助かる」

「いやいや、お前そんな淫欲ピツドじゃあるましい?」

「わたしの目の前にはこんなにも強い男がいるのだ。早く奪いたくて仕方ない」

この世界の女性は性欲の強さを実感していた。でもそれはモン娘限定だと思っていたけどこの考えは無くなり、この世界の人間はモン娘と変わらず肉食なんだと実感する。シヨウキの目はもうそれだ。

「いまこの時間はバトルファックを関係なしにして、わたしはフラツグを貪り合いたい」

「……」

どこか少し焦りを生みながらも俺の両肩を掴んでベットに押し倒す。ああ、とうとうシヨウキからも食われるのか。そんなことを陽気に考えながらも女性から求められる嬉しさも湧き上がり、彼女の情欲を受け止めようと思ったが…

「……」

「……?」

何もアクションが無い。ただ両肩を掴んでる彼女の手は少し震えていた。押し倒すだけでなにも始まらないまま時間が少しだけ経過する。

「……………えっと」

彼女の目を見れば少し困っているようだった。
「これはもしや？」

「なあ、シヨウキ。　いま少し怖かったりする？」

「！」

ピクリと反応を示した。

「吹き矢で射止めたくらいなんだ、ならもつとガツツリ喰らわないのか？」

「も、もちろんだが……その……」

どこか躊躇っている姿がうかがえる。

「俺はこの船で散々もん娘に喰られてるためこう言うことは慣れちゃまっている。だからあんたが襲いかかってくるなら喰られる側として受け止めるつもりでいる。しかしどうした？　ここまでやっておいてなにをためらう？」

「……す、すまない」

シヨウキは俺から離れ、目をそらす。
何か言おうとするが切り出せないようだ。

「シヨウキ？」

「……その、わからない」

「？」

「まずどうするべきかわからない」

「……わからないとは？」

「いや、だ、だって！ わたしは初めてなのだぞ!! たしかに私はバトルファツカーであり、淫流クノイチであり、男を快楽の虜にするのは容易い。だ、だが共に愛しながら求め合うのは、その、し、知らなく、て…」

随分としおらしくなるシヨウキに俺は啞然とする。こう言う事は慣れっこだと思つたが、それは俺の勘違いだ。だからそんな彼女に微笑みながら俺は体を起こす。まだ少しだけ体は痺れるけど根性で動かした。

「シヨウキ」

「？」

俺は彼女の頭を引き寄せて唇を奪う。

「んっ〜!?!」

目を白黒させるシヨウキを眺めながら俺は彼女を啜った。息苦しくなる頃に解放する。

「シヨウキ、俺たちは一度シロクマの里で肌を合わせあつて床を過ごした仲だ。危機的状况だったからアダルトチックな雰囲気は無かったけど、その時のシヨウキは俺から感じる生命の暖かさを欲してしがみ付いたくらいだ。ほら？ この方の傷跡、シヨウキの爪が食い込んでいたんだぞ？」

「!!」

「別に夜の営みを過ごした訳じゃないけど、既に肌を重ね合い、抱きしめあった関係だ。躊躇いも、遠慮もする必要は無いと思う」

「……っ」

「おいで、今はたくさん愛してやる。だからシヨウキも俺のことを愛してくれ」

その言葉を引き金に彼女は動く。

静かに夜の営みが始まる。

満月が綺麗なこの夜…

俺はくノ一の処女を散らしたのだ。

そして勘違いしてはならないことが一つある。

バトルファッカーは性的分野に慣れ、快楽で相手を落とすのは得意である。　　だけどこれは賭け事のために力を尽くすだけであり、た　　だお互いに愛し合うの事になるとそれは話が違う。　　異性同士で絡　　み合うとなればそこにバトルファッカーも職業の淫流クノイチも関　　係ない。　　自分と相手の気持ち体が現れた時に愛するのだ。

あとちなみに…

俺はボニー達を始めとして人外であるもん娘とは何度か交わりあ　　った。

だけど”人間”とは彼女が初めてである。

その意味では彼女が一人目になったとだけ伝えておこう。

…

…

ポルノフ
ポルノフ
71日目
昼

「なんだ!?! この!?! このブラは!?! うお、うおおお!!!? 聖なる香が!! 聖なる香りかする!!? これは! まさしく天使の愛だ!!!」

「今日は一段と増してやかましいぞブラハム」

「こんなにトランザムレアなブラはあるのか!?!」

「なんだそのレア度は?」

トランザムレア、なんか強そう（小並感）

それはともかく俺は20日ぶりにポルノフまでやってきた。相変わらず変態が編隊を組んでる村であり、もん娘はこの村を襲うことほしくないから平和だけど平和じゃない。あまりの気味悪さにな。証拠としてまず目の前のこいつがそうである事は分かってくれると思う。元ネタとしてエルスに特攻するくらいの存在だから違う意味で安心感あるけど安心できない。もうなんだコイツ。

「しかもこれはクノイチが付けているた鎖かたびらじゃないか！」

ええ…… (困惑)

そんなこともわかるのかよ？

「いや、まあ、もしやと思ってシヨウキから借りてきたけど……それもブラ公認なの？」

「女性が胸につけたものならそれはもうブラになる！」

「いや、おかしいだろ」

「しかしブラと思って持ってきてくれたのだ。それはブラジャーの事をだんだんと理解してきたことになる!! ふっ、青年まだ見習いだが、いずれブラジャーマスターになれるだろう！」

☆見習いブラジャーの称号を手に入れた。

「うわっ！視界の右上に何か出てきやがった!? うざっ!!」

「なんのことかわからないがまあいい。とりあえず約束通りにこれを渡そう」

そうやってブラハムから対価を頂く。

するととんでもないものをまた渡された。

「ふあ!? これ『対艦刀』じゃねーか!？」

とうとうこのマキブを使って海賊船でも切つてしまえと言う事なのか？

「そういえば前にも似たようなモノを渡した気がするな」

「それは俺が開幕ガーベラストレートで愛用してる『鉄刀』のことだな。まあアレも対艦刀に分類しても良いがこうしてちゃんとした『ビームソード』を与えられるなら区別つけてやりやすい」

「半分以上はわからないがまあいい。あとこれも渡しておこう」

ブラハムの手には黒い物体が乗せられている。

それを受け取るいつものようにマキブの情報が頭に流れ込みその正体を知る。

「!! ……とうとうこれを手に持つときがきたか」

「なにかと禍々しい銃だな？」

「まあな。これはカートリッジがある限り何発でも打てる最高クラスのスの銃だよ」

ただの『メイン』だけど、誘導、弾速、銃口、威力、そして何発も放てるカートリッジだけあり原作ゲームの中では最高クラスの銃だ。その名も『ビームマグナム』である。

「そっか、そういうや25のバンシイはビームマグナムだったな。使おうと思えば使えるのか…」

対艦刀とビームマグナムの二点、これは最高の代物である。

これでまた強くなれるのだから喜ばない訳ではない。

「それと青年、確か君は海賊業だったな？　ならばこの地図を渡そう」

「んん？」

「それはマキブが隠された地図だ。有効活用するといい」

「……お前が隠したんじゃないよな？」

「それは否定しよう。私はそれなりに旅をしたが、海に出るような事はしたことない」

「そうですか。　じゃあそういう事にしておこう」

ブラハムもパラドックスの一つだが、ゲームからするとアップデートで追加されたイベントキャラのようなものだろう。だからコイツに細かな設定は無い……と、思う。　今のところパンツ先生と同じようにちよつとしたイベントキャラだが、ブラハムの存在により俺はふざけたイベントに引っかけかかってふざけたような職業に就いたことに関しては何も言うまい。

「じゃあな、また来る」

「待っているぞ、青年」

早速天使のブラで昇天し始めた変態の部屋から出て少し人気のないところまで歩き、先ほど渡された『対艦刀』を取り出して軽い実験を開始する。

「トレース、オン……！　なんてね。　まあ、強いて言うならマキブ、

ON^{オン}かな」

少し言ってみただけだがやる事は似てるのでありだろう。

「まずはソードストライクの『シユベルトゲベル』からだ」

マキブに力をリンクすれば光り輝き、すぐに形が形成される。

しかし思ったよりも重力があり、支え切れず、地面に剣先をガツンと打ち付けてしまう。

「おお、ソードストライクの格闘武器だ！ これはかつこいい！ ロマンだよ！ …ぐつ、重ッ！」

とても大きな剣だ。これを振り回すと力があるな。一応これでも海賊やってるから筋肉は付いてきたから扱いは問題無いと思うが、練習あるのみ。そんな訳で次はソードインパルスの『エクスカリバー』を試そう。

「召喚されるとまずアンビデクストランスフォームの状態で形成されるのか。これも原作通りって事でいいのかな？」

しかし剣が二つだから重量がある。

でも破壊力は申し分ないだろう。

これもしつかり練習だ。

他にもグフユナイテッドの『テンペスト』も試した。そして最後にデイスティニーが使うアロンダイトビームソードの召喚を試すが残念、コストが足りないのでマキブから拒絶反応を起こしてビリビリときた。まるで「まだ貴様には早い代物だ」と跳ね除けられた気分だ。はいはい、ちゃんと頑張りますよ。

「しかしマキブも相当集まったな。まだ全部手に入れた訳じゃない

「フラッグの新たな武器を探しに行くのもロマンの一つだからねえ。
ぜひ探しに行きましょう」

「わかった、じゃあ次の目的は新たなマキブ探しだな」

ブラハムからもらった宝の地図を見せ、どんなお宝があるのか説明した。すると二人はすぐに探しに行こうと言った。やはり二人は海賊だな。武器だろうがなんだろうが宝の地図に隠されてるモノがあるなら探しに行く。ロマンを忘れない気持ちの良い連中だ。

「ちなみにアシエル、これはどこにあるんだ？」

「わからないねえ、情報が足りない。ただどなにかの大きな建物なのは確かだ。そしてすごく禍々しい」

「禍々しい建物？」

「あと私たちの原点に関わりそうだ」

「……原点？」

一体なんだろうか？

色々と考えは思い浮かぶがハッキリとしない。

でもアシエルの言葉からするとこの宝の地図はとんでもないところを記しており、簡単には手に入らないものなんだろう。そんな気がする。それをいつ見つけられるかはわからないが、ワクワクとしてきた。俺もエクバの職業に就いてる以上、自身を強化できるマキブがあるならみつきたいものだ。

隠せない好奇心と共に魚海賊団は大海を進んだ。

名前「フラッグ」(真名：海ノ雪旗)

レベル「50」

熟練度「60」

この世界に来て「71」日が経過。

興奮を心の中で躍らせながら

この冒険を日記帳に記録した▽

つづく

74日目　　外海

　　おさかな号　　

　　74日目　　

「あれは海軍の船か？　ひさびさに見たな」

　　いま外海の東にいる……と、言うか1ヶ月前に海軍とドンパチしながら入った大海賊の洞窟のちようど裏側にいる。　　嵐から逃げながら進んだらこんなところに流れてしまったのだ。　　しかも海軍の船がこちらを捉えている。　　また面倒な……

　　俺は物見やぐらから甲板を見下ろし、アシエルを見つけると叫んだ。

「アシエルー！　3時の方向を見ろー！」

「？」

　　アシエルは胸の谷間から望遠鏡を取り出し、俺が示した方向を見る。　　するとアシエルが降りてこいと指で合図してきたので、俺は飛び降りて彼女の目の前に着地するしかしバランス崩してしまい、よろけながら前に倒れるとアシエルの胸の谷間に顔が挟まる。

「むぐ、むぐぐぐ？　ぐぐぐつぐ？」

「胸から顔だして喋ってくれないか？　少しくすぐったいねえ」

「ぶはっ！　…アシエル、あの海軍どうする？　こちらから先制攻撃か？」

「それが好ましいいけど少し様子見だ。望遠鏡から見てもあの船は臨戦態勢に入らないからねえ、妙だ……」

「？」

この距離なら海軍もこちらの船に気づいてると思うが砲撃戦の態勢に入らず、正面からこちらに近づく。側面に付いてる大砲は飾りにして、早期軍隊決戦のつもりか？ こちらは大砲を放とうと思えば放てるのになんとも愚策な。

「いや、待て。光で何かサインを出している」

「サイン？」

「ワレ、タイワ、ヲ、モトム？ ……もしや話がしたいとでも言うのか？」

「海軍が海賊と対話をしたいたど？ 一体なんのつもりだよ？ もしや話し合いをするつもりで近づくけれど実は不意打ちのため……だとか？」

「わからないねえ。 だけど正義を掲げる集団だ。 罠にハマるようなことはしなさそうだが、さてどうするか」

「ならこちらは刃を突き出した状態で対話をするのはどうだ？ 手の内晒すのは好きじゃないけど、俺がファンネルを展開した状態でな。もし相手がこの条件を飲めないなら話す価値無しと見なせば良い」

「本当は海軍と関わりたくないが、聞くだけでもありか」

「一応俺がメガ・バズーカ・ランチャーを召喚して銃口を海軍船に向け

ておこう。見た目だけでも威力やばそうに見えるから、これで海軍も下手な判断は思う。もし何か怪しい動きをすればトリガーを引いて報復するさ……」

「おっかないねえ」

「だって賊を相手にする集団だ。例え俺たちが義賊だと言っても戯言としてしか受け入れない。なら遠慮は要らんよな？」

話が決まるとアシエルは『対話を受ける』とサインを送る。しかし手出しすると船を破壊すると脅しを入れた。そのタイミングで俺は百式が扱うメガ・バズーカ・ランチャーを召喚して構える。

見た目だけで充分にヤバいこと理解してくれると思うが、それでも対話を求める海軍を見て俺は何か厄介ごとに巻き込まれることになるのでは？ と、少し嫌な予感がしていた。

その後、海軍は一つの小舟を海に流すところらに近づいてくる。ボニーとアシエルは海に飛び込んで海軍の小舟に近づいた。後方ではメガ・バズーカ・ランチャーをリリツタに握らせ、リリツタの護衛にシヨウキをつける。大型のマキブをリリツタ達に任せ、俺は物陰からデユナメスが扱うスナイパーライフルを構え、いつ変な真似を起こされても構わないように準備をしていた。

ファンネルもアシエルの周りに漂わせているため、もし彼女が左手を上げれば会話のために近づいた交渉役は蜂の巣だ。これだけ武器を向けられてるのにもかかわらず、海軍は武器を引き抜か無い：と、言うよりは怯えて何も出来ないが正しいか。しかし一人除いて怖がる様子もなくむしろ興味ありげに見えるタツノコ兵がいた。あの落ち着き様はエリートだな。

いや待てよ、あのタツノコ兵もしかして？

既視感……と、言うよりは出会ったことあるだろうこの感じに首を傾げているとタツノコ兵はこちらを見たような気がした。

「!」

ああ、なるほど。

海賊の洞窟で警備をしていた兵士。

エリートの方ツノコ兵か。

外洋まで出てくるあたり本物のエリートだな。

「しかし何が起きようとしているんだ…?」

∴

∴

そしてあれから30分は経過しただろうか？

二段チャージも既に終わってるスナイパーライフルを構えてるのも
疲れてきた。するとルリツタが飲み物を渡してくれる。小さく
お礼を言いながら飲み物を飲もうとするとボニー達は動き出した。

ボニー達は海軍に背を向けておさかな号に戻ってきたのだ。

そしてこんなことを言われた

「大規模な作戦のために手が欲しいとのことじゃ」

「罨かと思いましたが、大国を揺るがす出来事が起きるとのことだ。

多分戦争か何かだな。 奴らの真面目な空気からするとマジな話だと思っ」

「なるほど。 それでどうすんの？ 俺はお頭に従うぞ」

その言葉にはかの仲間も頷き、この先の選択技を我らのお頭に委ねる。 その様子にお頭は満足げに頷き、アシエルもやれやれと口元を吊り上げる。 答えは決まったようだ。

「ここで大国に恩を売つとくのもアリだからな。 この話は乗ろうと思っぜ」

「そう言うわけじゃ」

その後、再び海軍の交渉役と短く会話をして「YES」と答えた。話を終えると俺たちお魚海賊団とはある場所まで招かれることになった。

◇

く グランドノア く
く 夜 く

ここは三大大国の一つであり、どんな時間でも賑わう城下町が明るさを引き出す。 なによりもここは人間やモン娘を問わずに参加で

きるコロシウムが名物なため、この国にはありとあらゆるもん娘で溢れている。そのかわり男性が参加すれば大体高い確率で敗北して性的に食べられることが多い。ルール上殺されることは無いが、性的公開処刑を受けることになる。しかしそのシチュエーションが好きでわざと負けてもん娘に弄ばれようと参加する変態も多いらしい。

しかもその敗北光景を観戦することを趣味とする変人や貴族も珍しくない。むしろ沢山いると言っても構わない。だけどそう言ったものがあるため、この大国は栄えていると言っても過言ではないのだ。

さてそんな俺たちはこの街にいるのだが…
今は絶賛ツツ、外食中である。

「フラッグ、飲んでるか？」

「アシエルか。まあ嗜む程度にな。だけど俺は甘いものが好きだからな、久しぶりに飲めたこのサイダーで楽しんでる」

「またまたそれは子供っぽい趣味で」

「子供心と若さを忘れない好青年と呼べって。ごくごく…：…プ
ハーッツ！ うめえええ!!」

「やれやれ…」

俺の子供っぽい味覚にアシエルはやれやれと言うのが笑っている。しかしアレだな。美人さんと飲むお酒は美味しいと言うのが本当だな。飲んでるのはサイダーだけだ。

「そんでショウキ、あんたは料理を取ってこないのか？」

「あの光景を見て取れると思うか？」

「……男にとっちゃ楽園だけど、あの肉厚の中に潜り込みながらだと料理は取り辛いね」

奥の方では食べ物 트레이にたんもりと乗せるボニーと、着いてきた数名の仲間たちが料理に群がっている。

あいつらは小柄だけど、そのかわり横にたわわ広がる二つの欲望の面積が邪魔をするため、落ち着いて料理を取れないのだ。あと賊だけあって、食に迫る彼女達の輪に入って無事に抜け出せると思えない。いまも数名の男性客は挟まれて幸せそうにしている。

食欲よりも違う欲が満たされてるその表情は見ていて少し気持ち悪い。食欲が失いそうだ。

あ、ちなみに俺たちお魚海賊団は外食店に来てるが、ここはバイキング形式で食事を楽しめるお店だ。

だからボニー達は料理が並べられたテーブルに群がっているのです。

「シヨウキは極忍だろ？ あの波を潜り抜けるのも容易いだろ」

「それはペったんこな私に対してあのおっぱい地獄に飛び込めと言うのか？」

「シヨウキは着痩せしてるだけでそれほどペったんこじゃないだろ。

てかマーメイド達の胸がおかしいだけだろ。人間の女性がアレを基準にしたらダメだって」

「フラッグ、あまり女性にお胸の話するのは紳士じゃないぜ？」

「ならアシエルの胸をシヨウキに分けてやれよ。バイキング形式

で」

「おいおい、それは取り放題じゃないか。分けるどころか無くなるだろ」

「無論、全部その胸取らせてもらう」

「やれやれ、極忍がそれで良いのかねえ？」

たゆんたゆんで動き辛いだろうな。

その場合だと快樂に特化した淫流くのいちがちようど良くなるのかな？

それはそれで恐ろしいな。

「しかしそうなるのアシエルがぺったんこになるのか。それはそれでスレンダーな体で美しいな。髪の毛も綺麗だし普通の美人さんだね」

「褒めすぎんなよ、フラッグ」

「……なんだろう、この会話で負けた感じは」

いじりすぎで不機嫌に染まるシヨウキ。

しかもなんか真面目に悩みました。

「ああ、でも！ もん娘を除いて人間だけの世界観でシヨウキのことは見たら普通に美人さんで分類されるから」

「！　　そ、そうか？」

「そうだよ………だろ！　聞き耳立ててる野郎ども!!」

「おおおう!!」

「ねーちゃん美人だぜえ!!」

「おい坊主! 両手で花で妬ましいなあ!」

「ロリ巨乳、はあ…はあ…」

「ほれみろ、シヨウキ」

「あ、うん…」

「やれやれ、男は単純だな」

「男は、バカでアホで単純でどうしようもない生き物つてそれ良く言われてるから。アシエルもよく知ってるだろ?」

「まあな」

肯定したアシエルの言葉と共に肩を組んで笑っていると、ボニー達がたんもりと料理を乗せたトレイをテーブルに置く。尾ビレにも器用にトレイを持っており、それもテーブルに乗せ終える。多量に収穫したその顔は満足げだ。まだ食べてないのにな。

「さて! 食べるぞ!」

「ちゃんと残さず食べよ、ボニー」

多分大丈夫だと思っけどとりあえず言っておく。

さて、俺はボニーとアシエルとシヨウキの四人テーブルに対し、横のテーブルを見ればおさかな海賊団の五姉妹マーメイドが仲良く食べている。ラリツタとレリツタは肉類、リリツタとルリツタは野菜、ロリツタはいきなりケーキを食らいつついる。

「ほれ、フラッグもシヨウキも食わぬと勿体ないぞ」

「はいよ、お頭」

それから好きなように料理をトレイに乗せ、それぞれ好きなように食べる準備する。

食べ放題なお店だけど、値段が張るだけあってどれも上品なお料理が多い。ちなみにこの外食店は国持ちで払ってくれた。なのでお魚海賊団は無償で味わえるのだ。90分コースだけど充分楽しめる。

「フラッグ、今回この話を乗ったのは良いが、メンバーが少ないのでは？」

彩り豊かな料理を取りながらシヨウキが横から話しかけてくる。

俺はうどんを湯がきながら答えた。

「たしかに、今回この大戦に関わることになるからメンバーを惜しまずに連れてこれば良かったのはわかる。でもシヨウキ、一つ思い出してみなよ」

「？」

「彼女達はマーメイドだぜ？　海の生き物が地上で長く滞在できる

訳が無い」

「それだとアシエル達に言えることなのでは？」

「彼女達は特別だ。　まずアシエルは稀少なサメ種族なんだけど、地

上に対して強い性質持ちと言うべきかな？　簡単に言うと他のマーメイドよりも強い個体と言う事だ」

「あともう一つ他にも理由があるが、これはシヨウキに話してもわからないだろうな。」

ゲームシステムで言う『アビリティ』って存在なんだけど、アシエルは『土属性ダメージ半減』のアビリティを持ってから地上生活が可能らしい。

でも定期的に水を得ないとダメだ。

「あとボニーも海賊体質として地上にも海上にも強い。　これは血筋が関係してると言ったら良いかな」

大海賊王ロザの子孫と言うのは強ち間違いではないかも知れないな。　どんなに過酷な土地でも冒険できる強さをボニーは引き継いでると言うべきか。　数週間前でひどい目にあつた雪越えの山でも、ボニーは両腕が凍結して永遠と使い物にならなくなる可能性も出ていた。　しかし今では両手にナイフとフォークを構えて元気に料理を食い尽くしてる。　マーメイドとしての治癒力と生命力が大海賊王として振る舞えるほどの強さを秘めていることを証明してる。

「では残りの五姉妹は？」

「あいつらもアシエルと似たようなもんでな、体質が地上に対して強いんだ。　詳しい理由はわからないけど、おそらくあの五姉妹の親が人間である事が原因じゃないかと言われてる。　土から産まれ、土に還る生き物である人間の精を受けているから周りのマーメイドよりは地上生活が可能らしい。　……あくまで『らしい』だからちゃんとした理由なのかは分からない」

「ふむ」

「あと定期的に水を飲んで体を潤せば10日は地上生活も可能らしい」

「まるで河童だな」

「その例えは正解に近いぞ。あと地上に潮風もあるなら健康に過ごせると聞いている。これはナタリアポートで家を建てて生きてるマーメイド達を見たら納得できるだろう。彼女達も人間の男性と未永く添い遂げるために潮風を浴びれる街に住まいを構えるんだ」

「なるほど、そう言うことか」

湯がき終えたうどんを取り出し、小さな器に移してミニうどんが完成だ。まあおそらくこのミニうどんはボニーに奪われるだろう。だからボニーの苦手な辛い七味唐辛子を振りかけることで奪われないように防止する。

「そんなに唐辛子を振りかけて大丈夫か？」

「ボニーに奪われるからこうやって防止しとくのだよ」

喉がやられそうになるけどこう言う時は乳製品を飲むといい。

「それそうと、シヨウキはどのタイミングで戻るんだ？」

「む、それは終わってからじゃないとわからぬな」

「そうか。とりあえずこの大戦が指定の場所まで来てくれる。迎えに行くから」

シヨウキはこの大戦にてアサシン一族から召集が掛かり、おさかな海賊団から一時的に離れることになった。本当はこのままいて欲しかったが致し方あるまい。かなり重要な事になるので断ることはできなかつた様だ。ボニーもこの件は了承済みである。

「じゃあ、互いの生存を祈って乾杯しよう」

「ああ」

暫しの別れ。

飲み物を打ちつけ合って健闘を讃え。

名前「フラッグ」(真名：海ノ雪旗)

レベル「50」

熟練度「62」

この世界に来て「74」日が経過。

食後に外の空気を吸いながら

ここまでの冒険を日記帳に記録した▽

つづく

74日目　　グランドノア

　　グランドノア　　
　　夜　　

　　バイキング形式の外食店で食事を終え、それぞれ与えられた寮で休むことになった。俺としてはおさかな号にある個室で休みたかったが、訳あってそれは許されなかった。理由としてはグランドノアの戦争に10日間の参加契約が結ばれてるためこの国から離れずにいるのだ。その代わりリーダー格の団長、そしてもう一人をグランドノアに残すことで、その他は一時帰宅可能との事だ。

　　なので俺とボニーだけがグランドノアに残り、アシエルと五姉妹はおさかな号に戻った。

　　別に俺じゃなくアシエルがグランドノアに残るのもアリだがボニーの強い要望と言う名のワガママで残ることになった。まあアシエルも一旦戻って今回の戦争で使うアイテムを整理したいと言っていたので従った。

　　で、今寮にいるのだが…

「ううう…た、食べ過ぎて動けないのだ…」

「量的にお好み焼き10枚分は胃袋に詰め込んだよな？」

　　そしてその栄養は胸に行くのだろう。

　　ただでさえ泳ぎ辛いのに更に大きくなると対策が必要だな。

　　…断食でもさせるか？

「ボニー、俺は少し散歩してくる。　　ついでにお茶があったら買ってきてやるよ」

「た、頼むのじゃ…」

布団の上から動けない俺のお頭を置いて出る。

え？ 一人で危なくないかって？

なーに言ってるんだ。

どう考えても外海を渡ってるボニーに勝てる奴がいる訳ない。

こんな形なりだけど、彼女はとても強いのだ。 まあそれでも腹一杯で動けないことを考えると心配なのでボニーの部屋にはフアンネルが停滞させてある。 もし俺の仲間以外が入り込めば銃口を向け、ボニーが指示すればフアンネルによって蜂の巣だ。

しかしニュータイプになると離れてもこんな事も出来るようになるからこの種族凄いわ。 その内ニュータイプの力をハマーン様並みに得てしまえばもつと凄いことができるのは確かだな。 だから天使さん達には感謝極まっている。 なので今度お礼の証にダメになりそうなほど美味しいお菓子を渡して墮天使にしてあげます。感謝を込めてね。

「……だれかいるな」

なんか扉の奥に人の気配を感じる。

それも俗物な感じだ。

この部屋に聞き耳を立てているのか？

俺は気配を消して忍び足で扉に近づき、鍵に手をかけると少し呼吸。

心の準備を終えるとそして一気に鍵を解除して扉を開けた。

ガチャ！

「うわっ!!?」

一人の大人が開かれた扉にぶつかり、廊下に尻餅をついていた。

「……おい、人の部屋で何やってんだアア？」

「ひっ！」

「……？ お前、さっきの外食店にいた客か？」

「！ な、なんのことだ……し、しらねーな」

しらばっくれるか……

なら……

「それにしても……」

「？」

「ロリ巨乳って素晴らしいよな」

「おお!! お前もそう思うか!! だよなあ！ 最高だよな！ ロリ巨乳ってのは!!」

「……そうか、そうか」

「……あ」

「やっぱりさっき『ロリ巨乳はあはあ』してた変態じゃねーか！ くだばれ俗物!!」

「うわああああ！ しまったアア!!」

ハマーン様の例え出した瞬間本当に俗物が現れるとか笑えねえ…
それでそんな俗物はものすごい勢いで逃げる。

俺は扉を閉めて一直線の廊下に出ると、壁に立て掛けられた箒を掴んで右手に構える。

腕を大きく振りかぶりなから右足で地面に踏み込み、一気に間合いを詰め出した。

「なっ!? はえええ!?」

そりやX1の『BD格闘』は早いに決まってる。

いつもはABCマントを付けて使ってるので速度が少し落ちるが付けてない状態でのこの格闘は25機最高クラスなんだぞ? しかしこのまま箒で攻撃するわけにはいかない。この箒は寮の道具だから壊したりするのは良くないと考えて箒をリリースする。

その代わり、短剣のマキブを取り出して構えると頭の中にイメージした兵器をリンクさせ『シグルブレイド』に変える。AGE―1スパローの最大の強みである特格の容量で一気に踏み込んでその背中を切り裂いた。X1よりも早い格闘はこれしかない。

「がっあ!?!」

「安心しろ、刃は隠してる」

そもそもこれはカット耐性高いだけで、最終段を出すまでは威力ないからな。だからマジで切り裂いてもさほどダメージないだろう。

まあしかし、こいつは俺の愛人を狙った変態だから別に軽く血飛沫晒しても良かったけど、ここは大国だからあまり問題は起こさないようにする。

「どうしました!?!」

すると騒ぎの音を聞いた兵がやってきた。

俺は軽く説明すると、廊下に倒れてる男を不届きものとみなし、兵はそいつを担いで去っていった。

「さて、散歩の続きだ」

しかしどこかにお茶でも売ってるだろうか？

自販機なんて存在しない世界だからな、手に入るのはいちや二やないかもね。しかも今は夜であり、道具屋などは閉まっているから望み薄だろう。そんなことを考えながら公園にやってきた。昼間は子供達で活気があっただろうけど数日後始まる戦争によりこの場所も子供が寄り付けなくなるのは確かだ。

そう考えると子供達のためにも戦争を長引かせない方がよい。俺たちお魚海賊団はただの雇われだが、手を抜かずに戦うだろう。大国に恩を作るためにもな。

ヒュン、ヒュン

「？」

何かが空を切る音がする。

誰かがまだ公園にいるのか？

すると俺よりも身長が低い子供に出会う。

「……」

その子供は黙々と木刀を振るう。

一般人から見たらただのチャンバラに見えるだろう。だがボニーの太刀筋を見ている俺からしたら、子供の剣戟は敵を斬るための太刀筋だ。しかし型などは感じられず、まるで我流だ。

だけど、あの感じは、わかる。

「天使の剣技か」

「!!?」

つい声を出してしまった。その声を聞いた子供はこちらを警戒しながら武器を構えた。普通町の中なら武器まで構える必要が無いが、彼の扱う剣技を見破ったことで警戒心を膨らませすぎた。更に俺は『天使』だと言ったのだ。希少な存在を知るような言葉を吐かれたらそりや武器も構えられるだろう。

「ああ、ごめん。邪魔したか？」

「い、いえ……ですが、今なんと仰いました？ 僕には天使の剣技だと聞こえましたが……」

「まいったねえ、聞こえてたか。まあ、いいや。うん、言ったよ、天使の剣技だって」

「……なぜ天使の事を？」

「そりや会ったことあるからとしか言えないな。そして手合わせした事ある」

「そ、そうなんですか!?!」

「まあな、冒険しているとそういうこともある。それで天使の剣技と言ったが、どこか君の剣技は天使が扱う太刀筋を感じさせるんだよ。それで君のような子供が使うから、ポロつと感想を零した」

「そうですか。　しかし天使の事を知ってる人がいるなんて…」

「その口振りだと、君も関わりあるようだな」

「え!?!　いや、なんとというか、訳ありですね」

「まあ良いさ、深くは突っ込まない」

「!　あ、ありがとうございます」

「あ、でもそのかわり俺が天使の話をしたことは仲間や周りに言わないでくれよ?　何だかんだで天使ってあまり口に出して良いモノじゃないから…な?」

「ええ、僕もその事については察しています。　だから大丈夫です」

「ん、わかった」

少しは警戒心を解いてくれたようだ。
そして話が通じるようで助かった。

「あと今頃ですけど、あなたは何者ですか?」

「俺はこの大戦に参加する事になった者だ」

「傭兵ですか?」

「いや、違う。　俺は義賊って奴だな」

「え?　ぎ、義賊?」

「まあな。　ところであんたは？」

「え？　あ、はい。　僕も今回の戦争の密偵として……………あ…」

「密偵？　なんかこの大戦で大変な役目でも受けてるのか？」

「ええと、まあ、はい…」

「ははは、そんな顔すんなよ。　今は聞かなかつた事にするから」

「ご、ごめんなさい、そうしてもらえると助かります」

「でも…そうだな、一つお願いがある」

「お願いですか？」

そう言う少年は顔を少しだけ厳しくする。

だが俺は両手を広げてフレンドリーに雰囲気を作った。

「そう警戒すんな。　ただ今さっきの剣技を見せてく欲しいだけさ。

それで俺も同じようにやって見たいから」

「今さっきやってた剣技ですか？」

「ああ。　できれば習得して強くなりたい。　愛する者のためにな」

「……………わかりました。　でもこれは難しいですよ…」

「構わん。　センスが無かったら俺にそこまでき。　でも、ニュータ

イプをなめんなよ」

「ニュータイプ？」

「気にすんな。とりあえず木刀もう一本あるようだな？ 借りるぜ」

「は、はい」

それから互いに木刀を握り合う。少年は腰を低く構える。

「この剣技は初歩的な技ですが、しなやかに筋肉を使わなければなりません。とりあえず見てください」

「ああ」

「……あ、それと、まず名前を教えてくださいますか？」

「おっと、そりやそうだな先生。俺はフラッグ」

「せ、先生？ せんせい……せんせい、か……え、えへ、うえへへへええへえ」

「うざっ」

「……はっ!? いかんいかん、時折過激的に襲う妄想に浸ってしまうところだった!」

「なんか色々大変だなあんた……まあ良い。ところで、あんたの名前は？」

「え？ あ、はい。失礼しました。僕の名前は……」

——ルカと言います。

フラッグはエンジェルダンスを覚えた▽

⋮

⋮

ガチャ

「ただいま。あとお茶無かった」

「随分と長い散歩じゃったな？」

「面白い人と出会ったから少し（剣で）話し込んでいた」

「ふむ。因みにそいつはおさかな海賊団に入る者になり得るか？」

「いや、ならない。旅仲間がいるからな、おさかな海賊団には加入しないだろう」

「そうか。それよりフラッグ、こっちに寄れ」

寝間着を身につけているボニーはベッドの上に座り、寝間着に着替えた俺を見計らって横に招く。

断る理由は無いのはボニーの隣まで寄り添い、ベッドの上に座り込んだ。

「こうしてフラッグを独り占めするのも久しぶりじゃ…」

ボニーは横に倒れると右腕を抱きしめ、ギュウツと包み込むようにしがみつく。

「ツ〜♡」

まるでご主人を見つけた猫のように甘え出す。

ふんわりと広がる金色の髪の毛はキラキラ。

鮮やかに煌めいておりとても綺麗である。

「ふうらあつぐ、だいすきなのだ…」

「俺もだよ」

ボニーは自分の頭を俺の肩に預けながらうつとりしているため、少し呂律が回ってないがそれほどに幸せを感じてくれている。俺は余っている片手をボニーの頬に触れ、手のひらから彼女の体温を感じる。

そんなボニーは大好きな人に寄り添える幸せによって恍惚に染まり始める。熱に浮かれたように頬を赤く染め、もたれかかる彼女は女性であることと、魅惑的なもん娘であることを再確認させられる。その肌と熱、そして抑えきれない吐息は耳元を擦るから胸の鼓動が速くなる。

「聞こえるぞ、ふらつぐも、どきどきしてるのが…」

「ああ……」

隠せる気がしない幸せの鼓動は密着してる彼女にも伝わる。

愛する彼も同じようにこの時間を幸せに感じてくれていることを彼女はなによりも喜びに満たされる。

そして…

もん娘としての性は当然のように彼を求め始めた。

肩に押し付けている顔が離れるとこちらを伺うように下から覗く。

恍惚に浸っている彼女の表情は無条件でこちらの体温を高める。

ああ、こんなにも可愛い生き物がいるのか…

抑えが効かなくなること的理解していても両手を伸ばし、やさしく

彼女の顔を支えて近づける。この後、何をするかを察している彼女は嬉しそうに目を瞑り、口元を前に突き出して合図をする。それが引き金となり、甘く啜りあった…

「んっ…んっ…ちゅ…ぱ…」

もうこうなってしまうては心満たされるまでこの啜り愛は止まらない。息苦しくなっても繋げあった唇は磁石のように離れず、そのままベッドに倒れこむ。もっと奪いたいがために彼女の背中に手を回し、深く抱き寄せ、豊満な胸はいやらしく潰される。脳が蕩けそうなほど柔らかな感触は魅惑的であり、この興奮が収まらない。それは同じく彼女も昂り、もん娘としての性は最高潮に達しようとしていた。

「ふらっぐ…お主が欲しい…」

「ああ、いっぱい愛してくれ、ボニー」

その後は言うまでもない。

マーメイドと人間は肌を重ね合う。

それは深海よりも深く溶け込んだだけの話。

名前【フラッグ】（真名：海ノ雪旗）
レベル【51】

熟練度「 65 」

この世界に来て「 74 」日が経過。

ここまでの冒険は愛を確かめ合った後

来る大戦に向けて日記帳に記録を残した▽

つづく

76日目　　～ エスタ周辺

～ エスタの周辺　　～
～ 戦争中　　～

戦争前の緊張感は解かれた。

この日のために力を蓄えて参加した兵士や傭兵また武人達はそれぞれの武器と精神を掲げて戦線まで進軍した。

そしてつい30分前にグランゴルドの兵士達と衝突の知らせが届く。

巨大なマッドゴーレム娘、普通のゴーレム娘、歩兵としてのアリ娘、快樂特化で戦意を奪うオートマータ娘、主にこの四種類が襲いかかってくる。これがただの冒険ならまだ殺伐としなかったかもしれない。だが自国を掛けた戦いとなると命懸けで闘えば兵士となり、なりふり構わない。

負ければ滅ぶのだから。

作戦としては海に追い込み、大地から遠ざける戦いを選んでいる。敵の殆どが土属性であり、大地の力を活かした戦いを得意としているため海に追い込むのが良いと言われている。そして戦力を奪うのだ。だが多大な犠牲を生みながら生き物を殺すための兵器が振るわれているのは確か。間違いなく犠牲は多くなり得るだろう。

そしてもしこの戦争が泥沼と化すなら、それは救いようがないほど死体の山を築いてしまうことになる。

そうならないために、この反攻作戦は防衛線の維持が重要となるのだ。攻めるのではなく、戦線を維持して組織力を保つ。消耗戦を避けるために過激な動きは起こさない。人的資源は多く有ろうとも犠牲を多くしてはならない。

しかしこのままでは将来的に泥沼な戦いとなってしまいうだろう。

だから、ごく一部の者だけしか知らない冒険者にとある役目を受け渡し、その者達に懸けた。

裏方で動く主人公達がこの戦争の火種を取り除いてくれると信じて、この戦線を留めなくてはならない。」

「それぞれ！ 血祭りですわ!!」

バス！バス！バス！

「おい『ラリツタ』！ 少しは下がれ！」

「このくらいどうってことありませんわ！ あなたは大人しく後方支援を果たしなさい！」

特技の『血祭り』を使っているのは五姉妹の長女。

彼女の名前は『ラリツタ』であり、元バーサーカとしての力をクレイモア・アクアの大剣に乗せて強引に敵を薙ぎ払う。

マーメイドの癖に力が強くて堪らない。

「だからと言って射線に入りすぎるとフレンドリーファイアーしてしまうぞ」

「あら？ あなたほどの腕前を持ってそんな失態を晒しますの？」

「そんなことしねーよ！ むしろあんた自らバズーカの射線に入ってるからコッチとしてはヒヤヒヤもんだぞ！」

「別に当たりませんから、お気になさらず」

「ならハウンドドッグの拡散ゲロビ流したろうかラリツタ？」

「それは無理」

丁重な口調からやや脳筋な戦いに少し頭を悩ませる。 けどドラリツタは状況把握能力が高いため味方の攻撃に巻き込まれない。 むしろバズーカの爆煙を視界切りに利用して闘う辺り古参から活躍してるその強さを見せていた。

「カコメ」

「カコメ」

「！」

大軍のアリ娘が傍から攻撃を仕掛けてくる。
いま装備してるマキブでは一掃できそうにない。

「ならばビームコンフューズ！」

足止めするくらいなら可能と考え、衝撃波を作り上げるとビームの拡散を受けて動きが止まるアリ娘達。

その隙にハンドグレネードを転がし起爆した。

「「ウワアアア!!」」

爆発で真上に飛び散るアリ娘達を放置してリロードを終えたところマキブをボニーに受け渡す。

「ボニーにシールドビットを展開」

「助かるのじゃ！」

タイミングよく力溜めを終えていたボニーにシールドビットを受け渡し、そのまま展開しながら敵陣に突っ込む。なんかFドライブのマスターガンダムがシールドビット張って横格するあの光景を思い浮かべてしまうんだよな。足掻きでガードしたら体力溶けてしまう。怖い怖い。

「ほら、そっちもだー！」

エネルギー切れを起こしそうになるビームサーベルに最後の仕事として敵に投げて突き刺す。

アシエルも遅れまいとボニーのサポートに走り出した。

「〜☒」

「〜♪」

リリツタとルリツタはマーメイドの綺麗な歌声で敵を魅了する。心酔わせるこの歌はアリ娘や兵士の動きを止めていた。証拠に触覚が情けなくへ口へ口になり兵士の男どもはビクンビクンとしている。とりあえず気持ち悪いからファンネルのビームをケツに打ち込んでやった。

「「『ピギイイ!?!』」」

「「『アツー!!』」」

よだれたらしてプルプルと震えている。
相当ファンネルの味が効いたのだろう。
ちなみに威力は手加減した。

「復活だーい！」

「レリツタ、怪我は大丈夫か？」

「もう治った！だから復活した！」

「はいよ」

元気に武器を構えて敵陣に乗り込むレリツタ。
あの調子だとまた怪我して後方に退きそうだ。

「ラリツタおねえちゃん！ 私も一緒に闘う！」

「あら、そうなの？ あまり無理したらダメよ」

「おねえちゃんみたいに強くなりたいから多少は無理するもん！」

「全く、仕方がない妹ね」

「えへへ。 よーし！ かかってこーい！」

「あらあら、うふふ」

こりやしつかりと俺が後方支援しないと姉妹共々倒れそうだな。
そうなるとビームマグナムか。 カートリッジだから何発でも撃てるし、威力も高いから確実にトドメ刺せる。 そう考えた俺はメイ
ンのビームライフルからビームマグナムに、サブのバズーカからヴェ
スバに切り替える。

「とりあえず一発」

ずっしりと重たいビームマグナムのトリガーを引き、敵兵に撃ち放
つ。

バキューーーン!!!

ボゴオオオ!!

「グアツ?!?!」

まるで鉄球にでもぶち当たったかのような鈍い音が広がり、直撃した敵は遠くに吹き飛ばされる。

「やはり強すぎるなコレ……」

今回の敵に対してこのマキブはあまりにも殺傷能力が高すぎる。

しかしそれは当たり前の話。ここは陸であり外海の世界では無い。マンタ娘やいかく娘などの外洋生物に対して必要な威力だがいま闘っている敵に対して過大戦力となっている。

ビームマグナムでは制御が効かないのだ。

「やはりZ系のビームライフルにするか。誘導力が低いから素早

い敵には当たらないけど、今回はそれでも無いからこのくらいで充分よな……」

しかしビームマグナムの威力射撃が効いたのか敵の戦意が少し薄れた気がする。そもそも俺という存在が敵によつては未知数であり、先ほどのビームマグナムが敵兵をぼろクズのように吹き飛ばしたのだ。しかも何発も撃てるときたらそりゃ戦意も薄れるに決まってる。

「ロリツタ、銃は使えるか?」

「海賊だよ、だから使えるに決まってるよ!」

「じゃあ軽く説明する。このカートリッジ式ビームライフルはトリガーが軽い。そして3連続で撃てる。そのかわり狙うつもりで撃たないと当たりにくい。いいね?」

「仕方ないなあ、先輩だから承ってあげる」

「頼もしいぞ、ロリツタ先輩」

俺はZ系のビームライフルをロリツタに渡して、ロリツタも後方支援の一部に加える。

しかし受け取ると彼女は首をかしげる。

「アレ? 銃が無い甲板長はどうするの?」

「ファンネルを使う」

「おk、把握」

いや、どこで覚えたしその言葉? まあいいや。

後方支援射撃としてテンプレ気味にファンネルを使うが、俺はニュータイプになってから更に器用な操作が出来るようになった。

そして、質も、量も、桁外れに…

「いけ! ファンネルとファンネルとファンネルとファンネルツツ!!」

「ぬお!? フラッグ!」

「くく拉拉ラ…:…ん? ふええ!? フラッグ甲板長さん!」

「すごい!!!」

「あら、とても濃ゆいこと」

両手を広げて念じればこれまで無いほど多量のファンネルが周りに展開される。その時に体から溢れる紫色の不気味なオーラは目視可能な程であり、それはニュータイプとして完成されてる証拠だった。あと紫色のオーラに関しては何度かその現象はあった。小舟の中でウヘブンに辿り着く前にも何度かその現象はあった。マンタ娘に襲われた時が一番大きかったはず。

「ファンネルよ！ 質量の高い敵を狙え!!」

質量リィのダィ高い敵を重点的に狙い、敵の統率力を失わせようと有りつ丈を解き放った。

ゲームで言えばSPが30くらいを消費して、放てば放つほどMPの消費量もバカにならないが、つまりそれだけ有ればこのような事が使用可能だ。

大軍相手に光る武装だ。

使わないわけにはいかない。

「あまり長引くと頭が割れそうだな……!」

遠隔操作のマキブを多量に扱うのはかなり苦しい。しかもそれぞれコストの技がバラバラである。だが『キュベレイのファンネル』って事が共通してるため、バラバラのコスト帯のマキブを扱っても『ただ数が多すぎるファンネル』ってだけだ。

短時間なら扱えない事もないのだ。

それでも普通なら情報量の多さに脳が潰れそうだが今の俺はニュータイプ。もともと素質があったのか一度開花すれば気持ち悪いくらいにその能力は高まり、今じゃシロツコやハマーン様にも劣らずニュータイプとしての強さを手に入れた。

これも海賊として過酷な環境を生きてきたからこそだろう。
あと種族的弱さで遅れを取るストレスを抱えながらその殻は破つて
たからな。

あれ？ 俺って結構勇者タイプ？

「避けれるものなら避けてみる！」

言ってることは勇者タイプじゃないけど。

ピュンピュンピュン!!!
ピュンピュンピュン!!!!!!!
ピュンピュンピュン!!!!

「ウガアア！」

「ガァー！」

「ヤメロ！」

「助けてくれー！」

「うあああ!!」

「ぎいああああ!!」

「ウゲエア!!」

ピュンピュンピュン!!!
ピュンピュンピュンピュンピュン!!!

無数の蜉蝣のごとくまわりを飛び回るファンネルは敵を囲い、無慈悲な兵器はこの戦争に参加した兵士たちを次々と撃ち潰していた。

一人が撃たれた。

その隣ではパニックで動けずにファンネルの餌食となって跡を追ってしまふ。

武器が破壊されてしまえば後ろを向いて逃げようとした瞬間に恐怖の光線が襲いかかるり恐怖を刻み込まれてしまう。

潜って逃げようとするアリ娘を真っ先に感知しては掘るための腕を撃ち抜かれて逃げ場を無くされてしまう。

迎撃しようとして武器を振るう者もいたが無造作に動くファンネルに武器は触れることなく何十倍にもなって返されてしまう。

仲間を盾にする愚か者は後ろからも撃たれてしまう。

必死に突破口を見出そうとする者は真っ先に倒されてしまう。

現実逃避する者は恐怖の閃光により夢を覚まさせられてしまう。

その中で頭を地面に伏せてガクガク命乞いをする者や、戦意喪失して地面に座り込んでしまった敗北主義者に対しては、ファンネルは襲わなかった。

ただ狙われないでくれと心のない浮遊する機械達に対して必死に祈りつづけていた。

「動く撃つぞ」

「！！！！」

冷酷に淡々と告げた声だけどよく聞こえたようだ。
すると…

「もう大丈夫じゃ、フラッグ」

軍を指揮する隊長格は地面に倒されていた。

どうやらファンネルの嵐の中でおさかな海賊団の船長が闇のサーベルで斬り伏せていたのだ。

そうなるこの師団は機能が停止するだろう。

そして始まるのは…敵の敗走である。

「逃げろオオ!!」

「撤退だあ!!」

「化け物め! うあああ!!」

「ウアー!」

「ひい! 悪魔だあ!」

「嫌だ嫌だ嫌だ死にたくない!」

冷静を失って必死に不利な海の方へ逃げてしまう。

それでも兵士たちは逃走。

戦場に振り返る事は無く皆が慌て背を見せた。

∴

∴

さて、ボニーが軍を指揮する長を討ち取ったことにより北に攻め込んできた敵の戦線は崩壊した。

これによりグランゴルド撤退を余儀なくされたのだ。

ちなみに敗走する兵には手を加えてない。

まだ戦意ある兵がいるなら攻勢の手を緩めないつもりだったが、戦う者は一人もいなかった。

それから北の戦線を任されたランドノア兵は援軍のために師団の半分が南に移る。

そのかわりおさかな海賊団は戦線維持のために北の戦場に残るところになった。

とりあえず拠点に戻り、魔法で作られたテントの中に入りお昼ご飯をいただいているところだ。

戦争中も食べれるうちに食べないとな。

「しかし外洋の海を渡り歩いてる俺たちからしたらなんとというか、あまり大したことは無いな…」

「だから海軍は外海まで使える海の荒くれ者を探したんだろうねえ。強いと知ってるからな」

「そしたらそんな海軍は要注意団体のおさかな魚海賊団を運良く見つけてしまう。それから交渉をして連れてくれば一騎当千の価値だった話だな。こうなるとお手柄だな、海軍は」

「少し癪だねえ…」

「しかし海軍だけじゃない！ この活躍にておさかな海賊団の知名度もうなぎ登りじゃー！」

「そりゃ一師団を退かせた大戦果だからな、間違いなく英雄扱いになるだろう」

敵の主力である第1前線をいきなり崩したのだ。

北の戦線はグラランドノアが制圧したため、敵はこの攻略を苦労する事になる。

グランゴルド兵の式力も大変低下してる頃だろう。

「でも英雄扱いはフラッグだねー」

「だよね！フラッグのファンネルは見慣れたはずなのにまた驚かされたよー！

「お陰で敵の大將は取れたと言うものも、外海の嵐に負けぬ勢いじゃったぞ」

「すごい量でしたね」

「ふふふ、少し前までの新入りがまたまた強くなって。おねえさんそろそろ襲っちゃおうかしら？」

仲間に褒められるのは大変嬉しいけど、実は多量のファンネルを動かしたあと酸欠状態になっていた。

体に酸素が足りないため意識が飛ばされそうになったのは秘密にしておこう。

「とりあえずこの戦線は維持を続ける。5日間は防衛戦をするとき」

つまり5日間以内にルカさん御一行はこの戦争の根っこを取り除かないとダメということになる。

この一帯を制圧したとは言えこの戦線を永遠と維持できるとは思えない。

いずれこの防衛線を崩れてしまう。

そうはると次は殲滅戦へと展開することになり、グラントノアの人的資源は削られ続けてしまう泥沼と化して屍の山を築くことになる。

誰もそんなことは望まない話だ。

「しかし私たちは海賊であり海上戦が得意なのだから南の海は任せれば良いのに、何を考えておるのじゃ」

「お嬢、おそらくそこは海軍がやっているのでしょう」

「ぬぬぬ！ 解せぬのじゃ！」

エスタへ進む大陸には海が面しており、グランゴルドはそこからも侵略を開始していた。

だがそこは海軍が抑えてる状態であり、今のところ戦線は問題無きそうである。

もとよりグランゴルドはアリ娘や移動要塞のゴーレム系の大きなモン娘を中心とした地上戦が強い。

タツノコ兵と同じくらい練度は高い。

そのかわり海兵は数が少ないため海の戦いは大国の中で弱いらしく、グランゴルド側は南でそこそこ苦戦してるらしい。そのかわり北に力入れているが、こちらのファンネルが初見殺しと襲いかかり一軍目は撤退を余儀なくされた。とりあえずしばらくは大丈夫だろう。

「それよりこれからどうするのじゃ？」

「いま塹壕を掘っている。あと地上に特殊な水を撒いてるらしい」「特殊な水？」

「土属性の生き物は地上に撒かれた特殊な水に触れると本来の力の半分以下になる。アリ娘の触覚が力をなくし統率力が無くなる」

「お嬢、アリは触覚で会話を取ります。アリ娘もまた同じように触覚で会話を取り、情報を共有します。なのでその能力を奪い取るのです」

アリ娘は情報共有速度が高く、普通の軍よりも素早く戦術を展開できる。この能力を活かしながら多量の兵を稼働すれば陸軍として最高クラスの強さを引き出す。グランゴルドの強みはこの統率力だ。働き者で勤勉なもん娘なことも相まってタツノコ兵よりも人海戦術を上回る種族だと言われている。

だが情報共有を行う触覚の力を奪い取れば相手の戦力は半減する。そのため特殊な水を撒いているのだ。あとゴーレムなどのモン娘も特殊な水によって戦闘力を奪う。効果がないのは人間だけだがもん娘の力には勝てないので戦力としてそれほどあるとは思えない。

つまりこの戦線はほぼ此方のようなものである。敵もこれ以上の進軍は厳しいだろう。

「ねーねー、私たちはここから動くのかな？」

「それはないねー、おそらくー」

「ええ〜？　なんで？」

「手柄を取られるからー」

「なにそれー！　くだらなーいー！」

「リリツタとレリツタ、あまりその内容で大声出すな」

子分たちの何気ないいつもの会話。

一時的な平穏だが……まもなくそれは壊される。

「チガウ！」

「コレはこんなモノのためじゃない！！」

「ツ!？」

頭に何かの声が入り込む。

これ：は???

なんだ？　気持ち悪いツ…！

ガヤガヤガヤガヤ

「むう？　なんか外が騒がしいのじゃ」

するとこのテントに兵士がやってくる。

「伝令です！　グランゴルド王が現れました！　しかもこの戦線の近くまで!!」

「なんだと!？」

「まさか王自ら現れるとは！」
「これはヤバそうだねえ…」

「ダメだ、ダメだ！」

「コレはこんなモノのじゃナイ!!」

「ツ、ツツ」

な、なんだこの感覚は??

一体なんだ??

もしやグランゴールド王から伝わるモノか?

っ、気持ち悪いツツ!

「甲板長さん? 大丈夫?」

「あ、ああ、ルリツタ、大丈夫…」

「もしかしてファンネルの疲れですか? そりゃアレだけの量を放ちましたから…」

「それもあるけど、この感覚は防衛線の先から感じるんだ……っ、頭が気持ち悪い…」

不愉快な感覚だが俺は装備してるマキブを確認する。

「ボニー、俺たちも迎え討つぞ。ここを崩されたらまた戦線の引き直しだ」

「確かに、この場で待機は得策じゃ無いねえ」

「うむ! 皆の者! 行くぞ!」

出撃命令は出ていないがお魚海賊団は特攻して行った隊長の後を追いかけた。

名前「 フラッグ 」(真名：海ノ雪旗)

レベル「 53 」

熟練度「 69 」

この世界に来て「 76 」日が経過。

ここまでの冒険は

再び参戦する前に

日記帳に記録を残した▽

つづく

76日目　　エスタ周辺　その2

　　エスタ周辺　　
　　戦争中　　

「グランゴールド王よ、貴様はこのような形を望むのか？」

「隊長、躊躇なさらさないで下さい」

「そうです。今は我らの敵！」

「なら祖国のためにこの剣を振るうまで！」

「っ…いざ行かん！」

部下の声によって迷いを払った軍の隊長がグランゴールド王に接近して剣を振るう。

守りを捨てた特攻により一瞬で決着をつけようと考えて懐に潜り込んだ。

ザクツ！

守りを捨てた諸刃の剣は心臓を貫く。
人ならばこの瞬間で死に一直線だ。

だが、しかし…

歴戦勇猛なランドノアの兵隊長は手応えはない感覚に寒気を感じる。

「なに!？」

異常を感じた隊長は剣を刺したまま手放した。

後ろに退こうとしたが、グランゴールド王の拳には既に魔力が溜められていた。

「しまっ…!!」

襲いかかるのは『魔導王』と称された一撃…

隊長は死を覚悟した。

思い浮かべるのは今まで祖国のために忠誠を誓って戦ってきた人生。

部下や家族を置いてこの世を去ってしまうことになる。

その無念を残しながら目を閉ざそうとした…

…瞬間だった。

「!?」

放たれる魔導王の目の中に多数の緑色の浮遊物が集う。

まるで隊長を攻撃から守るように動き回る浮遊物は魔導王の一撃を受け止めた。

「間に合ったか!!?」

後方から聞こえるのは1人の青年の声。

青年の名はフラッグ。

彼はグランゴルド王と対立してるグランノアの隊長が命奪われる数秒前を視認すると真っ先にシールドビットを送った。

だが隊長を囲った直前に大爆発が起きた。

シールドビットによる防衛か爆風にて視認できない。

隊長は無事であるかわからない状況に緊張が走る。

「っ、くっ……な、なにが?」

「！」

爆風が晴れる。

隊長は地面に伏せながらも、生きていた。

「隊長!!」

「隊長っ!!」

「よかった！生きてる！」

まだ生きていることに喜ぶ部下たちをよそに真上を通過する一つの物体。

その上でフラッグが叫ぶ。

「お前ら下がれええ！」

青白いバーニアを吹かせながらグランゴルド王に突き進むドダイの上に立ちながら彼は叫ぶ。

その声により部下は戦場である緊張感を取り戻した。

「っ、またこの感覚だ……気分が悪いッ！」

グランゴルドが現れてからは脳内にナニカが呼びかける。

いや訴えていた。

あまりの気持ち悪さにフラッグはグランゴルド王に向かって不快な眼差しを浴びせながらドダイを蹴り飛ばす。

「くらえ！ ハモニカ砲!!」

横に避けた場合のことも考えてハモニカ砲の餌食にしようと撃ち放つ。

「!?」

しかしフラッグの脳にNT特有の電流が走った。
咄嗟にハモニカ砲を盾にした。

「くうっ！　このっ！」

ドダイを貫通する光属性の魔法がまっすぐと青年に撃ち放たれる。

ハモニカ砲で受け止めるがあまりの威力に爆発するハモニカ砲は大破してしまう。

「しまっ、ハモニカ砲が！」

爆発の火傷を負いながらも彼は飛び引く。

大爆発の根本からダメージを受けないようにするが、それでも膝を
ついてよろけてしまう。

彼はNTとしての強さを得てもそれは肉体的な強さではない。

人間の身として既に危ない状態に追い込まれていた。

だがもし彼がハモニカ砲で受け止めずに回避すれば光属性の魔法
は後方にいる者達に襲いかかるだろう。

その中には彼の愛する女性も含まれている。

そのため彼は回避を選ばずに防御を選んだが…

結果として大ダメージを受けてしまった。

「光魔法だけあって光のような速さだった。もしNTの感覚が無ければアレを避けられる者はいろのか？」

しかもアレはまだ簡易的な魔法だろう。

ドダイを破壊するだけの威力で放ったが貫通するほどだった。

もし演唱されていた完璧な魔法ならばどうなっていた??

一撃で討たれてしまう威力になるだろう。

「原作並みか、またはそれ以上か……」

フラッグは強敵と見なすと躊躇を捨ててビームマグナムを取り出す。

躊躇えばこっち殺されてしまうことを考えて重たいトリガーを引いた。

やや反動が激しいが、見た目通りの破壊力を保った紫色のビームマグナムはグランゴルド王に伸びる。

「！」

防御態勢に入ったグランゴルド王は目の前に魔法の障壁を張りめぐらせる。

しかし正面から襲いかかる紫の閃光は障壁を無慈悲に打ち砕いた。

障壁の破片と紫色の火花をその場に残しながらグランゴルド王を吹き飛ばされて地面を抉りながら大地の藻屑と化する。

ビームマグナムの暴力的な一撃を抑え込むことは叶わなかった。

「まだだ！ お前はここで落ちろ！」

魔法耐性を考慮したABCマントを羽織りながらビームマグナムは地面に投げ捨ててビームザンパーを右手に掴んで地面を蹴って突貫する。エクバ最高ランクのBD格闘の動きでグランゴルド王を狙った。ビームザンパーとグランゴルド王の距離が一気に詰まる。

しかしグランゴルド王はダメージを負いながらもぎこちなく手を地面に突っ込むと魔法を射ち放ってなにかを施した。そのことに

気づかないフラッグは突貫を続けてしまう。魔法系なら決まって脆いはず！ 焦りから生まれるセオリー通りの動き。

しかしコレがダメだった。

フラッグの足元に魔法陣が展開される。

「なっ!？」

ビームマグナムで気絶寸前まで追い込んだと確信していた。

だが相手は魔導王。

そこらにいる人間と血脈が一味違う王族だ。

ビームマグナム”如き”では倒れなかった。

「(足元に魔法陣!?! これは!?!?)」

またフラッグはHPが半分以上減ったことで固有スキルの”NTの感”が発揮されなかった。

展開されていた魔法陣は目視する事でやっとそれが仕掛けられていた事を悟る。

これを防ぐことは不可能だろう。

「(間に合わない!!)」

避けることも防ぐこともできない。

そう思考が追いついた時には大地は光輝いた。

轟音と共に光の柱が真下から大魔法が貫いた。

「”フラッググッツ!?!”」

地上で動くことには慣れないマーメイド達はやっこの思いで追いついた。

フラッグの生存を確認した瞬間だった。

光の柱が彼を包み込む。

全てを浄化しそうな一撃は人間どころか軟弱なもん娘であれば簡単に消し去りそうな魔法に

彼は無事ではない：

「う、うそだ…」

「そんな！ そんなことは!？」

「甲板長!!」

大魔法並みの攻撃に対する恐怖と驚きもあるが、何よりも仲間として常に支えてきてくれた存在が消えてしまう。

その光景に体は硬直し、震え、武器を落としてしまう。

だけど…

彼はただでは終わらない。

それを知る二人は…

アシエルとボニーは彼の名を叫んだ。

「フラッグツツー!!!」

その声に応えるかのように光の柱の中央で紫色のオーラが爆発する。

そのオーラはグランゴルド王を覆い尽くした。

「ナン、ダ!!?」

紫色の妖しいオーラは『プレッシャー』と呼ばれる特殊な光だ。それに飲まれると体が強制的に硬直する。

だがそんなのは些細な問題だ。

グランゴルド王は光の柱の中からプレッシャーを解き放つ正体に
対して視線を離せなかった。

「分かった……！ 分かったよ！ この気持ち悪い感覚が!!」

「!」

「お前の”血脈”がそう訴えるのだろうか!? NTだから聞こえて仕
方ないんだよ!!」

光の柱から声が聞こえる。

まるでエコーをかけたかのような声が響く。

脳の中にも直接響き渡る声にグランゴルドは目を見開く。

プレッシャーは更に強まった。

「止めてやるよ！ そんなに俺に訴えるなら止めてやるさ!!」

紫色のオーラは光の柱を撃ち払う。

魔法陣も消え去った。

フラッグの手元に紫色のオーラが集まる。

だがその紫色のオーラはだんだんと緑色に変化して手の中で暴れ
る。

「……！ ウ、うぐ、ケ、ない」

いや、本当はこのプレッシャーを押しつけて硬直を強引に解除でき
る。

彼は魔導王と評される力を備えているから。

でもそこから動くことはできなかった。

青年の怒りを感じる。

彼から強い『憤り』を感じる。

それは血脈ヒトが目を離せなかった。

何せそれは『理解』にも見えたから。

だから…

グランゴルド王は回避を選ばなかった。

「目を覚ませエエエえ!!」

「!!」

手元から放たれる光はNTの具現化。

それはまるで 鳥 の様に羽ばたく光。

ガンダムナラNTテイの力がグランゴルド王を貫いた。

◇

お前も鳥にしてやる!!…って、気持ちは無くて、純粹に解放してやろうと思った。

しかし…

「当たった瞬間に逃げたか…」

グランゴルド王の事を考える。

彼は原作だと人を超えた「ヒト」と言われる古い血脈を持っている人物だ。

言わばこの世の超越者である。

あの人が魔導王なのもそう言う事だ。

「…」

だから俺にだけ訴えかけて辛かった。

でもなぜかは理解はできる。

ニュータイプとして精神的強さに目覚めた俺だからこそ、グランゴルド王の中に受け継がれている『血脈』に呼びかけられたのだ。または似たもの同士だからだろう。ヒトもニュータイプも人類の進化と超越から来ている。精神を超えた者同士だけが許される『理解』だからこそ意思が繋がり合った。

だから嫌でも聞こえてしまった。

でもそれは仕方ない。

原作通りニュータイプは声を良く拾う。

それが神話に生きた最古種のヒトの声だとしたらそれに近いし俺が真っ先に拾ってしまったまでの話。

「ぐっ……………体が…」

痛くて痛くて動かない。

でも死ななかった。

だって”根性補正”って奴が効いたからだろう。

「フラッグー！」

「ああ、ボニー、ごめん…おれ、なんか、放ったおけなく…て…」

「それは今は良いのじゃ！ とりあえず生きていて良かったのじゃ
！」

ああ…また泣かせてしまった。

最悪だな俺。

こんなんじやニュータイプなんて意味ないじゃないか…
泣かしてしまったら、意味ないだろ。

つづく

80日目　　～　おさかな海賊団　　e n d

～ グランドノア　～
～ 夜　～

反攻作戦は成功に終わり、グランドノアの宴で祝うことになった。俺はグランゴルド王と戦ったあと疲労により深く眠りについてそのまま2日間が経過していたようだ。　ニュータイプの力を発動しすぎた体は相当無理していたようだ。　目を覚ました頃には戦争も終わっていたが、ボニーとアシエルから軽く説教を受けてしまう。　ただ俺の動機やらを説明すると理解はしてくれた。

そのかわり二人揃って「夜は覚悟しろよ」と宣告を受けてしまう。

夜は倍になるな…耐えられるか？

いや、存分に溺れてしまいたい気分だ。

俺も喜んで快樂に狂おう。

さてルカさん御一行の活躍によって戦争は集結、戦後処理が行われると無事に終戦協定が結ばれた。　その中で戦争仕掛けてきたグランゴルドは『操られていた』という事で罪は軽くなった。　だが命を失った者もあり、この傷は癒えるまで時間を費やすことになるのは確かである。

悲しいけど、それが戦争なのよね。

さて、大戦が終われば始まるのは宴の始まり。

俺達おさかな海賊団も参加していた。

「肉だー!」

「魚だー!」

「犬だー!」

「え？ い、犬??」

「犬の形をしたゼリーだぜ、フラッグ」

「なんとも器用な事を…」

「あ、あおーん……」

いぬ娘が悲鳴と共に盛り上がっている。

そんな宴の中で俺は懐かしき顔と出くわした。

「え？ あんたもしや…アリスか？」

「もぐもぐ、フラッグか、もぐもぐ」

「まさかこの戦争に参加してたとはな…」

「いや、もぐもぐ、捕まって、もぐもぐ、いたのだ、もぐもぐ、もぐもぐ」

「ああ、そうなのね。 てかゆっくり食えよ」

「捕まってる間、もぐもぐ、なんにも食べれなかったから、もぐもぐ、もぐもぐ、我慢ならん、もぐもぐ」

「あ、うん、わかった。 とりあえず邪魔しないからゆっくり沢山食べてください」

「バリバリ、パリン、ブチツ、くつちやくつちや」

一体いま何を食べたんだ？

まさか皿ごといったのか？

どんだけ飢えているんだよ。

「あ、ちよつといいかな？」

「？」

アリスは放っておいてお魚海賊団の元へ戻る途中、とある人が訪ねてきた。

それは人間なんだけど人間の形では無い異形の存在が俺に接触してきた。

「あなたは…たしか」

「あ、あまり警戒しないでくれたら嬉しいかな？ 僕としてはこの姿は困りモノの一つでね」

「はい、わかりました。それはともかくグランゴルド王、どうかなさいましたか？」

そう、俺に話しかけてきたのはこの戦争の元凶と言える”グランゴルド王”だった。

随分とイメチェンされていらっしやる。

「君に少し用があるのだ。あと、ぼくたちそこまで年齢は離れて無はずだから普通に話してくれたら僕としては嬉しいかな？ 今は王と関係なしに…ダメ？」

「しゃーねーな王様、これでええやろ」

「切り替え速すぎないか!？」

「まあ丁寧な口調は疲れるし変に気を使わないでいいならそうする

さ。それで何か用とは？」

「ああ、君に一つお礼を言いたくて」

「お礼？」

「僕は操られて自我は無かったけど、君が僕に刃を向けてくれたことは覚えてる。そして君の活躍もあり、僕が自分自身の手でグラン・ドノアの兵を葬らずに済んだことも含めて君に感謝してる」

「ああ、なるほど。いや、気にするな。それに俺が気になったのは王様よりもその中にいる”ナニカ”だったから。止めて欲しいと言われて止めたただだよ」

「!?……わかるのかい？」

「ああ、俺も精神的には王様と似た様な感じだからな」

「そっか。だとしたらそこに君が居てよかった。いつかお礼をさせて欲しい。あ、それと名前は聞いて良いかな？」

「俺はフラッグ、おさかな海賊団の甲板長だ。この恩は高くつくぞ？」

「復興が終わってからで良いならなんでもお応えしよう。出来ることに限るけど」

「それでも俺たちはあくまで雇われに過ぎない。まずは国民を第一にな？　王様」

「ルカ、あなたはあの青年とはあまり接触しないように」

「イリアス様？」

「あの青年もソニアと同じように私の記憶の中にいない人物です。

更に天使が持つ聖素の香りがほんのりと漂っています……」

「!?」

「更に言えば人の体で別の次元へ踏み込んだ異様性を感じています。

人間だけど、人間以上のナニカを感じてたまりません。表現し難い

ですが、アレは何というか重力から浮いてるような感じですよ。また

は縛られないと言うべきか……」

「(ええ、その感じはするわね……)」

「ウンディーネ？」

「(ルカ、水の精霊として伝えるわ。あの者はあなたとはまた違う次

元を踏み込み、並ならぬ精神を超えている。もし彼と接触するなら

賢く立ち回りなさい、いいね?)」

「わ、わかった……」

それから宴の盛り上がりは中盤まで差し掛かったが、魔法によつて突然映像が流れる。

映像に現れたのはアリスフーズ15世だ。

この宴の中で『絶滅戦争』の宣戦布告を受けた。

これにより大国は大騒ぎになる。

おさかな海賊団もこれ以上の面倒ごとを避けようと考えたが、グラ

ンドノアはさりげなくおさかな海賊団を軍の一部に加えていた。

普通に逃げ遅れた。

ボニーは気持ちを切り替えてもつと恩を売ろうと言ってそのまま参戦を続行することになった。

だが一晚経過しても魔王軍の侵攻は見られない。

肩透かしを受けながらも、こちらの戦力を消費しないことを考える
と何事もなくてよかった解答に至る。

さて、そんなことより俺たちおさかな海賊団も傭兵としての契約期限が切れたためグランドノアを去る事になった。グランドノアか

らは盛大な感謝を受けた。　どうやら北の戦線の活躍は王女の耳に届いており、北の戦線を指揮する総隊長から報告を受けたらしい。

義賊としての名はこれで盛大に広まったのでボニーも大変満足していた。　ヨシ！

特に俺に対する評価はとても高い。

王女はできれば軍の一部に加えたいと言っていた。

高い地位と好待遇を約束するなど、色々と甘い話が飛んだが……

まあ　当然、俺は断った。

俺は海賊であり、組織の甲板長だ。

生涯の全てをおさかな海賊団に注ぐと誓ったのだ。
なのでそれを伝えてお誘いを断った。

報酬だけを受け取った。

さて、報酬の中身を確認したい気持ちを抑えて船に持ち帰ることを考える。

団長の命令で、中身の確認はお楽しみらしい。

「あー！　マーメイドの海賊団よー！」

「スゴイ!!」

「こつちみてー!!」

「おっぱいぶるんぶるんー！」

おさかな海賊団の活躍を知る住民から声援を浴びた。　今回の反攻作戦の功労者と言うことでそれなりに有名である。　ボニーはフンスー！と満足気に手を振り返し、アシェルもどこか楽しそうに手を振っていた。　俺も仲間と共に手を振って応える。　するとその中に……

「フラッグ、数日ぶりだな」

「シヨウキか！ お帰り。このまま合流か？」

「ああ。 サバサでの役割は終えた。 これからまたよろしく頼む」

戦争中の彼女はサバサの軍に加わり反攻作戦に参加した。 任されたのは南の戦線であり彼女は敵の捕獲を担当していた。 アサシン一族だけあつて夜闇に駆ける力は凄まじく、夜戦部隊に加わって活躍した。 それから反攻作戦が終了するとサバサに戻って状況整理を行つてある程度手伝うと解放されたようだ。

「よし、皆のも揃つたな！ それでは帰ろう！ 我らのおさかな号に！」

「「おー!!」」

街の中央でハーピーの羽が空に伸びる。

国民たちのお見送りと共におさかな海賊団は去つた。

◇

さて、おさかな号に到着してからはすぐに船を出して海に出る。

俺は早速報酬を確認しているところだ。

「フラッグ、何をしておる？」

「シヨウキか。 いや、渡された報酬の中身に入ってたマキブを確かめてる」

「ふむ、確かそれはグラントノアからだったな…む？ その『設計図』は何だ？」

「これか？ 立派なマキブの一部だよ」

「??…ああ、なるほど。 その設計図からマキブを作り上げるのか」

「いや違う。 この一枚の設計図だけでマキブだ」

「??…もしやこれでペチペチ叩いて攻撃するつもりか？」

「細長く丸めて叩けば痛そうだけど、残念ながらハズレだ。 これは ”ヘルメスの薔薇” と言われる設計図であり、G系統のMSに使われる『全ての換装兵器』を引き出すことができるマキブだ」

「全ての換装??」

「見たほうが早いな」

俺は設計図を両手に持って、とある換装の装備をイメージする。今は戦う状態じゃないから攻撃しない兵器を使うことにした。

「『リフレクターパック』!!」

俺の背中には分裂したリフレクターの羽が展開される。

大きな蝶の羽のように形作った。
しかし横幅を取るから動かし辛い。
さらに風の抵抗を受けるから少し踏ん張らなければならない。

「このリフレクターパックは魔法のダメージを防ぐどころそれをエネルギーに変換してしまう」

「なんと！ ABCマントよりも高い性能じゃないか！」

「まあな。 後方支援するにあたってこのリフレクターパックは破格の性能だ。 でもな、これはまだ断片に過ぎない。 もっともつとヤバイモノがこのヘルメスの薔薇の設計図に詰め込まれてる。 お陰で他がいらなくなるくらいになる」

「……と、言うとは？」

「エクバの職業が最上位クラスになればヘルメスの薔薇の設計図だけあれば充分なんだ。 冗談抜きに他はいらなくなるくらい。 そのヤバイマキブだよコイツは」

流石、大国が保管していただけある。

今までは剣でビームサーベルを引き出し、銃でビームライフル、大筒でヴェスバーのように限られていた。 だがヘルメスの薔薇の設計図が一つあるだけ『Gセルフ』の換装武器が全て扱ってしまうのだ。 グランドノアはとんでもない代物を持っていたんだな。 しかもこれ一枚で『パーフェクトパック』まで使えるとなると……

普通にチートじゃねーか。
たまげたなあ。

だけどここのマキブと俺の巡り合わせはどこか運命を感じる。

今のグランドノアを含んだグランゴルドなどの大国は戦争で荒れ

たものを修復するために国土回復レコンギスタを行っているのだ。

国土回復のために奮闘する国から貰い受けたのは『レコンギスタ』のマキブだ。

そのような意味を持って俺の目の前に現れてくれたようだ。

ブラハムが喜びそうなロマン話だな。

「大事にしよう。 国のためにおさに海賊団が戦った証となるからな」

俺はリフレクターパックを解除した。

重たい兵器から解放されると俺は背筋をグイッと伸ばし、首をポキポキと鳴らす。

その隣ではシヨウキがタルの上に座って夕日を眺めていた。

「やはり海はいいなあ。 眺めの良さもだけど、どれだけ自分が未熟者なのか充分に知らしめてくれるから」

「そうだな…」

適当に置いてある木箱の中から果実を取り出し、シヨウキの目の前に差し出す。

するとシヨウキは懐から短剣を取り出して一閃。

果実は半分に裂けた。

「ところで、これからおさかな海賊団はどこを目的地に向かう?」

「んー、そこはボニーの気の向くままにだな」

「そうか。 まあどこであれ、私もお供させてもらう」

「ああ。 ならこれからもよろしくな、シヨウキ」

「うむ」

お互い、半分にされた果実に食らいつく。

夕日の日差しを浴びながら潮風を味付けにこの味を楽しんだ。

◇

く おさかな号 く
く 夕方 く

「よお、エヴァ。 勉強中か？」

「まあね。 海賊として必要な知識は多いからね。 いま因数分解つてやらを勉強中よ」

「マジで航海士にでもなるつもりか？」

「私はそこまで戦闘力があるわけじゃないから。 なら裏方で活躍できる能力は必要でしょ？」

「それは周りの海賊マーメイドが強いだけでエヴァは大丈夫だよ」

「それでもこの組織にいるならもう脳筋な戦闘兵はいらないでしょ？
あなたも前衛じゃなくて後方支援を頑張るように、自分に見合った立ち位置を決めたじゃない」

「まあそうだけどさ。 でも航海士は本当に難しいぞ？ 暗算で因数分解と2次方程式ができないとダメなくらいだ。 あと勉強嫌いならなおさらな」

「たしかに、知識的問題は個人差によるわ。私も勉強はそこまで好きじゃないけど、お宝を求めるためには努力くらいするわよ。だけど私が航海士になろうと思ったのは私がサキュバスだからよ」

「…と、言いますと?」

「サキュバスは風の属性をうまく操ることができる。更に”自然感応”のスキルを使えるサキュバスだからね自然の変化を捉えるのは得意のよ。これのお陰でどこから嵐が来るとか感知できるわ」

「たしかに必要な能力は揃ってる。理にかなってるな」

「そういうことよ。面倒な料理洗濯なんかよりもこつちをやってる方がまだ楽だわ」

「ぶつちやけそれが本音だろ」

「ふふ、まあね」

「でもそれだけハングリー精神あるならそのうちこの海賊団を自立して自分で海賊団を作れそうだな」

「……自立?」

「うん。自分の海賊団を作るんだ」

「……自分、だけのねえ……」

「俺はこの海賊団に骨を埋める定めだけど、エヴァは自分だけの組織を作りたいならこの船で充分に力を蓄えて、その内この船を飛び出して行けば良いんじゃないか?」

それだけ言うとか何かを考え出したエヴァ。

あまり長続きしない性格してるけど、お魚海賊団に来てからは結構努力してる姿が見られるのだ。

もしかしたら彼女は海賊業の環境が肌にあってるのかもしれない。

でもフラツと止めるかもしれない。

そのくらいエヴァはいい加減なんだ。

「…それは無いね」

「おや？」

「だって自立するにもまずお金でしょ？ あと部下でしょ？ それから船でしょ？ 他にももつと知識も必要だわ。それに私が飛び出そうとした頃にはおさかな海賊団が全てお宝見つけてるかもしれないじゃ無い。 そうなるとなんか面倒だわ」

「そうなりますか」

「将来見えてるだけ有望じゃない。 でも…」

「？」

「この海賊団は居心地良いから私は抜け出そうとは思わないわよ」

「……その心は？」

「三食昼寝付き」

「感動返せ」

「そんなの昨日の夜に寝ているあなたからちよろまかしてしまったわ。 ぐちそうさん、美味しかったわよ」

「は!?! いや、嘘だろ?? だって昨日の夜はアシエルがべったりだったぞ!?!」

「下級とは言えわたしはサキユバスよ? 数分あれば余裕よ」

「…やはりあんた盗賊業向いてるわ」

どこかサキユバスらしくないエヴァに呆れながら俺は去る。

そうするとエヴァは再び勉強を開始した。

やはり原作同様どこか変な奴だな。

◇

く おさかな号個室
く
夜中
く

「マキブも随分と揃ったな」

「うむ! フラッグの努力じゃな!」

俺はベッドの上に座り、ボニーはその隣に座って肩に身を寄せる。

彼女の肌を感じながら袋を逆さに向けてジャラジャラとマキブを落とす。

手のひらに収まる小さなアクセサリー達の数も随分と多かった。

そりやこの世界に来て2ヶ月以上が経過してるのだ。

それなりの数が集まるに決まってる。

しかしその中でやはり”ヘルメスの薔薇の設計図”が一番凄いと思う。

これ一つで『Gセルフ』が使う換装兵器を引き出すことができるのだ。

まあ大国が所持してたマキブだ。

ブラハムから貰うよりはランクが高いのだろう。

しかしそうなるならブラハムがブラを集めさせる交換も一つのイベントだとすると、グランゴルドに対する反攻作戦も俺のストーリーに仕組まれたイベントの一つなんだろうか？

それはあり得る。

この世界はゲームだから『海ノ幸旗の物語』って感じにプレイヤーのためにワクワクとやりこみ要素を提供するイベントとして反攻作戦に参加する流れが現れたのだろう。

もしかしたらボニーが反攻作戦の参加で…

海軍の話に乗りますか？

はい

はいいえ

…を、選んだ世界線もあるのかもしれない。

例えばそうだな。

フラグを立てなくて断るとか、好感度が足りなかった場合とか、ゲームに良くある分岐点って感じだろう。

そう思つて隣の彼女をみる。

「…フラッグ？」

「んー？ どうした？」

「何を見つめておる？ 少し恥ずかしいぞ」

「いや、可愛かったから」

「な、なんだ、変な奴だな。 平気でそんなことを言うな……」

たしかにこの世界はゲームから生まれた世界だ。

しかし海を渡る時に感じる潮風、そしてマーメイド達の呼吸、それは紛れもなく本物だ。

それはゲームシステムなんかじゃない。

ちゃんと生きている。

いま真横で生きている。

ゲームの画面越しなら一マス、一マスと決められた世界だけど、コはそうじゃない。

旅をしていれば迫り来る害悪は何度でも俺たちを死の境目の誘う。

肌を傷つけば血は流れるし、魔性の快楽を与えられた身を委ねてし

まいそこで旅が終わってしまう危険な世界だ。

でもそれは生物だから正常である。

だから決して目の前にいる彼女はシステムなんかじゃないんだから。

ちゃんと生きてくれている。

「ボニー、俺はこの海賊団に来て2ヶ月近くが経過した。 来た当時

「よりも少しは強くなれただろうか？」

俺はマキブを整理しながらこの2ヶ月を打ち明ける。
船長の帽子を外してるボニーは自分の髪を梳かしながら答えた。

「何を言っておる。滅茶苦茶強くなったと思うぞ。そしてとても良くやっているとと思うのじゃ」

「そうか、それは良かった」

「しかし多分お主はこの海賊団に來なくとも強くなっておると思う。フラッグはそう言う人じゃ。マキブの力は反則的であるが、それでもそれらを使い熟すお主は努力家だ。時間があれば何度でも試行錯誤繰り返し、何度もイメージトレーニングを行っておる。イメージトレーニングのせいで料理を焦がす時があったな」

「そこはアシエルから怒られたので料理の時は料理を集中するようにしてる」

「でもそれはお主が我らに遅れを取らないようにしたい劣等感から来ておった。種族的弱さに悩ましながらな…」

「人間と言う種族をどうにかすることはできない。だから都合よく手元にあるマキブ達でそれを埋めるしか俺には方法がなかった。だから俺は…」

「我は分かっている。我は知ってるのじゃ。海外へ抜け出して喜ぶ我達を他所に、お主はこれまでにない程緊張していた。不安に目を濁らせていた表情を我は見ておった」

「内海はなんとかやって來れた。比較的穏やかな海だから俺は遅れ

を取らなかつた。でも外海はこれまでの強さを全否定してしまう。
その世界に踏み出した時、地上で生まれた人間の俺はこの海の上で
ついて来れるのか？ その不安しかなかった…」

今は人間の殻を破り、スノーヘブンで文句なしの強さを手に入れ
た。

だけど過去に感じた劣等感は消えることない。

その時の感情を思い出して少し辛そうな表情をボニーに見せてし
まう。

「フラッグ…」

ボニーは後ろから抱きしめる。

たわわ実った胸は背中に柔らかく感じる。

それでも彼女の抱擁はとても落ち着く。

「フラッグ、我らお魚海賊団はお主を見捨てぬ。種族的弱さに苦し
んでもお主の存在はお魚海賊団にとって必要不可欠だ」

こちらの頭を撫で、彼女は慰めてくれる。

「それにアシエルは言っておった、海賊業は戦いが全てではないとな。

お主はおさかな号が潰れぬように管理してくれる重要な役目を背
負ってくれた。だから皆と戦えぬだけで劣等感に溺れる必要は無
い」

「だな……そう何度も言ってくれたな、ボニーは」

「うむ。だがもうそれは気にしなくとも良いだろ。だがお主はい
つのまにか人間の弱さを克服してた。…本当にお主は何度も我ら
を驚かせては心配させてくれる。特にマンタ娘との一騎打ちに関

してはな」

「アレはそうしなければおさかな号潰れてかもしれなくて…」

「分かっておる。でもフラツと朽ちそうで怖かった。その時のお主はまだ…怖かったのだから」

『弱かった』とは言わない。

だが『怖かった』と言う。

大事にされている証拠だろう。

それは嬉しい話だ。

けど男として情け無さは見せれなかった。

俺もお前らのように戦えるのだと、マンタ娘の一騎打ちをチャンスにして見せつけたかった。

結局ゼロシステムに頼ってしまい無茶した結果に終わった。

片腕もひどくやられて包帯巻いた。

しかも一度戦っただけであのザマだ。

旅すれば当然のようにモン娘は何度も何度も襲いかかる。

無慈悲に連戦する世界だ。

だからあそこまで怪我を負ったのは複雑だった。

なのにボニー達は何度も戦って生き延びている。

俺はボニー達のように何度も戦っていけるのだろうか？

それは分からないけど限界は必ず来るのは理解済みである。

俺自身弁える必要が出てきた。

だからマンタ娘の一騎打ちがピークだと思った。

半分諦めそうになった。

でもそれは…

マンタ娘の言葉で少し変えられた。

励まされ、強者から褒めてもらった。

そして色々と教えてくれた。

種族的弱さからくる劣等感に追い詰められるなど告げてくれた。

だから自分の心に少しだけ余裕ができた。

まあ、そのあとスノウヘブンで秘められた能力を開花したから良かったけどあの時のマンタ娘には感謝している。

「ボニー、君には心配させすぎた。でも俺ってこんな性格だからさ……」

「分かっておる。お主はほんの少し問題児だが嫌いじゃない。むしろ考え続け、悩み続け、思考を放棄しない姿勢、とても大事な力じゃ」

「ありがとう、ボニー」

どんな時もボニーによって俺の不安はこうして拭われる。

だから外海でも元気に振る舞えたのだろう。

まったく、男として俺は情けない……

でも……

彼女は俺より強い生き物だ。

だからそんな彼女に寄り添うのは悪く無いことだよな？

「フラッグ、こっちを見るのじゃ」

「……」

すると甘えた声で俺の顔を振り向かせる。

俺の名を呼んだ彼女の瞳は海のように神秘的だ。

彼女の金色の髪の毛は綺麗な浜辺のように綺麗だ。いつまでも触れて指の間に通したい。

尾鰭を見る。

彼女のピンク色が美しい。

激しい戦いを生き抜いてきた強い腕だけどどこか可憐だ。

なにやりも強烈に実った二つの胸は実に柔らかそうだ。そんな欲張りボディを持つてる彼女に愛され、そして甘えられ、そしてコチラも愛して甘えることができる。なんてしあわせな事なのだろう。このマーメイドと出会えたことに俺は感謝しかなかった。

「フラッグ……」

「…ボニー」

名を読んで唇を食る。

だんだんと呼吸が苦しくなる。

少し乱暴だけどモン娘の貪欲の証。

痺れるような快樂。

とても甘くて気持ちが良い。

「フラッグ、これからも我を愛してくれ……」

「…ああ」

彼女の願いに答えると机に置かれたランプを消した。

月明かりだけが部屋の中に差し込む。

彼女の尾ビレと髪の毛は幻想的に光を吸収していた。

衣類を脱がしてその肌を晒す。

その姿はとても綺麗であった。

ツ…………ああ……………!

「我慢せずとも良い。わたしにフラッグの欲望をぶつけて欲しい……………いっぱい満たして」

「ツ———!!!」

理性は砕けた。

互いに理性と我慢を忘れて肌を重ね合う。

マーメイドの船長と愛を確かめ合う。

今宵も深海より深く、溶け込みあつた…

◇

く おさかな号 く
く キッチン く

「…………あれ、もしかして塩切らしそうになってる?」

おはようございます、フラッグです。

外の見張りを除いてまだみんな寝ています。

何故ならまだあさ5時くらいだろう。

とりあえず目が覚めた。

早起きの原因はボニーと行為を終えてスッキリしてるせいだと思う。

彼女は本当に…

柔らかいというか…

包まれるというか…

ほぐされるというか…

攻め立てないから…

…その、なんだろう？

あまり疲れ過ぎない。

「おはようフラッグ、朝チユンだな」

「朝チユンいなし」

どうやらアシエルもこの時間に起きた様だ。

「てかアシエル早いな？ いつも早いけど今日は特に早いな」

「包丁の音が聞こえたからな、起きてしまった」

「そりゃ失礼」

「それで、何を作ってるんだい？」

「ハムサンド」

「こりやうまそうだ」

俺は料理と両立させながらコーヒーを二人分淹れてアシエルに一つ渡した。

「ありがとうよ」

俺も一旦朝ごはん作りの手を止めると椅子に座ってゆっくりとコーヒーを味わう。

うん、あまり美味しいとは言えない。

まあこの苦さが朝に丁度いいと思いついて半分くらい飲んだ。

「ここから見えるナタリアポートは綺麗だな」

「そうだな」

キッチンの取り付けられた窓を開け、外を眺めるとナタリアポートが見える。

まだ活気は無いが、朝日に照らされ始める人魚と人間の街は綺麗に彩る。

「内海の潮風は気持ちいいな。　　なんだが少し懐かしいや」

「そりやしばらく外海で活動していたんだ。　　乱暴な潮風ばかりで心の底から落ち着ける時間なんか短すぎる」

「それな。　　だからもうしばらく内海を漂わない？　　荒んだ肌と心を穏やかな潮風に乗せて休めたい」

「船長が了承したら構わないと思うぜ」

「よし、あとでハムサンドで交渉だ」

「やれやれ、餌付けか…」

俺は有りつ丈のハムサンドとほかのサンドイッチも作り上げた。

アシエルにも手伝ってもらい6時前には完成した。
子分らはあと30分は起きないだろう。
あまり放置しているとパンが乾燥するので布を被せて隠した。

「なあ、フラッグ。私はフラッグに隠し事があるんだ？」

「どうした唐突に？」

「いや、何度か言おうと思ったが何度も先送りにしてな？ それでなかなか言えなかった事があるんだ」

「先送り？」

「ああ、そうだ」

どこか突然真面目な雰囲気を漂わせる。

「フラッグ、あんたは覚えてるか？ 私達と初めて出会い、そしてボニーを大爆発から守りために飛び出した事を…」

「覚えてるぞ。そのあと全身大火傷だっけ？」

「ああ、そうだ。それでな、その大火傷は手当てするだけじゃ治らない程に酷かった。だから私は一つとある方法で治療したんだが………そ、それは――」

「マーメイドの血でも飲ませたんだろ？」

「!?!?」

俺の答えにアシエルは驚きを隠せない。
カップからコーヒーを零しそうになっていた。

「まあそんなことだろうと思ったよ」

「…なんでそうだと思った？」

「まず至近距離での爆発を受けて全身大火傷を負ったら普通は10日以内で治るわけがない。もし物凄く効く薬を使われたなら大火傷もすぐに治ると思うが当時のおさかな海賊団にはそんな薬は無かった」

「…」

「だから俺はもう一つの回答に至った。人はマーメイドの血液を飲むと治癒力を高める。それは命を救う程だと聞いた事がある。でもそれって血統も関係してただのマーメイドじゃ効果は薄い。でも大海賊王ロザの子孫を自称するボニーならほかのマーメイドより格段に上だ。そうなる全身大火傷を治せるほどの血液じゃないかと考えた」

「そう…か」

「だから俺はボニーの血液で救われたと勝手に考えたよ。あとは大火傷から目覚めた時に口の中で鉄分の香りがした。生臭いとは言わないけど人間よりも濃い血液の味。ならば誰かの飲まされたのかなってね？　そこから辺まで考えたよ」

「…ああ、全くその通りだ。私はフラッグを救うためにお嬢から血液を絞らせて薬に混ぜたんだ。それをフラッグに飲ませた」

「なるほど、そりゃ効果覲面だな。お陰で元気溢れたよ」

「……なあ、フラッグ。私はお前を救うためにお嬢の血液を…その、マーメイドの血を勝手に飲ませたんだ。後遺症も出るかもしれないのに」

「アシエル、気にしないで。俺はそうしてくれたお陰で助かったんだぞ？　こうして元気に生きてる。だから感謝してるさ」

「……」

「それに後遺症と言っても悪いことは起きてないぞ？　むしろ人魚の血が混じっているお陰で『人魚のお守り』を使うと海の上に立つ事ができた。これはマーメイドの血液が混じってるからだな。あと他を言えば初対面のリヴァイアサンから片腕やられて凍結したことも覚えてるか？」

「ああ」

「凍傷に関してはミンクが薬を腕に塗り込んだ。しかしその薬ってマーメイドが火傷負った時に使われる塗り薬だった。それは俺に對しても効果覲面ですぐに治ったんだよ。何故ならマーメイドの血液が混じってるからだ。お陰で片腕の負傷に長く苦しむことは無かった」

「…」

「どうやら俺の体は周りの人間よりも治癒力が高くなってるようで厳しい航海も耐える事ができる。ドーピングされたとは言わないが俺はボニーの血液が混じってることで大いに助かってるんだ。だから俺はアシエルの処置を責めやしない。むしろ…感謝して

る方だな」

「っ……は、はは、そっか。 そうなのか……全く、やれやれ。 お前はそういう奴だったな……」

「おいおいなんだよ？ 元々知ってると思ってたけどまだアシエルは俺に対する理解度が低いようだな。 ……あれ？ そうなると俺って周りの人間よりも長生きすることになるのか？！」

「え？ ああ……どうかはわからないねえ」

「もしそうなら俺は100年程度で老いることも無いってことか？ やったじゃん」

「おいおい、そういう思考かい？」

「どうだほ？ でもそれはそれで良かったと思うよ。 だってマーマイドは人間よりも長生きだから。 そうなると俺は先に死んでしまおうかと思ってたけど反則的なやり方で長生きできるらしい。 そりゃ結構だな。 あっはっはっは、！」

「やれやれ、半分人間やめそうになってるのに呑気な奴だな……」

「何言ってるんだアシエル？ 俺はNTとしてある意味人間やめてんだぞ？ 今頃だな」

「……ひとつだけ訂正。 お前はどうしようもなくバカだな」

「そんな男を好きになったアシエルもアシエルだけだな」

「やれやれ、言わせておけば……全く……」

そう言うとアシエルは俺の顔を引き寄せた唇を奪う。
お互いにコーヒーの苦い味が混ざり合う。
苦いけど、甘い口づけとなる。

「アシエル…」

「なんだ？」

「これからもよろしくな」

俺はアシエルを抱き寄せてニコリと表情を見せる。
それを見たアシエルも…

「ああ、これからもよろしく頼むぜ！ みんなの甲板長」

飛び切りの笑顔を見せてくれた。

…

…

俺はおさかな号の乗組員として日々奮闘する。

たまに地上での生活も恋しくなるが俺はボニーやアシエル達が行く先を見たくてこの海賊団には寄り添う。

それはこれからも変わらず、マキブを集めながらいつまでも愉快的な彼女たちと航海を続けるだろう。

俺の名は 海ノ 幸旗 (うみの ゆきはた)

海 の 世界で旅する お魚海賊団 の
幸せな 旗(フラッグ)です。

ここまでの 冒険 を 記録 に 残しますか?▽

→はい

いいえ

名前「 フラッグ 」(真名：海ノ雪旗)

レベル「 55 」

熟練度「 70 」

この世界に来て 「 80 」 日が経過。

ここまでの冒険は

愛用してる日記帳に記録を残しました▽

【もんむす・くえすとーばらどつくすRPG】

【 前章 + 中章 】

おわり

幸せな旗はへ if へを掲げる世界線
ステイシー end

俺はマキブを集めながらこの世界を旅していた。

気がついたらもんぱらの中章の海軍本部で料理係を請け負っていた。

え？

なんでこんなことになったって？

遡ること二週間前の話。

マールポートに滞在してしばらくレベリングを繰り返していた。だがある日の事。

大規模な海賊団がマールポートに襲いかかり、おれはその中に巻き込まれた。

海軍のタツノコ兵は奮闘するも無力な市民はどうすることもできず恐怖の中でただ逃げ回っていた。

そんな俺はレベリングでボロボロだったけど、回復を惜むと市民を守るために力を振るっていた。

だが、その時の俺はデスヘルが使うビームサイズを構えていた。あとレベルリングの怪我でところどころ血まみれ。しかも黒いコートを来ていたから殺戮を楽しむ死神に見えなくもなかった。

そのような格好からタツノコ兵は俺が海賊側に見えたようだ。

それから海賊を退かせ、一息ついた瞬間だ。

俺は背後から不意打ちを受けると残り少ない体力は底まで削られて倒されてしまった。

意識は刈り取られてボロボロのまま運ばれた。

かなり運が悪い扱いを受けた。
そしてかなり体が痛かった：

目を覚ました俺は治療を受けながらも誤解を解いた。

マールポートの市民からも俺に助けてもらった証言も頂いて俺の誤解はすぐに解けた。

それはともかく海軍側はこの失態に対して大変俺に迷惑をかけたように海軍本部を束ねるリヴァイアサンからも深々と頭を下げられた。

俺も紛らわしい事をしたと思ったのでこのことは海軍本部の正義を思つて水に流した。

あと市民を守ったのでささやかに表彰された。

しかし打ちどころが悪かったのか冒険するには少しだけしんどかった。

そのためしばらく海軍本部で治療を受けることになり、傷が癒えるまでここに残ることになった。

それでここからが本題なんだが：

メシが不味い：

俺はあまりにもひどい食事に苛立ったのでキッチンを勝手に借りて自分だけの料理を作った。

海軍ならカレーだろう。

オムレツでトッピングしたりと好き勝手作った。

すると美味しい匂いにつられて海兵が集まりだし「フラッグの作る料理はおいしい」と話は広がった。

最初のうちは一人で食べていたが、いつのまにかタツノコ兵に囲まれていて、料理を欲しがられる。

分けてあげると自分の食べる分が少なくなった。

しかし皆から「美味しいであります！」とお褒めをいただいて悪い気はしなかった。

腹はそこまで満たされなかった、代わりに気分を満たされた。

料理を終えて貸してもらっている個室で休んでいると一人の訪問者。

ウミウシ兵が「料理を作ってください！」とお願いにやって来た。

俺は話の趣旨が見えない。

詳しく聞いた。

なんともそのウミウシ兵は……

あ、名前は『ステイシー』だ。

そんでステイシーは継るような思いで俺に強請ってきたのだ。

ステイシーも怪我人をお願いするのは些か気が引けていたが、しかしお願いしたい追い込まれていた……メシマズに。

必死に懇願するステイシーからその理由を聞いた。

まず海軍の軍力は悪くないが、メシマズのせい武力が下がっているらしい。

モチベーションの話だろう。

それ故に作戦がうまくいかないことが多いらしい。

その説明を受けた俺はなんじゃそりや……って感じだっけど必死な彼女を放って置くことができなくなった。

しばらく考えたあと俺は傷が完治するまでは構わないと了承してあげた。

すると喜んだ。

それも飛び跳ねる程だ。

俺はそんな彼女の反応に少し驚いたか、まあいいかと考えていた。

しかし少し目のやり場に困った。

ウミウシ兵を作った”絵師”さんの特徴なのか二つの山がすぐく揺れるものだから最近解消されなかった要求は肉欲を刺激する。

するとステイシーはその視線に気づいたのか一瞬だけニンマリと笑う。

料理を作ってくれる嬉しさと表面を隠して抱きついてきた。

すると「これは前払いですよ…ふふつ」と耳元で囁かれて抑えが効かなくなつた。

それから襲われた。

見た目はやや小さいのに包容力のあるお姉さん系のもんむすに抱きしめられて性は抑えれなかつた。

蠱惑的な雰囲気や漂わせながら柔らかく包み込んできた。

俺はそんなステイシーに抗えずにいた。

もん娘に襲われる…

そこに恐怖感に駆け巡られる。

だけどステイシーは何枚も上手で「安心して任せてください」と甘くて身を委ねなくなるその言葉に痺れさせられた。

柔らかな抱擁を受け入れて肉欲は弾け飛んだ。

気が狂うほど彼女が気持ちよかつた…

◇

さて、約束は約束だ。

俺は海軍のために腕を振るうことにした。

あとステイシーによつてスツキリさせられていた事と調子が良い。握る包丁が軽いので気合が入った。

皆に料理を振る舞うことになるから恥ずかしい食卓にしないよう気合いを入れてキツチンは戦場と化す。

あつという間に肉じゃがを作り終えた。

無我夢中で作り続けたが50人分は超えてるだろう。

量も半端なくかなり疲れたが、食堂からは「うまい！」や「美味しい！」と感激の声が広まった。

ただの肉じゃがでこれならどれだけメシマズに苦しめられていたのやら…

あのリヴァイアサンもご満悦だった。

気分は大変良かった。

そんな感じに傷が治るまでの期間だが料理は昼と夜だけ手伝う事にした。

料理を振る舞うたびに感激の声が広まる。

そして海軍の武力は存分に上がった。

業務も捗ったらしい。

そして数日後…

傷が終えて旅を再開できる程になった。

海軍の医師からも旅が再開できるとお言葉をもらった。

その医師から「一つ楽しみが無くね」と少し残念そうにされた。

俺は個室に戻って旅立ち前にマキブを整理していると……ステイシーがやってきた。

もう展開は分かると思うが…

「残ってくださいー」と言われた。

でも、そのお願いは料理のためでは無かった。

実はステイシーとは海軍本部に滞在してる間は仲良くしてもらっている。

お互いにたわいもない話し合ったり、背中が届かないところに包帯やテープング、塗り薬を手伝ってもらったりもした。

あとステイシーに料理の手ほどきしたりと海軍本部での楽しい時間を彼女からもらったり。

あと……

夜はもん娘が得意とする魔性の快楽で弄んでくれたりと肉欲は満たされた。

それは美味しい料理を作ってくれるお礼で…と、言うのは最初の内であり、いつしか互いに求め合うように肌を重ねていた。

そうやって彼女と交流を深めるうちに、ステイシーはとても魅力的な女性であることがよくわかった。

俺としても彼女に好意を抱き始めて、ステイシーも俺に好意を抱いていた。

そんな感じに、ステイシーとはいつのまにか惹かれる関係になっていた。

俺は歩みを考える。

海軍本部に残ると言うことは…

それは旅を捨てる事だ。

ステイシーはそれを承知の上でお願いした。
一緒にいたいです。
愛したい男性の近くに居たいから…と。

——YESと答えた。

「え!?! い、いいの…です、か?」

「俺はとりあえず旅してるだけでいつか職を持たないとダメだろう。
いつかはやめちまう旅だ」

そう、俺自身はこの旅は『とりあえず』って感じに歩んでいた。
マキブに関しても戦いに必要だから探してた。

RPGの醍醐味のごとくコレクトしながらきままに旅する。
でも絶対に旅をしなければならぬ理由はなかった。

別に使命感もある訳じゃない。

だから旅をすっぱり終えることも可能だ。

そのくらい自由だから。

だからステイシーには『いいよ』と了承した。

感激のあまりまた襲われた。
共に溺れた。

◇

「フラッグ？ これはどこに置けばいいですか？」

「あ、それは鍋に入れていいぞ。 そしたら次はみりんと調理酒を用意して」

「わかりました」

「それから……おい、そこで盗み食いしてるタツノコ兵、何か用か？」

「むぐっ!? ……くん……ええとですね、今度の作戦でフラッグ料理長には同行してもらいます」

「何のため？」

「近々グラントノアで反攻作戦が起きまして、エスタの北海域は海軍が承る事になりました。 それは長期間の任務になりそうです。

そのためフラッグ料理長には同行願います」

「なるほどわかった……で？ リヴァイアサンにその話は？ また勝手に調理場から引っ張る事件はないよなあ？」

「それは反省してます!! 今回はちゃんと話を通してありますよ!?!」

「はいよ。 ……ちなみにステイシーは」

「ステイシーも一緒であります!」

「よし、話は決まった。 行くぞ」

「もう、フラッグさんったら……」

「じゃあよろしくであります!」

こんな感じに俺は海軍本部の料理長として生きている。

ちなみにこの世界の主人公であるルカさん御一行はこの海軍本部に来たけど…

いまの俺には関係無い。

俺には料理を喜んでくれる海兵と、近々婚礼を上げる事になったステイシーが居れば問題ない。

たまに戦闘に参加する時に使うマキブを隣に添えてこの海軍本部で生きる事にした。

これは俺と料理を愛してくれるウミウシ兵の話。
海軍の料理人として添い遂げた世界線だ。

e n d r o o t 【ウミウシ兵】

おわり

あげは e n d

とある人は言った。

「戦争は地獄だ」

この言葉はまさにそうだ：

俺はグランドノアの反抗作戦に参加して戦っていた。

しかし戦いは熾烈を極めた。

周りの人間の兵士そうだけど、人間の俺からしたら多量のもん娘を相手に戦い続けれる訳が無い。

「種族としての力量差だ。」

勝てない。

多くの人間兵は流れるように後方支援に動く。

それは俺も同じ。

だがトリガーを引くたびなぜ参加してしまったのかと考えていた。

それは報酬のためだったか？

名誉の為だったか？

やましい気持ちで挑んだのか？

イベントの一つだろうとRPGの醍醐味として？

そんなの戦争に巻き込まれ続けたせいで分からなくなった。

今じゃ参加した理由なんかどうでもいい。

このように苛立ちを持ちながらも今だけは共に戦う仲間のため俺は誰一人殺させまいと必死にマキブを使う。

…
…

必死の抵抗により、戦争は3日で終了した。

ルカさん御一行がうまくやってくれたようだ。

俺は主人公の活躍に感謝しながらマキブを整理していた。

しかしここがゲームの世界であろうとも血と血で争う戦いに心が荒んでいた。

目の前でどれだけ人ともん娘が死んだのか？

そこに敵味方関係ない。

こども簡単に命は弄ばれてしまうのか…

俺もレベリングのためにモン娘を倒すが、命を奪うようなことはそう無い。

残忍なモン娘相手には容赦しないけど、命を刈り取るようなことはない。

ビームサーベルやビームライフルなど大体のマキブは無属性の魔法判定だ。

命は奪わずに気絶させるだけで終わる。

もちろんやり過ぎたら死ぬけど、決して殺しの快樂のために俺は戦ってない。

そう思ってきたが…

今回は有無言わず命を賭け合っている。

まったくもって、苦しい時間だった…

「……………死体が、多い…な」

戦線を撤収する。

周りを見る。

戦場となった大地の至る所に死体が広がっていた。

地に転がる死体達に対して吊いの魔法で死人となった肉体を燃やす。

そうやって浄化して、処理を施す魔導師を横目に早くここを去りたいと考える。

「これで…よかった…のか？」

俺はグランドノアのために充分やったのだろう。

でも、もし俺が心身共にもっと強ければこんな死人は出なかっただろうか？

後方支援で『みんなのため』に戦っていたつもりだったのか？

でも俺の持つマキブは強い武器である。

そこらへんの下級職に劣らない強さ。

これだけ強いんだから前線に立って敵を押し込めばもっと被害は起きずに済んだ筈だろうか？

全てとは言わないが俺が配備された戦線くらいなら死人は抑えられた筈だ。

戦争が終わった以上は結果論に過ぎないが思考が止まらない。

間違ったのか？

後ろで戦っていたのは間違いか？

「…っ、げっほ…」

ああ…

こんなにも心が荒んでしまうなら…

戦争に参加なんてさなければ良かった。

もう何の目的で参加したかも忘れた。

ならこの荒んだ心も忘れたら…と濁り始めた目を荒地に向けて俺は歩く。

「ああ……！」

一匹のもん娘が地に伏せて倒れていた。

兵士ではない。

そのもん娘は運悪く戦争に巻き込まれてしまったのだろう。

グランドノアはあらかじめプランセクト村やその周辺には戦争が始まることを伝えている。

ノア地方に被害が広まることを告げていた。

だから戦争状態が続いてる間は外に出回らないように用心する筈だ。そして早く戦争が終わることを願う筈だ。臆病でいいから戦いに巻き込まれないように引きこもってるのが正解だ。しかしそれでも情報が行き渡らずに巻き込まれてしまう奴も現れるに決まってる。中には誤って巻き込まれるも者もいる。理由は様々だ。

目の前で地に伏せてるもん娘は…

ただ巻き込まれたのかもしれない。

「あ、ああ、あああ……！」

俺はなんとも言えない気持ちに襲われた。

命を賭けて戦う奴ならまだ良い。

しかし命を賭ける必要無き生き物がこうも葬られてしまうのは頂けなかった。

俺はこの時強い憤りを感じる。

この戦争を引き起こした元凶である『リリス三姉妹』に対してだ。でもこれは理由があつての事だ。

けど……目の前のコレを見てそんなの関係ない。理解していても、俺は許せなかった。

「くっ、そっ、こんなっ、事を……」

すると次の瞬間……

沢山の『声』が聞こえた。

「あ、ああ、あつ、なぜエ?!?!?」

この戦場で倒れた者達の声だった。

まるで『NT特有の死人の声を拾う力』と同じ感覚に包まれる。

そんなことに気づく余裕もなく、頭を抑え、地面に倒れ、呼吸が荒くなる。

自分が悪いわけじゃ無いが、こうも沢山の死人を出してしまった。

もし俺がやり方を変えたなら!

もつとこの戦いのために奮闘したなら!

有り余るマキブで戦場を支配してしまえば!

!!?
目の前に倒れてるモン娘も無残に散らなくて良かったと言うのか

その結果……

こんなに小さく…

可憐な命が…

命が…

灯火が…

「……………、……………、……………」

「!?」

う、ごい、た？

「……………う……………つ……………」

「!?」

動いたのか!?

まだ命があると言うのか!?

もし見間違いじゃないのならツツ!

「あ、ああ！ 生き…!!」

俺は『フェニックスの羽』を心臓の辺りに押し込む。
効果が薄いつ!

そのもん娘の衣類を剥いで心臓に強く押し込む。
まだ命がそこに留まってるなら!

まだ息を吹き返す筈！

俺は必死になり、これまで使うことなかったフェニックスの羽をも
う一枚、もう一枚、何枚と使った。

この際、全ての路銀や物資なんか惜しく無い。

俺は全てフェニックスの羽を使うつもりで：

◇

私は、反攻作戦が起こる事を知っていた。

ここまでその警告が届いたから。

でとあんなに友好的なグランゴルドがランドノアに戦争を仕掛
けるのは可笑しいと感じだから。

だから私はゴツダールの住処からノア地方に移動してグランゴル
ドの牙に傷つくランドノアのために何かできないかと考えた。

ゴツダールはグランゴルド側だけど、グランゴルドは間違ってるか
ら私はそちら側に着こうとは思わない。

寧ろランドノアにそんなグランゴルドを止めて欲しいから手伝
おうと思った。

でも、戦争は無慈悲で、私はグランゴルドの兵士達に斬り殺された。

……まだ命は保たれてる。

でもこのまま死んでしまうことになるだろう。

村を出る前、周りのスキュラ達は何も手出しはしないほうが良いと
警告を受けた。

ほとぼりが冷めるまで潜んでる方が良いと言っていた。

でも私はなんとかかしたい…
何とかしたいと言った。
わたしなんかでだれか一人でも助けられないか？
そう思っこの場所までやってきた。

でも、それは叶わなかった。

同じ地方に住む仲間の警告を無視した。

その結末は…

「…もう、ダメです…ね…」

もう、動けない…

わたしはもん娘だから、生命力があるから死ぬまで数時間このま
ま。

酷い痛みを味わい続けてしまう。

あまりにも酷い苦しみに私は後悔しながら早く死んでしまいた
かった。

でも、死にたくなかった。

こんな簡単に散らしてしまう。
そんなの誰だって嫌だ。

でも私の場合は戦争に乗り込んだ代償だ。
悪いツケが回ったのだ。

自業自得なんだ…

「…」

命の炎が消える感覚がよく分かる。
身に纏う鱗粉も血流で流れ落ちる。

羽の色も消えてしまう。

触覚に感覚はない。

もう、無理なんだと…

だから…

死を受け入れようとした…

でも…

その時だった。

「え…」

心臓に当てられる熱は私の命を蘇らせる。

それは何枚も、何枚も、心臓に当てられる。

だんだんと生命力を取り戻す感覚に包まれる。

私は永遠と闇の世界に落とされてしまうだろう瞼が開かれて光が差し込んだ。

それは生きてる証拠になる。

ああ、とても綺麗な夕焼けだ。

私はこの夕焼けで飛び回るのが大好きだ。

またこの光を受けることができる嬉しさもあった。
しかし驚いた。

次に視界に入るのは…ひとりの青年だった。

「!!」

「あ、なた…は？」

「あ…ああ、生き、てる…」

青年の顔は、必死だった。

目に後悔と憤りを溜めながら

生きてる生命を見つけだせたと

心の底から震えながら泣きそうである

青年の姿…

それはあまりにも嬉しそうだったから

まるで救われたのは私じゃなくて

青年の方ではないかと思つたほど…

「生きてる…生きてるっ！ 生きて、るッッ！」

死の直前にいる私は

救われた事に喜びと困惑を併せながらも

青年は何かに謝るように

『ごめんなさい』と謝り続けた…

汚れた手で拾い上げる願う資格が無くても

生きてくれて良かったと

救えたと…

|

⋮

◇

「幸旗さん、ぼーっとしてどうしました？」

「……んえ？ ああ、いや、なんでもない……よ」

「本当ですか？」

「………」

「今日も一緒に寝ましようか？」

「今日は、大丈夫……それほど今は……聞こえないから……」

「………」

ひとりの青年は種族的弱さに溺れていた。

心も、体も、周りのもん娘に比べて、何もかも劣る種族だ。

参加した戦争の中でストレスは限界を超えた。

ストレスを抱えて、死者の声を聞く。

彼は人間の種族を脱ぎ捨てNTとなった。

いや、なつてしまった…

もともと素質があつたのか彼はNTになれた…

しかし、それは…

彼にとつて嬉しくない産物だつた…

「大丈夫ですよ、私が、近くにいますから…」

「……ああ、ありがとう……」

今日の彼は目に生きた色は映し出されて無い…

今日は特に酷かつた…

今すぐにも廃人に染まつてしまいそうだ。

なぜならNTに開花したことでありとあらゆる声が聞こえるようになつたから。

それは度が過ぎるほどである。

あの戦争で重ねられた『死者達の声』が付きまとつていた。

毎日の夜を彼の体を蝕んでいた…

「やはり今日は私が一緒に……」

「……大丈夫だ、ありがとう」

「いえ、苦しいですよね……」

「……う、うう……」

基本的に青年は明るい性格だ。

昼間はお日様の下で少女に対して、優しく、明るく、振る舞う。

少女はその青年にいつも笑みをこぼす。

だが青年は時折…人が変わってしまったかのように何かに恐れるように苦しむ。

彼の姿が痛々しい。

少女は救いたかった。

そう、これはあの時から変わらない気持ちだ。

戦争を終えてから少女は青年に救われた。

だがその青年は懺悔するかのようにな少女に謝り、激しく後悔をした。

別に彼は悪くないが自分を責め続けた。

だが少女は振袖に見立てた大きな羽を使って青年を抱きしめて、頭を撫でて、涙が落ち着くまで慰め続けた。

一頻り悔やんだ後、彼は情けない姿を見せたことに恥じていたがその少女は気にしなかった。

寧ろ、少女はだれか一人でも救いたいと考えていたため、涙を流す彼のために抱きしめて和らげることができた、心を救えたからと喜んでいた。

それから彼は元気を取り戻してノア地方を発った。
しかし道中で何度も頭を抑えて苦しみ、嘔吐して、涙を流して、何かに蝕まれては、壊れそうになっていた。
戦争で亡くなった死人達の声は幻覚とばかり絡みつき、闇と地獄から死んだ者達の手が彼をつかんでいた。
払うこともできず、抗うこともできず、ただ引きずりこまれる恐怖は青年を追い込み続けていた。

精神的に追い込まれ続ける。
命を断ちたい程に身を捨てそうになったこともある。
そんな少女は青年を苦しみから守ろうといつも抱きしめていた。

大きな振袖の形した羽で青年を包み込む。
精神安定剤とばかりに鱗粉を彼に被せて落ち着かせる。
彼女の触覚で彼の心臓に触れて痛みを和らげる。
何度も何度も優しく声をかけつつづける。
聖母を感じさせる抱擁は彼を何度も救った。

「もう、大丈夫ですよ」

「あ……あげは……俺は今回も、君に……」

「お気になさらないください」

柔らかく、でも大きく抱きしめながら少女は優しく語りかける。

「わたしは、こうしてあなたを抱きしめてあげられることが、嬉しいですから」

「……ありがとう」

そして今回も、少女に救われた。
青年はいつも通りの目の色を取り戻した。
落ち着いたことに安堵して…何かを感じる。
下を見た。

「ふふっ、それよりも…さつきからお股に当たってるモノがありませんけど?」

「あ、いや、ええと…あれだ、その、生きてる証拠と言うか…てか、
そ、それよりも…」

「ふふ、それよりも…どうしました?」

「その、君のお陰で定期的に襲う呪いに蝕ばまれずに済む。本当に
ありがとう。でも、いつも、決まったように、へ、変な気分、う、あ、
蝕まれてしまいそうだし、はあ…はあ…ああ」

「ふふ、それで?」

「つつ、あ、あげは、あんた、やはりわざと、鱗粉に、っ、淫薬か、何
かを混ぜただろ? ……つつ、あ、ちよ、し、視界が…ぼや、け、る
…」

「ふふ。溜まった性欲を発散すれば一緒に嫌なことなんて吹き飛び
ますよ?」

「だからって、また、触覚でなあ…あ、ああ、あかん、し、視界が、桃
色、に…」

「あまり触覚でアレをやると危ないって怒られたのもうやりません

よ。だ、か、ら…女性として機能してる部分で…ね？」

少女は聖母の様に振る舞うが忘れてはならない。
彼女はもん娘である。

目の前に男がいるなら…
愛したい男がいるならやることは一つだ。

「大丈夫ですよ。苦痛も、悲しみも、わたしが優しく溶かして、たくさん愛してあげますから」

「あ、ああ、あああ…っ！」

「怖がらないで。柔らかに包んで忘れさせてあげる。絶対に気持ちいいから」

口付けを受けて脳が痺れる。

鱗粉によって惑わされる。

膨れ上がる肉欲はもう収まりを知らない。

月明かりの下で二人は絡み合った。

◇

「幸旗さんが探してるマキブってわたしが持つてる『蝶の羽』の様に綺麗なんですよね？」

「ああ。でもその羽は綺麗っただけじゃない。全てをゼロにしてしまうほどの力を持つてる」

「確か『月光蝶』って名前でした？」

「ああそうだ。それがあれば、歴史すら変えることができる。また、無駄な争いも無くせる。そして死人も出ない世界にもできる…」

「それはすごいですね」

幸旗に付き添う『あげは娘』は彼の行動を尊重する。

そうすることで彼の呪いは解き放たれるからだ。

彼女は『雪旗』と『世界』を天秤にかけるなら『雪旗』を取るだろう。

そのくらいにあげは娘は幸旗の羽となる。

だからこの『月光蝶』でこの先どんな事が起きても彼女は彼に付き添うだろう。

その先が何もかも無くなるとしても…

「やはりスノウへブンに行くべきか…」

「スノウ…??」

「次の目的地だよ」

「それはどこですか？」

「突然現れた西北の大陸だ。そこに向かう」

「わー、それは大変そうですね」

「ああ。だからちゃんと俺のために付いてきてくれよ。俺は君の羽が必要だから」

「はい、もちろんですよ幸旗さん」

この先、彼の手によってこの世界がどうなったかはわからない。

ただ一つわかるのは…

命の恩人である雪旗のために…

あげは娘はその羽で舞い続ける事だけだ…

e n d r o o t 【あげは娘】

マージユ end

マキブを集めながら、もんぱらの世界を楽しんで80日は旅をした
だろうか？

随分とゆつくりと歩んだものだ。

そりやゲームと同じようにセーブのロードなんて便利な機能は無
い現実味ある毎日。

常に慎重に進んでるに決まってる。

しかし一人旅をしていたとは言えまさか『悪夢の荒野』の近くまで
フラフラと冒険してたとは思わなかった。

まあ、来てしまったのは仕方ない。

そのため俺はしばらく貴婦人の村を拠点に…するのは色々と危険
なので、ハーピーの羽のワープ地点として扱いつつ、この一帯でレベ
リングをしながら『神鳥のほこら』でも見に行こうと命知らずを考え
ていた。

しかしこの辺り人間なんかでは即蹂躪されてしまいうだろう。

鬼とかがいるからな。

けど持っているマキブがどれも強いから助かるものだ。

特にグランドノアの反攻作戦に参加したのがデカイな。

結構貢献した。

マキブの力で強引に前線を押し上げたり、撤退線を援護したり、補
給路の確保も勤しんだり、グランドノアは優勢に立ち回ることがで
きた。

この活躍によって王妃から感謝とばかりに『ヘルメスの薔薇の設計
図』を頂いた。

お陰で『Gセルフの換装兵器』でどんな敵も立ち向かえるようにな
った。

もしかしたらだけど、ゴールド大陸西の大穴にいるアポトーシスとも対等に立ち向かえるかもしれない……が、正直その先は行くつもりはない。

命が惜しいので進むなら神鳥のほこらまでにしようとか考えてる。

俺はまた表世界を楽しみたいので死ぬ気は無いし、まだ見てない場所もある。

それでも…

「ああ、この辺りまで来ると一人旅は楽じゃないな」

一人旅は寂しいってのもあるけど、問題はそこじゃない。

街に行けば酒場とかで見知ったことがある旅仲間に出会えるたりとそれも旅の醍醐味だが、基本一人旅の俺はそう言うのに少なからず寂しさを覚える。もちろん人肌の恋しさだけではなく一人だと大変な事も多い。厳しい奥地まで進むとそりや痛快する。この辺りまで一人でできて少なからず限界も感じた。ストーリーの中盤も終わるあたりの場所だからそれもそうだろうけど。

しかし仲間は特に作りもせず孤独奮闘していた俺にもある日、旅の道連れができたのだ。

それは『悪夢の荒野』で旅をしていた時の話だ。

俺は悪夢の荒野まで旅立つ前に貴婦人の村で美味しい情報を得たのだ。

本当に、味覚的に美味しい話だ。

悪夢の荒野にはレアなもん娘が存在しており、そのモン娘が持つゼリー（？）がとても美味だと聞いたのだ。

その話に興味を持ったので悪夢の荒野をただ切り抜けるだけじゃ

なくて、噂されてるレアなもん娘を求めながら悪夢の荒野を攻略しようとした。

俺は3日分の食料を持ち、悪夢の荒野でレベリングも兼ねてしばらく探索していた。

だがレアなもん娘だけあってなかなかエンカウントしなかった。

それでも食料に余裕を持たせながら探索していたが疲労は蓄積する。

とある戦闘で判断ミスを起こして腕を怪我してしまった。

この世界はゲームのシステムとステータスである程度は守られるが、それでも人間は脆いものだから気をつけなければならない。

疲労での判断ミスはもつてのほかだ。

そこそこの長旅故に慣れた痛みだが放置するわけにも行かず、俺は腕に薬草を塗りつけて腕に包帯を巻いた。

しかしその包帯は使用期限が迫っており、そろそろ捨てなければならぬ。

しかし包帯はまだ沢山あった。

なので、遊び心も兼ねて包帯を無駄に伸ばし、腕に巻いた時に大きなりボンの形を作った。

……道中の枝とかに引っ掛けると危ないから後で解くが、この包帯にグレネードとか巻いておくのはどうだろうか？ 包帯を切り離してそのまま起爆とか出来そうだ。

そんな事を考えながら大きなりボンを作った包帯を腕に巻きつけ、この辺りを探索すると……

一体のもん娘が現れたのだ。

しかもそのもん娘は貴婦人の村で噂されてたレアなもん娘だった。

「わー！ 大きなりボンですねー♪」

そのもん娘は『ゼラチナスキューブ娘』だった。

確かに、彼女はレアな分類だった。

俺は貴婦人の村で聞いた話に納得していると、ゼラチナスキューブ娘は友好的に近づいて来た。

俺は友好的なフリをして近づいてこちらの命を刈り取るのではないかと思い、ゼラチナスキューブ娘に警戒するがその眼は純粹だった。

特に野心は無くふつうに友好的な娘。

でも手で静止するとゼラチナスキューブ娘はその場で止まった。

でもニコニコとしている。

ある程度、警戒を解いて俺は腕に巻いてる大きなリボンを見せる。

「残念ながら、これは使用期限ギリギリの包帯なんだよな」

「そうなんですか？ でも遊び心あって良いと思いまーす♪」

なんかお褒めを頂いた。

予想してた反応と違って出鼻を挫かれたが、悪い気はしない。

なので俺は「ありがとう」とお礼を言った。

だがちよつとだけ、ゼラチナスキューブ娘は残念そうにしていた。

本物のリボンかと思って近づいたらしい。

「リボン好きなのか？」

「はい♪ 大好きなんですよ♪」

ゼラチナスキューブ娘は自分の頭にゼリーのリボンをつけている。

そのくらいリボンが好きなようだ。だから俺に近づいできたらしい。

あわよくば「殺してでも貰う」とかそんなんだろうかと思ったけど全然そんな気はしない。

彼女からしたら近くで見れたら万歳らしい。

それもそうか。

ここは『悪夢の荒野』と言われるくらいだ。

まず人間はこないし、来たとしてもこんな危ないところでリボン結んだオシヤレをする余裕もあるとは思えない。

リボンをつけるほどお洒落をしてるとしたら、それは腕の立つ冒険者だ。

しかしレアなもん娘と言われるゼラチナスキューブ娘とエンカウントする事も稀である上に、こんな危険は場所は早々に攻略して切り抜ける筈だから。

しかし俺は彼女を探すために根気よく数日間探索してたから、こうして出会えたようだ。

「そっか、でも、リボンじゃないのですね…」

「……」

残念そうだ。

俺は少し可哀想と思った。

だから俺は少しだけ考える。

こうしてレアな彼女に出会えたのだ。

何かの縁だと思ってここは一つ腕を振るおうと考えた。

「ちよつと待ってろよ」

「？」

まずサバサで手に入れたアクセサリーのパーツを道具袋から取り出した。

太陽の光に当てればキラキラと輝く黄色の紐状のアクセサリーを適当な長さに切り、それを小道具で細工する。

因みに紐の大きさはプレゼント箱とかに結べるお洒落なアイテムだ。

これはサバサの酒場でやっていたビンゴ大会で手に入れたのだ。

使い道は分からなかったがとりあえず道具袋にそのまま保管していた。

「何をするのですか？？」

「いいから、見てなって」

お洒落な紐をちよちよい細工。

頭つけるには丁度よいサイズのリボンを作り上げたのだ。

最後は結び目の真ん中にボタンで留めて軽く針糸を通して固定する。

「はい、どうぞ」

「!!」

数分で作り上げた大した価値もないリボン。

それをゼラチナスキューブ娘にプレゼントすることにした。
するとゼラチナスキューブ娘は目を輝かせながら手のひらに受け取る。

彼女はリボンと俺の顔を交互に見ながら「いいの!? 本当によいの!？」と驚いていた。

そんな彼女の様子に笑いながら「余り物で悪いけど」と言ってプレゼントした。

それでも大変喜ばれたのだ。

この時、ゲームシステムにすれば…

『ゼラチナスキューブ娘の好感度が80上がった』って感じに好感度が上昇していたらしいがそんな事は気にもしなかったし全く考えなかった。

それから仲良くなったゼラチナスキューブ娘とお昼頃を食べることにになり、お昼休憩を取りながら俺はこれまでの旅を話した。

サバサでビンゴ大会を楽しんだ事。

マステギアで魔導を体験した事。

グランドノアで反攻作戦に参加した事。

マキブを集めながら世界を旅してる事。

色々だ。

彼女は貪欲に話を聞いていた。

彼女は悪夢の荒野から出ることが無いため外の世界の話に興味

深々である。

するとゼラチナスキューブ娘から質問を受けた。

それは悪夢の荒野と恐れられる場所になんで来たのか？ その理由を聞かれた。

俺は素直に『貴婦人の村で聞いた美味しい話題』をゼラチナスキューブ娘に話した。

「これ美味しいの？ 聞いたことないな〜」

「噂じゃ大変美味だと聞いたぞ」

「…じゃあ、食べてみる？」

リボンのお礼とばかりにキューブに触れる事を許された。

俺はキューブに触れる。

それを手に取って食べる。

「っ、うまつ…!?!」

いや、これ本当に美味しい！

「これは、本当に、むぐむぐ…」

「あ、あの、お兄さん？」

このキューブはすごく甘くて美味しい。いつまでも舐めていた魔性の味だった。

体の一部を舐められてるゼラチナスキューブ娘はまさかこのキューブが珍味として受け止められると思わなかったようで、少し複雑な顔をしていた。

「ええと、そんなに美味しいの？」

「ん？ ……はっ!? す、すまん！」

夢中になって味身をしていた。

あまりにもはしたない事をしたと思って謝る。

しかしゼラチナスキューブ娘は「いいよ、別に♪」と微笑んでいた。

「っ…」

かわいい…

そしてこの時、俺は考えが甘かった。

スライムの体を食べている。

スライムの特徴と言えば体に入り込んで支配する能力が高い。

そこから細胞の形を変えたりとするほどに危険だ。

俺は気づかずに彼女の味に支配されていた。

…

…

さて、俺はゼラチナスキューブ娘から珍味を貰い、すごく元気になった。

傷を癒す効果もあるのか包帯に巻かれた深い傷も治っていた。

体もすごく調子が良いので悪夢の荒野を一気に突破しようと思える。

俺はゼラチナスキューブ娘にお礼を言つてこの場を去ろうとしたが、腕が冷んやりとした感触に包まれた。

ゼラチナスキューブ娘に掴まれたのだ。

すると…

「一緒に連れて行ってください♪」

「ふあ?」

彼女は俺の旅の話を聞いて外の世界に興味を持ったようだ。

特にサバサのように貿易が捗る場所に行けば、お洒落なアクセサリーが手に入る。

特にリボンを求めて俺に付いて行きたいと言ったのだ。

まさかそう来るとは思わなかったので少し思考が停止していた。

だが彼女はただ付いていくとは言わなかった。

「お兄さんが望むなら♪ わたしのキューブは好きなだけ食べていいので♪」

——魅力的な提案だった。

脳が彼女を欲したくて判断を支配する。

「それにこのキューブに包まれたらすごく気持ちがいいんですよ? お兄さんのためなら幾らでも気持ちよくしてあげます♪」

——そう、とても魅力的な提案だ…

「……だから、その、ダメかな？」

「……俺の行く先は、大変だぞ？」

「ばっちこーいです♪」

彼女にそのつもりはない。

ただ純粹について行きたいと言っていただけ。

しかし彼女と言う味に支配されていた俺は彼女の同行を了承する。
こうしてゼラチナスキューブ娘との旅が始まった。

◇

「フラッグ兄さん、何か釣れました？」

「だめだマジユ、なかなか釣れない。だからキューブ舐めさせて」

「もう、それはどういうことですか？」

「うまうま……」

「……まだ許可してませんよ？」

「うお!? 釣竿にヒットした! うおおお!」

「無視ですか……まあ、別にいいですけど」

「つて、うおお!? なんかでかかない!」

「ほーら、フラッグお兄さくん♪ ふあいと、ふあいと♪」

こんな感じにゆったりと寄り道しながら楽しんでいる。
いまレムズ海岸で釣りをしている。
妖精の森を抜けるのは大変だった。

彼女の声援を受けながら竿に力を込めて引っ張りあげた。

バシャーン!

「すごい! でかいよ!」

「よっしゃああマージュ!! やつと大物が釣れ………は?」

「み、みず……」ぴちぴち

「つて! あんた残念なドーマイマジやねーか!」

「み、水……」

「やかましいわ!」

海にぶん投げた。

「んなアホな…」

「なんか残念だね？」

「だよな。 だからキューブ舐めさせて」

「もう、そればっかり〜！ むう、そんな食いしん坊なフラッグお兄さんはスライム式のお仕置ですからね♪ えいっ」

「ちよ!? マージュ!? ま、まて!?」

「嫌だよ〜♪ ゆるさな〜い♪ 3回は覚悟してもらうんだから♪」

「あ、でも、うまうま…」

「もう！ 緊張感持つてよく、お兄さ〜ん！」

このあと、彼女の甘い泉の中で弄ばれたのは言うまでも無い。

もうこの味から抜け出せそうにないや…

別にそれでも構わない。

俺の名はフラッグ。

美味しいお洒落さんと旅をしています。

end root【ゼラチナスキューブ娘】

エリツサ end

『迷いの森』ってご存じかな？

原作ではかなり早い段階で姿をあらわすダンジョンだがいきなり潜り込んでしまっただけっつこう苦戦する場所だ。

間違つて入ると痛い目に遭う。

ただその先には『エンリカ』と呼ばれる隠れ里が存在する。

原作プレイ済みの俺からしたら踏み込んでみたい場所だ。エンリカには腕の立つ隠れ天使達が沢山だが、敵に見えるような変なことしなければ問題ないだろう。

ただ迷い込んだフリをして観光をしよう。

そう考えて乗り込んだが…

いやー、めちやくちや迷う。

流石、迷いの森だ。

道が全然わからない。

入り口からほぼまっすぐ進んでいけば辿り着く……って、考えても真っ直ぐは行かないものだ。

一応、食料とハーピーの羽があるから死まで追い込まれることはないと思うが、何日もこの森で迷ってるのも精神的に来る。それにこのモン娘も弱くないから連戦は困りようだ。

そう考えながら歩いてると大きな木に果実が実っていた。

俺はビームライフルの出力を極限にまで下げると針のように細長いビームを上撃ち放つ。

放たれたビームで果実の枝を切り落とし、俺の手元にストーンと落ちて来た。

自然の恵みを手に取って大口を開けて食べようとした、その時だっ

た。

「それを食べるのはやめたほうがいいよ…」

「!？」

俺は声の下方にビームライフルを向けて警戒する。

俺は目一杯警戒心を剥き出しにして銃口を向けることで牽制した。

「わたしはあなたを襲わないよ…」

「……」

もし襲うなら声をかけずに彼女が持つてるその弓で俺を射止めていたはずだ。

俺はそう考えると静かにビームライフルを下げた。

緊張感をほぐすため、少し会話を行う。

「肌が黒くないな……ダークエルフじゃない純白なエルフか？」

「そこは意識した事ないけど、わたしはダークエルフじゃない…」

「珍しいな。ここにいるエルフは全部黒く墜ちたと思ってたけど」

「そんなことない、村に純白なら数名はいる…」

そう話しながらエルフの彼女は指を伸ばす。

「その果実、普通の木の实じゃないから食べない方が良い…」

「……ああ、そう言ってたな。 教えてくれてありがとう」

「構わない。 それよりもここは人が来るには厳しい場所だから無理な散策はやめたほうが良い……」

「そうか。 でも冒険者として気になったからな散策してたんだ」

「そう……あと、その木の実を渡して、必要なの……」

「え？ あ、うん、まあええよ。 ほら――」

ぴかーん

ゴロゴロゴロ……

「?!?!」

「こりや嵐が近そうだな。 こりやどこかで雨宿りしないと」

少しでも悪天候に染まるとハーピーの羽は機能しない。

だから多分、今投げて動かないだろう。

だからどこか避難する場所を考えた。

「……そ、そんなところにいると、雷が危ないよ、あぶないんだから……」

「ならどうすんのさ？ ハーピーの羽は動かない」

「……なら。 わたしの家に案内する、だから付いて来――」

ぴかーん!!!

ゴロゴロゴロ!!!

「っ!!」

「……大丈夫か?」

エルフの少女は毛を逆立てた猫のように驚き飛び上がり、体を硬直させる。

「……か、雷、き、嫌い、怖い……」

物静かな性格をしてると思っただが、豪雷とその爆音にエルフの少女は頭を抑えてガタガタと震えている。

「かなり響くな、この音は」

「っ、な、なんであなたは怖く――――」

ピカーン!ゴロゴロ

「ひう!!」

エルフの少女は地面にしゃがみ込んでしまう。

俺は見えていられなくなったので彼女に近寄り、背中を優しくさする。

すると額に雨水が触れる。

とうとう本格的に雨が降って来た。

これはマジで危ない。

「…ツ、こ、こっち、早く来てツツ」

「お、おう」

いつのまにか気持ちを取り戻したエルフの少女は俺の手を引いて走り出す。

雷の音が鳴るたびに彼女は体を硬直させてコケそうになるが俺は咄嗟に支えてあげた、

それを繰り返しながら見えてきた村に招かれる。

そして奥の方にある家まで走るとエルフの少女は扉を開けて俺ごと家に連れ込んだ。

「なっ！　また人間ですか!？」

「!？」

家の中に入れば現れたの……天使だ。

初めて見る神聖な生き物だが……

「つて、どこまで引っ張んの!？」

俺は家の中に関わらずまだ手を引かれていた。

バタバタと床を踏み込みながらエルフの少女は個室の扉を開ける。

俺を部屋の中に招き入れて手を離れた。

エルフの少女は部屋の扉を閉め、カーテンを閉め、窓の鍵を閉め、狩に使っていただろう弓を壁に立てかけ、また俺の手を引っ張るとベッドに引き寄せ、俺はバランスを崩して跪く。

エルフの少女は必死に掛け布団を回収すると俺の腕だけを布団の中に巻き込んで姿を隠した。

「……え、なにこの状況」

「……」

何も反応はない。

「……」

「ええ……」

まったくもって訳の分からない状況。

ただ時計の針がカチカチとなる。

すると壁を打ち付ける暴風がガタガタと家を軋ませる。

特に窓ガラスはガシヤガシヤとやかましい。

そして再び、雷と爆音が鳴り響いた。

「ああああ”あ”!! つつ、うう……」

「おいおい!? 大丈夫か……だああっ!?」

これまでに無いほど怯え出したエルフの少女は苦しそうに悲鳴をあげる。

そんな彼女に対して俺は本格的に心配になるが、手首を強く掴まれると腕全体が布団の中に飲み込まれる。

顔はまだギリギリ布団の外だ。

「……なあ、本当に、大丈夫かあんた?」

返事がない。

俺の声に反応できないほど震えていた。

俺はなぜこんな展開になったのか全くもって理解はできないでいた。

だがこんなにも怯えてる彼女を目の当たりにしたからこそ放って置けなくなつたので、俺は勝手にベットに座り込む。

エルフの少女の近くまで座る。

「……」

ただ近くにおいて手を握りしめるだけ。

いや本当に、なんでこんなことしてるのやら…

でも今はこうしてやるのが正しいのだろう。

そう考え、しばらく彼女の近くにおいてあげた。

◇

悪天候の中、あんなにも怯えていたエルフの少女はいつのまにか眠り込んでいた。

すると家に訪問した時に目があつた天使が部屋に入ってきた。

天使は当然警戒したが俺は口元に人差し指を立てて「しっ」と静かにして欲しいとジェスチャーをする。

俺の肘を枕にして眠り込んだエルフの少女を見た天使は何か納得すると警戒を解いてくれた。

「この子は昔、雷に直撃したことがあるのよ」

「え？」

「エルフだから直撃に耐えたけど、爆音と雷に深いトラウマを持ってしまったのよ。悪天候になる時を感知するところの子は深く眠り込み、夢の奥に逃げ込むの。そうやって悪天候が通り過ぎるのを待つよ」

「なるほど。しかしこの子は先ほどまで外にいました。悪天候を感知できるならなんで家に引き籠もって無かったのですか？」

「多分、眠りにつくための木の実が足りなかったのね」

「木の実？」

「ええ、迷いの森には睡眠薬としての役割を果たす毒性の木の実があつてね、それを急いで探していたのでしよう」

「……あ、もしかして、これ？」

「！ ええ、それよ」

「そっか、これか」

どうやら俺が丁度持っていたようだ。

そして、このエルフの少女は俺にとって毒でしかないこの木の実を回収したあと悪天候が来ることを知らせて俺を迷いの森から去るよ
うに言ったのだろう。

なんだ、優しいな、この子。

「……で、なんで俺はこんな目に？」

「雷に怯えて無意識に連れてしまったのでしよう。あと人肌を求め
てると言ったら良いかしら？」

「？」

「その子、ずっと一人だったから。その子にとって恐怖心を拭うに
は人肌が1番だった。意思など関係なしにエルフが求めたので
しよう」

「それでもエルフは人間嫌いでは？」

「そうでもない。好き嫌いの差が大きいだけでその子は気にならないエルフ。だから本能が人肌を求めた。とりあえずその状態だとしばらく解放されないようね」

「まあ、そうなりますね。引き剥がすことはできなさそうなのでしばらくお邪魔します」

「ええ、その子をよろしく」

それだけ言うと天使はこの部屋を出て行く。

俺とエルフの少女だけになった。

「まだまだ嵐の真っ最中だ。まだ起きんなよ…」

今は嵐と無関係に眠りついているこの子の頭を撫でながら俺もウトウトしてきた。

眠気と戦いながら、俺は優しく撫で続けていた。

◇

もうあれから一週間前だったかな。

俺は数日だけエンリカに滞在した。

そこで元兵士として戦っていた天使から戦闘における座学を受けた。

元天使兵はもう武器を握ることは考えていなかったが軽い授業なら構わないと考えて教えてくれたのだ。

なので素人の俺からしたらありがたい時間だった。

その代わりエンリカに天使がいることは内緒にして欲しいと言われたのでそこは了承した。

そんな感じにエンリカで短く過ごして…

また旅を始めた。

「次はどこに行こうか？」

「どこでも良いよ…」

旅仲間を一人で迎えて旅の再開である。

「なんなら美味しいもの食べに行くか？ 例えばヤマタイとかさ」

「どこでも大丈夫だよ…」

「…この観光地に行きたいとか無い？」

「どこでも構わないよ…」

「少しはワガママとか言っただけを困らせても良いんだぞ？ アレをしたいとか、コレをしたいとかさ。 仲間なんだから何か要望があってもバチは当たらない」

「ワガママ？ 要望??」

「うん」

「……」

彼女はなにかを考える。

そしてフラフラと俺の近くに寄り添い…
ピタリと引っ付いた。

「わたしはこれでいいよ…」

「相変わらずのふわふわエルフで安心したよ」

「……好き」

頭一つ分小さな彼女はピタッと寄り添い、袖を掴んでギュツと抱きしめる。

俺はそんな彼女の頭を撫でながらも周りを警戒する。

まだもん娘がうろついている道中だ。

気は緩めない。

「ねえ…」

「どうした?」

「この冒険が終わったらどこかに家を作りたい…」

「…」

「一緒にね、静かに暮らそう…」

「……なんだ、ちゃんと要望あるじゃないか」

「ダメ？」

「良いよ。でもそれはこの冒険で少しでも自然災害を克服してからだな」

彼女がこの旅ついて来たのは過酷な冒険を経験して心を強くすることだ。

雷の音なんかには負けない強い精神力を得たいと考えていた。

この事は前々から考えていたが、彼女はあの村からどうも踏み出せずにいた。

しかし旅人の俺と出会って仲間にして欲しいと言った。

俺は「いいよ」と了承する。

そして彼女はこの旅について来たのだ。

あと、雷が落ちたあの日の事を聞いた。

何故俺の手を布団の中に潜り込むまで引いたのか？

「自然があなたなら大丈夫だと言ったから。」

意味はよくわからないけど彼女は俺を運命の人とかそんな感じに見出したらしい。

ブラハムを思い出すな…

それでも今はまさにその運命の人だったのか旅をしている。

「エリツサ、今の君は雷の音とかに負けない君かな？」

「いや、まだ不十分だよ…」

トラウマは簡単には治らない。

それはわかっていた。

「そうか、ならまだ旅を続けようか？」

「そうする…」

「わかった。ならちゃんと付いて来いよ」

でも彼女は弱くない。

自分よりも大きなもん娘相手でも立ち向かえる精神を持っている。

いつかトラウマも克服してくれるだろう。

ダメならダメで仕方ない。

それでも俺はただ彼女を見守るだけだ。

「ワガママちゃんとおった…」

「ほお？」

「フラッグ、少しだけ下向いて…」

「？」

俺は素直に下に俯く。

エリツサは素早く目の前に回り込んだ。

両手でこちらの頭を固定すると一気に引き寄せ…

「んちゅ…」

「!？」

「ん、んん、…ちゅぱっ」

重なり合った唇は離れる。

エリツサの瞳はゆっくりと見開かれた。

ブルー色に染まる綺麗な瞳がこちらを覗き込んでいた。

口付けを解放すると少しだけ頬を緩ませて、柔らかに笑みんだ。

「ぐ」馳走さま…」

「…それでも随分と遠慮気味なワガママだな？」

「ならもう一回…」

「あ！ 待ったエリツサ、敵がいる」

俺はエリツサを軽く突き放すと武器を構えた。

すると『ピュツ』と空を切る細いモノが横を通り過ぎた。

遠くにいたもん娘の眉間に刺さるとゆっくりと倒れた。

「コレでいい…」

「……え？」

「だからフラッグの続きをもらうね…」

「え？ ちよ!?!…んんっ!?!」

「ん、んくっ、ちゅぶ、ちゅ…」

そうすると次は先ほどよりも情熱に啜われてしまう。

やばい、頭がボヤけそう…

てかそれよりも弓を射ったエリツサの瞳は冷徹な色をしていた。

綺麗に青色なんだけど、どこか怖かった。

このふわふわエルフは物静かな分、自然災害に負けないほどの恐ろしさを持っているようだ。

「んん……ちゅ……ふふ、美味しい……」

「う……そ、そうですか……うあ……」

脳みそがふわふわする。

危ない、よろけそう……

エルフは淫乱とか言うけど強ち間違いじゃないかもな。

この子はエルフだし夜になればそれなりに食欲に染まったりもする。

だからこのキスはまだ断片に過ぎない……

そもそも原作通りにエリツサはお口が器用だからキス一つで狂わされる。

バトルファッカーだけあるのか意識が持って行かれるレベルで口付けが上手だ。

口付けが終わると俺はその度にフラついてエリツサに支えられる。そのやりとりばかりだ。

「行こう、フラッグ。　続きは宿で沢山しよう？」

「……」

俺は既に彼女に射止められていたらしい。

俺の名はフラッグ。
ふわふわなエルフの人肌に触れている。

e n d r o o t 【バトルファーカーのエリツサ】

エル end

く ライラの大滝 く

「1、2、3、4……ふん、ふん……7回か」

子供の頃の川遊びを思い出す。

俺は綺麗な川で水切りしてるところだ。

わざわざ遊ぶためにココまで来たわけじゃ無いが、太陽に反射されてキラキラと綺麗に輝く川を見ると、ガキ大将の頃を思い出したので少し楽しみたくなった。

靴を脱ぎ、ズボンを捲り上げ、川に足を浸す。

ひんやり冷たくて気持ち良い。

長旅で歩き回った足の痛みと疲労が拭われて行くようだった。

「そおい」

それから平べったい石を探すと水平に投げ飛ばし、水切りで遊ぶ。かなり良い形をした平石があるので結構な回数を水切ってくれた。やばい。

少しだけ楽しむつもりだったのに川遊びが止まらない。

川岸に移動して頭だけを水の中に突っ込む。

「……ふはあ!! 水ウメエ」

水も非常に美味しい。

人気も無いから隠れた憩いの場だな。

周りは静かで、水のせせらぎは心地よい。

「お腹すいた、作るか」

ある程度遊ぶと調理道具を取り出し、料理を開始する。ヤマタイで手に入れたうどんの乾麺とカツオの粉末、そしてこの川から汲み上げた美味しい水でうどんを湯がき、そして完成させる。最後に乾燥させたかまぼこを乗せて、多少彩りを良くする。木影に腰を落として、割り箸を片手に準備完了だ。

「さーて、早速いただきま………誰だい？　そこにいるのは」

◇

私の名前はエル。

お母さんがマーメイドだから私もマーメイド。

でもお父さんは人間だったようだけど、あまり話してくれない。

私が生まれたときははいなかったから多分死んでしまったのだと思う。

人間ともん娘は寿命に差がある。他にも種族的強さも差がある。

だから長くは生きられないらしい。

お父さんが居ないのは少し寂しかったけどわたしには優しいお母さんがいるから大丈夫なんだよ！

でも少し過保護すぎるのかな？

あまりお外に連れ出してくれないの。

ジエネラルマーメイドをお供につけたら少しは外に出れるけど最近はあまり洞窟の外に出させてくれない。

だから私にはあまりお友達がいらない。

同じ年くらいのマーメイドの女の子と遊ぶことあるけど、私のお母さんがクイーンマーメイドだからみんな身分の違いを気にしてあまり寄り添わない…

マーメイド達は私に遠慮するんだ。

だから『他の種族』とお友達になろうとすれば私にも遊び相手が増えるかな？ もちろん身分を隠した上で友達になってくれた子とお付き合いすれば問題は解消されるかもだけど…：…なかなかお外に出れないから困ってる。

そんな感じに悩みを持ちながら私はマーメイドの隠れ家として使われてるライラの大滝で過ごしていた。

しかしある日、お母さんと門番のジェネラルマーメイドの目を盗んで私だけが知る秘密の抜け穴からこっそりと抜け出した。お目付役をつけていないが、少しくらいは良いでしょうと甘い考えで外の空気を楽しんだ。

久しぶりに浴びる日差し。

もちろん洞窟からも日差しは浴びれるが、草原の上で浴びれる日差しは全くちがう。

綺麗に済んだ空気と小鳥の鳴き声は気持ちよく体に染み渡る。

だけどお母さんが心配してると思うと罪悪感が湧き、引き返そうと考えた時だった。

水を切る音が聞こえた。

この近くに誰かが来るのは珍しい。

いまこのライラの大滝はマーメイドの縄張りだからマーメイドよりも力劣る生き物はココに踏み込まない。

私はそのことが気になったので音のする方へ向かう。
茂みに隠れて観察すると…

「人間!？」

男の人が川に顔を突っ込んでいた。

そして男性は顔を上げると『うめえ!』と叫び喜んでいた。

それから川の水を鍋に汲み、硬くて白い棒の束を投入すると湯がき始める。

最後に粉状を鍋に入れて味付けをすると、鍋ごと食べ始めようとしていた。

この時、私は仲間人間が近くまで来てることを知らせるべきだった。ジェネラルマーメイドを洞窟の入り口で待ち受けさせ、そして対話でお引き取りを願うように手配させるべきだった。

しかし私は眺め続けていた。

楽しそうに自然の恵みを受ける人間の姿から目を離せずにいた。

だが夢中になり過ぎた体は前に乗り出すと体を支えていた枝をポキリと音を立てて折れてしまい、うつ伏せで倒れ込んでしまう。

「!？」

……………見つかってしまった。

「誰だい? そこにいるのは?」

人間はこちらを睨む。

見つかってしまった…

私は好奇心に動いてしまい、そして失敗してしまったことに後悔す

る。

ここから逃げなければならぬのに体は怖がって動かない。

私にわかる。

あの人間はどこか強い。

本能が逃げることができないう言っていた。

「(お母さんっ、ごめんなさいっ)」

わたしは…

母に謝りながら覚悟を決めた…

だけどそんな覚悟は裏切ってくれた。

「……なんだ、マーメイドか。 とりあえず用があるならあとでしてくれ、うどんが伸びる」

「え…」

男性は特に興味は示さず、お昼ご飯にありつき始めた。

私の心配は彼の食べる音で段々と消え失せてしまう。

「うん、ヤマタイの乾麺もうまいな。 職人からは試作品として貰ったけど結構いけるじゃん」

「……」

「カツオ出汁も効いてるし、麺類にはピツタシだ。 さすがヤマタイ

「と言うべきか」

鍋ごと楽しむ彼の姿はまるで子供のようにだった。でもヤマタイと言う単語から彼は色んなところを旅する冒険者だとすぐにわかった。

格好も冒険者が着こなすような姿だ。

ただ襲いかかるもん娘を倒すだけじゃなくて、この世界を楽しむような空気を感ぜさせる。

だから、羨ましく思った…

「……君はさつきからそこでジツとこちらを見てるがどうしたんだ？
食べる邪魔をしないのはありがたいが」

「え？…ええと…」

「…もしかしてこれ気になるのか？ ならこっちに来いよ。 出汁も余ってるし、おかわり作ろうと思ってたから。 よければ一緒に食べるか？」

「!!」

男性は最初と違って柔らかな雰囲気を漂わせると私を食事に招く。

本来は警戒すべきお誘いなのだが…

「良いの？」

「ああ。 一人分増えようが変わらない」

そう言うと彼は同じ料理を作り始めた。

湯がき終えるまで少し時間があるようだ。

「ところで君の名前は？ おれはフラッグ」

「わたしはエルだよ」

「エル…?? ああ、そうか…なるほど、可愛い名前だな」

「う、うん！ えへへ、ありがとう…」

何か考える素振りを見せるが彼は私の名前を褒めると鍋の中を長い棒二つでかき回す。

「ここら辺に住んでるのか？」

「うん。今はあの洞窟に住んでる」

「そっか。 そうなると、あの洞窟はマーメイドで沢山なのか？」

「え？ うん。 しばらく前に滅茶苦茶強い女性が現れてね、それでマーメイドこの洞窟に追いやられたの…あ！ ここ、これは内緒だからね！」

「わかったよ、内緒だ。 でも災難だったな」

彼は野菜をハサミで切ってお鍋に投入する。

「ねえ、フラッグは冒険者？」

「そうだよ。 俺はこの世界を歩き回って、色んなところを冒険する」

「一緒に冒険する仲間はいないの？」

「いないよ。ずっと一人だ」

「……お友達も？」

「いないね。どこかに腰が落ち着いたらお友達は作れるけど、旅してる時はお友達は作れないかな」

彼は少し困ったように笑う。

でもあまり寂しくないようだ。

「ところで君は知ってるかい？　いまグランドノアとグランゴルドは戦争中だったってこと」

「そうなの!？」

「うん。俺はその戦争に参加したくないからこころ辺まで逃げて来たんだ。だからしばらくココで身を潜めさせてもらう。だから俺もここに居ることをマーメイド達に内緒にしてくれ」

「あ、うん！　わかった！」

フラッグはそれだけ言うと火を止める。

鍋から“うどん”と言う食べ物を取り分けるとわたしに渡してくれた。

「熱いぞ」

「う、うん……」

わたしは初めて見る食べ物にワクワクしながら一口放り込む。
熱々だけど美味しい味が口の中に広がった。

「美味しい!!」

「それは良かった」

彼は私の反応を見て満足そうにすると彼は鍋ごと食べだした。

「冒険すればこんな風に美味しい食べ物にありつける。エルも世界を見たいと思ったら旅すればいい。誰かと一緒にとか…な？」

「旅…誰かと一緒に…」

「まあ強くないとそれは難しいけどな」

「私はそれなりに強いよ！ だってお母さんの子供だから！」

「エルはお母さんのこと大好きなんだな」

「うん！」

彼は熱々のお鍋にもかかわらず出汁をゴクゴクと飲み干してしま
う。

そのあと『ぐ』馳走さま』と手を合わせた。

「ねえ、フラッグはまだココにいるの？」

「ああ、いるぞ。 グランドノアから身を潜めるためにな」

「それなら街に飛んだりしないの？ ノア地方以外とか？」

「人間のネットワークはあまり舐めない方がいい。俺がもし街に行けば、グランドノアから派遣された優秀な情報屋などが俺のことを捕まえようとする。フラッグって人間は腕が立つから戦争に加えよう……とかね？ だからこうして人気の無い場所に逃げ込むんだ」

「大変なんだね……」

「ああ。力を持つとそりやな」

「……じゃあ、しばらくココに居てくれるんだね？」

「なんだい？ 俺がココにいるならまた遊びに来ようとか思ってるのかい？」

「えへへ、フラッグお兄ちゃんと居ると楽しいから」

「そうか」

「そしてね！ 私がお兄ちゃんのお友達になってあげる！……ダメかな？」

「!!……そうか、ありがとな」

フラッグは柔らかく笑みながら私の頭に手を置くと優しく撫でました。

初めて人間に触れられたけど、それは暖かに感じられた。人間の体温は人魚よりも熱く高いと聞かされていたが、火傷するような熱さではなく、嬉しくなる温かさを感じられた。

「だけど段々と恥ずかしくなった私は「ごちそうさま！」と容器を置いて逃げるように川の中へ飛び込んだ。」

「お、お母さんが心配するから帰るね！」

「わかった。またな、エル」

「うん！　またねフラッグ！　また来るから！」

川の深いところまで潜ると急いで離れました。でもそれは怖いからじゃなくて、恥ずかしくなった顔を見られたくないからだと思っている。

でも、また彼に会いたいと言う気持ちで沢山でした。

その後、私だけが知る洞窟の抜け道からライラの大滝に戻ってルンルン気分で自分の部屋に戻りました。

「お母さんは人間って危ない生き物だと言ってたけど、みんながみんな悪い人なんじゃないよね？」

撫でられた頭に触れながら、今より幼い頃に教えられた疑問と答え合わせをする。

人は野蛮な生き物と聞いてた。けれど人間の彼は別にそんな事は無かった。優しさで接してくれた。

でもお母さんの言葉だつて信じたい。

「……だから、それはわたし自身で決めないとダメだよね」

お母さんは言っていた。

上に立つ者は何事も自分の目で確かめて、そしてそれを自分の中で真実に変え、答えにしなければならないと。

だから私はお母さんの言葉だけじゃなくて、自分でもそれが誠かを知らなければならぬ。

「また、フラッグに逢いに行こう…」

ウキウキ気分の私を見たお母さんには何があったのか尋ねだけど、楽しい事に巡り会えたと濁した。

深くは追求されず、ただ「良かったね」と一緒に喜んでくれた。

それから次の日もフラッグに会うため、私は秘密の抜け穴から抜き出してライラの大滝の外へ飛び出した。

彼と初めて出会った場所まで向かう。

その近くにハンモックが作られていた。

フラッグはその近くで小さなアクセサリを草原の姉に沢山ばら撒き、細かく整理していた。

彼曰く大事な生命線らしい。

私はフラッグのアクセサリに付着した汚れを落とすお手伝いをしながら、旅の話を伺った。

例えばヤマタイの山にいるオロチとお供え物のお団子の味を当てるゲームをしたと話してくれた。

なかなか接戦だったり面白い話をしてくれた。

勝敗は引き分けだったが、楽しいひと時を与えてくれたオロチはお礼とばかりに軽いおまじないを掛けてくれた。

旅を続けていればそのうち種族的変化をもたらすらしい。

他にもグランドノアのコロナムで開催されたエキスパートクラスの大会に出場した時、回復アイテム無しで決勝戦まで突破するとそのまま優勝した話も聞いた。全てトランザムで完封したと言ってたけど……トランザムってなんだろう？ ……トラとハム？ ……違うよね？

でもコロナムで暴れすぎた結果、グランドノアがフラッグを軍に加えようと勧誘が激しくなったとも聞いた。自業自得な部分はあるけど面倒だと頭を抱えていた。その結果、戦争中は隠れるためにココまで来たらしい。

でもこれにより彼が強いことはよく分かった。

ココまで来れたのも納得いく。

腕の立つ冒険者ってこう言う人の事を言うのだろう。

だからますます彼のことが気になり、私は何度も何度も会いに行つた。初めて作った人間のお友達と遊ぶため。また世界を見て回っている旅人の話をを聞くために私は彼との時間を楽しみにしている。

だけど出合いがあれば、別れもある。

数日経過すると、彼は戦争が終わった事を知るとライラの大滝付近に作った拠点を片付けて旅立つ準備をしていた。

「エル、いつかまた会おう」

「うん！」

寂しい、行かないで……………

なんて事は言わない。

だって私もいつしか、この世界を旅して彼に会えば良いのだから。

◇

出合いは必ずしも良い展開であることは無い。

「…な、なんでココに……」

「俺は冒険者だから何処にいても可笑しく無い。それで？ このサン・イリアをどうするつもりだ？……マーメイドのエル」

俺はグランドノアの戦争が終わった後はサン・イリアまでやってきた。

ここはマキナの研究が進んでる大国であり、マキブも回収してるのではないかと考えた。

そのためサン・イリアに寄ったが、タイミング悪くもん娘による殲滅戦争が開始された。

そのまま俺は巻き込まれた。

戦争に参加したいとは思われないが目の前で無力な人が襲われるなら助けようと思って襲いかかってきたマーメイド兵と対立する。

ダブルオー系のファングを敵の真上に飛ばして気を逸らすと、何度も使い慣らしたトランザムを発動して先陣を切ったジエネラルマーメイドを斬り刻む。

最後に飛び交うファングを刺して動けなくした。

殺してはいないが、その光景に敵の動きが止まる一度トランザムを解除する。

使い切ったからの反動がやばいので。

そのため、紅く灯った体は元の色に戻る。

エルは紅く灯っていた正体を知ることになった。

「エル、君は人間の敵であるのか？」

「違う!!」

「!!?」

エルの叫びは今回の作戦を全否定することになる。
そのためエルについて来た仲間は驚き目を見開いた。
でもごく一部のマーメイドは目を閉ざして反応しない。
人間に友好的なマーメイドもいるのだろう。

「違う!! 違うの!! これは!これは!!」

「……」

「違うの…違うの…ちがう、の…」

エルは俺の言葉に怯えながら涙を流し始める。
やってる事は人間を脅かす所業。

しかしエルは間違いだと理解してるからこそ、涙を流しながら否定する。

「なんか理由があるんだな？」

「!」

「俺の友達が苦しそうに喚いてるんだ。何かあるんだろう」

「っ………みんな、武器を、下ろして…」

エルの指示により武器を下ろすマーメイド兵達。

ごく数名はエルの指示に反発しようとする奴もいた。

中には戸惑ってまだ武器を下さない奴がいたりとしたが、最終的には全員の武器を下げられる。

「フラッグ……ぐめ」

「違うなエル。俺には言わなくて良い。このサン・イリアに言うセリフだ。と、言ってもこの状況じゃどうもな…」

街中は大混乱。

まだマーメイド兵の侵略は本格的に始まっておらず、入り口にいるサン・イリアの兵しか倒されていない。

ただ一部の海賊マーメイドは先に街中へ向かってサン・イリア兵と攻防が続いている。

本格的な制圧が始まった訳では無いが人間よりも強い兵が大量になだれ込もうとしてるため、街中は混乱に陥っていた。

「エル、何故こんな事をしたのか話が聴きたい。いいよな？」

「うん」

「よし。じゃあ移動しようか。このまま入り口に軍を展開するのよろしく無い。一旦下げてくれたら助かる」

「うん、わかった。みんな、一旦このサン・イリアから軍を引くよ」

素直に聞く者、不満げに言う事を聞く者で様々だ。しかしマーメイド兵の大体は、エルと俺の関係が気になって仕方ない。何せ次期女王となる器がただの人間と対等に話すからだ。

さて、サン・イリアからやや離れた場所に向かい、そこらへん湖の近くまでやってきた。

俺は切り株に座り、エルも俺の近くまでやってくる……が、やや遠慮気味な感じがする。やはり人間が住まう街に攻めようとしたからだろう。その俺も武力的に支配されそうになってた側の人間だ。でも原作を知ってる俺だから、エルを攻め立てようなど考えやしない。

なので…

「うどんでも食べながら話を聴くとしようか」

「！」

「食べたいだろ？」

「う、うん！」

と、言つて俺はうどんを湯がき始めた。
怒つてないアピールのためにも一緒に食事をするのだ。

「しかし久しぶりだな、エル。 いや、一週間程度だからそんなに時間は経つてないか」

「でもフラッグがいなくなって寂しかったよ」

「そうか。 でも君が旅をすればいつでも会えるようになるさ。 今
回みたいなのはレアケースだけだ」

うどんを器に入れ、お互いに食べ始める。

しかしお目付役のマーメイド兵は毒を盛った可能性を考えて止めようとしたが同じ鍋で作った料理だ。 まず俺が食べることで無害を証明すると黙り込んでくれた。 でもまあ次期女王を守りたいその精神は悪いことではないから責めようとは思わない。

さて、それからエルに話を聞き続けた。

やはり原作通りと言うべきか、母親に『人間はヤベーやつ』と吹き

込まれたらしい。

でもエル自身は原作とは違って、人間を侵略して恐怖に陥れてしまうのは間違いだと理解していた。それは俺と出会った事で変わったのだろう。

しかしエルは母親が大好きであり、母親が言うことはなんだって聞き入りたい。そのため母親を困らせる事は出来なかった。さらに言えば次期女王として軍を率いれる実績すら積まなければならぬ立場だ。

このように彼女は悩み続けていた。

これらを放棄する事はできず時は流れて、遂に決行の日が来てしまう。

母親の期待に応えたい気持ちが優先されてしまい、軍を率いてサン・イリアに侵略を開始してしまった。

でもそのかわり、武器を持たない人間は襲わないでと命令を付け加えた。殺傷も論外だとエルは指示を出す。ただ敵の城を落とすだけ。阻む敵だけは戦って退くようにしたのだ。

しかし半分勝手に加わった海賊マーメイドは言う事は聞かずに、エル達に便乗して街中で暴れていたらしい。

精鋭部隊であるサン・イリア兵によって追い出されたが。街中はあまり被害が無かったのは原作とは違う展開だな。

だが気にした方が良いのはエルがこの後どうしたいかだ。

侵略しないで去るならそれでいい。

だがこのまま侵略を行うなら俺は人間側としてエルたちと戦う羽目になる。

そうなれば俺とエルじゃなく、人間ともん娘の争いだ。

そこに平和や友好関係は意味をなさない…

「私は人々を襲いたくない。ねえ、どうしたら良い？」

彼女は侵略の選択技は捨てた。

だからどうしたら良いかを尋ねた。

自分ではもうどうする事も出来ない…

そんな気持ちで押しつぶされ、まだ幼い顔立ちを持つ彼女の瞳から涙が流れ出した…

だから、原作を知る俺はこのために鍛えてきた。

「俺がエルの母と対話しよう」

「!!」

「人間と人魚が喧嘩しなくても良いようにやってやるさ…」

アレからヤマタノオロチのおまじないが効いた。

そうして『対話』に向いた種族に変わった。

だから敵の憎しみを根絶するときだ。

◇

これは一人の人間の話。

ライラの大滝の最深部で激戦が繰り広げられた。

それは金色に眼の奥が染まった『イノベーター』と呼ばれる青年。

そして人間に増悪を抱く現クイーンマーメイドが『対話』を行なっていた。

最初は少しだけ言葉を交わした。しかし声に耳を傾けなかった。それだけ人間に憎しみを抱いていることを証明している。だが彼も退くことは許されなかった。

それは人間のためか？

またもん娘のためか？

もしくは次期女王となる彼女のためか？

それははつきりしない。

ただトランザムで体を紅く染めれば、憎しみを吐き出すクイーン
マーメイドと戦うだけ。

大津波を起こせばクアンタが扱うGNソードで斬り裂いた。

大魔法が来ればGN粒子をレーザー光線にして打ち消した。

青年は完全に人間を超越した力で戦った。

クイーンマーメイドが地に伏せてしまう。

力が弱まつてる間に青年はエルの手を握るとトランザムを行った。

他者と表層意識を共有する。

簡単に言えば、三人と心を通わせた状態だ。

『人は巨大な力に恐れて誤ってしまったけど』

『だがそれを娘に引き継がせるべきではない』

『そして娘の事をもっと知ってあげて欲しい』

『エル…』

『お母さん…』

クイーンマーメイドと『対話』を繰り広げた。

それが終わればクイーンマーメイドは心を落ち着かせていた。

その目はすぐく穏やかで怒りは静まっております、優しい母親であつた。

クイーンマーメイドはエルを抱きしめて、エルはお母さんに抱きし

められて喜んでいた。

こうして人間と人魚の関係を悪化させてしまう流れは無くなる。
原作はパラドックスとなったのだ…

◇

あれから時間がかかりの時間が経過したの。

私は次期女王として玉座を得て全てのマーメイドを束ねている。

あ、全てと言っても海賊マーメイドは知らないよ？

私が束ねているのは静かに暮らしたいマーメイド。あと人間と共存を望むマーメイドだけ。あと人間と

その道のりはなかなか大変だったけど、わたしにはあの人々が常に寄り添ってくれたからこそここまで来れた。

それまでは世間知らずな子供だった。

でもあの人と世界を旅して、色んなものを見て、沢山を教えてくれた。

お陰で心も体も強くなり、女王としてふさわしい存在になれた。

懐かしい…

もう100年以上前の事なのね。

あれは確か、ライラの大滝の近くで彼と出会い、うどんを食べて、友

達になって、私の母を助けてくれた。

それから世界の広さを知って彼と旅をした。

滅びに向かう世界を救うために彼は対話を重ね続けた。

わたしも共にいた。

そして全てが終われば彼と結婚した。

指輪を嵌めて、口付けをした。

すごく幸せだった。

それから子供を育んだ。

すごくしあわせな人生を………彼と送った。

「おいおい何が『しあわせな人生を送った』だよ？ 俺はまだまだ全然生きてるし取り残されたアポトーシスと絶賛対話中だぞ？ まだまだ新種も現れるし…」

「かと言って体の半分以上がメタルになるなんてバカな人」

「イノベーターだから仕方ないね。 その分若いままの姿でメタルになってる。 夫がイケメンの姿のまま嬉しんじゃないの？ かれこれ100年はこの姿だからな」

「ふふ、メタルに関してはもう慣れたから良いけど。 でも私はあなたがヨボヨボでも愛の形は変わらない」

「そうか、ありがとう」

バチャバチャ

「もう！ お父さん！ お母さん！ 子供の前でイチャイチャしすぎ！」

「クイーンマーメイドとしての立場に疲れてるのよ。 夫の前ではイチャイチャしたくなるのよ」

「そんな訳だ。 だから、子供はお友達と遊んで来て、どうぞ」

「うー!! パパ大嫌い!!」

「ええー、そんなー」

「あら？ 別に嫌いでも良いわよ？ パパは私が貰うから」

「なっ！ ダメ！ ダメダメダメ!!! 私のお父さんは私の!!」

「いいえ、残念ながら私のよ!!」

「むー！ ならお父さんの事襲ってわたしも繋がり合うから！」

「ぶっ…」

「それは絶対にダメよ！」

海深く溶け込みあった仲の良い夫婦がいた。

その人間と人魚は共存の架け橋となっていた。

そして…

二人から生まれた子供は人間と人魚が愛し合ったことで育まれた平和の象徴、その証となる。

「とりあえず二人とも喧嘩はそこまで。今日の夜ご飯はヤマタイのうどんだよ」

「ほんとう!?!」

うどんのように幸せはどこまでも伸びる…
愛情と共に啜り合った。

俺の名はフラッグ。
対話を重ねた小さな人魚の隣人。

e n d r o o t 【プリンセスマーメイド】

ジエシー end

この世界を堪能して80日は経過したか？

最近記憶に強く残った出来事と言ったらノア地方で戦争が起きた事だろうか？

いやー、アリ娘は強敵でしたね。

人海戦術に名に恥じぬ黒く染まった津波のようだった。ひたすらハモニカ砲とデイバイダーで広範囲を殲滅したり、夜戦時に月明かりが良ければサテライトキャノンで一掃したりとこちらも物量で押し切った。

リロード時間は長いけどこのマキブ達には本当に助かった。

お陰で黒い大津波を打ち払った英雄として酒場では大騒ぎだった。

これもマキブ様々です。

それから戦争が終わり、次の日に目を覚ますと体に何か変化を感じた。

ステータス画面を開くと何か新しく変われる状態になっていた。

これが種族的進化だと理解してから急いでイリアス神殿へ飛んで行った。

そしたら「オールドタイプ」って種族に変わることができた。
てか種族的扱いなのかコレで

この種族に就いた理由はわからないが、おそらくガンダムX系の武装を使い続けたからだと思う。反攻作戦に参加する前もこれらの武装を重点的に活用していたくらいだ。

なんと言うか孤独奮闘してる旅中だと『一人 対 多数』な状況が相次ぐため、ガンダムXの広範囲武装に頼らざるを得ない。

もちろん弾幕で制圧するZガンダムや圧倒的パワーをまたガンダ

ムZZも候補にあったが、俺はNTみたいに飛び抜けた強さもない。常にノーマリティーな戦いで巧みに凌いできた。だから『オールドタイプ』の枠に落ち着いたと考えてる。

しかしこれらの種族判定については、ありとあらゆるガンダムが使った兵器に触れてる時点でオールドタイプかニュータイプのどちらかに行き着くのも定めの一つなんだろうか？

しかしガンダムってのは戦争に巻き込まれる事で自分の在り方と存在意義を理解することが多い。

だから反攻作戦と言う名の「戦争」に触れたことで俺の中にある分岐点が今回の騒動で揺れ動いたのかもしれない。

その結果としてオールドタイプの判定を受けたではないかと俺は考えている。

ちなみにオールドタイプの種族効果は『マキブによる広範囲攻撃のSPとMPの消費量が下げる』効果を持っていた。

これ初手でバンバン強い武装を扱ってもガス欠しないのありがたいえ。

となると？

マキブの力が最終段階にいたるとしたら…

ウイングゼロのゲロビ（メイン）撃って

運命でゲロビ（射CS）撃って

セブンソードのゲロビ（格CS）撃って

V2ABでゲロビ（サブ）撃って

サバーニヤ（特射）撃って

ハモニカ砲（特格）撃って

サテライトキャノン（覚醒技）撃って

ゲロまみれにすれば良いのか？

これは俺の機嫌に左右して大陸一つ無くなりますね。NTの様な不思議な力が無い結果として強力な武装に頼りまくったオールドタイプの末路か。ワンボタンで戦争を決めたい人間らしさ満点だな。

それでもマキブが無いと意味がない。

どこかで発掘でも…

「あ、そうか。サン・イリアの技術室に行けばマキブあるかもしれないな」

確かあの大国はサン・イリア王がメカニックだからもしかしたらマキブを保管してる可能性がある。

原作でもマキナの調査と研究に力を注いでる国家だったな。

この世界にきて何度か寄ったことある街だけどそう言うのを忘れてたな。

うん、いい機会だからちよいと立ち寄ってみるか。

「飛べっ！」

ハーピーの羽を真上に投げ、サン・イリアまで飛んだ。

空に浮き上がり、チラリと大地が見える。

大国同士で争いあった戦後の大地はどこどころ荒れていた。

その中には俺のマキブが挟った部分も含めて…

サン・イリアの技術開発者たちとコンタクトを取り、マキナを超えたマキブの存在に興味を示した。
軽いお手伝いをする事で彼らが保管してるマキブを頂くことになった。

簡単に言えば取り引きだ。

だがあまりマキブを魅せつけるのもアレなので、ザクのマシンガンやヒートホーク、あとスクリューウェップとバズーカのようにビーム兵器は隠した上で見せることにした。

ビーム兵器は不味いと思ったので、技術開発的に追いついてるレベルのものだけを見せた。

∴

∴

そうして数日間経ったある日のことだ∴

研究のお手伝いまで時間があることを考え、出来立てホヤホヤのノアパンを購入してから街中でフラフラと食べ歩く。

ほのぼのとした大国を眺めながら墮落した生活でもしようとか考えていたら、突如目の前の水路から無数の影が飛び出してきた。

「っ!?!」

俺はノアパンを手放し、バックステップしながらヒートホークを手元に召喚する。

飛び出してきた水しぶきにより地面に落ちたノアパンが台無しになつて少し落ち込む。

すると敵が武器を投擲する構えを影で確認したので咄嗟にヒートホークを投げつけて相殺した。水飛沫は落ち着いて正体を現す。

「なっ、人魚だと!?!」

「たああ!!」

襲いかかってきた敵に驚いてると大きな尻尾で叩きつけてきた。

俺は咄嗟にガーベラストレートの鞘で受け止めるが全体重をかけられた一撃に耐えきれず地面に叩きつけられた。

「あぐっ!!」

流石、マーメイドの將軍として君臨するジェネラルマーメイドだ。

ジェ^將ネ^軍ラルだけある。

尻尾のたたき付けでこの威力か。

「もう一撃よ!」

「!?!」

地面に叩きつけられてバウンドダウンしていた俺はもう一撃尻尾で薙ぎ払われる。

二撃目を受けて簡単に叩き飛ばされてしまう。

空っぽの樽を破壊しながら壁に打ち付けられた。

「っ、い、痛っ…」

レベルはそれなりにあるからHPは削りきれなかったけれど、鞘で受け止めるのは愚策だったか。

あと頭がグラングランする。

音波属性にやられるってこういうことなんだろうか？

お陰で街中の至る所でマーメイドに襲われてる人々の悲鳴がよく聞こえる。

恐らく鼓膜が制御できてないな。

脳みそにもダメージを受けたせいで無用な音まで拾ってしまう。

酷く煩わしい…

「てか、原作者考えれば撃滅戦争が始める頃か？ 完全に忘れてた…」

「なに!? まだ意識があるのね、あなた！」

「俺は全力で抵抗する」

ハイパーバズーカを召喚して先ほどのジェネラルマーメイドに撃ち放つ。

加速する実弾にジェネラルマーメイドは三又の鉾、通称トライデントで斬りはらわれた。

しかしジェネラルマーメイドは爆発に埋もれる。

「うえ…」

ただしバズーカの爆発は俺にとって爆音に変わり耳に劈く。

音波属性弱体化状態、マジで嫌い。

汚い、流石マーメイド汚い。

いや、身体は綺麗なんだけどね？

しかもジェネラルマーメイドに関しては無印の終章でお世話になりました。

殺伐とした天使戦の最中、天使よりも天使な癒し枠として大変お世話になりました。

ありがとうございます。

でも今はありがたくない。

帰れ、街中で人を襲うなもん娘共め。

「くっ、爆発するなんて。でもこの程度、どうって事ないわ」

そうですか。

全然元気ですか。

こちらもただのバズーカで倒れるとは思ってない。

でもああやって回避せずにトライデントで斬りはらう感じだと相当の戦士タイプだな。

逆にやりやすい。

「挨拶代わりに尻尾で叩くとは随分だな？ お陰で音がよく聞こえて

頭サッパリしてる。目覚ましには良い一撃だな？ 彼氏さんでき

たら次はその人にやってやれよ」

「あら？ 結構強くやったつもりだけど、よく立ってるわね」

「生憎、ノア地方を一人で歩き回れる冒険者なんでね。そう簡単には倒れてやらない」

「そう……なら私が相手を――」

『トランザム』ツツ!!』

「!!!?」

叫びながら一歩踏み込むと紅い分身を作りだしながらGNダガーを取り出してジェネラルマーメイドに突貫する。

迎撃とばかりにトライデントでこちらを突いてくるがソレを踏みつけ、彼女の頭の上に飛ぶ。

「(トライデント)を踏み台にした!?!」

そのまま彼女の頭上を手のひらに納め、片手で逆立ち。

そのまま切り裂こうとしたが、トランザムが解除されてしまう。

思ったよりもダメージが大きかったのと、音波属性弱化状態に体が慣れていないのか、トランザムが解除された。

想定外な展開に勢いが殺されてしまい変に力が抜ける。

彼女の頭の上で1回転すると…

ストン…と降りた。

「ひゃっ!」

「うえ…?」

彼女の肩に座ってしまった。

いや、座るつもりはなかったぞ?

けどなんか、座ってしまった…

「な! なんなの!?!」

「え? あ、いや、どうしてだろう…ね?」

てか、この歳で肩車してもらうとかいつぶりだろう？

とりあえず魔がさした俺はジェネラルマーメイドの頬つぺたに触れてみる。

マーメイドだけあってみずみずしいが白い肌は柔らかい。もちもちしてる。

あと髪の毛も色鮮やかな水色で非常に綺麗である。

マーメイドって基本綺麗だから当たり前か。

「ふうえふあいふああふあうぶぐふぐー！」

「え？なんだって？…くつくつ」

頬つぺを引つたり、グイツと両手で挟んで潰したりとイタズラを施す。

音波属性攻撃の仕返しだ。

このまま調子を崩してやろう。

戦士はこう言うのに弱いからな。

するとトライデントが横から襲いかかってきたので、体を捻って回避するとトライデントの棒を掴む。

「は、離しなさいー！」

「貰った！」

「！」

トライデントを掴んで上に掲げれる。

するとジェネラルマーメイドの腕は真っ直ぐ上に伸びる。

その隙に手を伸ばして脇をくすぐった。

「え？ あはは！あはは！ 擦ぐらないで！あははは！れ！ え!!
ちよ、ちよつと！ ひゃ、ひゃい！」

「つと、つと！ よし、トライデント奪った！」

「しまっ!? つ、ツ、あははは、あ、あつ、ちよつ、た、タンマ、あは
はは!!」

「オールドタイプの擦りだ。 存分に味わえ」

ここは街中だからあまりマキブは扱いたく無い。

そのためトランザムで背後に待って一閃しようと思ったけどトラ
ンザムの解除から、肩車してこの擦りである。

最初はイタズラ心を込めて敵の調子を崩すつもりだったが、思った
よりも反応が良かった。

ほんの少しだけ面白くなってきたので擦りまで試したらご覧の通
り。

あとこのジエネラルマーメイドが擦られる事に弱いようだ。

しかし、あまり調子に乗りすぎて一つハプニングが起きてしまう。

「!?」

擦られたせいでジエネラルマーメイドは体を振らせて、俺は肩車か
らバランスを崩す。

自分で掴んでいるトライデントが顔にぶつかる。

ぶつけた衝撃と音波属性弱体化状態の合わせ技で視界と意識をチカ
チカさせながら、肩車から落ちてしまった。

地面に倒れるジエネラルマーメイド。

そのまま落下する俺。

そして…

ポヨン、ぽよん…

むにゆうう…うう

「んんっ…」

色っぽい声が聞こえる。

また手のひらと、顔に柔らかな感触を味わう。

揺れる意識は正常に戻る。

そして気づいた。

顔を上げればジェネラルマーメイドの涙目で笑い疲れていた顔が目の前だった。

「やばっ!？」

よりによつてもん娘の腹の上だ！

俺は死ぬ気か!?

むにゆ、むにゆ…

「あ、ん、っ…ふふ、なかなか積極的ね」

仰向けのジェネラルマーメイドのお腹の上に倒れていたことを理

解する。

その位置から退こうとするが…

ガシツ!!

ギユウウ!!

「?!?!」

「ふふふ、散々やつてくれたわね。次は私が落としてくれるわ」

俺は腕ごと上半身を強く抱きしめられる。

また彼女の尾びれも下半身に絡みついて脚は動かせない。

彼女の豊満な胸が形を崩すほどに押し付けられる。

随分と魅惑的な状態だが…

これめちやくちや危ない。

「ファ、ファンネ」ん…んん?!」

遠隔操作のファンネルを展開しようとした。

だが俺は生憎オールドタイプであり、召喚速度は遅い。

お陰で召喚は拒否されてしまう。

「んっ、ちゅ、ちゅぶ…」

「~~~~?!」

くすぐったく唇を奪われてしまう。

「ちゅ、ちゅ…んん…んぶ…」

「!、!?!、!…」

もん娘の性技は人智を超えている。
ほんの口づけ一つで理性が狂わされる程だ。
唾液を馴染ませて絡み合う舌。
仄かに甘い味が口の中で渦巻く。
しかも美しき女性と口づけを行ってる事実で頭の中がどうにかなりそうだ。

熱に侵され始める感覚に襲われながらも俺はなんとか躡いてみる。

「んふっ…逃げちゃだめよ」

「っ!？」

気づいたら俺は彼女の腕から解放されてる。

起き上がるうと思えば起き上がれる…と、思いきや、手錠のように腕を拘束する水に包まれていた。

解放はされてない。

むしろ動きがさらに拘束されていた。

「口付けは初めてかしら？　ふふっ、かわいい…んちゅゆっ…」

ジェネラルマーメイドの両手は俺の頬を優しく支えてグツと引き寄せられる。

「ふぁ…あ…」

ダメだ…

脳が痺れる。

揉みほぐされている感覚。

柔らかに重なり合った口付けはこれまで以上に強く押し付けられて、彼女の感触がより鮮明に味わう。

よじる体に力は無い。

啜われる毎に骨抜きにされ始めてどうにもならないのだ。

意識も恍惚に染まり始めている。

「んん、ちゅぱっ……あらっ……ふふ、目がとろくんとしてるわよ？」

「あ、あう……あ」

こんなに甘い口付けは初めてだ。

冒険中はもん娘による性的攻撃を仕掛けられたことはあった。

けれどルカさんほど真面目に食らってやる事はない。

そのためビームサーベルや十手で斬り払ったりして接近を許さないようにしてる。

万が一絡みつかれたり、マウントポジションを奪われても、多彩なマキブならそんな状況はどうにでもしてきた。

……で、何が言いたいかと言うとだ。

もん娘の性技を受けないよう物理的に否定し続けてる俺はあまり性技を受けたことない。

つまり性的攻撃を受けた時の快樂に争う精神力も鍛えておらず、そっちの経験浅いのだ。

学生は卒業しても、大人になるための卒業はして俺なんか性技に長けたもん娘の本気の口づけを受ければ、あとは容易い。

しかもお相手が中章に現れるジエネラルマーメイドだ。

戦闘能力も高ければ性技も長けている強力なもん娘。

ジエネラルの名に恥じぬレベル強さだ。

人間程度、手玉に取ってしまう。

「あ……ああ……っ……」

恍惚に落とされめ意識は朦朧としてまともな判断も出来ない。

このまま溺れていた感情に蝕まれてしまい。

何もかも投げ打ってジェネラルマーメイドと啜り合っていた肉欲は理性を押し退けていた。

「ふふふ、可愛い……いいわよ、そのまま溺れていなさい…」

ジェネラルマーメイドは俺の様子に満足してるのか蠱惑な表情で抱き寄せる。

その性技で心身を奪い、甘えさせるような抱擁で意識すらも柔らかく包む。

魅惑的な肉体は人を簡単に落としてしまう。

その母性本能は身を委ねたくなるほどだ。

もう、あと戻りできないところまで来た。

おちたい。

堕ちたい。

このまま彼女に堕とされたい。

この身を任せたい。

このまま堕とされてしまうだろう…

「っ……十手!!」

「!？」

腰に常時装備しているビームライフルになんとか手をかけてトリガーを引いた。

ビームの刃は斜めに飛び出して水のボールをかき消した。

「ヴェスバーー！」

まだ微かに残る理性を動かして腰に展開したヴェスバーを地面に撃ち放つ。

体が空に舞った。

その衝撃でジェネラルマーメイドの抱擁から解放された。

もし彼女の両腕で抱きしめられたままだったらヴェスバーで抜け出すことはできなかったが、水のボールを使ったお陰で抜け出せた。しかし半分以上力が抜け始めてる体では上手く立ち上がれない。

近くに転がっていたガーベラストレートを回収するとそれを松葉杖代わりに立ち上がり、ジェネラルマーメイドと向き合う。

「う…ぐう…」

しかし視界はボヤけている。

相当ジェネラルマーメイドの快楽に揉まれたようだ。

なんとかして呼吸するが、興奮して紅潮した心拍数を落ち着かせようとすると、女性から注がれる肉欲が喜びが勝る。

深い呼吸が行えない。

お陰で甘い吐息のように掻き消えそうになっている。

「う、うう…あ」

正直な話。

もっとジェネラルマーメイドによってめちやくちやにして欲しかったくらいだ。

彼女が持つあの体で満たしてくれるならどれほど幸せなのか…

「っ！」

でもここで溺れたなら俺の冒険が終わることが心を嫌う。
俺は刀のガーベラを引き抜いて真上から足に突き刺した。

「あゝあゝ、いだあアツ!!」

「何やってるの!?!」

血が溢れる。

しかしお陰で落ち着いた。

肉欲は落ち着き、痛覚が勝る。

液状の回復薬を足に垂らして傷を治す。

「すううううー……ハアアアア……っ!!」

ジネラルマーメイドと混ざり合った唾液が付着した口元を服で
拭って深く呼吸した。

もうなりふり構わない。

街中で扱うのは気が引けるが致し方ない。

ビーム兵器の使用を決めた。

ガチャヤ！（インコム）

チャキ！（アグニ）

カチン！（ハモニカ砲）

シュン！（ヴェスバー）

「!?」

「マキブの本気を召喚したんだ。 覚悟しろ侵略者」

銃口補正と火力のオンパレードをフルオープンする。

最後にビームサーベルを召喚する。

グツと魔力を込めるとビームサーベルは物凄い音を立て始める。

莫大なビーム量が刃となって弾けていた。

「最大出力で解放した『サイサリス』のビームサーベルだ。 そんな槍

ではこれを打ち破れると思うなよ」

「……そう、それがあなたの本気ね……」

雰囲気が変わった俺の様子にジェネラルマーメイドは姿勢を低くして構える。

先ほどまでは、脇を擦ってトライデントを奪えば仕返しとばかりに唇を奪って恍惚に染めていたり、比較的平和な桃色空間だったが今からは違おうと雰囲気が一変する。

上手く力が入らなかった足腰はいつ間にか緊張感によって筋肉を取り戻してた。

重たい武装で戦える。

でも、もう一つだけ。

とある感情を湧き上がらせて後押しする。

それは…

「よくも出来立て熱々のノアパンをびちやびちやに濡らしやがって！
許さないからなあ!!」

「怒りはそこ!?!」

食い物の恨みは恐ろしいと言うが、強ち間違いではない。

怒りと共に重装備で固めたマキブをジェネラルマーメイドにぶつ
けた。

勝敗は言わずもがな。

ビーム兵器が圧倒的な強さだった。

◇

アリス・フィール15世による恐怖の宣戦布告は勇者ルカによる獅子奮迅の活躍により抑えられた。

しかし様々な被害を齎らす。

故に人間とも？娘の間にはたしかに亀裂が走り出していた。

特にその中でサン・イリアに住まう市民達は大きな傷を負ってしまった。何せ友好関係が高く築かれていたところをマーメイドによる侵略を受けたからだ。もん娘の事情を理解する人は少なからずいたが、侵略により壊された人はもん娘を強く憎み、追放の声を上

げていた。仕方ない事だろう。もん娘はその気になれば人を容易く殺せるから。

しかしそれは後にとある次期王女のマーメイドによって暖められる。

だがそれまでは人間ともん娘の間に来上がった亀裂は閉じないだろう。

さて、そんな俺はサン・イリアを早々に離れた。

理由としてはまずあのジェネラルマーメイドを打ちのめした後の事だ。

そのまま侵略を続けるマーメイド達を退けようとマキブをフル活用して街から追い払った。

お陰でサン・イリアではマキナを超えた兵器を使用してる青年がいる話で持ちきりとなった。

そして：

俺は密かに予感していたものが的中した。

それはサン・イリアの技術者の中に狂人らしき人間に目をつけられる事だ。

前も説明したと思うが、マキナによって発展を繰り返すサン・イリアは沢山の研究者と技術者で溢れてるが、その中で特にマッドと言えるほど狂った奴も少なからず存在する。

そこら辺気にしてたのであまりビーム兵器を使えなかった。

実弾属性のマキブしか見せなかったのもそのためだ。

だが人魚の侵略中に俺はビーム兵器のマキブを使い、そして運悪く目をつけられたのだ。

俺は身の危険を感じたのでサン・イリアから逃げ出した。

まあこんな事もあると考えていたから前払いとばかりにサン・イリ

アが保管していたマキブは貰い受けた。

それにそろそろ引き時だと考えたため手を引いたのだ。

また一人旅。

しかたないことだろう。

気持ち切り替えて気ままに旅を始めていたが、俺の身の回りに一つ変化が起きた。

それは…

「ねえ、明日はどこに行く？」

「サン・イリアから離れた場所ならどこでも。あとベッドに武器を置かないで。危ない」

「そんなフラッグもマキブをベッドに散らばせてるじゃない？」

「今はアクセサリーの状態だから良いの」

「持ち運びが楽だし、セコイ能力ね」

「その代わり全てを扱うのは困難極まりない」

「でもそれが人間の得意分野よね？ わたしには無理な細かさよ」

今の俺は一人旅ではない。

とあるマーメイドと旅をしている。

そのマーメイドは「武者修行の旅！」とか言っただけで世界を旅し始めたあのジェネラルマーメイドだった。

しかし『武者修行の旅』については半分嘘であり、本当は「私を負

かしたとある人に会うため」と言っつて内海付近を旅立っていたらしい。

それから運命の出会いと言うべきか、サン・イリアの侵略から一週間経過した頃に彼女と出会った。

俺は彼女の事覚えていた。

彼女も俺のことを覚えていた。

しかし彼女は出会った喜びよりもどこか負い目を持っていた。もん娘として侵略した側だからだろう。

一応サン・イリアは和平が結ばれたので現在は敵対関係も無くなっていたが將軍として攻め入った彼女は穏やかじゃ無かった。

でも俺は気にして無かった。

気にしたのはノアパンの恨みだけ。

だから「久しぶり」と友好的な態度で声をかけた。すると彼女は嬉しそうに飛びついてきた。

敵意も悪意も無い相手に武器を構えることも出来ない。

俺は驚き戸惑いながらも飛び込む彼女を受け止めてしまった。

それからギュツと抱きしめられて、彼女から唇を奪われてしまう。

頬をスベスベの手で包まれて、引き寄せられて、口付けと共に逃げ場を奪う。

抵抗する力も意思も揉み解された。

あの瞬間は忘れることはできない。

「ねえ、フラッグ」

「どうした？」

「あなたは今まで出会った人間の中でとても強い男性だわ。わたしを倒して、もん娘にも優しい。その上わたしを抱き止めてくれた。こんなにも…疼くの。だから……子作りしよう？」

「……………はい？」

え？

なんだった？

「強いあなたとわたしでね？」

「と、突然、ですね」

思わず敬語になってしまうほどの提案に俺は度肝を抜かれる。だが俺の態度にジェシーはやや不機嫌ながらも、ジツと見つめて回答を待っていた。

「……………」

「あ、うん、真面目に答えるよ」

「うん……………それで、どう…か、な？」

トライデントを握り、戦う時は力強い眼差しを持つ彼女も、今は俺の答えに不安を抱き、目の奥は怖がっていた。

平気な顔で振舞っているが「もし断られたらどうしよう……………」そんな感情が見えなくもない。

「良いんじゃないかな。俺とジェシーが寄り添い会う幸せな、家庭…」

「!!」

お互いに相性は悪くないだろう。

むしろ良好な関係を築けるはずだ。

俺は少なからず、そう思ってる。

「そっか、…:…なら」

「!」

ジェシーは肩を掴むと真正面に向き合う。

そのまま頬を支えるとジェシーは静かに目を閉ざし、顔を近づける。

唇は柔らかに重なり合った。

「これからの好意を受け止めてくれるよね?」

「それは好意に行為を掛けてるのか?」

「もん娘は男性を気持ちよくさせることも好意と考えるけど、お腹に子を宿す事を好意と考えるのよ。そんなあなたは『YES』と胸が張り裂けそうな程嬉しい答えを言ってくれた。なら、わたしはやる事一つよ…」

「そうか、なら、お願いがある」

「お願い？ なんでも言つてフラッグ」

「俺やジェシーと同じように強い子供が欲しい。強い子供を産んで」

「ええ、必ず作るわ…」

前までは武器を交じり会えた敵同士だった。でも今は愛を育むために交わる仲だ。

ジェシーは幸福の時間に溺れて、俺は人魚の体に溺れる。

今宵は安宿で激しく絡み合った…

…

…

…

とある人間、とある人魚、この二人から新たな生命が育まれた。

それは強くて優しい女の子のマーメイドだ。

そのマーメイドは、次期女王となったマーメイドの親衛隊総隊長となり、また親友になるほどの器になった。のちに現役時代の母親を超えた将軍となるほどである。

将軍となったマーメイドは母親から受け継いだトライデントと、唯

一残ったハモニカ砲を受け継いで来たる害悪を退け続けた。
その強さはまるで二人の親が望んだ光景だった。

「ねえ、あなた。天国から見てくれてるかしら？ 私たちの子は強く
立派ですよ…」

寿命によって先に亡くなった男の写真に声をかける。

その写真は、マーメイドと寄り添いながら幸福に満たされている笑
顔の一枚だった…

「人として終わることを選んだあなたはどこまでも強かった。本当
は長生きして欲しかったけど…」

写真縦の横には愛した男がこの世を去った事で機能しなくなった
銃と剣のマキブのアクセサリーが飾られている…

世界を救うためにボロボロになったマキブ達は、今も彼と共にいる
のだろうか？

それは天国にいる彼にしか分からない。

「天国で見ている。あなたとわたしの子を」

写真に映る彼の名前は 海ノ 雪旗…
海深く幸せな人生を送った男である…

e n d r o o t
　　おわり
　　【ジエネラルマーメイド】

ナビス end

こんな世界だから廃村やゴーストタウンは幾らでもある。
村がもん娘に襲われたり、疫病で人々が減ったりと、理由は様々だ。
あの三大淫魔も原因の一つだと思う。
干からびた人間も見た。

しかしそう言った類は旅をしていると嫌なほど見られる。旅人からしたら廃村などは掘り出し物のボーナスチェスト扱いだ。貰えるものは貰う。そうは言っても大体は取られているが、それも旅の醍醐味なんだろうと納得しつつもしアイテムが残っていればラツキー程度で考えて手を出せばいい。
たまにミミックがいてビツクリするけどマキブの敵ではない。

「けっほ、けっほ………おえ………」

病状が悪化している。

旅中で風邪を拗らせたようだ。

悠長に廃村なんか説明してる場合じゃない。

「ぜえ…ぜえ………」

雨風が激しくなってきた。

ABCマントを雨がっぱ代わりにしているがこんなんでも雨は凌げない。

村に戻ろうにもハーピーの羽は動かない。戦いの空気を感じたり、災害で天候が荒い事が原因だろう。戻る手段もなく、時間的にまもなく夜だ。どこかで1日を過ぎ、雨風を凌げる屋根か建物を探さないとならない。

だめだ、眩暈もしてきた。しんどい。

「あれは…」

先ほどの説明のお手本とばかりに人気のない寂れた村がある。
廃村だ。

しかもアレは教会か？

それはりに大きいな。

びしょ濡れ覚悟で一氣に進んだ。

雷の音が鳴る。

それに煽られながら建物に踏み込んで、空き瓶に足が取られてしま
う。

「うおお!？」

ABCマントを巻き込みながら地面を転がり、椅子に頭をぶつけて
静止する。ただでさえ熱に浮かされて頭がフラフラするのに物理
的な痛みでさらに痛い。最悪だ。

「うっ、寒い……」

火を焚きたいところだが建物の中でそれは大変危険だ。

我慢するしか無い。

どこが使われてないベッドを探す。

呼吸が酷くなってきた。

本格的に熱に浮かされている。

寒気がしているあたり本格的に風邪をひいてしまったようだ。

「風邪に合う薬あったか？ 無いか…毒消し草で治る？ いや、そん

な訳ないよな。くっそ、頭がボツとする」

どうにかして街に戻れたら良いがハーピーの羽は動かないから自

分の足で戻るしか方法がない。

だが時間的に夜だ。

もん娘がウロチョロしている。

しかもゴースト系が増える時間帯になると弱った体で冒険するのは大変危険だ。

この状態で捕まれハワイ一気に魂を抜き取られてしまう。

「耐えれば……朝まで、耐えれ、ば……」

比較的安全なのは夜が明けるまで立て籠もる事だろう。その間にもん娘から侵入される恐れがある。扉に空き缶などで防犯をする必要はある。しかし体に気力が湧かない。少しだけ、休もう。せめて5分だけでも休もう。そしたら防犯を仕掛けよう。そう考えて壁に寄りかかる。

「はあ……はあ……」

段々と状態が悪化する。

しかし原因は理解していた。

免疫力が薄まっている。

理由は簡単。

ビスケットばかり食べていた事だ。

肉や野菜を食べずに空腹を満たすだけのビスケットを食べていた。

体の中に栄養が足りなくて風邪をひいたのだろう。

自己管理を怠った結果だ。

「……」

視界がボヤけてきた。

この状態で満足に戦えない。
なんとかして休まなければ…
そのためには安全を確保しなければならぬ。
この部屋を安全な状態にしなければ。
しかし眠気に誘われようとしていた。
体が限界だ。
このまま意識を闇の中に投げたい睡眠欲で沢山だ。
それほどに体が重たい。このまま休みたい。

だが安全を確保せずに次を目覚めた時、俺はどうなってるか？
このまま何もなければ死ぬようなことは無いと思うが、眠り込んで
るところを精に飢えたもん娘に見つかれば有言わずに襲われてし
まうだろう。

目覚めても弱った体では抵抗も虚しい。
なすがまま食われてしまうだろ。
気に入られてそのまま飼われてしまうのであれば、しばらくは死ぬ
ことは無いと思うがそれは冒険の終わりを物語る。

一つしかない命でその扱いは嫌だ。
でも、体が動かない…
ああ、このまま意識は堕ちてしまうか。

ガチャ

「!?」

扉の音が聞こえた。
目が覚める。
体を駆け巡る緊張感は筋肉を奮い立たせる。

「ぜえ…ぜえ…」

視界に入ったシルエットは人の形をしていた。
しかし旅人では無い。

旅で培った経験と感覚がもん娘だと警告する。
朦朧とする意識を無理やり覚醒させながら手元にビームライフルを召喚する。

「くるか、くるの…の、か！ けっほ…けっほ…」

今の俺はどんな顔をしているだろうか？

手負いの獲物のように追い込まれた表情をしているだろうか？
もしそうならその表情は極力抑えなければならぬ。
そうでなければ俺の心が負けそうだから。

「あら？ だれかいるのですか？」

目の前に現れたのは小柄な娘だった。

しかし人間では無い、人の形をしたもん娘だ。

そのもん娘は黒いナースの服を着こなしていた。
背中からは翼が、お尻からは尻尾が生えている。

なによりこちらを覗く淡い深紫の瞳は情欲に惑わされそうだ。
そして、戦慄する。

淫魔特有の香りを漂わせていた。

「この状況で、嘘だろ…」

相手の戦闘能力は高くないと思うが、淫魔にそれは関係ない。な
ぜなら今の俺は体力的にも、精神的にも危うい状況だ。淫魔からし
たらそれは最高の獲物となり得る。更に淫魔特有の瘴気に触れた

り、また吸い込んだりして意識が呑まれたら理性は一気に無くしてしまふ。

終わってしまうだろう。

「っ、それ以上、来るなあ！ けっほ…っ、さもないと撃つぞ…！
はあ…はあ…！」

まるで今の俺は敗走してる兵士のようだ。

映画やアニメでよく見るような展開。

だけどそんなこと考える余裕もなく、今はどうにかしてこの状況を凌ぎ切らなければならぬ。

追い払うか？

または倒すか？

できれば消耗はしたくないから前者がいい。

だが戦わざるを得ない状況ならここから死闘を演じなければならぬ。

使うマキブによっては建物は崩れる恐れもあるこの部屋は無事では無いと思うだろう。

だが熱に浮かされたこの頭で考えるが定まらない。 なりふり構ってられないからだ。 それほどに俺は思考能力が低下していた。

ビームライフルが震えて銃口が定まらない。

ああ、でも、やるしか無いか…

しかし、その悩みは杞憂だった。

「た、大変じゃないですか！ は、早く治療しないとその状態は危険ですよ！」

もん娘は俺の苦しいその状態を心配していた。
更にその声は本心からコチヲを心配してくれてるように聞こえた。

「敵意が無いのは理解できた…が。」

「…ツ、ツ、くる、なっ…！」

俺は全力で近寄られることを否定する。

弱めに設定したビームで威嚇射撃を足元に撃ち放つ。
そのもん娘は少し驚いて歩みを止めてくれた。

「はあ…はあ…けっほ！　ぐっ、ゲツホ…！」

段々と荒くなる呼吸。

彼女を弱々しく睨む。

力の入らない体はビームライフルをカタカタと震わせていた。

これ以上は来ないでくれと訴えた。

「私は医師です！　そしてあなたに敵意はありません！　その辛い状態を治せますから！　どうか落ち着いてください！」

「そう思うならこの部屋から出てくれッ、頼むッ！　今はお前らもん娘が怖いッ！」

相手は敵意がなかりうとも油断できない。

外の世界はあまり気を許しすぎではならない。

それが人間より強いもん娘と言うなら尚更だ。

人間なんかではどうしようもない。

だから彼女のご厚意に首を振って威嚇する。

怖くて仕方ないから。

だって、相手は強いもん娘だ…

「最後の警告だツ、この部屋から出て行ってくれツ…」

ヴェスバーも召喚して腰に構える。

如何にも威力が高い兵器であることを見せつけて牽制した。

本当は撃ちたくない。

だが躊躇えば死ぬ未来も捨てきれない。

目の前にいるもん娘が下がってくれることを願った。

「っ、本当は実力行使は好きじゃありませんが致し方無いですね。

……私の目を見てください！」

「!? ……しまっ、ア！… あ、ああ………」

判断力の無い状態だったから、彼女の言葉を真面目に受けてしまった俺は眼を見てしまった。

脚腰に力を無くなる。

精神的抵抗力は即座に奪われた。

恐怖心に絶望しながら前に倒れる。

受け止められた…

「ごめんなさい。でも、大丈夫ですから安心して下さい…」

柔らかな抱擁に包まれながら彼女の言葉が耳に入る。

その声は魔性だ。

弱ってしまっているその身を委ねなくなるほどの優しさ。

脳を簡単に揺さぶった…

「あ」

もう、いいや…

諦めてしまった。

意識を手放す。

一気に闇の中に落ちていった…

ここで俺の冒険は終わってしまった…

◇

どうもこんにちは、フラッグです。

俺の冒険は終わってなかったようです。

「フラッグさん、具合の方はいかがですか？」

「かなり楽になってきた、ありがとう」

「はい、それは良かったです。ですが念のためにお熱を図りますね」

さて、寂れた協会の中で倒れてから一日が経過した。

いま俺のことを診断してるのは『ナーキユバス』ってもん娘だ。

どこで手に入れたのか不明な黒いナース服と大きな注射器を武器にした医療系特化の淫魔のモン娘だ。

ゲームでは開幕『みんなドーピング』にお世話になりました。

もちろん別の方面でもお世話になりました。

なかなかエロチックでしたね。

「お熱測り終わりました。健康に近いです、良好ですよ」

「そうか、よかった」

「あとはちゃんと栄養ある物を食べて、免疫力を高めてください。

冒険者故に食生活も偏りますが、そこを言い訳にして疎かにするとまた倒れますよ？」

「反省してる。ビスケットばかり食べていた俺がバカだった」

やはり栄養不足が原因で風邪に対する耐性が低かったようだ。

てか途中から風邪では済まされず、熱も出てきて本格的に危ない状態だったようだ。

でもまだその程度の症状で良かったらしい。

もし原因不明の全くわからない病気にかかっていたら、治療法などが無くて苦しんでいたのかもしれないからだ。

「雨も降り終えた。ハーピーの羽も元気に動いてるから街に飛べそ

うだな。ナビス、ありがとう。これでまた冒険ができるよ」

「いえ！ 元氣になられて良かったです」

「さて、治してくれたのは嬉しいけどまず治療費ってどのくらいするかな?」

「そんな! お金なんてとんでもないですよ! これはただ私のお節介ですから、お気になさらず旅を続けてください!」

「え? でも…うーん、本当に良いの? むしろ無償で治してもらった話になると逆に何か裏がありそうで怖いんだが…」

「別に裏もありませんよ、信じてください…?」

「何故疑問系?」

「…う、その、本来なら対価は求めますが、それを聞く暇もなく勝手にこちらが治療しましたのでそれを請求するのはおかしいのでお気になさらないで下さい。大丈夫ですから」

彼女はニコリと笑う。

思わず見惚れそうで少し困った。

「わかった。ならナビスさんのお節介には感謝だけを残しておこう。ありがとうございます、お陰で助かりました」

「いえいえ、それほど」

ぐうぐ

「?」

「は、はうう、その、恥ずかしいところを聞かれましたね…」

赤面しながら口元を押さえるナビス。

空腹による腹の音だが…

相手がサキユバスである事を考えていた。

「なんか……その、ごめんな？」

「もう！謝らないでください！ ……う、くっう…お、落ちいて…
ふう…」

「……」

ナビスは空腹を押さえるよりも、理性を抑え込み、自分を保とうと
しているように見えた。

やはり彼女は淫魔である『ソレ』は限り免れないのだろう…

「貧弱だから気を使わせてしまったか…」

「！」

俺は理解してることを示すように「ごめん」と声をかけた。

「い、いえ、大丈夫、です……はあ…んんっ…ぐっ…」

淫魔として相当我慢してるようだ。

ちなみに俺が理解してる理由は一つしか思い至らない。

まず淫魔は男の精を食料にしてエネルギーを得る。そして目の
前には男の俺がいるからサキユバスとして精を頂こうと考えていた
のだろう。

精を頂くにも、その対価として風邪を治してくれた治療費の代わり
にでも考えていたのだろう。だが免疫力低下してる俺からそんな

事すると命危うい。それは医師として避けたいから俺を狙わない。いや、狙うことができないのだ。

本当なら淫魔の得意技を活かして睡眠中とかにこっそりとバレずにちよろまかしていたけどそうしなかった。なんとも優しいサキユバスなんだろうか…

「安心して。俺も君が何を欲してるのかを理解してる。だから…その、なんだ。今は少しだけ我慢してくれるとありがたい」

「え？……えつと…」

「これから外に出て食料を取ってくる。そんで糧を得て、元気に精をつけたら……その、お、俺のことは好きにしてくれも構わないと言うか…ほら？ もともと崩れ落ちそうな身だったがナビスによって救われてる。だからあんたになら一度委ても良いと思ってる…」

「！」

病み上がりにもかかわらず俺はマキブを装備して外に出かけた。土砂降りの雨で気にしてなかったけど、近くに雑草まみれの農園がある。

雑草まみれは仕方ないが、それでも少しくらいは野菜や果実があるだろう。

そう考えて飛び出せば、幾らか収穫できた。もともとここは人が住んでいた村だった事もあり、農園の中には丈夫に育ってくれる種などが生きてたのだろう。

自然の恵みに感謝だ。

あと軽く体を動かしていれば自分が空腹であることもはつきりしてきた。

食欲も同時に本来の気力も取り戻しつつあるのだろう。自分で言うけど、良い傾向だろう。

「採ってきた」

「！」

それから収穫した野菜や果実をテーブルに置く。

道具袋から調味料を取り出し、久しぶりに料理を作ることにした。

一般家庭を築いていただろう家から放置されてた鍋を借りると汚れを洗い落とし、携帯用の料理道具を取り出して調理を開始する。

野菜を一口サイズに切りながら、スープの味付けする。

作り上げたのは塩味のポトフ風だ。

今回は肉はないが野菜の味付けが活きている。

「お腹すいたから早速いただく。ナビスさんも食べないか？」

「あ、はい。では…」

教会で待っていたナビスを招いて。

ポトフをいただくことにした。

「美味しいですね！」

「料理は久しぶりで心配だったけど、うまく作れてよかった」

火を使った料理なんていつ頃か覚えてない。

長旅にビスケットが便利であまり気にしなかった。

「自炊は素晴らしいですね。あとちゃんと野菜を取るのですよ？」

「わかってるよナビスさん」

「ナビスで良いですよ」

軽くお喋りしながら次をおかわりする。

俺は相当お腹すいてたのだろう。

最近まで少食を続けてたせいで胃袋が小さくなっていたが、いざ食べ続ければ食欲は増すばかりだ。

もともと俺は沢山食べていたからこのくらい普通なのだろう。忘れていたのかな…

「うーん、ですが。フラッグさんはちゃんと野菜を取るのか心配ですね」

「おいおい、今回の事で身に染みたからちやんと食べるよ」

「…よし、決めました！しばらく私がフラッグさんの食生活を見るために同行しますね！」

「ふあ!?! こっほ…どういふ事なの!?!」

少しむせながら俺は彼女の言葉を再確認する。

「そのままの意味ですよ。私はフラッグさんの旅に同行する。それだけです」

「ええと…ええ?!」

「まだフラッグさんは病み上がりです。また倒れられては困ります。なのでもうしばらくはフラッグさんの容態は見させて頂きます」

すね」

「ナビスって、もしかして前もそういう事してたの？」

「いえいえ、誰かと同行するのはあなたが初めてなんですよ。それにフラッグさんは世界を旅していると聞きましたので一緒に着いて行きたいだけです。もともと私も世界を旅したいと考えていましたから」

「ああ、そう言うこと…」

「なので、私が旅に同行することで風邪の治療費はチャラにしてあげますね」

「おいおい、勝手なお節介だから対価は要らないって言ったじゃないか。サキユバスは嘘つきだな」

「ふふ、男に嘘をついたり、惑わせたりするのはサキユバスの役目ですよ？」

そうやって夜ご飯を片付ける。

その後、もう一晩この廃村で過ごしそうと考えて俺が診断を受けていた個室まで戻る。

ナビスが「もう一度診察します」と言ったので服を脱ぐ。

心臓の音、舌を出して容態を確認する。

ナースだけど医師さんだな。

「ナビス、もし着いて来たいのなら拒もうとは思わない。俺もそろそろ一人じゃやれること少なくて辛く感じて来たし。でも俺の行く先は結構危険だぞ？ 本当に大丈夫かい？」

「はい、大丈夫ですよ。だってヤンチャな患者さんが一緒にいますので」

「まだ患者扱いですか、そうですか」

「ふふっ」

彼女は笑いながら診察を終える。

十分に健康だと告げられた。

「それに、フラッグさんならついて行っても大丈夫と思いましたので」

「なんで？」

「優しく感じたからですかね？」

「何を根拠に優しいと述べてるの？ 料理に関しては感謝の気持ち表してるだけだぞ？ ただのお人好しと思ったらそれは勘違いさ」

「いえ、サキユバスに身を委ねても良い発言をするフラッグだからこそですよ」

「!？」

『精をつけたら好きにして良い』なんて、サキユバス相手に自殺行為のセリフに値します。でもそれってサキユバスの私に心を許してくれてる証拠なんですよね？ なら、大丈夫だと感じました」

「…そりゃ、返せる手段ってそのくらいじゃ無いのか？ 俺が渡せる対価なんて…」

「しかし真剣に提案してくれました。私が求める対価を返してあげようと考えてくれました。それが私にとって嬉しかったからこの場所で待ちました。すごく、嬉しかったから…」

「あ、ああ、そうなの…か」

「はい」

「…」

心の底から嬉しそうなその表情を見ると頬が熱く感じる。

まだ熱でもあるのか疑いたくなる気持ちになるが、なんとか心を落ち着かせた。

「それで…その、フラッグさん？ どうします？」

「っ…」

子を育むための精子をわざわざ定期するのは男としてやや複雑ではあるが、彼女がそれを求めている。

そもそも弱り果てていた俺を襲えば我慢などせずに済んだはず。しかし彼女は救命する事を選んでくれた。目の前に好物がいたのにそれを耐えていた。いまはそんな彼女を満たせてあげられるかもしれない。 なら…

「俺は発言に…責任を持つ、ぞ？ て、抵抗はしない。 うん、し、しません」

「!! ……ふふ、ありがとう。 本当は抵抗されても仕方ないと思っ
てます」

そう言いながらナビスは診察の器具を置いた。
ゆつくりと近づいてくる。

「……………」

「その、怖いですか？」

「…その……………」

「ふふっ、大丈夫。わたしを見て」

「!?……………」

頬を支えられて彼女の顔に向かされる。

愛撫するように触れられた頬は痺れるようだ。

それだけで脳が麻痺してるように感じる。

コレが淫魔なのか。

恐怖心を抱えながらも納得しながら、彼女。真っ直ぐと見つめれば
そこに吸い込まれるような眼が写っている。

そして顔を引き寄せられるように唇が触れる。

一瞬にして脳内が桃色に染まった。

「はじめての味。　まだ誰にも犯されてない味ですね」

「はぁ…はぁ……………」

呼吸が落ち着かない。

考える余力はどこに行った？

彼女に全て吸い込まれたみたいだ。

「怖がらないでフラッグさん。　わたしが優しく導きますから」

そう言うときつきよりも唇を貪りながら顔を触れると動かないように固定する。

これまで感じた事無いほど柔らかい口づけに全身の力が抜けてベッドの上に倒れてしまう。

彼女は覆い被さる。

クスクス笑いながら頬に手を伸ばす。手のひらが触れるか触れないかのもどかしい距離感で愛撫される。味わった事ない感覚に脳が小刻みに痺れて、呼吸も小刻みに荒くなっていた。淫魔にとつては挨拶程度だろうが未知なる快樂に涙が自然と流れる。それをペロリとひと舐めて彼女は馬乗りにも体を起こす。舌舐めずって涙の味を楽しむ。

「！、！！、!!!」

その姿は情欲を慥る。

呼吸が彼女を欲する。

これが恐怖心なのか分からない。

「ふふっ、フラッグさん、とても可愛いですよ…」

ナビスは蠱惑的な表情で笑う。

「俺は、食わ…れる、のか…?」

「はい。でも大丈夫。とっつても気持ちいいですから。全てを委ねて」

「あ…ああ！ ナ、ナビス…!」

「かわいい、わたしの患者さん」

「サキユバスに身を委ねるなど何を考えているのやら。」

でも今は彼女に任せても良いと思えた。

彼女になら奪い尽くされても良いと思った。

それほどにもん娘との交わりは危険なんだと知って、後戻りはできない。

彼女とまぐわり合う。

一方的に吸い尽くされたが幸福だった。

彼女は何度も口づけをして味を刻む。

無意識に彼女を抱きしめて肉欲を満たそうと必死だから、彼女はクスと笑って何度も、何度も、相手が患者であることも忘れて……

病に犯されたみたいだ。

◇

見晴らしの良い大きな木の上で世界を眺める。

「やはりあの件で患者さんは多いです。痛くて苦しくて可愛そうです…」

「ほんの数日とは言え、大戦争だったのは間違いない。傷跡はとても大きい」

「私は体の傷は治しても心の傷まで治せません。無力ですかね？」

「それは無い。君は良く頑張ってる。だからこうして南西までやってきて世界樹に登っているんだろう？」

「はい。この世界樹にある世界樹の葉を回収して、恵のオアシスにある泉の水と調合して”世界樹のしずく”を作り上げるために、わたしはここまで来ました」

「ここまで来るのは容易く無い。すごく大変だ。しかしこの場所まで踏み込んで来た君を無力と侮辱してどうする？もしそんなこと言う情弱野郎がいたら俺がメタメタにしてやるよ」

「ダメですよ？患者さんを増やささないで下さい」

「冗談だよ」

マキブを使って彼女からもん娘を守る。

俺が傷ついても、彼女が治してくれるから。

「フラッグ、大丈夫ですか？」

「平気だ。本格的に疲れないうちに進もう」

これまで、俺は彼女と共に世界を旅して来た。

途中途中、病気の者を治すために村や町に寄り、彼女の力になってあげた。

そうやって旅をして来た今、とても大きな世界樹を登っていた。

そこから見下ろす世界は広いが、遠くでは二つの大国を傷ついていた戦場がある。

その傷を少しでも取り除きたくて彼女はいつものように動いた。

本当は俺達にとって関係無い出来事。

けれど彼女の強い要望に応えるべく俺は力を貸すことにした。

そして、これからも彼女に力を貸すだろう。

まるで病のように。

こればかりはおそらく治療法が見つからない。

「あとフラッグ……」

「なんですか？ 先生？」

「その先生ってのは止めれないですか？」

「楽しいから言ってるのですよ、先生」

「もう！ 名前で呼んで下さい！」

「わかりました、ナビス先生」

「むっ！」

なんだかんだで良き関係を築き上げながら、俺は彼女のメスとして
行く先を切り開くだけだ。

俺の名はフラッグ。

治療法の無い病を負った彼女の患者です。

e n d r o o t 【ナースサキユバス】

アリス end

イリアスベルクの近くで俺はとあるもん娘と戦闘を行い、そして…倒された。

ああ、わかってるとも。

この世界でもん娘に倒されてしまったら、辿る結末はただ一つだけ。

誰もが理解してること。

それは旅人として終わってしまう末路。

これから俺はもん娘に貪られるのだ。

ああ、せめて心はズタボロにされず…

自我を保てた終わり方が良いな…

敗者だけど、怠惰にもそれを望む。

俺は敗北を受け止めた。

…

…

「って、まだエンドじゃねーよ…ッ！」

「うむ？　　なんどかよくわからない事を述べながら目覚めたようだが…」

俺の横から声が聞こえた。
その声の持ち主は小さな蛇の妖魔だ。
なによりも見たことある者だ。

「いや、気にするな。それよりここは？」

「イリアスベルクの宿屋だ。そこまで運んでやったのだから。感謝するんだな」

「感謝はしますけど、まさか連れ込まれるとは思わなかった」

周りを見ると本当に宿屋だ。
しかも使ったことある部屋。

「ふっふっふ、しかし敗者は勝者のなすがままと言うべきか……」

「な、まさか!? あんた寝込みを襲ったのか!？」

「さて、それはどうかな?」

「うわあ、ここで奪われるのか。しかも寝てる間に知りもせず……」

「くくくつ、安心しろ。我はお主からまだ初めて奪ってはおらぬ。
ただ、美味しくちゅーちゅーさせて貰ったがな」

「やっぱり寝込み襲ってるじゃねーか!!」

「なかなか美味かったぞ」

まさか初めて敗北しあ相手が無印のヒロインである魔王様とは思わなかった。

しかも既に美味しく頂かれてたようだ。

あ、本当だ。

今下着一枚の格好だ。

これはたしかに屈辱的だな…

「てか、そんなことされてるのに俺は良く目覚めなかったな」

「スリープを重ね掛けされていたんだ。簡単には目覚めぬさ」

「それにしてもあまりにも無防備すぎないか？」

「死闘を演じていた訳では無いからな、心が油断していたのだろう。しかし随分とグツスリ眠り込んでいたなお主？ スリープは初めてか？」

「ああ、あんなにも簡単に落とされるとは思わなかった。頭がスツと宙に浮いて、そのまま抗わずに闇の中へ落とされたら楽な感覚だったし…」

「そこから更にスリープを重ね掛けしたからな、お主によっては強力な魔法だったのだろう」

「終いにはブラインドで視界が遮られて、起きて目覚めてるのかもわからないし。なんともひどい妨害呪文なこと…」

「それが魔法の面白いところだ。さて、目覚めたところ悪いが明日に向けてまた寝てもらおうか」

「……は？」

まさか！

また寝てる間のように俺を襲うつもりか!?

「お主は強いからな、だからイリアスポーツまで同行するのに丁度良い。遺憾せん今の私にはその力が無いからな。……付いてきてもらうぞ?」

「ええと、拒否権とかはないの?」

「ない事もないが、ここからイリアスポーツに向かうその道中は強力なもん娘で溢れている。だからそこを我とお主で共に突破すれば楽だと思うが……どうだ? 合理的な話ではあると思うが」

「ああ、そういう事……」

しかし魔王（ロリ）が『我が下僕なれば世界の半分をくれてやろう』じゃなくて『ロリの魔王が仲間になりたそうにこちらを見てる、仲間になりますか?▽』の状態は何事かと思う。

「もしかしてあの戦闘はそういうテストだったりするの? なんか下手に挑発もしてきたし」

「下手に挑発と言うな。まあ、そんな挑発に乗ってくれた貴様も貴様だがな」

「挑戦的なのは理解してたから俺はそれに乗っただけだよ。別に殺し合いではなく、いまは己を高めるために少し刃を交えたただけだ。決して殺戮の快楽に目覚めたとかそうでは無いからな?」

「そこは分かっておる。それでどうだ？ イリアスポートまで同行せぬか？」

「良いよ、一緒に行こう。君なら強いし、俺と組めばイリアスベルクからイリアスポートまで突破できそうだ」

「よし、交渉成立だな！ なら明日に向けて休むとしよう」

そう言うと、アリスは俺の布団の中に潜り込んでくる。

「おい待て、なんで俺の寝床……あ、この部屋ベッド一つしかないのか……」

「そういうことだ。もしほかの部屋を取ると言っても満室だぞ？ ならこの部屋で半分コにするしかないだろう」

「待て待て、俺は椅子で寝るからこのベッドは君が使ってくれ」

「なんだ？ 恥ずかしいのか？ 初々しいな」

にやにやとニンマリ笑うロリ魔王にデコピンしてやると一瞬にして涙目になる。

「初々しいしのは否定しないし、恥ずかしいのも否定しない。それに関しても間もない女性と床を一緒にするのは正直どうなんだ？ 俺そういうのはあまり良くないと思うから辞めとく」

「ふむ、案外紳士なのだな？ まあ良い。ならこの布団は丸々使わせて貰おう」

「そうしてくれ」

それだけ言うと俺は道具袋にあるマキブを確認する。
どうやら一つも失っていないようだ。

良かった。

しかしまさか魔王のアリスとコンビを組むとは思わなかった。
即席で一時的な関係だと思いが、無印のヒロインと一緒にするのは
少しドキドキしている。

でもほんの少しだけ怖いな…

元とは言えば彼女は世界の主人公の…

いや、でもここはパラドックス。

そうじゃない事だっでありうる。

けどやはり抵抗はある。

俺はそんな彼女と普通に接していけるだろうか？

それは明日になってわかるだろう。

◇

「ふむ、到着したな」

「ああ、そうだな。朝早くから出たのにもう夕方だ、時間が短く感じ
るな…」

「しかしフラッグと同行出来て正解だったな。他の者ではこうも行
くまい」

「そんなことないさ。むしろアリスが強かったから楽だったんだ
よ」

「いや、我は剣も扱えるが魔法も活用して全力を出せている。しかし長旅で魔力も長くは持つまい。そうなると我に残るのはこの剣のみであり、戦闘面において一気に辛くなるだろう。しかし幾らでも使えるマキナ師のお主がいるからこそ安定した旅路だった。ありがとうフラッグ」

「い、いや、そんなことないさ。それに俺もありがとうと言いたい。いずれここまで通る道だから今回アリスが居て助かった」

俺はアリスと握手をして感謝を表した。

さて…

「宿屋は早めに取らないと無くなるよな？」

「うむ、そうだな。急ぐか」

「ちゃんと2部屋あれば良いけど」

「なんなら同室でも構わないぞ？」

「また寝込み襲われたら困るからやめとく」

そう言いながら俺はふと思い、港を眺める。
荒くれたちが出港する船に乗り出した。

その時だが…

幻覚だろうか？

一瞬だけ船に乗る『俺』の姿が見えた…

「？」

荒くれ達に押し退けられて無理やり乗せられたような幻覚が見えてしまう。

何故だ？ 疲れてるのか？

俺は首を振って、もう一度眺め直す。

するとその船には『俺』はいなかった。

「…」

やはり気のせいのようなだ…

厳しい道中の緊張感によって精神的にも疲れてるのだろう。早く疲れを取った方が良いようだ。

◇

「なるほど、なかなか大変なことになってんだな」

「全く、あの白兔はどこに消えたと言うのだ…」

「しかも配下にいる四天王ってやらかも反応が無いと来た。魔王様はなかなか厳しい現状に立ち会ってることになるよな？」

宿屋を訪ねたが部屋が一つしかなかった。

海が荒れ狂い、まともな航海ができないことで船員や行商人がイリアスポートに滞在することで宿屋の部屋が殆ど埋まっているとのことだ。

まあ、泊まれる部屋が残って良かったと考える。

ない場合はどこかの街に飛んでそこに泊まれば良いが、それは少しだけ面倒だ。

「しかしお主も私とそう変わらぬな。気づいたらもん娘まみれの平原に落とされたりと苦労しておる」

「本当にな。まあマキブに関しての知識があつたから今はどうにかなっているけど、このままでは弱いままだ。もっとマキブを追求して数を揃えないと話にならない」

「ふむ、では今のお主はそのマキブ集めとやらの旅に出ているわけだな？」

「そういうことで間違いない。そんなアリスも白兔を探しながら自分の城に帰りつつ、配下を見つけて旅だろ？ 要するに行き当たりバツタリ」

「うむ、その認識で間違いない。行き当たりバツタリなのは否定し難いのも癪だが……まあ良い」

「しかし俺たちの目的は似ているな。俺はマキブを見つける旅、アリスは配下と城を見つける旅。なにかを求めているのは互いに同じだな」

「規模は違うがな」

「魔王様と肩並べるなんて恐れ多い」

「そうか」

「……」

少し長めの沈黙。

すると俺はとある事を考え、口を開いた…

「…：…なあ、俺少し考えた事がある」

「…：…一つ、我は提案があるのだが」

「あ…：」

「む…：」

互いに言葉が重なり合う。

俺とアリスは少し目を見開くが、恐らく今回の旅路のように利害一致してるところがあるため、考えてることは同じなんだろう。

だから俺は敢えて尋ねる。

「俺も人のこと言えず、マキブ探しのために行き当たりバッタリだ。だから一つずつ順に探して行くと思う。それも旅をしながら己を極めるために、この世界を次々と歩くと思うんだ」

「うむ」

「そしてアリスも俺と似たようなものだと思ってる。だからさ…：俺と」

「仲間になろうと言うことか？」

「…：あー、やはり分かっていた？」

「そうなるとは思っておったぞ」

特に驚きもせず、予想してたかのような表情で冷静に告げた。

「そうか。それでアリスはどう？ 悪い話では無いと思うが」

「そうだな。もし：お主がどうしようもなく弱かったら断っていたと思うが、今回の旅路でそうで無いことがわかった。周りと比べてましな程度に賢いところもまあまあ高得点だ。また、世界を回ろうなどなかなか肝が備わっているところもありがたい。まだ多少荒削りなところはあるが、道連れにするにはまったくもって良い人材だ」

「！ なら」

「うむ、これからよろしく頼もう。我が城に着くまでその力を貸してもらおう。なんなら我を無事届けられたあかつきには我の下部にして高待遇の席に就かせても良いぞ？」

「なかなか心踊る話じゃ無いか。いいよ、その時が来たら考えさせてもらう。でも無愛想なお城だったらその話は受けないけどな」

「む！ なにを言う！ 人間どもが作るようなお城よりも立派な場所だ!! ええい、ならばしかとその目に我のお城を刻ませてやらないとならないな！」

「楽しみだ」

それから俺はアリスの仲間として隣に立つ事を許された。

本当は『家来その1』って感じの扱いにするつもりだったが、人間にしては戦闘力が高い事と、おいしい料理が作れることが彼女の中では高得点のようだ。

そのため特別に仲間としての平等な扱いが許された。
あと呼び捨てにすることも許された。
いい魔王様だな。

それで旅をすればもちろん、意見が衝突したり、食い違いが起きたりもする。そこからくだらない喧嘩をしたり、アリスのわがままに困らされたりと色々であったが関係が悪化すること一度もなかった。

甘いもので許してもらったりと手段はあったのでたまにそこからへんでコントロールしたりとアリスとの関係は良好に保つ。

もちろん俺たちは喧嘩ばかりでは無い。

互いにフォローしながら色々な物を乗り越えた。

しかしアリスはプチ魔王のロリになったせいで些か精神面が不安定だった。

だからそんな彼女を何度も支えながら俺は仲間として助けた。

あと魔王である彼女の立場が立場だから、旅を続けて先に進むにつれ、彼女は苦悩したり、時には絶望をしたりと、何度も繰り返した。

その度に俺は彼女を励ました。

世界の危機と戦う時も：

とてつもなく大きな決断を迫られた時も：

俺は彼女の味方として常に寄り添い続けた。

いつだったか彼女が俺の身を案じて拒もうとしても、その小さな体を抱きしめて離さないようにした。本心ではない、拒むことが辛くて涙を噛みしめる彼女を強く抱きしめる。側にいると約束した。

本当の話をすると：

最初はここまで彼女の事を深く思おうとは思わなかった。

原作の重要な立ち位置にいるキャラと旅できるってワクワクのた
めだった。

それほどに軽い気持ちがあった。

でも、そんな軽い気持ちはいつしかなくなり、今では彼女のとぐろ
の中に溺れていた気分だった。

それほどにアリスが大きくなっていた。

それもそうだ。

何日も何十日も何百日も旅を重ねながら、同じ飯と、同じ戦い、同
じ空気、同じ寝床、同じ道楽、凡ゆる者を共有してきた仲間だから。

パートナーだから。

惹かれた異性だから。

俺にとって初めてもん娘の魔性に溺れさせて貰った相手だ。特
別だった。彼女にとって最初は捕食行為のつもりだったが、不安な
気持ちを誤魔化すためにいつしか愛を確かめ合う目的でまぐわった。
慰めるために、甘えるために。

そう思えるほど俺は彼女に溺れ切っていたのだろう。

しかしここまで前作の無印ヒロインとここまで仲深まるとは思わ
なかった。

最初はルカさんに申し訳ないと言う気持ちはあった。

でも今は違う。

彼にアリスを渡そうとは更々思わない。

もし仮に、アリスを奪いにきたのなら、それが天使の能力を開花し
たとしても俺は命がけで立ち向かうだろう。

この愛しい魔王を絶対に譲りたく無い。

だって俺はこの妖魔のことが好きだから。

…

…

「フラッグ、後悔はしてないのだな？」

「愚問だよ。俺はしてないしする筈もない。そもそも俺がここに
いるのは人間とか魔物とか関係ないから…」

「そうか。その…フラッグ」

「？」

「ありがとう…」

「ああ。俺もアリスの仲間にしてくれてありがとうな」

「ふっ、お前と言う奴は、まったく」

「随分と困った仲間とでも？ あの日共に旅をしてから知ってる癖
に」

「まったくだ。なんでこんな奴を好いたのか私もわからない」

「何でだろうね？ へんな物でも食べんじやないか？ ロリから大人
に戻っても拾い食いの癖は治ってないみたいだし？」

「た、たわけ！ そんな事は…な、無い！」

「可愛いな、アリス」

「ツク！ …ふん、エロめ。 後でこっそり搾り取ってやる」

「この大戦中にそんな暇あれば良いけどね」

魔王城のバルコニーから戦場を眺める。

あらゆるところで狼煙が上がっている。

もうすぐこの辺りまで来るだろう…

この世界の敵が。

「フラッグ」

「？」

「この魔王を惑わせたその代償、軽くはない。 勝手に死ぬことは許

さぬ。 許さないからな」

「ああ、もちろんだ」

この『世界 / パラドックス』は随分と壊れやすい。

それでも魔王として守りたいものが多い彼女の事を俺は守ろうと思おう。

例え、抗えない運命が迫り来るとしても…

その行動は無駄と…

無意味と、述べたくもなるかもしれないが…

馬鹿らしい。
そんなの関係ない。

俺は、イリアスベルクから始まったアリスと、これまで重ねてきたこのストーリーに思いを馳せる。

アリスを大事にしたいためにただこのマキブで戦うだけ。

だって俺は

アリスの仲間なのだから。

俺の名はフラッグ。

魔王様の仲間としての許された人間です。

e n d r o o t 【アリス・フィーズ】

おわり